

つくば市

金田西坪B遺跡2

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書ⅩⅧ

令和3年3月

独立行政法人都市再生機構
東日本都市再生本部
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第449集

つくば市

こ ん だ に し つ ほ び

金田西坪B遺跡2

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書ⅩⅩⅢ

令和3年3月

独立行政法人都市再生機構
東日本都市再生本部
公益財団法人茨城県教育財団



調査区全景（平成29年度調査）



第28号掘立柱建物跡（平成29年度調査）

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、独立行政法人都市再生機構東日本都市再生本部による中根・金田台特定土地区画整理事業に伴って実施した、つくば市金田西坪B遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、縄文時代から平安時代にかけて断続的に形成された集落跡や、奈良時代の河内郡衙を構成する施設の一部を確認しました。特に、奈良時代の四面廂建物跡や総柱建物跡などの掘立柱建物跡群は、郡司の居宅と考えられ、河内郡衙の様相を考える上で重要な資料となります。

本書を、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります独立行政法人都市再生機構東日本都市再生本部に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長 柴原 宏一

例 言

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構東日本都市再生本部の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成28～30年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市金田字二本松台1626-1番地ほかに所在する金田西坪B遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成28年12月1日～平成29年3月31日
平成29年4月1日～6月30日
平成30年8月1日～9月30日
整理 令和2年4月1日～令和3年3月31日
- 3 発掘調査は、副参事兼調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。
平成28年度
首席調査員兼班長 駒澤 悦郎
次席調査員 木村 光輝
次席調査員 大武 宣隆 平成28年12月1日～平成29年1月31日
嘱託調査員 根本 康弘
平成29年度
首席調査員兼班長 駒澤 悦郎
次席調査員 清水 哲
次席調査員 野内智一郎
嘱託調査員 仙波 亨
平成30年度
首席調査員兼班長 駒澤 悦郎
次席調査員 三浦 裕介
嘱託調査員 壘沼 智彦
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長小林和彦のもと、以下の者が担当した。
首席調査員 齋藤 貴惟 令和3年3月1日～3月31日
次席調査員 野内智一郎
- 5 本書の執筆分担は、下記のとおりである。
野内智一郎 第1章～第3章第3節4・第3章第3節6～4節
齋藤 貴惟 第3章第3節5
バリノ・サーヴェイ株式会社 第3章第3節3(4)
- 6 本書の作成にあたり、鍛冶関連遺物の自然科学分析、及び金属製品の保存処理については、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また、石材の一部については、茨城大学名誉教授（地質学）・日立市郷土博物館特別専門職田切美智雄氏に、奈良時代の須恵器や掘立柱建物の配列については、ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター所長佐々木義剛氏に、中・近世の遺物については、土浦市立上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員比毛君男氏にそれぞれご指導いただいた。
- 7 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真等は、茨城県埋蔵文化財センターにて保管されている。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、 $X = + 10,760 \text{ m}$ 、 $Y = + 26,680 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1a) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A、B、C…、西から東へ 1、2、3… とし、「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a、b、c…、西から東へ 1、2、3、… と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a 区」のように呼称した。

- 2 実測図、遺構・出土遺物一覧で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P-ピット SA-柱穴列 SB-掘立柱建物跡 SD-溝跡 SF-道路跡

SI-竪穴建物跡 SK-土坑 TP-陥し穴

土層 K-攪乱

土層解説 ローム-ロームブロック 焼土-焼土ブロック 粘土-粘土ブロック 粘-粘性 締-締まり

サイズは「大・中・小・粒」で、炭化物については「材・物・粒」で表記した。

含有量 A-多量 B-中量 C-少量 D-微量

粘性・締まり A-強い B-普通 C-弱い

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・赤彩・施軸

 炉・火床面・黒色処理・被熱痕・

 竪部材・粘土範囲・炭化物範囲・鉄滓付着

 繊維土器

 須臾器断面

 柱建物跡・柱あたり

●土器

○土製品

□石器・石製品

△金属製品

----- 硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構・出土遺物一覧の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m、cm、g で示した。なお、現存値は () を、推定値は [] を付けて示した。

(2) 遺物番号は遺構ごとの通し番号とし、本文、挿図、表、写真図版に記した番号と同一とした。

(3) 出土遺物一覧の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

- 6 竪穴建物跡の「主軸」は、炉・竪を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

- 7 今回の報告する遺構の調査年次は以下のとおりである。また、整理の段階で遺構名を変更したものと及び欠番にしたものは以下のとおりである。

平成 28 年度調査 (2016)

SI61 ~ 66, SB14 ~ 17, 第 2 号大型円形土坑, SK151 ~ 190, SD54 ~ 56・58, SF 3

平成 29 年度調査 (2017)

SI10 ~ 12・24・27・28・35・36・46・47・67 ~ 69・71・73 ~ 89・91 ~ 98, SB18 ~ 36, 第 1 号鍛冶工房跡,
SK191 ~ 377・384・385, SD 5・8・59・61 ~ 64・66・67, SA 9・10, TP 4 ~ 8

平成 30 年度調査 (2018)

SK378 ~ 381, SF 3・4

遺構名変更表

旧遺構	新遺構
SI 27 P 5	SK 382
SI 28	第 1 号鍛冶工房跡
SI 73 P 7	SB 37 P 5
SB 29 P 8	SK 386
SK 171	第 2 号大型円形土坑
SK 192	SB 37 P 6
SK 205	SB 38 P 1
SK 218	SB 40 P 2
SK 219	SB 39 P 2
SK 220	SB 40 P 3
SK 221	SB 38 P 2
SK 256	SB 37 P 7
SK 265	SA 10 P 1
SK 266	SB 38 P 7

旧遺構	新遺構
SK 267	SA 10 P 2
SK 268	SB 38 P 6
SK 269	SB 39 P 6
SK 270	SB 40 P 6
SK 271	SB 38 P 5
SK 272	SB 39 P 5
SK 274	SB 40 P 5
SK 275	SB 40 P 1
SK 277	SB 39 P 1
SK 278	SB 37 P 9
SK 279	SB 37 P 8
SK 286	SB 37 P 1
SK 288	SB 37 P 2
SK 291	SB 37 P 4

旧遺構	新遺構
SK 292	SB 37 P 3
SK 305	SB 39 P 3
SK 306	SB 38 P 3
SK 310	SB 38 P 4
SK 311	SB 39 P 4
SK 312	SB 40 P 4
SK 339	SA 10 P 3
SK 367	SB 41 P 1
SK 368	SB 42 P 1
SK 369	SB 41 P 2
SK 371	SB 42 P 2
SK 372	SB 41 P 3
SK 373	SB 42 P 3

欠番遺構

SK152・155・165・167 ~ 170・183・206・207・212・223 ~ 225・228 ~ 230・232・236・248・253・
262・281 ~ 283・295・300・303・307・309・313・317・320・322・323・325 ~ 328・330・348・350・
356 ~ 358・363・370・383

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
金田西坪B遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 位置と地形	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	12
第1節 調査の概要	12
第2節 基本層序	12
第3節 遺構と遺物	13
1 縄文時代の遺構と遺物	13
(1) 竪穴建物跡	13
(2) 土坑	21
(3) 陥し穴	38
2 弥生時代の遺構と遺物	41
(1) 竪穴建物跡	41
(2) 土坑	49
3 古墳時代の遺構と遺物	51
(1) 竪穴建物跡	51
(2) 鍛冶工房跡	91
(3) 土坑	96
(4) 金田西坪B遺跡出土鉄滓の自然科学分析	99
4 奈良時代の遺構と遺物	118
(1) 竪穴建物跡	118
(2) 掘立柱建物跡	147
(3) 大型円形土坑	184
(4) 土坑	185
(5) 柱穴列	187
(6) 溝跡	189
5 平安時代の遺構と遺物	190
竪穴建物跡	190
6 中・近世の遺構と遺物	198
(1) 掘立柱建物跡	198
(2) 土坑	204
(3) 溝跡	206
(4) 道路跡	209
7 時期不明の遺構	210
(1) 土坑	210
(2) 溝跡	218
8 遺構外出土遺物	219
第4節 総括	222
写真図版	PL 1 ~ PL 48
抄録	
付図	

挿図目次

第1図 金田西坪B遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院2500分の1「上紙」「常陸藩図」「谷田部」「土庫」)	9
第2図 金田西坪B遺跡調査区設定図(つくば市都市計画図2500分の1)	11
第3図 基本土層図	12
第4図 第36号竪穴建物跡・出土遺物実測図	13
第5図 第36号竪穴建物跡出土遺物実測図	14
第6図 第81号竪穴建物跡実測図	14
第7図 第81号竪穴建物跡・出土遺物実測図	15
第8図 第81号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)	16
第9図 第96号竪穴建物跡実測図	18
第10図 第96号竪穴建物跡・出土遺物実測図	19
第11図 第97号竪穴建物跡実測図	20
第12図 第97号竪穴建物跡出土遺物実測図	21
第13図 第153号土坑・出土遺物実測図	22
第14図 第181号土坑・出土遺物実測図	23
第15図 第182号土坑・出土遺物実測図	24
第16図 第182号土坑出土遺物実測図	25
第17図 第187号土坑・出土遺物実測図	26
第18図 第188号土坑・出土遺物実測図	27
第19図 第188号土坑出土遺物実測図	28
第20図 第189号土坑実測図	29
第21図 第216号土坑・出土遺物実測図	30
第22図 第216号土坑出土遺物実測図	31
第23図 第261号土坑実測図	31
第24図 第336号土坑・出土遺物実測図	32
第25図 第336号土坑出土遺物実測図	33
第26図 第352号土坑・出土遺物実測図	34
第27図 第364号土坑・出土遺物実測図	35
第28図 その他の縄文時代の土坑実測図(1)	36
第29図 その他の縄文時代の土坑実測図(2)	37
第30図 第4号陥し穴実測図	38
第31図 第5号陥し穴・出土遺物実測図	38
第32図 第6号陥し穴・出土遺物実測図	39
第33図 第7号陥し穴実測図	40
第34図 第8号陥し穴実測図	41
第35図 第12号竪穴建物跡実測図	42
第36図 第12号竪穴建物跡出土遺物実測図	43
第37図 第66号竪穴建物跡実測図(1)	44
第38図 第66号竪穴建物跡実測図(2)	45

第 39 图	第 66 号竖穴建物跡出土遺物実測図	45	第 104 图	第 46 号竖穴建物跡出土遺物実測図	127
第 40 图	第 69 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	46	第 105 图	第 61 号竖穴建物跡実測図	128
第 41 图	第 89 号竖穴建物跡実測図	47	第 106 图	第 61 号竖穴建物跡出土遺物実測図	129
第 42 图	第 89 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	48	第 107 图	第 63 号竖穴建物跡実測図	130
第 43 图	第 217 号土坑実測図	49	第 108 图	第 63 号竖穴建物跡出土遺物実測図	131
第 44 图	第 217 号土坑出土遺物実測図	50	第 109 图	第 64 号竖穴建物跡実測図	132
第 45 图	第 314 号土坑、出土遺物実測図	50	第 110 图	第 64 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	133
第 46 图	第 10 号竖穴建物跡実測図	51	第 111 图	第 71 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	134
第 47 图	第 10 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	52	第 112 图	第 74 号竖穴建物跡実測図	135
第 48 图	第 10 号竖穴建物跡出土遺物実測図	53	第 113 图	第 74 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	136
第 49 图	第 27 号竖穴建物跡実測図	54	第 114 图	第 77 号竖穴建物跡実測図	137
第 50 图	第 27 号竖穴建物跡出土遺物実測図	55	第 115 图	第 77 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	138
第 51 图	第 35 号竖穴建物跡実測図	56	第 116 图	第 78 号竖穴建物跡実測図	139
第 52 图	第 35 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)	57	第 117 图	第 78 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	140
第 53 图	第 35 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)	58	第 118 图	第 80 号竖穴建物跡実測図 (1)	141
第 54 图	第 62 号竖穴建物跡実測図	59	第 119 图	第 80 号竖穴建物跡実測図 (2)	142
第 55 图	第 62 号竖穴建物跡出土遺物実測図	60	第 120 图	第 83 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	143
第 56 图	第 65 号竖穴建物跡実測図	61	第 121 图	第 93 号竖穴建物跡実測図	144
第 57 图	第 65 号竖穴建物跡出土遺物実測図	62	第 122 图	第 93 号竖穴建物跡出土遺物実測図	145
第 58 图	第 67 号竖穴建物跡実測図	62	第 123 图	第 94 号竖穴建物跡実測図	146
第 59 图	第 67 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	63	第 124 图	第 14 号竪立柱建物跡実測図	147
第 60 图	第 68 号竖穴建物跡実測図 (1)	64	第 125 图	第 14 号竪立柱建物跡出土遺物実測図	148
第 61 图	第 68 号竖穴建物跡実測図 (2)	65	第 126 图	第 16 号竪立柱建物跡実測図	149
第 62 图	第 68 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)	65	第 127 图	第 17 号竪立柱建物跡実測図	150
第 63 图	第 68 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)	66	第 128 图	第 18 号竪立柱建物跡出土遺物実測図	151
第 64 图	第 73 号竖穴建物跡実測図	67	第 129 图	第 18 号竪立柱建物跡実測図 (1)	152
第 65 图	第 73 号竖穴建物跡出土遺物実測図	68	第 130 图	第 18 号竪立柱建物跡実測図 (2)	153
第 66 图	第 75 号竖穴建物跡実測図	69	第 131 图	第 19 号竪立柱建物跡実測図	154
第 67 图	第 75 号竖穴建物跡出土遺物実測図	70	第 132 图	第 19 号竪立柱建物跡、出土遺物実測図	155
第 68 图	第 79 号竖穴建物跡実測図	71	第 133 图	第 20 号竪立柱建物跡実測図	156
第 69 图	第 79 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)	72	第 134 图	第 20 号竪立柱建物跡、出土遺物実測図	157
第 70 图	第 79 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)	73	第 135 图	第 21 号竪立柱建物跡実測図	158
第 71 图	第 82 号竖穴建物跡実測図	74	第 136 图	第 21 号竪立柱建物跡出土遺物実測図	159
第 72 图	第 84 号竖穴建物跡実測図	75	第 137 图	第 22 号竪立柱建物跡実測図	159
第 73 图	第 84 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)	76	第 138 图	第 22 号竪立柱建物跡、出土遺物実測図	160
第 74 图	第 84 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)	77	第 139 图	第 23 号竪立柱建物跡実測図	161
第 75 图	第 85 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	78	第 140 图	第 23 号竪立柱建物跡出土遺物実測図	162
第 76 图	第 86 号竖穴建物跡実測図 (1)	79	第 141 图	第 24 号竪立柱建物跡出土遺物実測図	162
第 77 图	第 86 号竖穴建物跡実測図 (2)	80	第 142 图	第 24 号竪立柱建物跡実測図	163
第 78 图	第 86 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)	81	第 143 图	第 25 号竪立柱建物跡実測図	164
第 79 图	第 86 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)	82	第 144 图	第 25 号竪立柱建物跡出土遺物実測図	165
第 80 图	第 87 号竖穴建物跡実測図	84	第 145 图	第 26 号竪立柱建物跡実測図	166
第 81 图	第 87 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	85	第 146 图	第 27 号竪立柱建物跡実測図 (1)	167
第 82 图	第 88 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	86	第 147 图	第 27 号竪立柱建物跡実測図 (2)	168
第 83 图	第 91 号竖穴建物跡、出土遺物実測図	87	第 148 图	第 28 号竪立柱建物跡出土遺物実測図	169
第 84 图	第 92、98 号竖穴建物跡実測図	88	第 149 图	第 28 号竪立柱建物跡実測図 (1)	170
第 85 图	第 92 号竖穴建物跡出土遺物実測図	89	第 150 图	第 28 号竪立柱建物跡実測図 (2)	171
第 86 图	第 98 号竖穴建物跡出土遺物実測図	90	第 151 图	第 29 号竪立柱建物跡実測図	172
第 87 图	第 1 号鍛冶工房跡実測図 (1)	92	第 152 图	第 29 号竪立柱建物跡出土遺物実測図 (1)	173
第 88 图	第 1 号鍛冶工房跡実測図 (2)	93	第 153 图	第 32 号竪立柱建物跡出土遺物実測図	173
第 89 图	第 1 号鍛冶工房跡実測図 (3)	94	第 154 图	第 32 号竪立柱建物跡実測図 (1)	174
第 90 图	第 1 号鍛冶工房跡出土遺物実測図	95	第 155 图	第 32 号竪立柱建物跡実測図 (2)	175
第 91 图	第 154 号土坑、出土遺物実測図	96	第 156 图	第 33 号竪立柱建物跡、出土遺物実測図	175
第 92 图	第 276 号土坑実測図	97	第 157 图	第 34 号竪立柱建物跡実測図	176
第 93 图	第 276 号土坑出土遺物実測図	98	第 158 图	第 36 号竪立柱建物跡実測図	177
第 94 图	第 365 号土坑、出土遺物実測図	98	第 159 图	第 37 号竪立柱建物跡実測図	178
第 95 图	第 11 号竖穴建物跡実測図 (1)	118	第 160 图	第 37 号竪立柱建物跡出土遺物実測図	179
第 96 图	第 11 号竖穴建物跡実測図 (2)	119	第 161 图	第 38 ~ 40 号竪立柱建物跡実測図 (1)	180
第 97 图	第 11 号竖穴建物跡実測図 (3)	120	第 162 图	第 38 ~ 40 号竪立柱建物跡実測図 (2)	181
第 98 图	第 11 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)	121	第 163 图	第 39 号竪立柱建物跡出土遺物実測図	181
第 99 图	第 11 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)	122	第 164 图	第 40 号竪立柱建物跡出土遺物実測図	182
第 100 图	第 11 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (3)	123	第 165 图	第 41、42 号大型柱建物跡実測図	183
第 101 图	第 46 号竖穴建物跡実測図 (1)	124	第 166 图	第 2 号大型四方形土坑実測図	184
第 102 图	第 46 号竖穴建物跡実測図 (2)	125	第 167 图	第 2 号大型四方形土坑、出土遺物実測図	185
第 103 图	第 46 号竖穴建物跡実測図 (3)	126	第 168 图	第 190 号土坑、出土遺物実測図	186

第169頁	第213号土坑・出土遺物実測図	186	第188頁	第160号土坑実測図	204
第170頁	第9号柱穴列・出土遺物実測図	187	第189頁	第178号土坑実測図	205
第171頁	第10号柱穴列・出土遺物実測図	188	第190頁	中・近世のその他の土坑実測図	205
第174頁	第5号溝跡・出土遺物実測図	189	第191頁	第54号溝跡実測図	206
第173頁	第24号竪穴建物跡実測図	190	第192頁	第55号溝跡・出土遺物実測図	207
第174頁	第24号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)	191	第193頁	第56号溝跡実測図	208
第175頁	第24号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)	192	第194頁	第3号道路跡・出土遺物実測図	209
第176頁	第47号竪穴建物跡実測図	193	第195頁	第4号道路跡実測図	210
第177頁	第47号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)	194	第196頁	時期不明の土坑実測図(1)	210
第178頁	第47号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)	195	第197頁	時期不明の土坑実測図(2)	211
第179頁	第76号竪穴建物跡実測図	196	第198頁	時期不明の土坑実測図(3)	212
第180頁	第95号竪穴建物跡・出土遺物実測図	197	第199頁	時期不明の土坑実測図(4)	213
第181頁	第95号竪穴建物跡出土遺物実測図	198	第200頁	時期不明の土坑実測図(5)	214
第182頁	第15号掘立柱建物跡実測図	199	第201頁	時期不明の土坑実測図(6)	215
第183頁	第30号掘立柱建物跡・出土遺物実測図	200	第202頁	時期不明の溝跡実測図(1)	218
第184頁	第31号掘立柱建物跡実測図	201	第203頁	時期不明の溝跡実測図(2)	219
第185頁	第35号掘立柱建物跡実測図(1)	202	第204頁	遺構外出土遺物実測図(1)	219
第186頁	第35号掘立柱建物跡実測図(2)	203	第205頁	遺構外出土遺物実測図(2)	220
第187頁	第151号土坑実測図	204			

挿表目次

第1表	金田西坪B遺跡周辺道路跡一覽	10	第41表	第87号竪穴建物跡出土遺物一覽	85
第2表	第36号竪穴建物跡出土遺物一覽	14	第42表	第88号竪穴建物跡出土遺物一覽	86
第3表	第81号竪穴建物跡出土遺物一覽	17	第43表	第91号竪穴建物跡出土遺物一覽	87
第4表	第96号竪穴建物跡出土遺物一覽	19	第44表	第92号竪穴建物跡出土遺物一覽	89
第5表	第97号竪穴建物跡出土遺物一覽	21	第45表	第98号竪穴建物跡出土遺物一覽	90
第6表	縄文時代竪穴建物跡一覽	21	第46表	古墳時代竪穴建物跡一覽	90
第7表	第153号土坑出土遺物一覽	22	第47表	第1号鍛冶工房跡出土遺物一覽	95
第8表	第181号土坑出土遺物一覽	23	第48表	第1号鍛冶工房跡出土鉄滓集計表	95
第9表	第182号土坑出土遺物一覽	25	第49表	第154号土坑出土遺物一覽	96
第10表	第187号土坑出土遺物一覽	27	第50表	第276号土坑出土遺物一覽	98
第11表	第188号土坑出土遺物一覽	29	第51表	第365号土坑出土遺物一覽	98
第12表	第216号土坑出土遺物一覽	31	第52表	古墳時代土坑一覽	98
第13表	第326号土坑出土遺物一覽	33	第53表	第11号竪穴建物跡出土遺物一覽	123
第14表	第352号土坑出土遺物一覽	34	第54表	第46号竪穴建物跡出土遺物一覽	126
第15表	第364号土坑出土遺物一覽	35	第55表	第61号竪穴建物跡出土遺物一覽	129
第16表	縄文時代土坑一覽	35	第56表	第63号竪穴建物跡出土遺物一覽	131
第17表	第5号陥し穴出土遺物一覽	39	第57表	第64号竪穴建物跡出土遺物一覽	133
第18表	第6号陥し穴出土遺物一覽	40	第58表	第71号竪穴建物跡出土遺物一覽	134
第19表	縄文時代陥し穴一覽	41	第59表	第74号竪穴建物跡出土遺物一覽	137
第20表	第12号竪穴建物跡出土遺物一覽	43	第60表	第77号竪穴建物跡出土遺物一覽	138
第21表	第66号竪穴建物跡出土遺物一覽	45	第61表	第78号竪穴建物跡出土遺物一覽	140
第22表	第69号竪穴建物跡出土遺物一覽	46	第62表	第83号竪穴建物跡出土遺物一覽	143
第23表	第89号竪穴建物跡出土遺物一覽	49	第63表	第93号竪穴建物跡出土遺物一覽	146
第24表	弥生時代竪穴建物跡一覽	49	第64表	奈良時代竪穴建物跡一覽	146
第25表	第217号土坑出土遺物一覽	50	第65表	第14号掘立柱建物跡出土遺物一覽	148
第26表	第314号土坑出土遺物一覽	51	第66表	第18号掘立柱建物跡出土遺物一覽	151
第27表	弥生時代土坑一覽	51	第67表	第19号掘立柱建物跡出土遺物一覽	155
第28表	第10号竪穴建物跡出土遺物一覽	53	第68表	第20号掘立柱建物跡出土遺物一覽	157
第29表	第27号竪穴建物跡出土遺物一覽	55	第69表	第21号掘立柱建物跡出土遺物一覽	159
第30表	第35号竪穴建物跡出土遺物一覽	58	第70表	第22号掘立柱建物跡出土遺物一覽	160
第31表	第62号竪穴建物跡出土遺物一覽	60	第71表	第23号掘立柱建物跡出土遺物一覽	162
第32表	第65号竪穴建物跡出土遺物一覽	62	第72表	第24号掘立柱建物跡出土遺物一覽	164
第33表	第67号竪穴建物跡出土遺物一覽	63	第73表	第25号掘立柱建物跡出土遺物一覽	165
第34表	第68号竪穴建物跡出土遺物一覽	66	第74表	第28号掘立柱建物跡出土遺物一覽	169
第35表	第73号竪穴建物跡出土遺物一覽	68	第75表	第29号掘立柱建物跡出土遺物一覽	173
第36表	第75号竪穴建物跡出土遺物一覽	70	第76表	第32号掘立柱建物跡出土遺物一覽	173
第37表	第79号竪穴建物跡出土遺物一覽	73	第77表	第33号掘立柱建物跡出土遺物一覽	176
第38表	第84号竪穴建物跡出土遺物一覽	77	第78表	第37号掘立柱建物跡出土遺物一覽	179
第39表	第85号竪穴建物跡出土遺物一覽	79	第79表	第39号掘立柱建物跡出土遺物一覽	181
第40表	第86号竪穴建物跡出土遺物一覽	83	第80表	第40号掘立柱建物跡出土遺物一覽	182

第 81 表	奈良時代掘立柱建物跡一覽	183	第 93 表	平安時代竪穴建物跡一覽	198
第 82 表	第 2 号大型円形土坑出土遺物一覽	185	第 94 表	第 30 号掘立柱建物跡出土遺物一覽	200
第 83 表	第 190 号土坑出土遺物一覽	186	第 95 表	中・近世の掘立柱建物跡一覽	203
第 84 表	第 213 号土坑出土遺物一覽	186	第 96 表	中・近世の土坑一覽	206
第 85 表	奈良時代土坑一覽	187	第 97 表	第 55 号溝跡出土遺物一覽	207
第 86 表	第 9 号柱穴列出土遺物一覽	187	第 98 表	中・近世の溝跡一覽	209
第 87 表	第 10 号柱穴列出土遺物一覽	188	第 99 表	第 3 号道路跡出土遺物一覽	209
第 88 表	奈良時代柱穴列一覽	188	第 100 表	近世の道路跡一覽	210
第 89 表	第 5 号溝跡出土遺物一覽	189	第 101 表	時期不明の土坑一覽	215
第 90 表	第 24 号竪穴建物跡出土遺物一覽	192	第 102 表	時期不明の溝跡一覽	219
第 91 表	第 47 号竪穴建物跡出土遺物一覽	195	第 103 表	遺構外出土遺物一覽	220
第 92 表	第 95 号竪穴建物跡出土遺物一覽	198			

写真図版目次

PL.1	平成 28 年度調査区遠景 (南から)	PL10	第 89 号竪穴建物跡
PL.1	平成 29 年度調査区遠景 (北から)	PL10	第 217 号土坑
PL.2	平成 28 年度調査区全景	PL10	第 10 号竪穴建物跡 遺物出土状況 (1)
PL.3	平成 29 年度調査区全景	PL10	第 10 号竪穴建物跡 遺物出土状況 (2)
PL.4	第 18 ~ 22・32 号掘立柱建物跡	PL10	第 10 号竪穴建物跡 遺物出土状況 (3)
PL.4	第 28 号掘立柱建物跡	PL10	第 10 号竪穴建物跡
PL.5	第 36 号竪穴建物跡	PL10	第 27 号竪穴建物跡 竪
PL.5	第 36 号竪穴建物跡 竪	PL10	第 27 号竪穴建物跡
PL.5	第 81 号竪穴建物跡 遺物出土状況	PL11	第 35 号竪穴建物跡 竪
PL.5	第 81 号竪穴建物跡 竪	PL11	第 35 号竪穴建物跡
PL.5	第 81 号竪穴建物跡	PL11	第 62 号竪穴建物跡 遺物出土状況
PL.5	第 96 号竪穴建物跡	PL11	第 62 号竪穴建物跡 竪
PL.5	第 97 号竪穴建物跡	PL11	第 62 号竪穴建物跡
PL.5	第 153 号土坑 遺物出土状況	PL11	第 65 号竪穴建物跡 遺物出土状況
PL.6	第 153 号土坑	PL11	第 65 号竪穴建物跡 竪
PL.6	第 181 号土坑 遺物出土状況	PL11	第 65 号竪穴建物跡
PL.6	第 181 号土坑	PL12	第 67 号竪穴建物跡
PL.6	第 182 号土坑 遺物出土状況	PL12	第 68 号竪穴建物跡 竪
PL.6	第 182 号土坑	PL12	第 68 号竪穴建物跡
PL.6	第 187 号土坑 遺物出土状況	PL12	第 73 号竪穴建物跡 遺物出土状況 (1)
PL.6	第 188 号土坑 遺物出土状況	PL12	第 73 号竪穴建物跡 遺物出土状況 (2)
PL.6	第 188 号土坑	PL12	第 73 号竪穴建物跡 竪
PL.7	第 189 号土坑	PL12	第 73 号竪穴建物跡
PL.7	第 216 号土坑	PL12	第 75 号竪穴建物跡 遺物出土状況
PL.7	第 235 号土坑	PL13	第 79 号竪穴建物跡 竪
PL.7	第 260 号土坑	PL13	第 82 号竪穴建物跡
PL.7	第 261 号土坑	PL13	第 84 号竪穴建物跡 竪
PL.7	第 334 号土坑	PL13	第 84 号竪穴建物跡 遺物出土状況
PL.7	第 336 号土坑 遺物出土状況 (1)	PL13	第 84 号竪穴建物跡
PL.7	第 336 号土坑 遺物出土状況 (2)	PL13	第 85 号竪穴建物跡
PL.8	第 352 号土坑	PL13	第 86 号竪穴建物跡 竪
PL.8	第 353 号土坑	PL13	第 86 号竪穴建物跡
PL.8	第 364 号土坑	PL14	第 87 号竪穴建物跡 竪
PL.8	第 4 号隔し穴	PL14	第 87 号竪穴建物跡
PL.8	第 5 号隔し穴	PL14	第 88 号竪穴建物跡
PL.8	第 6 号隔し穴	PL14	第 91 号竪穴建物跡
PL.8	第 7 号隔し穴	PL14	第 92 号竪穴建物跡 竪
PL.8	第 8 号隔し穴	PL14	第 92 号竪穴建物跡
PL.9	第 12 号竪穴建物跡 遺物出土状況	PL14	第 1 号鍛冶工房跡 竪 (1)
PL.9	第 12 号竪穴建物跡 竪	PL14	第 1 号鍛冶工房跡 竪 (2)
PL.9	第 12 号竪穴建物跡	PL15	第 1 号鍛冶工房跡 竪 (3)
PL.9	第 66 号竪穴建物跡 焼土検出状況	PL15	第 1 号鍛冶工房跡 竪 (4)
PL.9	第 66 号竪穴建物跡 竪	PL15	第 1 号鍛冶工房跡 竪 (5)
PL.9	第 66 号竪穴建物跡	PL15	第 1 号鍛冶工房跡 (1)
PL.9	第 69 号竪穴建物跡	PL15	第 1 号鍛冶工房跡 (2)
PL.9	第 89 号竪穴建物跡 竪	PL15	第 154 号土坑 遺物出土状況

PL15	第 276 号土坑	遺物出土狀況	PL23	第 190 号土坑	遺物出土狀況
PL15	第 276 号土坑		PL24	第 213 号土坑	遺物出土狀況
PL16	第 365 号土坑		PL24	第 9 号柱穴	
PL16	第 11 号竪穴建物跡	遺物出土狀況	PL24	第 5 号溝跡 (1)	
PL16	第 11 号竪穴建物跡	竈	PL24	第 5 号溝跡 (2)	
PL16	第 46 号竪穴建物跡	遺物出土狀況 (1)	PL24	第 24 号竪穴建物跡	遺物出土狀況
PL16	第 46 号竪穴建物跡	遺物出土狀況 (2)	PL24	第 24 号竪穴建物跡	
PL16	第 46 号竪穴建物跡	遺物出土狀況 (3)	PL24	第 47 号竪穴建物跡	遺物出土狀況 (1)
PL16	第 46 号竪穴建物跡	竈遺物出土狀況	PL24	第 47 号竪穴建物跡	遺物出土狀況 (2)
PL17	第 46 号竪穴建物跡	竈	PL25	第 47 号竪穴建物跡	竈遺物出土狀況
PL17	第 46 号竪穴建物跡		PL25	第 47 号竪穴建物跡	竈
PL17	第 61 号竪穴建物跡	遺物出土狀況	PL25	第 47 号竪穴建物跡	
PL17	第 61 号竪穴建物跡	竈	PL25	第 76 号竪穴建物跡	
PL17	第 61 号竪穴建物跡		PL25	第 96 号竪穴建物跡	遺物出土狀況
PL17	第 63 号竪穴建物跡	遺物出土狀況	PL25	第 96 号竪穴建物跡	竈
PL17	第 64 号竪穴建物跡	竈	PL25	第 96 号竪穴建物跡	
PL17	第 64 号竪穴建物跡		PL25	第 15 号掘立柱建物跡	
PL17	第 64 号竪穴建物跡		PL26	第 30 号掘立柱建物跡	確認狀況
PL18	第 71 号竪穴建物跡		PL26	第 30 号掘立柱建物跡	
PL18	第 74 号竪穴建物跡	遺物出土狀況	PL26	第 31 号掘立柱建物跡	確認狀況
PL18	第 74 号竪穴建物跡	竈	PL26	第 31 号掘立柱建物跡	
PL18	第 74 号竪穴建物跡		PL26	第 55 号溝跡 (1)	
PL18	第 77 号竪穴建物跡	竈	PL26	第 55 号溝跡 (2)	
PL18	第 77 号竪穴建物跡		PL26	第 56 号溝跡	
PL18	第 78 号竪穴建物跡		PL26	第 54 号溝跡	
PL18	第 80 号竪穴建物跡	竈	PL27	第 151 号土坑	
PL19	第 80 号竪穴建物跡		PL27	第 160 号土坑	
PL19	第 83 号竪穴建物跡	遺物出土狀況	PL27	第 161 号土坑	
PL19	第 83 号竪穴建物跡	竈	PL27	第 176 号土坑	
PL19	第 93 号竪穴建物跡	竈	PL27	第 177 号土坑	
PL19	第 93 号竪穴建物跡		PL27	第 178 号土坑	
PL19	第 94 号竪穴建物跡		PL27	第 184 号土坑	
PL19	第 14 号掘立柱建物跡		PL27	第 3・4 号道路跡	
PL19	第 16 号掘立柱建物跡		PL28	第 36・81・96・97 号竪穴建物跡出土土器	
PL20	第 17 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL29	第 187・188・216・336 号土坑出土土器	
PL20	第 18 号掘立柱建物跡		PL30	第 153・181・182・188 号土坑出土土器	
PL20	第 18 号掘立柱建物跡		PL31	第 216・336・352・364 号土坑	
PL20	第 19 号掘立柱建物跡			第 5・6 号隔土穴出土土器	
PL20	第 20 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL32	第 12・66・89 号竪穴建物跡	
PL20	第 20 号掘立柱建物跡			第 217・314 号土坑出土土器	
PL20	第 21 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL33	第 10・27 号竪穴建物跡出土土器	
PL20	第 21 号掘立柱建物跡		PL34	第 35・65・67・68 号竪穴建物跡出土土器	
PL21	第 22 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL35	第 73・75・79 号竪穴建物跡出土土器	
PL21	第 22 号掘立柱建物跡		PL36	第 84 号竪穴建物跡出土土器	
PL21	第 23・24 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL37	第 84～86 号竪穴建物跡出土土器	
PL21	第 23 号掘立柱建物跡		PL38	第 86～88・92 号竪穴建物跡出土土器	
PL21	第 24 号掘立柱建物跡		PL39	第 11 号竪穴建物跡、第 1 号鍛冶工房跡	
PL21	第 25 号掘立柱建物跡	確認狀況		第 154・276・365 号土坑出土土器	
PL21	第 25 号掘立柱建物跡		PL40	第 11・61 号竪穴建物跡出土土器	
PL21	第 26 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL41	第 46・63・64 号竪穴建物跡出土土器	
PL22	第 26 号掘立柱建物跡		PL42	第 74・77・78・93 号竪穴建物跡	
PL22	第 27 号掘立柱建物跡			第 19 号掘立柱建物跡、第 190・213 号土坑	
PL22	第 28 号掘立柱建物跡	確認狀況 (1)		第 5 号溝跡出土土器	
PL22	第 28 号掘立柱建物跡	確認狀況 (2)	PL43	第 24・47 号竪穴建物跡出土土器	
PL22	第 28 号掘立柱建物跡		PL44	第 47・95 号竪穴建物跡、遺構外出土土器	
PL22	第 29 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL45	第 11・73・75・79・81・84・86・89 号竪穴建物跡	
PL22	第 29 号掘立柱建物跡			第 1 号鍛冶工房跡、遺構外出土土製品	
PL22	第 32 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL46	第 81・96 号竪穴建物跡、第 216 号土坑	
PL23	第 32 号掘立柱建物跡			遺構外出土土器	
PL23	第 34 号掘立柱建物跡	確認狀況	PL47	第 35 号竪穴建物跡出土土製品	
PL23	第 34 号掘立柱建物跡			第 63・86 号竪穴建物跡、第 37 号掘立柱建物跡	
PL23	第 36・41・42 号掘立柱建物跡			第 182 号土坑、第 55 号溝跡出土土器	
PL23	第 38・39・40 号掘立柱建物跡		PL48	第 27・35・46・74 号竪穴建物跡、第 1 号鍛冶工房跡	
PL23	第 41 号掘立柱建物跡	遺物出土狀況		第 10 号柱穴、遺構外出土金屬製品	
PL23	第 2 号大型内形土坑			第 3 号道路跡出土遺物	

金田西坪B遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

金田西坪B遺跡は、つくば市の北東部、桜川右岸の標高約24mの台地上に立地しています。

中根・金田台特定土地区画整理事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、公益財団法人茨城県教育財団が平成28年度に4,470㎡、平成29年度に4,247㎡、平成30年度に279㎡の発掘調査を行いました。



金田西坪B遺跡の調査の内容

当遺跡の一部は、平成12・13年度に確認調査が行われ、^{こうち}河内郡の^{ぐんじやう}郡庁域や^{しやうせう}正倉城が確認され、^{かんだ}金田官衙遺跡として国の史跡に指定されました。

今回の調査はその南部にあたり、^{たてあな}堅穴建物跡44棟、^{ほったて}掘立柱建物跡29棟、^か鍛冶^じ工房跡1棟、^{みぞ}溝跡13条、^{おと}陥し^{あな}穴5基などを確認し、縄文時代から平安時代にかけて断続的に集落が形成されていたことが明らかになりました。



平成29年度調査区遠景（東から）



縄文時代の出土遺物



古墳時代の出土遺物



奈良時代の大型竪穴建物跡



第74号竪穴建物跡出土遺物

調査の成果

調査によって、縄文時代の連続してつくられた陥し穴からなる狩猟場や、縄文時代から平安時代にかけての当地の集落、古墳時代の鍛冶工房跡の様子などが分かりました。

なかでも、奈良時代の大型の竪穴建物跡やしめんびし四面廂建物跡は、河内郡を治めていた郡司の居宅と考えられ、大型の竪穴建物から掘立柱建物へと移り変わっていく様子が分かりました。また、建て替えを繰り返しながら倉庫や広場を整備しており、敷地内の構造も明らかになってきました。これらは、河内郡衙の様相を知る上で大きな手掛かりとなるものです。

以上のような集落の変遷や出土遺物から、この台地上に暮らした人々の生活や社会の一端を垣間見ることができます。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

つくば市では、世界に開かれた国際交流の中心、世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として、21世紀の新しい街づくりが進められている。その一環として取り組んでいるのが、2005年に開業した「つくばエクスプレス」の沿線開発である。中根・金田台地区については、住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に、平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に、平成16年7月から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社に、平成23年7月から独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部に、平成31年4月から独立行政法人都市再生機構東日本都市再生本部に名称を変更）が事業主体として、土地区画整理事業を進めている。金田西坪B遺跡については、平成6年11月18日、住宅・都市整備公団つくば開発局長が茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成7年度、現地踏査を実施した。平成12年3月6日～9日、13日～15日及び17日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成12年3月17日、茨城県教育委員会教育長は都市基盤整備公団茨城地域支社長あてに、事業地内に金田西坪B遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成28年1月4日、平成30年2月5日、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部つくば・千葉常磐担当推進役は茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成28年1月6日及び平成30年2月13日、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部つくば・千葉常磐担当推進役あてに、工事着工前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成27年2月19日、平成28年2月16日、平成29年2月20日及び平成30年2月26日に、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部つくば・千葉常磐担当推進役は茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成27年2月20日、平成28年2月16日、平成29年2月22日及び平成30年2月27日に、茨城県教育委員会教育長は独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部つくば・千葉常磐担当推進役あてに、金田西坪B遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部長から中根・金田台地区埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成28年12月1日から平成29年3月31日まで、平成29年4月1日から6月30日まで、平成30年8月1日から9月30日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

金田西坪B遺跡の調査は、平成28年12月1日から平成29年3月31日までの4か月間と平成29年4月1日から6月30日までの3か月間、平成30年8月1日から9月30日までの2か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

平成28年度

工程 \ 期間	12月	1月	2月	3月
調査準備 表土除去 遺構確認				
遺構調査				
遺物洗浄 注写真整理				
撤収				

平成29年度

工程 \ 期間	4月	5月	6月
調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 注写真整理			
撤収			

平成30年度

工程 \ 期間	8月	9月
調査準備 表土除去 遺構確認		
遺構調査		
遺物洗浄 注写真整理		
撤収		

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

金田西坪B遺跡は、茨城県つくば市金田字二本松台1626-1番地ほかに所在している。

つくば市は、茨城県の南西部に位置し、北部は筑波山塊に接し、東側約5kmには霞ヶ浦がある。市域の多くは筑波山を北端として、その南東側に広がる標高25mほどの平坦な筑波・稲敷台地上にある。この台地は、東を霞ヶ浦に流入する板川、西を利根川に合流する小貝川によって区切られており、東から花室川、運沼川、谷田川、西谷田川などの中小河川がほぼ北から南側に向かって流れている。

筑波・稲敷台地は、千葉県北部から茨城県南部にかけて広がる常総台地の一部であり、地質的には海成砂層の成田層を基盤として、その上に砂層・砂礫層の竜ヶ崎層、さらに泥質粘土層の常総粘土層、関東ローム層が連続して堆積し、最上部は腐植土層となっている¹⁾。

当遺跡は、つくば市の北東部、板川右岸の標高約24mの台地上に立地している。台地は東側の板川、西側の花室川に挟まれ、遺跡はその西側に位置し、幅約360mほどで、ほぼ南北に延びている。沖積低地との比高差は20～23mである。当遺跡の調査前の現況は、畑地・山林であった。

第2節 歴史的環境

金田西坪B遺跡周辺の板川及び花室川流域の台地には、旧石器時代から江戸時代までの遺跡が多数分布している。ここでは、『茨城県遺跡地図』²⁾に登録されている当該地域の主な遺跡を、時代ごとに概観する。

旧石器時代の遺跡は、上野古屋敷遺跡³⁾(15)、中根中谷津遺跡⁴⁾(20)、柴崎大堀遺跡⁵⁾(25)、東岡中原遺跡⁶⁾(28)で、石器集中地点が確認されている。中でも東岡中原遺跡では、ナイフ形石器、尖頭器、掻器、彫刻刀形石器、楔形石器、石刀、石核などが、多層位にわたって出土している。これらは県内の旧石器時代を考える上で重要な資料となっている。また、花室川左岸の北条中台遺跡⁷⁾、柴崎遺跡⁸⁾(7)からもナイフ形石器や尖頭器が出土しており、当該期の人々の活動の痕跡を確認することができる。花室川の川底からは、ナウマンソウ等の化石が出土しており、旧石器時代の人々が狩猟対象としていたことが考えられている⁹⁾。

縄文時代の遺跡は、多数確認されており、柴崎遺跡では、早期の炉穴が確認されている。上野陣場遺跡¹⁰⁾(14)、上野古屋敷遺跡、東岡中原遺跡では、前期の集落跡が確認されており、当該地域の人々が定住し始めたことを示している。中期に入ると、遺跡数も増加し、集落の規模が大きくなっている。花室川下流左岸の下広岡遺跡¹¹⁾は、大規模な集落跡が確認されている。後期には、周辺地域で貝塚が形成されるようになる。上境旭台貝塚¹²⁾(19)や板川下流域に存在する国指定史跡の土浦市上高津貝塚¹³⁾では、後期から晩期にかけて形成された貝塚が存在する。これらの貝塚からは、土器のほか、動物の骨などの自然遺物も多量に出土しており、当該期の生業活動を推測する上で良好な資料となっている。また、柴崎大堀遺跡、上野陣場遺跡、上野古屋敷遺跡、上境旭台貝塚、東岡中原遺跡からは、縄文時代に作られた陥し穴が確認されており、台地上が狩猟の場としても利用されていたことが分かる。

弥生時代の遺跡は、上野陣場遺跡、上野古屋敷遺跡、やや板川の支流にある玉取向山遺跡¹⁴⁾で、後期の集落跡が確認されているが遺跡数は少ない。玉取向山遺跡では、竪穴建物跡からバグマタイト産石英片が1,000g

以上出土しており、その使用目的については、以前より様々な見解が示されている³⁰⁾。

古墳時代になると遺跡数が急増し、桜川周辺の微高地や台地全域に広がる。桜川右岸では、上野陣場遺跡、上野古屋敷遺跡から前・後期、東岡中原遺跡から中期、柴崎遺跡から後期の集落跡がそれぞれ確認されている。古墳は、全長80mで当地域最大の前方後円墳である上野天神塚古墳(12)や、上野定使古墳群(13)が存在している。この他、栗原十日塚古墳(10)、栗原愛吾塚古墳(11)をはじめ、桜川右岸台地縁辺部に、円筒埴輪・人物埴輪・動物埴輪が出土した上境滝の古墳群(18)、埴輪片や石棺の破片が確認された横町古墳群(21)などが知られている³¹⁾。上境作ノ内古墳群(17)の1号墳では、発掘調査により石棺内から被葬者の骨が確認されている³²⁾。これらの古墳群のうち、前期古墳である上野天神塚古墳以外の古墳群は、いずれも後期古墳である。

奈良・平安時代の当該地域は、河内郡菅田郷に属し、その後12世紀には田中荘に属していた。当該期の遺跡は、桜川と花室川に挟まれた中根、金田を中心とする台地上に集中している。金田西坪B遺跡や金田西遺跡(3)については、平成12年から平成13年に河内郡衛正倉城・郡庁城・郡寺域確認のための確認調査が行われた。この確認調査によって、区画溝とその内部に掘立柱建物や礎石建物で構成される倉庫群が確認され、正倉城がほぼ明確になった。九重東岡庵寺(3)では、平成13年から平成14年に主要伽藍と寺域溝の確認調査が行われ、主要伽藍となりうる建物跡は確認できなかったが、金田西坪B遺跡、金田西遺跡とともに金田官衙遺跡群として国指定を受けた³³⁾。さらに、平成27・28年度に九重東岡庵寺と金田西遺跡の発掘調査を行い、奈良から平安時代の郡衙や郡寺を維持する人々の集落跡が南北に延びていることを確認した³⁴⁾。また、金田官衙遺跡群の西側に位置する東岡中原遺跡からは、河内郡衙を支えた郡司層及び下級官人の居住地と考えられる大規模な集落が確認されている³⁵⁾。

中世の遺跡も数多く確認されている。柴崎遺跡では、12～13世紀の方形堅穴遺構を中心とした集落跡が、上野古屋敷遺跡では、溝で区画された掘立柱建物跡を中心とする集落跡が確認されている³⁶⁾。また、金田西坪B遺跡では、以前の調査で15世紀後葉から16世紀中葉を中心とした屋敷跡が青白磁などの威信財とともに確認されており、屋敷地を区画する溝や、掘立柱建物跡、方形堅穴遺構などが検出された³⁷⁾。桜川左岸には小田氏の居城であった国指定史跡小田城跡があり、それに関連する城館跡も多い。桜川右岸には、柴崎片岡上館跡(5)、金田城跡(24)、花室城跡(32)、上ノ室城跡(37)、古米館跡(66)などが位置しており、戦国時代の当地域の緊張状態を伝えている。また、花室城の西には花室寺畑庵寺³⁸⁾(33)が、古米館跡の北には阿弥陀寺跡³⁹⁾(62)が知られており、いずれも中世瓦が採集されている。筑波山塊から霞ヶ浦西岸に偏在する中世瓦の分布は、特に小田氏領に顕著にみられ⁴⁰⁾、権威・外護者としての小田氏の影響力の強さを示している。室町時代から江戸時代にかけての遺跡には、柴崎大堀遺跡(25)があり、堀と土塁が確認され、隣接する金田城の守りも視野に入れないが街道閉鎖に主眼を置いたものと考えられている⁴¹⁾。当地域は鎌倉時代から室町時代にかけては小田氏が支配し、戦国時代には小田方と佐竹方の度重なる攻防により、その支配も変化した。柴崎地区は、中世末まで上境・中根・土器屋・松塚・横町・柴崎地区で一郷を構成し、筑波郡と境を隣接することから境郷とも呼ばれていた。

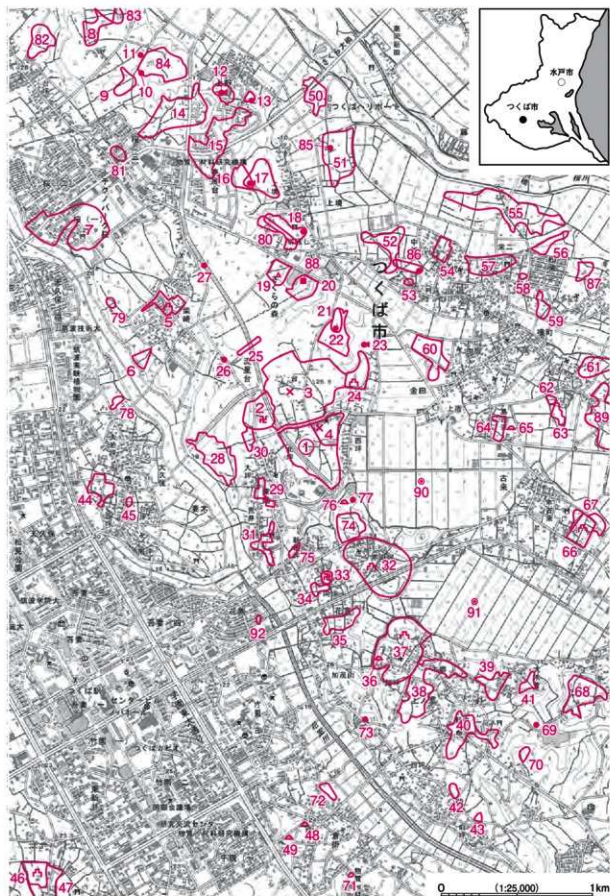
江戸時代には、堀氏王取藩の知行地となった上野・栗原地区を除き、当該地域の多くが土浦藩に属することになり、明治4年(1871)の廃藩置県に至っている。当該地域は、織田信長の側近として活躍した堀秀政の弟である利重が大坂の陣での武功により立藩した玉取藩及び徳川家康の一族で早くから家康に仕え武功を立てた松平信一が立藩した土浦藩、それぞれの藩の中心地とはならなかったものの、やや花室川の支流にある大角豆代川遺跡からは17世紀前半の瀬戸・美濃の志野鉄銚小皿が採集されている⁴²⁾。

※ 文中の()内の番号は、第1図及び第1表の当該番号と同じである。

註

- 1) a 大山年次監修『茨城県 地質のガイド』コロナ社 1977年8月
b 日本の地質「関東地方」編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 2007年5月
- 2) 茨城県教育庁文化課編『茨城県道跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) a 三谷正・大塚雅昭・桑村裕『上野古原敷道跡1 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』茨城県教育財団文化財調査報告第285集 2007年3月
b 川井正一『上野古原敷道跡2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』茨城県教育財団文化財調査報告第307集 2008年3月
c 川井正一・齋藤和浩『上野古原敷道跡3 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』茨城県教育財団文化財調査報告第324集 2009年3月
d 櫻井完介・江原美奈子『上野古原敷道跡4 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』茨城県教育財団文化財調査報告第334集 2010年3月
- 4) a 川村博博【(仮称)中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 中谷津道跡1】茨城県教育財団文化財調査報告第139集 1998年9月
b 荒井克一郎【中根中谷津道跡2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ】茨城県教育財団文化財調査報告第367集 2013年3月
- 5) 鹿野浩一・皆川貴之『柴崎大塚道跡・柴崎大日塚 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書ⅩⅠ』茨城県教育財団文化財調査報告第429集 2017年3月
- 6) a 成島一也【中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告Ⅱ 中原道跡1】茨城県教育財団文化財調査報告第155集 2000年3月
b 成島一也・宮田和男【中原道跡2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ】茨城県教育財団文化財調査報告第159集 2000年3月
c 高野節夫・白田正子・仲村浩一郎・島田和宏【中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中原道跡3】茨城県教育財団文化財調査報告第170集 2001年3月
d 駒澤悦郎【中根中原道跡4 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ】茨城県教育財団文化財調査報告第251集 2005年3月
- 7) 吉川明宏・新井聡・黒澤秀雄【(仮称)北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中台道跡】茨城県教育財団文化財調査報告第102集 1995年12月
- 8) a 高村勇【研究学園都市計画桜柴崎土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) 柴崎道跡Ⅰ・Ⅱ-Ⅰ区】茨城県教育財団文化財調査報告第54集 1989年9月
b 依藤正好・松浦敏【研究学園都市計画桜柴崎土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ) 柴崎道跡Ⅱ区 中塚道跡】茨城県教育財団文化財調査報告第63集 1991年3月
c 土生朗治【研究学園都市計画桜柴崎土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ) 柴崎道跡Ⅲ区】茨城県教育財団文化財調査報告第72集 1992年3月
d 萩野谷悟【研究学園都市計画桜柴崎土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ) 柴崎道跡Ⅱ区・Ⅲ区】茨城県教育財団文化財調査報告第93集 1994年9月
- 9) 飯泉克典・国府田貞樹・小池渉・西本豊弘・安藤寿男・伊達元成【茨城県霞ヶ浦西部花室川河床層より産出した後期更新世末期のニホンアマガサ化石】『地質学雑誌』第116巻 5号 2010年5月
- 10) a 川上直登・長谷川聡・大塚雅昭『上野陣場道跡 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』茨城県教育財団文化財調査報告第182集 2002年3月
b 川井正一・齋藤和浩『上野陣場道跡2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』茨城県教育財団文化財調査報告第323集 2009年3月
- 11) 加藤雅美・小河邦男『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 下法岡道跡』茨城県教育財団文化財調査報告第10集 1981年3月

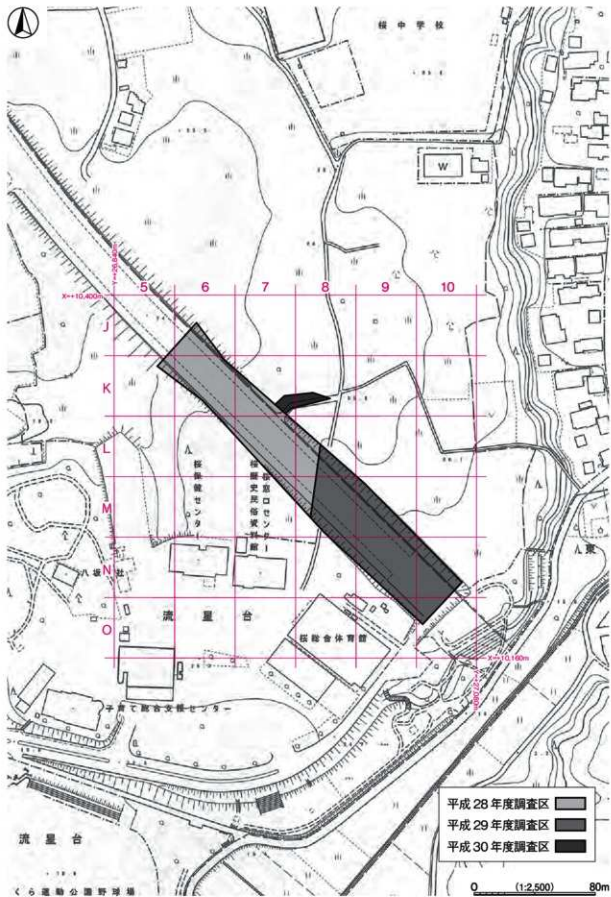
- 12) a 柴山正広・須賀川正一・小野政美・小川貴行・越川欣和『上境旭台貝塚 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIII』茨城県教育財団文化財調査報告第325集 2009年3月
- b 江原美奈子『上境旭台貝塚2 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XV』茨城県教育財団文化財調査報告第364集 2012年3月
- c 荒崎克一郎『上境旭台貝塚3 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XVII』茨城県教育財団文化財調査報告第368集 2013年3月
- d 小林和彦『上境旭台貝塚4 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIX』茨城県教育財団文化財調査報告第397集 2015年3月
- 13) a 佐藤孝雄・大内千年編『国指定史跡上高津貝塚A地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告-』土浦市教育委員会 1994年3月
- b 塩谷修『国指定史跡上高津貝塚E地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告-』土浦市教育委員会 2000年3月
- c 石川功・福田礼子編『国指定史跡上高津貝塚C地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告-』土浦市教育委員会 2006年3月
- 14) a 石橋光・関口友紀『玉取道跡-火葬場建設に伴う発掘調査報告-』つくば市教育委員会 2000年3月
- b 奥沢智也『玉取向山道跡 県立つくば養護学校(仮称)整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第263集 2006年3月
- 15) a 江幡良夫『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 原北北道跡Ⅱ 西原道跡』茨城県教育財団文化財調査報告第85集 1994年3月
- b 小川和博・大淵敦志・鍛冶文博『六十塚道跡』土浦市道跡調査会 1998年3月
- c 中村哲也『野中道跡 第2次調査報告書』美浦村教育委員会 2000年3月
- d 黒沢春彦『土浦周辺における弥生時代後期の様相』[土浦市立博物館紀要]第11号 土浦市立博物館 2001年3月
- e 関口満・窪田恵一『下郷道跡・下郷古墳群』下郷古墳群調査会 2001年7月
- 16) 桜村史編さん委員会『桜村史 上巻』桜村教育委員会 1982年3月
- 17) つくば市教育委員会『上境園前点検 遺物抽出接合・原稿執筆ノ1内1号墳 発掘・確認調査』[つくば市内道跡]つくば市 2001年3月
- 18) a 九重庵寺道跡調査団『東岡道跡-九重庵寺跡調査報告-』桜村教育委員会 1984年3月
- b 白田正子『金田西道跡 金田西坪B道跡 九重東岡庵寺 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』茨城県教育財団文化財調査報告第209集 2003年3月
- c 白田正子『九重東岡庵寺確認調査報告書1』茨城県教育財団 2001年3月
- 19) 荒井保雄『九重東岡庵寺 金田西道跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIX』茨城県教育財団文化財調査報告第435集 2019年3月
- 20) 註6)と同じ
- d 白田正子『東岡中原道跡の様相』[古代地方官衙周辺における集落の様相-常陸国河内郡を中心として-]2005年2月
- 21) 註3)と同じ
- 22) 野田良直『金田西坪B道跡 中根・金田台地区埋蔵文化財調査報告書XIX』茨城県教育財団文化財調査報告第443集 2020年3月
- 23) 橋嶋君男・梶崎祐輔『常陸南部における中世瓦の検討』『要良岐考古』第17号 1995年5月
- 24) つくば市教育委員会『つくば市道跡分布調査報告書-谷田部地区・桜地区-』つくば市 2001年3月
- 25) 比毛君男『常陸における中世瓦の様相』[東国の地域考古学]2011年3月
- 26) 註5)と同じ
- 27) 註23)と同じ



第1図 金田西坪B遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院25,000分の1「上郷」「常陸藤沢」「谷田部」「土浦」)

第1表 金田西坪B遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安			鎌倉・室町	江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
①	金田西坪B遺跡		○	○	○	○	○	47	小野崎宿遺跡						○	○
2	九重東岡摩寺							48	倉掛天神塚						○	○
3	金田西遺跡		○		○	○	○	49	倉掛千現塚							○
4	金田西坪A遺跡							50	上境北ノ内遺跡					○	○	○
5	柴崎片岡上館跡				○	○	○	51	上境古屋敷遺跡				○	○	○	○
6	柴崎南遺跡				○	○	○	52	中根不葉菰遺跡		○				○	○
7	柴崎遺跡	○	○	○	○	○	○	53	中根宮ノ前遺跡					○	○	○
8	栗原五竜遺跡		○		○	○	○	54	中根屋敷耐館跡					○	○	○
9	栗原大山西遺跡						○	○	55	中根遺跡					○	○
10	栗原十日塚古墳				○				56	松塚鷲打遺跡					○	○
11	栗原愛宕塚古墳				○				57	栄土器屋遺跡					○	○
12	上野天神塚古墳				○				58	栄屋敷付遺跡					○	○
13	上野定使古墳群				○				59	栄尼塚遺跡					○	○
14	上野陣場遺跡			○	○	○	○	○	60	金田竜宮橋遺跡					○	○
15	上野古屋敷遺跡	○	○	○	○	○	○	○	61	大白畑遺跡					○	○
16	上境作ノ内遺跡		○	○	○	○	○	○	62	阿弥陀寺跡					○	○
17	上境作ノ内古墳群				○				63	大南遺跡					○	○
18	上境滝の台古墳群				○				64	古來北ノ崎遺跡					○	○
19	上境旭台貝塚				○				65	古來島ノ前塚					○	○
20	中根中谷津遺跡	○	○						66	古來館跡		○	○	○	○	○
21	横町古墳群				○				67	古來遺跡					○	○
22	横町庚申塚遺跡		○		○	○	○	○	68	吉瀬清水台遺跡		○	○			
23	金田古墳				○				69	上ノ室大日塚古墳					○	○
24	金田城跡							○	70	上ノ室大十塚遺跡					○	
25	柴崎大堰遺跡	○	○						71	倉掛遺跡		○				
26	柴崎稲荷前古墳				○				72	倉掛明神の門遺跡				○		○
27	柴崎大日塚							○	73	上ノ室入定原古墳				○		
28	東岡中原遺跡	○	○						74	花室遺跡		○				
29	東岡南遺跡				○	○	○	○	75	花室溝向遺跡					○	
30	東岡中畑遺跡							○	76	花室後田塚						○
31	東岡天神前遺跡							○	77	花室大日塚古墳						
32	花室城跡	○	○	○	○	○	○	○	78	妻木湯ノ果遺跡					○	
33	花室寺畑庵寺							○	79	柴崎ボツケ遺跡					○	
34	花室寺山前遺跡							○	80	上境滝ノ臺遺跡		○	○			
35	花室儀置台遺跡				○	○	○	○	81	上野中塚遺跡		○		○	○	○
36	上ノ室タテ坪塚								82	栗原才十郎遺跡		○				
37	上ノ室城跡		○			○	○	○	83	栗原五竜塚古墳群					○	
38	上ノ室ハイバ遺跡					○	○	○	84	栗原大山遺跡						
39	上ノ室十枚遺跡					○	○	○	85	上境どんどん塚古墳						
40	上ノ室野中遺跡		○		○	○	○	○	86	中根とりい塚古墳群					○	
41	上ノ室薬師山遺跡							○	87	松塚高畑遺跡					○	○
42	上ノ室中坪後遺跡					○	○	○	88	中根中谷津古墳					○	
43	上ノ室中畑遺跡		○			○	○	○	89	大寺前遺跡					○	○
44	妻木坪内遺跡							○	90	金田本田遺跡					○	
45	妻木宮前遺跡							○	91	上ノ室桑里					○	
46	小野崎館跡							○	92	花室大根遺跡						



第2図 金田西坪B遺跡調査区設定図（つくば市都市計画図2,500分の1）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

金田西坪B遺跡は、つくば市の北東部に位置し、桜川の低地に臨む標高24mの右岸台地上に立地している。古くから河内郡衙・河内郡寺の推定地とされてきた場所であり、平成12年・13年度に確認調査が行われ、正倉院と正倉区画溝が確認されている。

今回の調査地区は、確認調査をした場所の南部にあたる。調査面積は、平成28年度4,470㎡、平成29年度4,247㎡、平成30年度279㎡である。総面積は8,996㎡となる。

調査の結果、竪穴建物跡44棟（縄文時代4、弥生時代4、古墳時代20、奈良時代12、平安時代4）、掘立柱建物跡29棟（奈良時代25、中・近世4）、鍛冶工房跡1棟（古墳時代）、大型円形土坑1基（奈良時代）、土坑146基（縄文時代22、弥生時代2、古墳時代3、奈良時代2、中・近世8、時期不明109）、溝跡13条（奈良時代1、中・近世3、時期不明9）、柱穴列2条（奈良時代）、陥し穴5基（縄文時代）、道路跡2条（近世）を確認した。

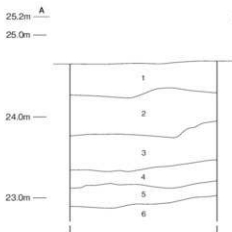
遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に86箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢）、弥生土器（壺）、土師器（坏・高台付坏・碗・小皿・鉢・壺・甕・瓶）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・鉢・捏鉢・甕・瓶）、土製品（土玉・土器片・紡錘車・羽口・円面硯）、石器（剥片・石鏃・磨製石斧・石皿・磨石・敲石・凹石・砥石）、石製品（白玉・剣型模造品・有孔円板）、金属製品（刀子・鉄鏃・釘・轡）、鍛冶関連遺物（鉄滓・碗状滓・粒状滓・鍛造剥片）などである。

第2節 基本層序

調査区中央部の台地上の平坦面（K74区）にテストピットを設定し、基本土層（第3図）の観察を行った。土層は6層に分層でき、第2・3層が関東ローム層である。

第1層は、表土である。粘性・締まりとも普通で、層厚は30～40cmである。

第2層は、暗褐色を呈するソフトローム層である。粘性は普通で締まりが強い。ロームブロックやローム粒子を少量含み、層厚は36～60cmである。



第3図 基本土層図

第3層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりとも普通で、層厚は40～50cmである。

第4層は、ローム層から粘土層への漸移層で、にぶい黄褐色を呈している。粘性・締まりともに強く、層厚は14～30cmである。

第5層は、灰白色を呈する常総粘土層である。粘性・締まりともに非常に強く、層厚は20～30cmである。

第6層は、浅黄褐色を呈するシルト層で、酸化鉄を含んでいる。粘性・締まりともに非常に強い。下層は未掘のため、本来の層位は不明である。

遺構は主に第2層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡4棟、土坑22基、陥し穴5基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第36号竪穴建物跡（第4・5図 PL 5）

位置 調査区南部のM9g5区、標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸2.75 m、短軸2.38 mの楕円形で、主軸方向はN-45°-Wである。壁高は10 cmで、緩やかに立ち上がっている。

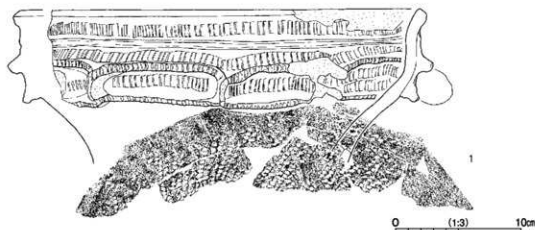
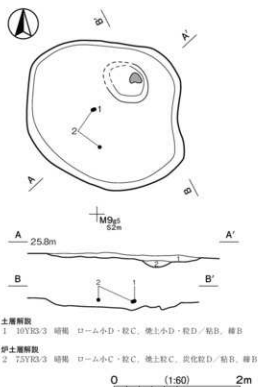
床 平坦で、硬化面は確認できなかった。

炉 北東部に付設されている。炉床面は、一部が火熱を受けて赤変硬化している。

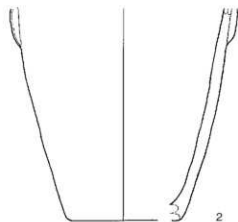
覆土 単一層である。上部が削平されているため、堆積の状況は不明である。

遺物出土状況 縄文土器片7点（深鉢）が出土している。1は中央部の覆土上層、2も接合した破片が中央部とやや南部の覆土上層から出土している。同一層からまとまって出土していることから、投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第4図 第36号竪穴建物跡・出土遺物実測図



0 (1:3) 10m

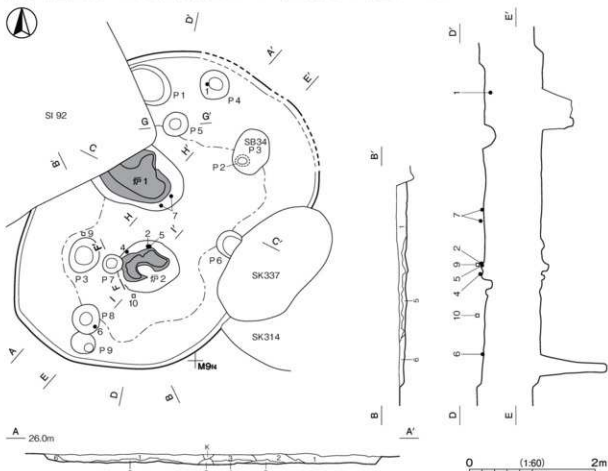
第5図 第36号竪穴建物跡出土遺物実測図

第2表 第36号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[316]	(123)	-	長石・石英・雲母	にぶい焼	普通	口縁上部陶文 隆帯による横杵区画 (区画内及び頸マセタビク文 黒文に墨黒文R1、部)	覆土上層	30% PL28
2	縄文土器	深鉢	-	(168)	[90]	長石・石英・雲母	橙	普通	2条の並行隆帯が垂下	覆土上層	30% PL28

第81号竪穴建物跡 (第6~8図 PL 5)

位置 調査区南部のM 9e3区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。



第6図 第81号竪穴建物跡実測図

重複関係 第92号竪穴建物、第34号掘立柱建物、第314・337号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.42m、短軸3.54mの楕円形で、主軸方向はN-41°-Eである。壁高は7~12cmで、緩やかに立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

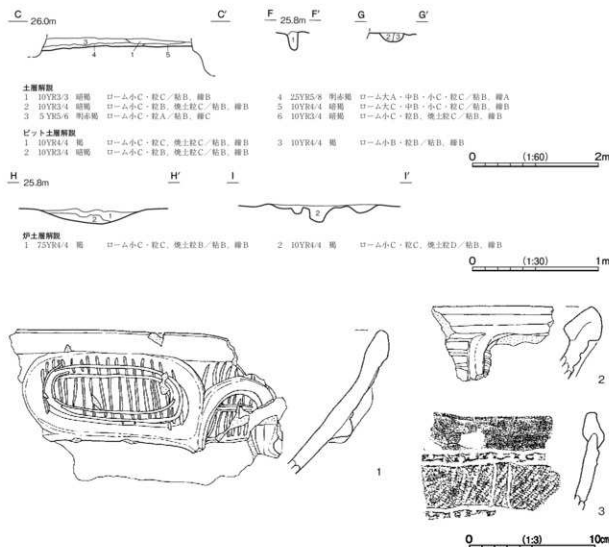
炉 2か所。炉1はほぼ中央部に、炉2はやや南部に付設されている。炉床面は、いずれも火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 9か所。深さは12~108cmで、性格は不明である。

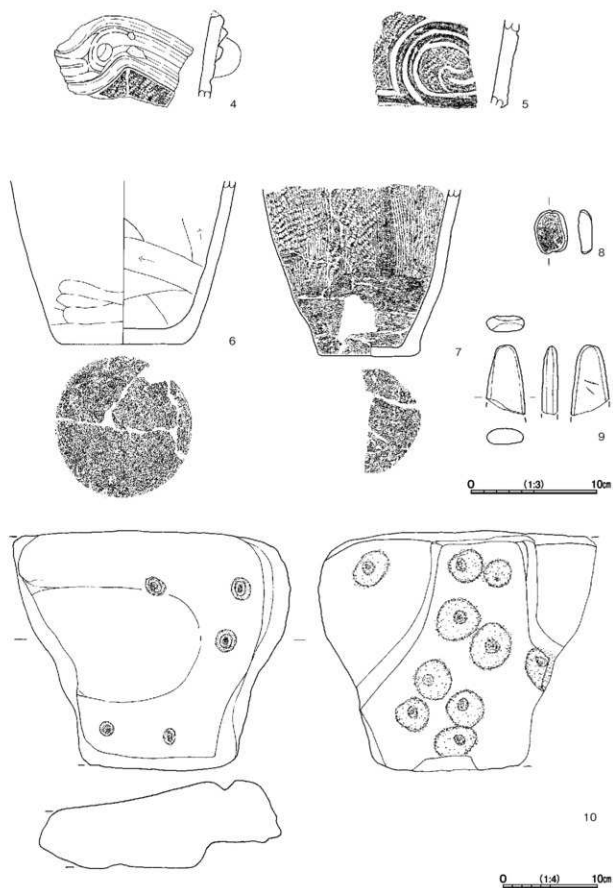
覆土 6層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片108点（深鉢）、土製品1点（土器片錘）、石器2点（磨製石斧、石皿・凹石）が出土している。2・4・5・7は炉1・2周辺、6は南部の床面から出土している。1はP4の覆土中層から、10は中央部の覆土上層から、3・8は覆土中からそれぞれ出土している。出土状況から、いずれも埋め戻す過程で、投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第7図 第81号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第8图 第81号窑穴建物跡出土遺物実測図

第3表 第81号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(11.5)	-	長石・石英・雲母・赤鉄粒子	橙	普通	上縁上部無文・隆帯による南内区画・区画内沈線を交錯・底文に半跏織文列。(横)	覆土中層	10% PL28
2	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・石英・雲母・赤鉄粒子	明赤褐	普通	口縁部巻き・隆帯による南内区画・区内キヤキヒツ文	伊2	
3	縄文土器	深鉢	-	(7.7)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁上部無文・口縁部下交互刺突・底文に半跏織文列。(横)	覆土中	PL28
4	縄文土器	深鉢	-	(6.9)	-	長石・石英・雲母	にがい橙	普通	太北縁による高卷文・平行縦文・底文に半跏織文列。(横)	伊2	PL28
5	縄文土器	深鉢	-	(7.2)	-	長石・石英・雲母・赤鉄粒子	橙	普通	隆帯による積み状の突起・横方向の平行沈線	伊2	PL28
6	縄文土器	深鉢	-	(13.1)	9.9	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外面下部横位のナゲ・内面横方向の削りとナゲ	床面	30%
7	縄文土器	深鉢	-	(13.2)	8.0	長石・石英・雲母・赤鉄粒子	明赤褐	普通	縁面拭工具による縦位の各種文・半跏織文LR(横)・底部に横位のヘラ痕りとナゲ	伊1	30% PL28
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴		出土位置	備考
8	土器片断	3.5	2.7	1.0	10.68	長石・石英	にがい赤褐	製部内・両端にキザリ目		覆土中	PL45
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
9	磨製石平	(5.6)	3.1	1.2	(33.94)	緑色岩	小型 全面研磨 側縁部に横 刃部欠損		覆土中層	PL46	
10	石片	(29.1)	25.3	9.1	(10.15)g	砂岩	周縁部上部研磨 中央部状に研磨 表裏面に凹み痕		覆土上層	PL46	

第96号竪穴建物跡(第9・10図 PL5)

位置 調査区中央部のM8区。標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第89号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 二段の掘り込みをもつ有段式竪穴建物跡である。隅丸長方形で、主軸方向はN-44°-Wである。上段は長軸8.10m、短軸5.92mである。壁は高さ24~54cmで、緩やかに立ち上がっている。下段は長軸5.70m、短軸4.50mで、上段との高低差は24cmである。壁はほぼ直立している。

床 上段・下段ともにはほぼ平坦で、下段の中央部が踏み固められている。上段の北壁下から東壁下にかけて壁溝が存在し、下段も南壁以外には壁溝が確認された。

ピット 6か所。P1~P4は深さ114~126cmで、下段の各コーナー部近くに位置しており、主柱穴と考えられる。P5・P6はそれぞれ深さ18cm・24cmで、性格は不明である。

覆土 8層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

遺物出土状況 縄文土器片29点(深鉢27, 浅鉢2), 石器1点(石鏃)が出土している。1~4は覆土中から出土しており、焼絶後、埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。

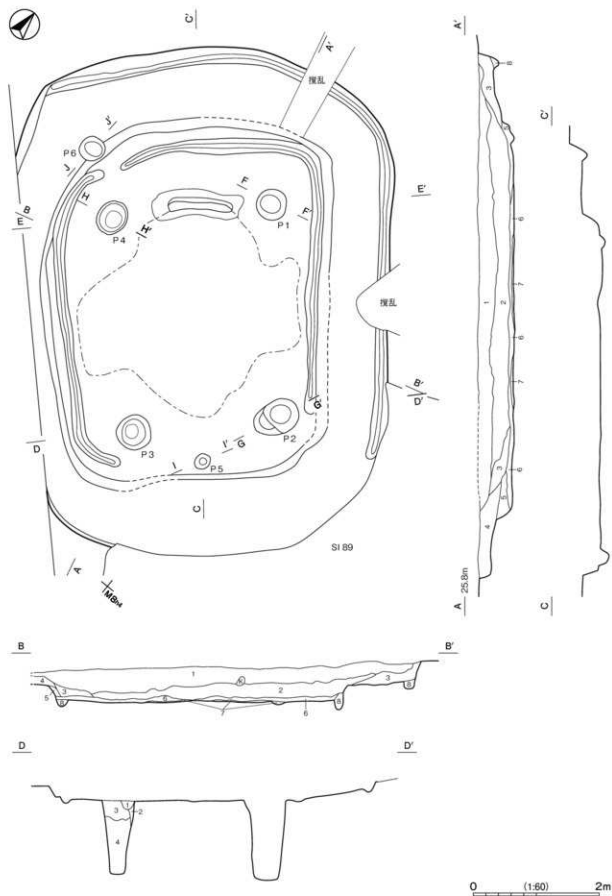
所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

土層解説

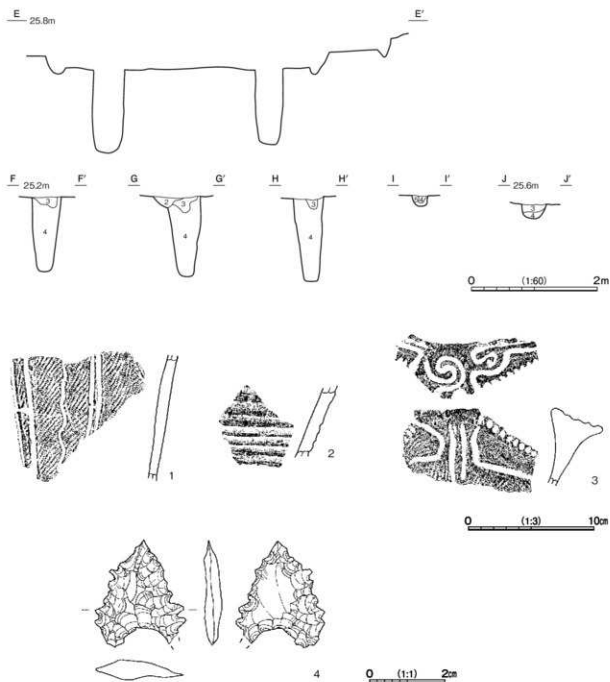
1	75YR4/3 黄	ローム粒B・炭化粒D・粘土・練A	5	75YR4/3 黄	ローム粒D・粘土・練A
2	75YR4/3 黄	ローム中D・小C・粒B・炭化粒D・粘土・練A	6	75YR5/3 じみ黄	ローム粒D・炭化粒D・粘土・練A
3	75YR4/3 黄	ローム小D・粒C・炭化粒D・粘土・練A	7	75YR2/2 黒褐	ローム小D・粒D・粘土・練A
4	75YR4/4 黄	ローム小D・粒D・粘土・練A	8	75YR4/3 黄	ローム小D・粘土・練A

ピット土層解説

1	75YR4/3 黄	ローム粒C・粘土・練A	4	75YR3/4 暗褐	ローム小D・粒D・炭化粒D・粘土・練A
2	75YR4/4 黄	ローム中D・小C・粒B・粘土・練B	5	75YR4/3 黄	ローム小D・粘土・練A
3	75YR4/3 黄	ローム小D・粘土・練A			



第9图 第96号聚穴建物跡実測図



第10図 第96号堅穴建物跡・出土遺物実測図

第4表 第96号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(10.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	単段縄文瓦(横) 沈線による蛇行線・並行線による星条文	覆土中	10% PL28
2	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶみ褐	普通	横段の連続大蛇線文	覆土中	PL28
3	縄文土器	浅鉢	-	(6.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口内底部に平出歯 三角筋に重り出し大渦巻文 口縁部沈線による区画 単段縄文瓦(横)	覆土中	10% PL28
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
4	石器	29	2.4	0.5	(1.96)	黒曜石	基部中央深く穿入 両面押圧割線			覆土中	PL46

第 97 号竪穴建物跡 (第 11・12 図 PL 5)

位置 調査区南部の N10b1 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

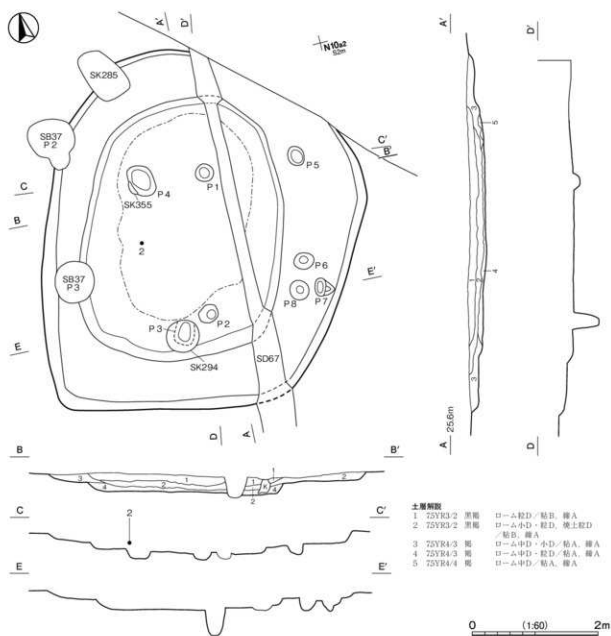
重複関係 第 37 号掘立柱建物、第 285・294・355 号土坑、第 67 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 二段の掘り込みをもつ有段式竪穴建物跡である。隅丸長方形で、主軸方向は N-14°-E である。上段は長軸 5.70 m、短軸 5.10 m である。壁は高さ 12~30 cm で、緩やかに立ち上がっている。下段は長軸 4.20 m、短軸 3.12 m で、上段との高低差は 18 cm である。壁は外傾して立ち上がっている。

床 上段・下段ともにほぼ平坦で、下段の中央部が踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

ピット 8 か所。ピットは深さ 12~45 cm で、性格は不明である。

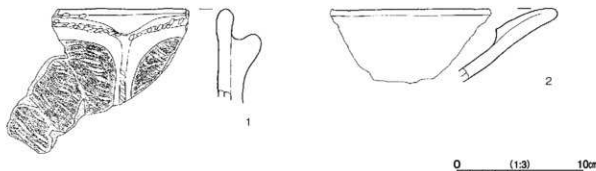
覆土 5 層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。



第 11 図 第 97 号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 縄文土器片 116 点（深鉢 115、浅鉢 1）が出土している。1 は廃絶後、埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 12 図 第 97 号堅穴建物跡出土遺物実測図

第 5 表 第 97 号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	他成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(11.4)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	上部無文 縁帯をV字状に貼付	掘削縄文土	覆土中 PL28
2	縄文土器	浅鉢	-	(5.9)	-	長石・石英・雲母	に近い橙	普通	外・内面縁位の丁寧な磨き	掘削中層	PL28

第 6 表 縄文時代堅穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	器高 (cm)	床面 構造	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考	
							柱穴 出入口	ピット	竈	貯蔵穴					
36	M9a5	N-45°-W	楕円形	2.75×2.38	10	平坦	-	-	-	丸味砂	-	不明	縄文土器	中期中葉	
81	M9a3	N-41°-E	楕円形	5.42×3.54	7~12	平坦	-	-	-	9 級砂	-	大為	縄文土器、石器	中期中葉	本跡→S192 S031、S8314、317
96	M8 f3	N-44°-W	楕円形	8.10×5.92	24~54	平坦	一部	4	2	-	-	自然	縄文土器、石器	中期中葉	本跡→S189
197	N10b1	N-14°-E	楕円形	5.70×5.10	12~30	平坦	-	-	-	8	-	自然	縄文土器	中期中葉	本跡→S107、S126、 294、295、S106

(2) 土坑

今回の調査で、縄文時代の土坑 22 基を確認した。形状や遺物出土状況などが特徴的な土坑 11 基については、文章と実測図、出土遺物一覧で解説する。その他の縄文時代の土坑については、実測図と土層解説を掲載する。

ア) 形状や遺物出土状況などが特徴的な土坑

第 153 号土坑 (第 13 図)

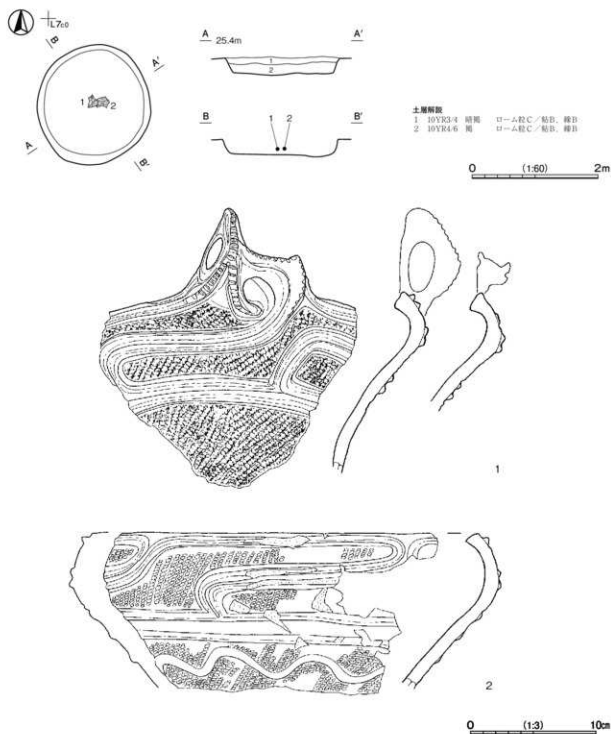
位置 調査区中央部の L7c0 区、標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 径 1.82 ~ 1.94 m の円形で、底面は平坦である。確認面からの深さは 26 cm で、外傾している。

覆土 2 層に分層できる。暗褐色土がレンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

遺物出土状況 縄文土器片 28 点（深鉢）が覆土中から出土している。1・2 共に覆土下層から出土しており、埋没する早い段階で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉である。



第13図 第153号土坑・出土遺物実測図

第7表 第153号土坑出土遺物一覧

番号	種別	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様の特徴はか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(21.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	縄文に準ぶ縄文文。縦の段帯に於いて浅褐色土文。段帯上に4-9mmの段帯による区画文。	覆土下層	20% PL30
2	縄文土器	深鉢	[308]	(124)	-	長石・石英・雲母・細礫	明褐色	普通	縄文に準ぶ縄文文。縦の段帯に於いて浅褐色土文。段帯上に4-9mmの段帯による区画文。	覆土下層	20% PL30

第181号土坑 (第14図 PL.6)

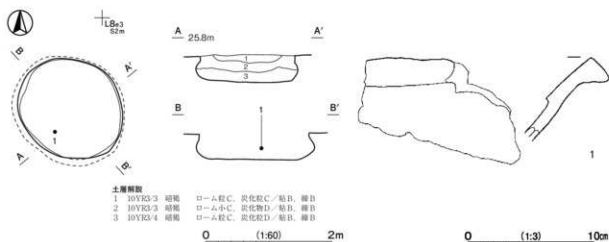
位置 調査区中央部のL 8e2区、標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 開口部は長径1.76 m、短径1.56 mで、長径方向がN-47°-Wの楕円形である。最大径は長径1.88 m、短径1.70 mで、底面は楕円形を呈し平坦である。確認面からの深さは44 cmである。壁は中位まで内彎して袋状を呈し、底面から30～35 cmのところできびれ、上位は直立している。

覆土 3層に分層できる。暗褐色土がレンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

遺物出土状況 縄文土器片91点(深鉢89、浅鉢2)が覆土中から出土している。1は覆土中層から出土しており、埋没する過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉である。



第14図 第181号土坑・出土遺物実測図

第8表 第181号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	浅鉢	-	(6.6)	-	長石・石英・赤色砂子	橙	普通	口野部肥厚・内面横位の溝き	覆土中層	10% PL20

第182号土坑 (第15・16図 PL.6)

位置 調査区中央部のL 8f3区、標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

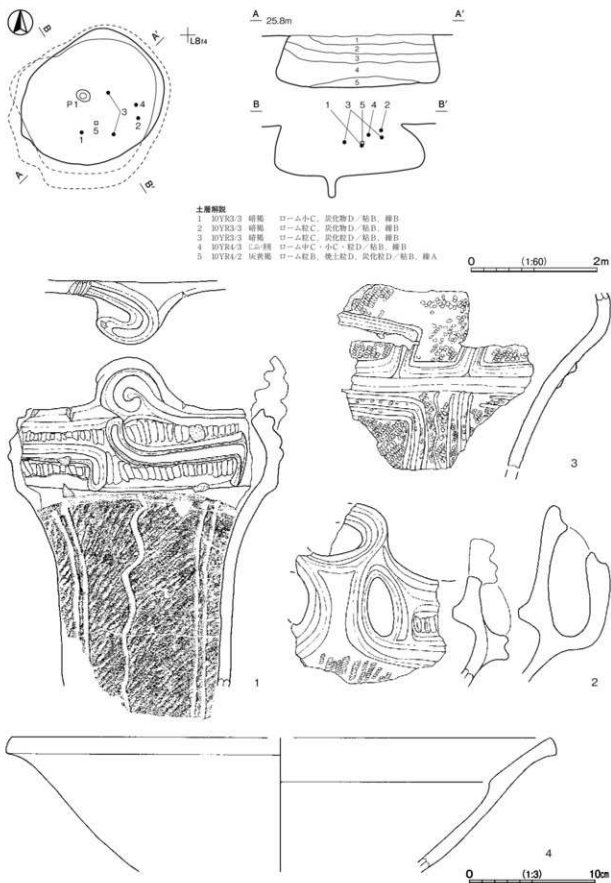
規模と形状 開口部は長径2.27 m、短径1.92 mで、長径方向がN-45°-Eの楕円形である。底面は長径2.60 m、短径2.40 mの楕円形で、平坦である。確認面からの深さは82 cmである。壁は内彎し、袋状を呈している。

ピット 底面中央に1か所確認した。性格は不明である。

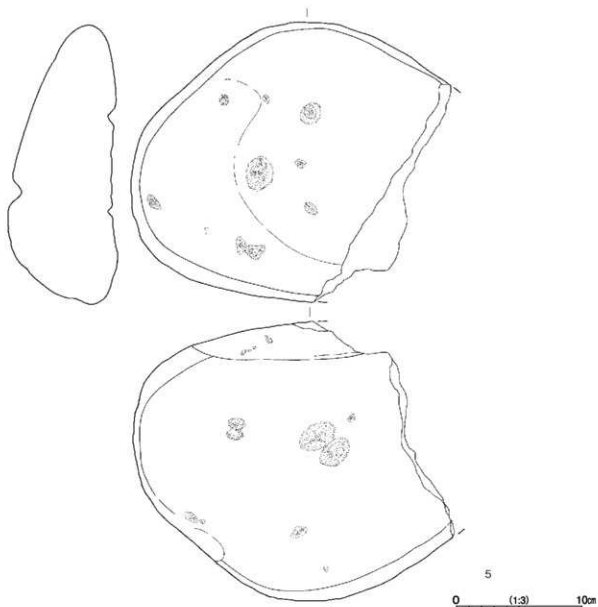
覆土 5層に分層できる。覆土がレンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

遺物出土状況 縄文土器片86点(深鉢85、浅鉢1)、石器2点(磨製石斧、石皿・凹石)が覆土中から出土している。1・3・5は覆土中層から出土しており、3は破片2点が接合したものである。2・4は覆土上層から出土している。これらは埋没の過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉である。



第15图 第182号土坑·出土遺物実測図



第16図 第182号土坑出土遺物実測図

第9表 第182号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[206]	(263)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	器部による遺着文・区画文（区画内キタダツク文） 器文に準ずる縄文列（縦）並行沈線・縦行沈線が若干	竈土中層	30% PL30
2	縄文土器	深鉢	-	(144)	-	長石・石英・雲母 にふくむ	普通	器部にはびらで太沈線が内文・隆部による方形区画 器文に準ずる縄文列（縦）	竈土上層	PL30	
3	縄文土器	深鉢	-	(139)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	暗	普通	器文に準ずる縄文列（縦） 逆し字状の縦行沈線・ 縦行沈線が若干	竈土中層	PL30
4	縄文土器	浅鉢	[426]	(107)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	明褐色	普通	外・内面横位の丁寧な刺さ	竈土上層	20% PL30

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	石槌・石臼	(22.2)	(25.5)	8.8	(5.25) kg	安山岩	中央部研削 表面面に凹み痕	竈土中層	PL47

第187号土坑 (第17図 PL 6)

位置 調査区中央部のL7a0区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径1.80m、短径1.64mの円形で、底面は平坦である。確認面からの深さは22cmで、壁は外傾している。



第17図 第187号土坑・出土遺物実測図

覆土 2層に分層できる。暗褐色土がレンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

遺物出土状況 縄文土器片 1点（深鉢）が覆土下層から完形に近い形でまともに出て出土した。埋没する早い段階で遺棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉である。

第10表 第187号土坑出土遺物一覧

番号	種別	形種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴はか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[267]	44.4	13.2	長石・石英・雲母	橙	普通	器文に華形縄文図、1層、窪帯による高卷文、区画文、胴部に縦行波線が帯下	覆土下層	80% PL29

第188号土坑（第18・19図 PL 6）

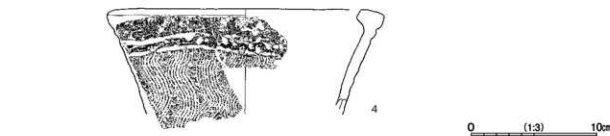
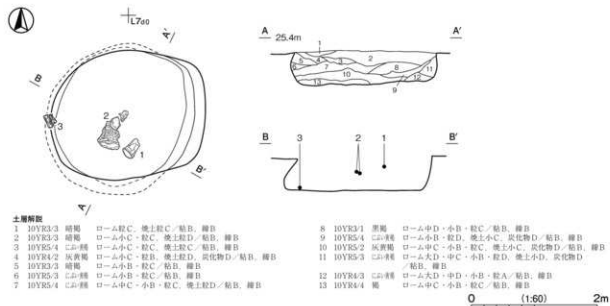
位置 調査区中央部のL7d0区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 開口部は長径2.60m、短径2.12mで、長軸方向がN-89°-Eの楕円形である。最大径は長径2.68m、短径2.24mで、底面は平坦で楕円形を呈する。確認面からの深さは56cmで、西壁は内彎、東壁は外傾している。

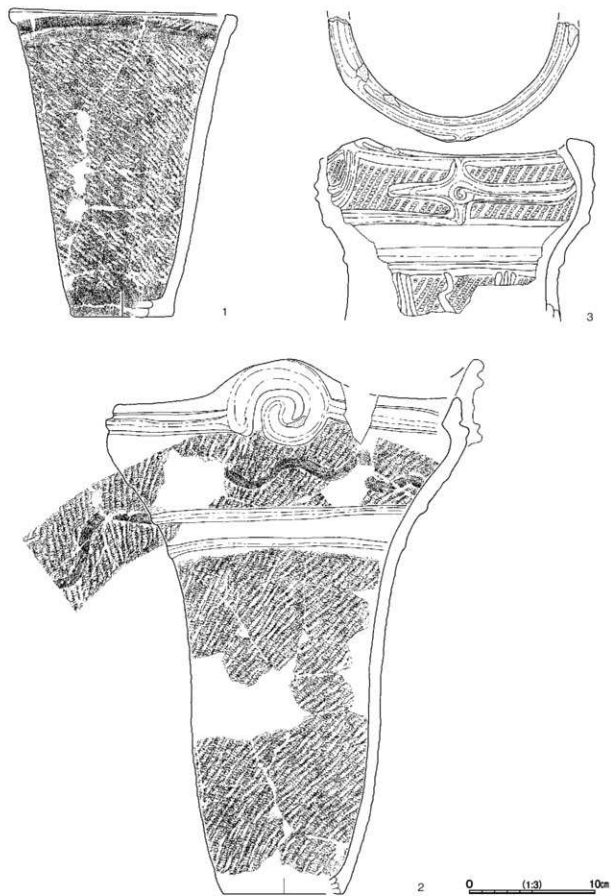
覆土 13層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片 57点（深鉢56、浅鉢1）が覆土中から出土している。1は覆土上層から、2は覆土中層から、3は覆土下層からそれぞれ出土しており、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉である。



第18図 第188号土坑・出土遺物実測図



第19图 第188号土坑出土遗物实测图

第11表 第188号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか*	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	17.0	24.5	[7.8]	長石・石英・雲母・赤色砂子	明赤褐色	普通	胎文に甲斐縄文LR(縦)と7部肥厚口縁部沈線が二重	覆土上層	90% PL29
2	縄文土器	深鉢	27.0	42.7	[9.5]	長石・石英・雲母	橙	普通	胎文に甲斐縄文縦(縦)・波道線土沈線による渦文口縁部沈線を伴った沈線が二重 胎文による横走流線が二重	覆土中層	80% PL29
3	縄文土器	深鉢	[19.6]	[14.6]	-	長石・石英・赤色砂子	に濃い橙	普通	胎文に甲斐縄文縦(縦)と1部肥厚口縁部が二重 胎文による渦文と区別文・流線沈線・横行沈線が二重	覆土下層	20% PL30
4	縄文土器	深鉢	[18.6]	(8.4)	-	長石・石英・赤色砂子	灰褐色	普通	胎文に甲斐縄文縦(縦)と流線沈線が二重	覆土中	10% PL30

第189号土坑 (第20図 PL.7)

位置 調査区中央部のL7e9区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

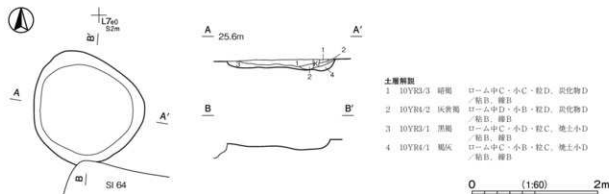
重複関係 第64号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.84m、短径1.74mの円形で、底面は平坦である。確認面からの深さは18cmで、壁は外傾している。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片5点(深鉢)が覆土中から出土している。いずれも細片で、図示できなかった。

所見 後世の削平により全体像が分からないが、規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第20図 第189号土坑実測図

第216号土坑 (第21・22図 PL.7)

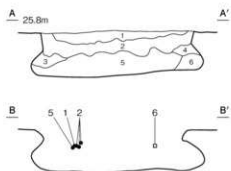
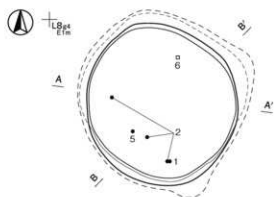
位置 調査区中央部のL8g4区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 開口部は径2.40～2.62mの円形である。最大径は長径3.08m、短径2.88mの不整形円形で、底面は平坦である。確認面からの深さは66cmで、壁は中位まで内彎して袋状を呈し、底面から40cmのところぐびれ、上位はほぼ外傾している。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片95点(深鉢92、浅鉢3)、石器5点(磨製石斧1、磨石2、敲石2)が出土している。2は覆土中層の第2層から散乱した状態で出土しており、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉である。

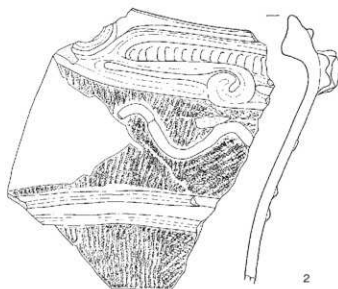
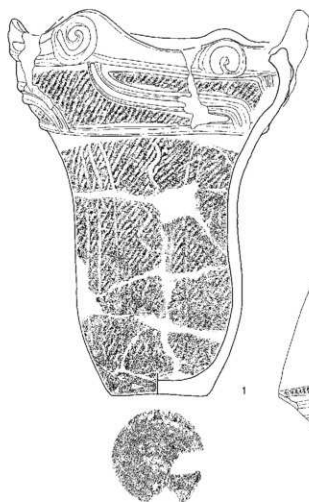


土層解説

- 1 75YR4-6 層
 ①-△小D・粒B、焼土中D・小D・粒B、炭化材B・粒D
 ②-粘B、雜A
- 2 75YR5-6 明層
 ①-△小D・粒B、焼土小D・粒B、炭化材D・粒D
 ②-粘B、雜B
- 3 75YR3-4 暗層
 ①-△小D・粒B、焼土小D・粒B、炭化物D・粒B
 ②-粘B、雜B

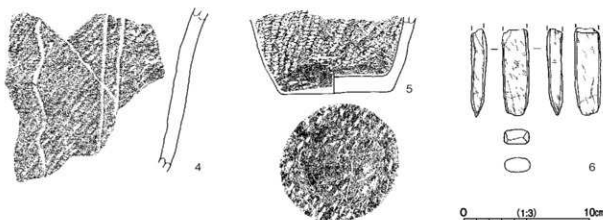
- 4 75YR3-3 暗層
 ①-△小D・粒B、焼土小D・粒D、炭化粒D
 ②-粘B、雜B
- 5 75YR5-5 明層
 ①-△中D・小D・粒B・粘A、雜B
- 6 75YR4-3 層
 ①-△小B・粒B、焼土粒D、炭化物D・粒D
 ②-粘A、雜B

0 (1:60) 2m



0 (1:3) 10m

第21図 第216号土坑・出土遺物実測図



第22図 第216号土坑出土遺物実測図

第12表 第216号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴はか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	22.6	30.8	7.5	長石・石英・雲母・赤色砂子	明赤褐色	普通	縄文に準給縄文風。(横) 隆帯による凸条文・凸角文。胎土に並行沈線・縦行沈線が多少	覆土中層	90% PL29
2	縄文土器	深鉢	-	(22.4)	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	縄文に準給縄文風。(横) 口縁部内のある段帯帯付胎土上に凸条文。縦行沈線内キツピリな文	覆土中層	10% PL31
3	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	縄文に準給縄文風。(横) 並行沈線・縦行沈線が多少。赤土層の縦行沈線	覆土中層	PL31
4	縄文土器	深鉢	-	(12.9)	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	縄文に準給縄文風。(横) 並行沈線・縦行沈線が多少	覆土中層	10% PL31
5	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	8.7	長石・石英・雲母・赤色砂子	赤	普通	準給縄文風。(横) 底面に網代文	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	磨製石斧	(7.0)	2.1	1.2	(30.8)	ホルンフェルス	小型 表裏面粗面に縦溝 舞線部に縦 基部欠損 刃は表裏から研ぎ出さず	覆土中層	PL46

第261号土坑 (第23図)

位置 調査区中央部の M 8b6区、標高 26 mほどの平坦な台地上に位置している。

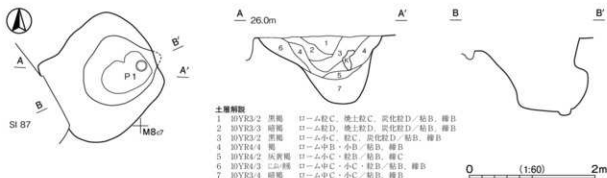
重複関係 第87号堅穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 1.72 m、短軸 1.65 mの隅丸方形で、長軸方向は N - 64° - Eである。底面は長径 0.78 m、短径 0.52 mの楕円形で、ほぼ平坦である。確認面からの深さは 120 cmで、東壁は中位まで内舞して袋状を呈し、底面から 70 cmのところできげれ、上位は外傾している。

ピット 底面東側に 1 か所確認した。性格は不明である。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片 4 点(深鉢)が覆土中から出土している。いずれも細片で、図示できなかった。



第23図 第261号土坑実測図

所見 規模と形状から、貯蔵穴と思われる。時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第336号土坑 (第24・25図 PL7)

位置 調査区南部のN9b9区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第73号竪穴建物、第194号土坑に掘り込まれている。

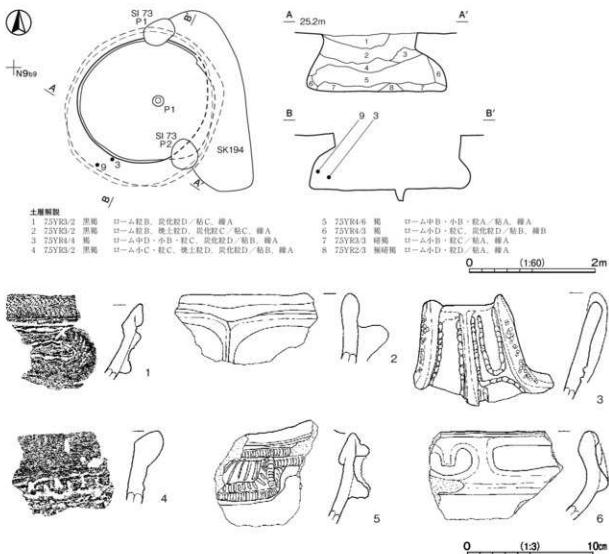
規模と形状 開口部は径2.00～2.04mの円形と推定できる。底面は長径2.64m、短径2.44mの円形で、平坦である。確認面からの深さは88cmで、壁は内彎して袋状を呈し、底面から62～80cmのところできびれ、上位は直立している。

ピット 底面はほぼ中央に1か所確認した。性格は不明である。

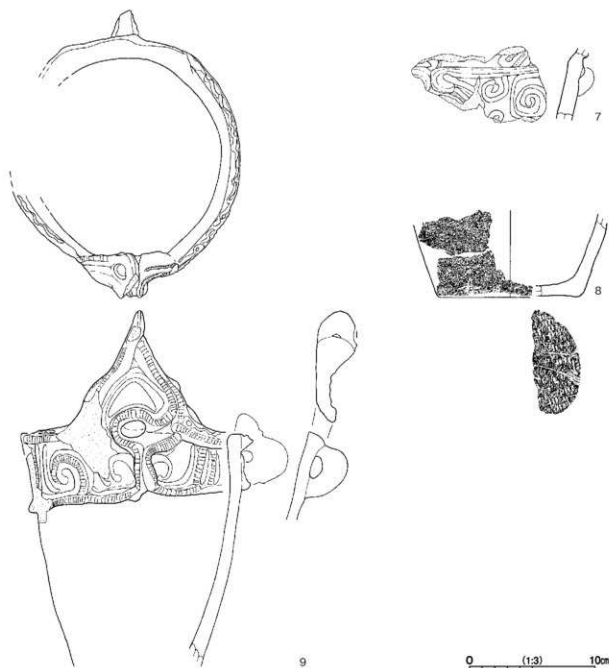
覆土 8層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、第3層までは埋め戻され、その後、自然堆積したものと考えられる。第7層は壁の崩落土と思われる。

遺物出土状況 縄文土器片71点(深鉢)が出土している。3・9はいずれも覆土下層から出土しており、9は完形に近い形で出土した。どちらも埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉である。



第24図 第336号土坑・出土遺物実測図



第25図 第336号土坑出土遺物実測図

第13表 第336号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	陶文土器	深鉢	-	(5.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部肥厚 肥厚部に単曲線文(Ⅰ区) 胎土上に多方向から単曲線文(Ⅱ区)	覆土中	
2	陶文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胎帯による横み林の発軀	覆土中	
3	陶文土器	深鉢	-	(8.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい中橙	普通	胎帯に沿って斜引目研ぎ文 胎土面厚から1条の断面呈三角形の胎帯が垂下胎帯上に単曲線文(Ⅰ区) 胎	覆土下層	
4	陶文土器	深鉢	-	(5.8)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部肥厚 胎帯に交互刺突文	覆土中	
5	陶文土器	深鉢	-	(7.2)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	胎帯による区画 区画内条線文(Ⅰ区) 胎帯上条線で文様描画	覆土中	
6	陶文土器	深鉢	-	(7.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部厚みのみから胎帯斜付列、内面下帯交字文	覆土中	
7	陶文土器	深鉢	-	(6.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい中橙	普通	洗練により流暢文様描写	覆土中	
8	陶文土器	深鉢	-	(6.8)	[110]	長石・石英・雲母・赤色粘土	橙	普通	外・内面下帯交字文 胎面に刺突文	覆土中	
9	陶文土器	深鉢	[17.0]	(28.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい中橙	普通	口縁部交互刺突による流暢文 口縁部肥厚 胎帯上条線と皮線で文様描画 口縁下1/2交帯手	覆土下層	80%

第352号土坑 (第26図 PL 8)

位置 調査区南部のM 9f6区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

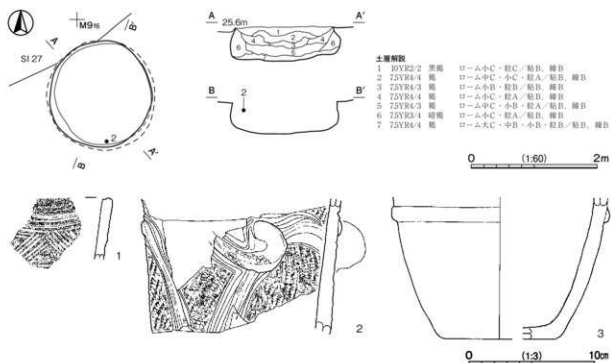
重複関係 第27号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は径1.55～1.70mの円形である。最大径は長径1.76m、短径1.72mで、底面は平坦である。確認面からの深さは52cmで、壁は内増して袋状を呈している。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片11点(深鉢)が覆土中から出土している。2は南側覆土中層から出土しており、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 上層が削平されているが、規模と形状から貯蔵穴と考えられる。時期は、出土土器から中期中葉である。



第26図 第352号土坑・出土遺物実測図

第14表 第352号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様の特徴	はか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(49)	-	長石・石英	橙	普通	沈澱による文様線画		覆土中	PL31
2	縄文土器	深鉢	-	(108)	-	長石・石英・赤色粒子	淡黄橙	普通	胎土上に突如、縁帯縁を二重沈澱により区画した単純縄文型。(編)		覆土中層	10% PL31
3	縄文土器	深鉢	-	(113)	[86]	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	外・内面丁寧なナデ	縁部に縁帯	覆土中	10%

第364号土坑 (第27図 PL 8)

位置 調査区南部のM 9d2区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

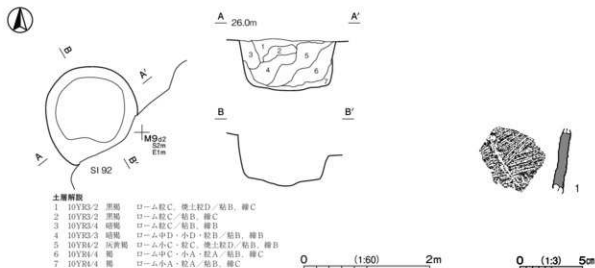
重複関係 第92号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.60m、短径1.46mで、長径方向がN-16°-Eの楕円形である。底面は径1.2mのほぼ円形で、平坦である。確認面からの深さは80cmで、壁は直立している。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 縄文土器片1点(深鉢)が、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から早期木炭と考えられる。



第 27 図 第 364 号土坑・出土遺物実測図

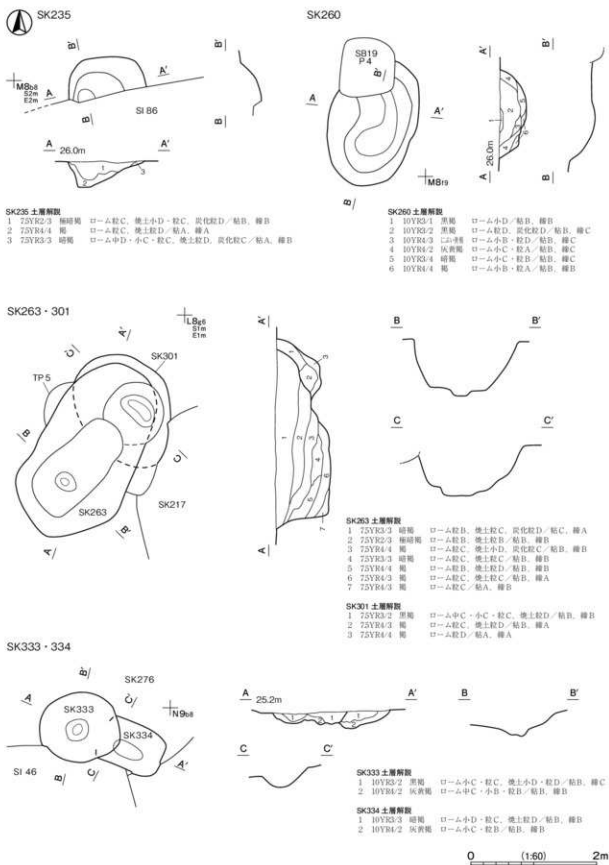
第 15 表 第 364 号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	長石	紅褐色	普通	胎土に植物繊維を含む。外・内面只縁による文	覆土中	PL31

第 16 表 縄文時代土坑一覧

番号	位置	主軸方向	開口部平面形	概 略 (m)		深さ (m)	底面	壁面	ビッド	覆土	主な出土遺物	備考
				開口部長径×短径	最大径長径×短径							
153	L 7 c0	-	円形	1.94 × 1.82	-	26	平坦	外縁	-	自然	縄文土器	
181	L 8 e2	N - 47° - W	楕円形	1.76 × 1.56	1.88 × 1.70	44	平坦	直立内壁	-	自然	縄文土器	
182	L 8 f3	N - 45° - E	楕円形	2.27 × 1.92	2.60 × 2.40	82	平坦	内壁	1	自然	縄文土器、石器	
187	L 7 a0	N - 22° - E	円形	1.80 × 1.64	-	22	平坦	外縁	-	自然	縄文土器	
188	L 7 d0	N - 80° - E	楕円形	2.00 × 2.12	2.08 × 2.24	56	平坦	内壁	-	人為	縄文土器	
189	L 7 e9	N - 21° - W	円形	1.84 × 1.74	-	18	平坦	外縁	-	人為	縄文土器	本跡→SI64
216	L 8 g4	-	円形	2.62 × 2.40	3.08 × 2.88	66	平坦	外縁内壁	-	人為	縄文土器、石器	
235	M 8 h8	N - 80° - E	[楕円形]	1.22 × (0.64)	-	40	皿状	縦斜	-	人為	縄文土器	本跡→SI86 PL 7
260	M 8 e8	N - 11° - E	楕円形	1.96 × 1.40	-	48	皿状	縦斜外縁	-	人為		本跡→SI19 PL 7
261	M 8 h6	N - 64° - E	楕円方形	(1.72) × 1.65	-	120	平坦	外縁内壁	1	人為	縄文土器	本跡→SI87
263	L 8 a5	N - 34° - E	楕円形	3.06 × 1.64	-	80	平坦	外縁	1	自然	縄文土器	SK301、TP 5 →本跡
301	L 8 a6	N - 40° - W	楕円形	1.78 × (1.36)	-	68	皿状	外縁	1	自然		SK302 →本跡 →SK217、280
333	N 9 g7	N - 70° - W	楕円形	1.32 × 1.12	-	28	凹凸	縦斜	-	不明		SK334 →本跡 →SI86、SK276
334	N 9 g7	N - 70° - W	[楕円方形]	(1.04) × 0.76	-	20	皿状	縦斜	-	自然		本跡→SI8
336	N 9 a9	-	[円形]	2.04 × (2.00)	2.64 × 2.44	88	平坦	直立内壁	1	自然	縄文土器	SK276、333 PL 7、本跡→SI73、SK191
337	M 9 e4	N - 44° - E	楕円形	2.18 × 1.25	-	69	平坦	ほぼ直立	1	自然	縄文土器	SI81 →本跡 →SI27、SK314
352	M 9 f6	-	円形	1.70 × 1.55	1.76 × 1.72	52	平坦	内壁	-	人為	縄文土器	本跡→SI27
353	M 9 e3	N - 35° - E	楕円形	1.80 × 0.90	-	31	傾斜	外縁縦斜	-	自然		本跡→SI92、98 PL 8
364	M 9 d2	N - 16° - E	楕円形	1.60 × 1.46	-	80	平坦	直立	-	人為	縄文土器	本跡→SI92
366	M 8 a9	N - 67° - E	不整楕円形	0.56 × 0.30	-	52	有段	外縁	-	自然	縄文土器	本跡→SI86
378	K 8 h2	N - 75° - E	[円形・楕円形]	2.30 × (1.24)	-	122	平坦	ほぼ直立	-	自然	縄文土器	
379	K 8 g4	N - 10° - E	楕円形	0.44 × 0.32	-	44	有段	外縁	-	自然	縄文土器	

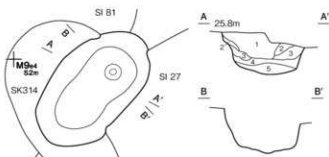
イ) その他の縄文時代の土坑 (第28・29図 PL 7・8)



第28図 その他の縄文時代の土坑実測図(1)



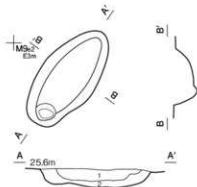
SK337



SK337 土層解説

- 1 10YR3-3 赤褐色 ㊦-ム小C・粒C・焼土粒C/粘B、礫B
- 2 10YR3-4 暗褐色 ㊦-ム小C・粒C・焼土粒C/粘B、礫B
- 3 10YR4-4 褐色 ㊦-ム小C・粒B・焼土粒C/粘B、礫B
- 4 10YR4-4 褐色 ㊦-ム小C・粒C/粘B、礫B
- 5 10YR3-4 暗褐色 ㊦-ム小C・粒C/粘B、礫B

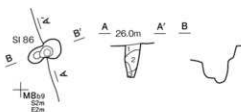
SK353



SK353 土層解説

- 1 7.5YR3-3 暗褐色 ㊦-ム小C・粒C/粘B、礫B
- 2 7.5YR3-4 暗褐色 ㊦-ム小B・粒B/粘B、礫B

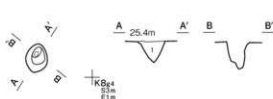
SK366



SK366 土層解説

- 1 10YR4-4 褐色 ㊦-ム粒B、焼土粒C/粘B、礫B
- 2 10YR3-2 赤褐色 ㊦-ム小D・粒B/粘C、礫B
- 3 10YR3-2 赤褐色 ㊦-ム中D・小B・粒C、炭化粒D/粘C、礫A

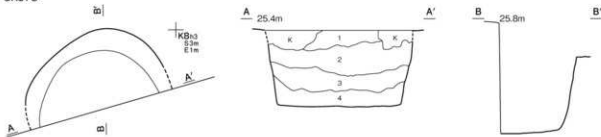
SK379



SK379 土層解説

- 1 10YR2-2 赤褐色 ㊦-ム小D・粒C/粘B、礫B

SK378



SK378 土層解説

- 1 10YR2-2 赤褐色 ㊦-ム粒C/粘B、礫B
- 2 10YR2-2 赤褐色 ㊦-ム小D・粒C/粘B、礫B
- 3 10YR2-3 赤褐色 ㊦-ム小D・粒B/粘B、礫B
- 4 10YR2-3 暗褐色 ㊦-ム小B・粒B/粘B、礫B

0 (1:50) 2m

第29図 その他の縄文時代の土坑実測図(2)

(3) 陥し穴

第4号陥し穴 (第30図 PL.8)

位置 調査区中央部のM9b1区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

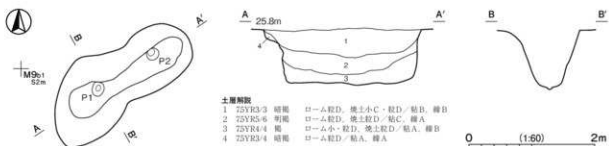
規模と形状 長径2.52m、短径1.12mの不整楕円形で、長径方向はN-56°-Eである。深さは100cmで、底面はほぼ平坦である。短径方向の断面形はV字状で、壁は外傾している。

ピット 底面に2か所確認した。P1・P2は径25cm・21cmで、深さ4cm・8cmである。いずれも規模が小さいため、性格は不明であるが、逆茂木のピットの可能性がある。

覆土 4層に分類できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

遺物出土状況 縄文土器片4点(深鉢)が覆土中から出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器が細片のため明確ではないが、覆土の色調や他の陥し穴との関係から、早期から前期と考えられる。



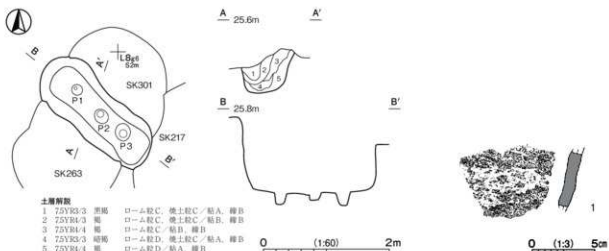
第30図 第4号陥し穴実測図

第5号陥し穴 (第31図 PL.8)

位置 調査区中央部のL8g5区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第217・263・301号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第217・263・301号土坑に掘り込まれているため、長径2.16m、短径0.92mしか確認できなかった。平面形は楕円形で、長径方向はN-43°-Wである。深さは120cmで、底面はほぼ平坦である。遺存する短径方向の断面形はU字状で、壁はほぼ直立している。



第31図 第5号陥し穴・出土遺物実測図

ピット 底面に3か所確認した。P1～P3は径18～29cmで、深さ10～25cmである。規模と形状から逆茂木のピットと考えられる。

覆土 5層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

遺物出土状況 縄文土器片15点(深鉢)が覆土中から出土している。1は陥し穴が埋まる過程で流れ込んだものと考えられる。

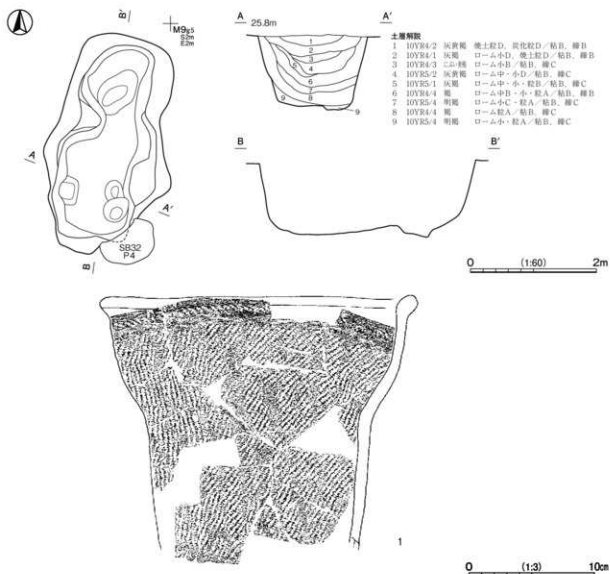
所見 時期は、出土土器から早期から前期と考えられる。

第17表 第5号陥し穴出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	長石・石英	黒褐色	普通	胎土に繊維を多く含む 外面艶く潤滑	覆土中	PL31

第6号陥し穴(第32図 PL 8)

位置 調査区中央部のM9g5区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。



第32図 第6号陥し穴・出土遺物実測図

重複関係 第32号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径3.52 m、短径2.12 mの不整楕円形で、長径方向はN-16°-Eである。深さは120 cmで、底面はほぼ平坦である。短径方向の断面形はU字状で、壁はほぼ直立している。

覆土 9層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

遺物出土状況 縄文土器片16点(深鉢)が覆土中から出土している。1は覆土中からの出土で、破片が接合したものである。いずれも埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器及び周辺の陥し穴との関係から、前期から中期と考えられる。

第18表 第6号陥し穴出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	230	(202)	-	長石・石英・雲母	にぶい	普通	口縁部肥厚	肥厚部・地文に華道縄文RL(縦)	覆土中	30% PL31

第7号陥し穴(第33図 PL 8)

位置 調査区南部のM9i3区、標高27 mほどの平坦な台地上に位置している。

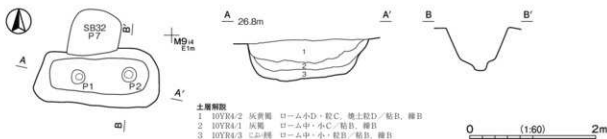
重複関係 第32号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸1.93 m、短軸0.94 mの長方形で、長径方向はN-87°-Wである。深さは66 cmで、底面はほぼ平坦である。短軸方向の断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾している。

ピット 底面に2か所確認した。P1・P2は径22 cm・25 cmで、深さ8 cm・10 cmである。いずれも規模が小さいため、性格は不明であるが、逆茂木のピットの可能性がある。

覆土 3層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

所見 遺物は出土していない。時期は、形状や周辺の陥し穴との関係から、早期から前期のものと考えられる。



第33図 第7号陥し穴実測図

第8号陥し穴(第34図 PL 8)

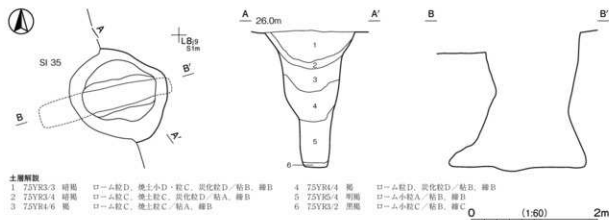
位置 調査区中央部のL8j8区、標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第35号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径1.60 m、短径1.48 mの楕円形で、長径方向はN-29°-Wである。深さは220 cmで、底面は平坦である。長径方向の断面形はV字状で、底面から直立し、上位は緩やかに外傾している。短径方向の断面形は袋状を呈し、壁は内傾して底面から80~120 cmのところまでぐびれ、上位は外傾している。

覆土 6層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

所見 遺物は出土していない。時期は、形状や周辺の陥し穴との関係から、早期から前期のものと考えられる。



第34図 第8号陥し穴実測図

第19表 縄文時代陥し穴一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m) (軸) (軸)	深さ (cm)					
4	M9s1	N-56°-E	不整形円形	2.52×1.12	100	外傾	平坦	自然	縄文土器	
5	L8s5	N-43°-W	楕円形	(2.16×0.92)	120	ほぼ直立	平坦	自然	縄文土器	本跡→SK217・263・301
6	M9s5	N-16°-E	不整形円形	3.52×2.12	120	ほぼ直立	平坦	自然	縄文土器	本跡→SE32
7	M913	N-87°-W	長方形	1.93×0.94	66	外傾	平坦	自然		本跡→SE32
8	L818	N-29°-W	楕円形	1.60×(1.48)	220	ほぼ直立	平坦	自然		本跡→SE35

2 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡4棟、土坑2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第12号竪穴建物跡 (第35・36図 PL.9)

位置 調査区中央部のM8c0区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.56m、短軸5.04mの隅丸長方形で、主軸方向はN-48°-Wである。壁高は36～56cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

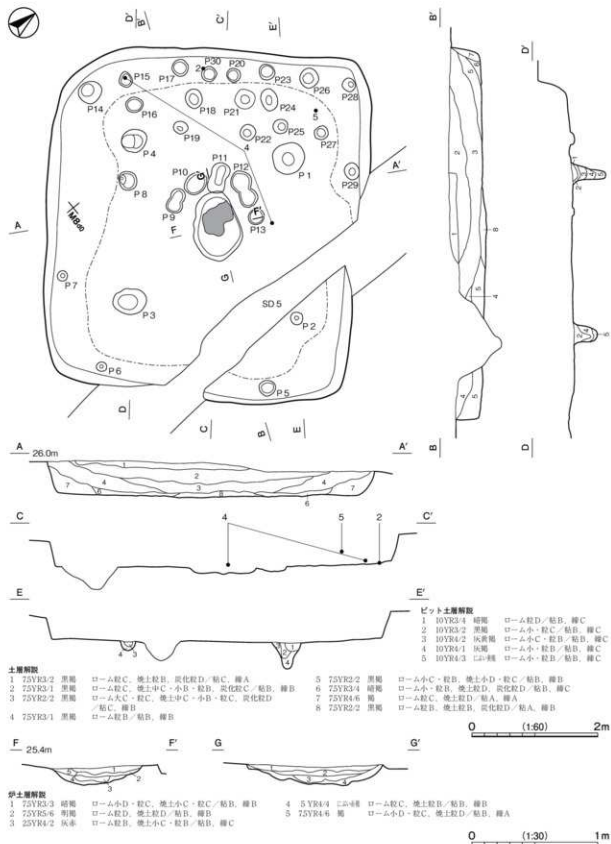
炉 中央部に付設されている。床面を浅く皿状に掘りくぼめて使用した地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 30か所。P1・P3・P4は深さ40～55cmで、配置から主柱穴と考えられる。その他のピットは、深さ4～53cmとばらつきがある。特に北西に集中して確認したが、性格は不明である。

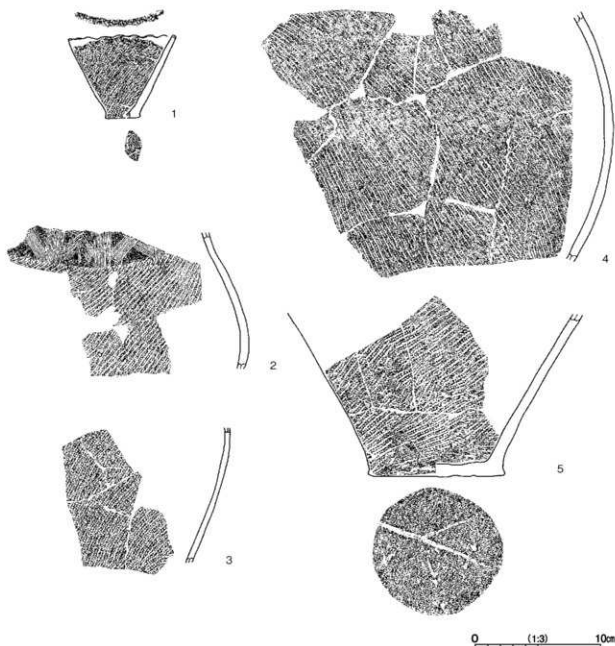
覆土 8層に分層できる。各層に焼土粒子や炭化粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 弥生土器片43点(齋42、鉢1)、石器1点(敲石)、石英片3点(64.54g)が出土している。2は北部の床面から出土しており、本跡が廃絶された際に遺棄されたものと考えられる。4は西コーナー部と中央の覆土下層から出土した破片2点が接合したものである。5は覆土中層から、1・3は覆土中からそれぞれ出土しており、埋め戻される過程で混入したと思われる。

所見 覆土中から石英片がまとまって出土しており、当時の人々が石器・石製品の製作等、何らかの形で使用していた可能性が考えられる。時期は、出土土器から後期前半と考えられる。



第35図 第12号竪穴建物跡実測図



第36図 第12号竪穴建物跡出土遺物実測図

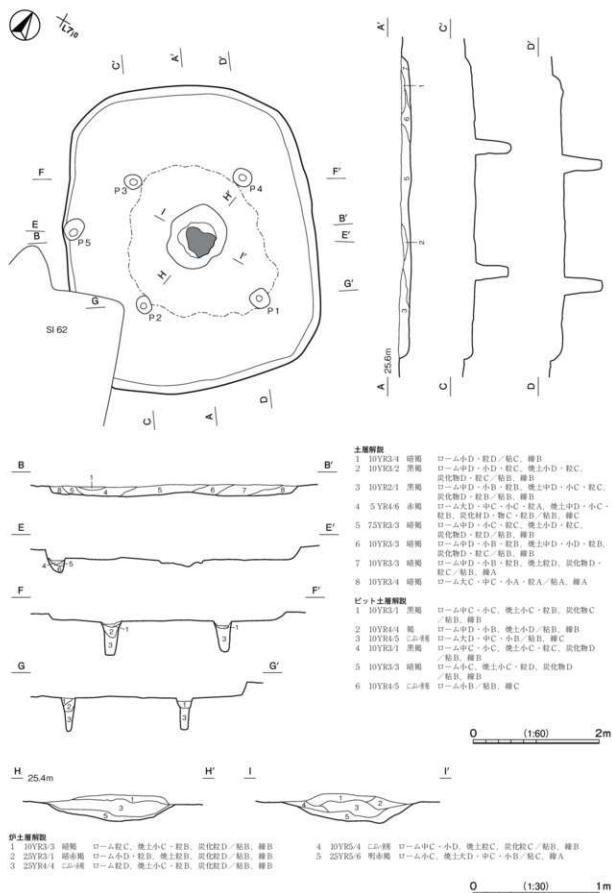
第20表 第12号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種類	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	赤生土器	鉢	[88]	6.5	[28]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇交互斜変による波状口縁 内面傾位のナデ 体部附加状1種付加2条	覆土中	30% PL32
2	赤生土器	壺	-	(10.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部10条1単位の縦曲文 肩付区前後支張山形文 内肩ノ交文字ナデ 体部附加状1種付加2条	床面	10% PL32
3	赤生土器	壺	-	(10.8)	-	長石・石英	褐	普通	体部附加状1種付加2条	覆土中	5% PL32
4	赤生土器	壺	-	(10.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	外・内面劣化 体部附加状1種付加2条	覆土下層	20% PL32
5	赤生土器	壺	-	(13.0)	10.3	長石・石英・雲母・赤鉄粉	にぶい褐	普通	内面傾位のナデ 体部附加状1種付加2条 底部4重直	覆土中層	30% PL32

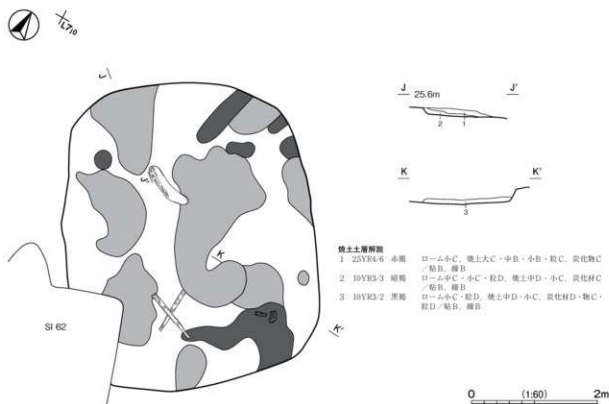
第66号竪穴建物跡 (第37～39図)

位置 調査区中央部のL7j0区。標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第62号竪穴建物に掘り込まれている。



第37図 第66号堅穴建物跡実測図(1)



第38図 第66号竪穴建物跡実測図(2)

規模と形状 長軸4.80 m、短軸3.94 mの隅丸長方形で、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は12～18 cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

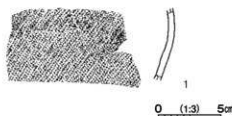
炉 中央部に付設されている。炉面を30 cmほど掘りくぼめて使用した地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変色化している。

ピット 5か所。P1～P4は深さ50～65 cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ25 cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層に分層できる。覆土が薄く、堆積の状況は不明である。

遺物出土状況 弥生土器片14点(壺)、石英片2点(46.04 g)が出土している。1は覆土中から出土している。

所見 焼土と炭化材が広範囲で検出されたことから、焼失住居である。時期は、出土土器から後期前半と考えられる。



第39図 第66号竪穴建物跡出土遺物実測図

第21表 第66号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(5.8)	-	灰石・石英・雲母	灰青褐色	普通	附加様1種付加2条	内面変化により不明	覆土中	5% PL32

第 69 号竪穴建物跡 (第 40 図 PL 9)

位置 調査区南部の N 9g0 区、標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 23・24 号掘立柱建物、第 222 号土坑に掘り込まれている。

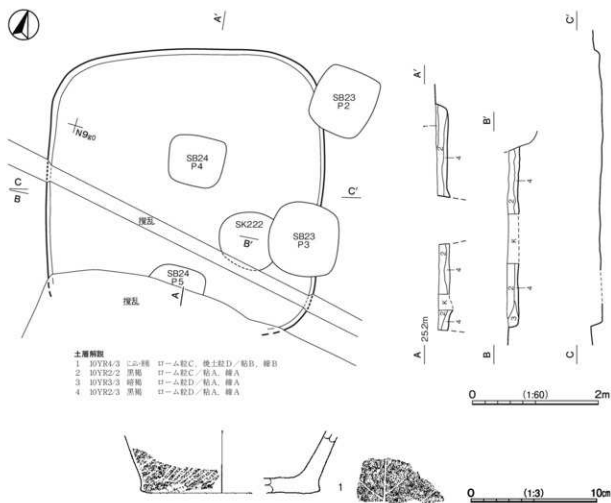
規模と形状 南部が攪乱を受けており、東西軸は 4.38 m で、南北軸は 4.34 m しか確認できなかった。形状は隅丸方形と推定され、主軸方向は N-18°-W である。壁高は 16~20 cm で、外傾している。

床 平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。

覆土 4 層に分層できる。不規則な堆積の状況から、埋め戻されている。

遺物出土状況 弥生土器片 2 点 (壺) が出土している。1 は覆土中から出土しており、埋め戻しに伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期前半と考えられる。



第 40 図 第 69 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 22 表 第 69 号竪穴建物跡出土遺物一覧

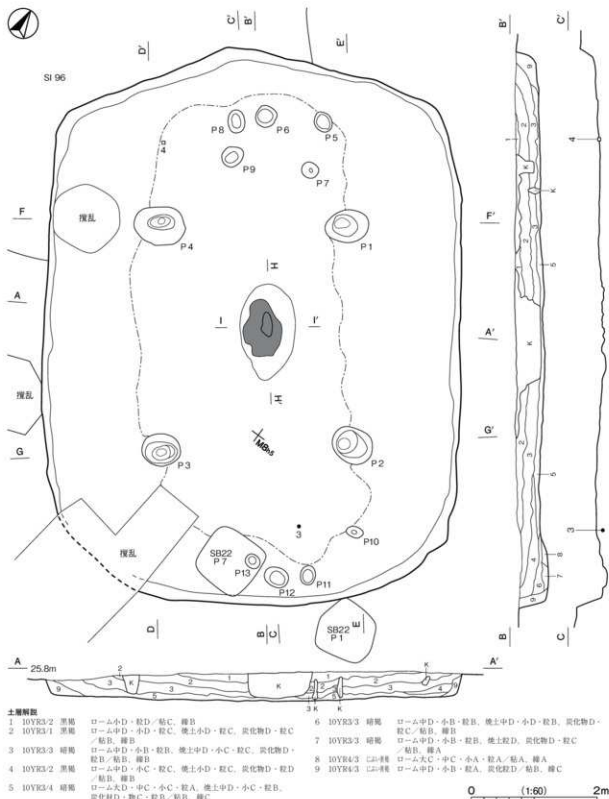
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(38)	(10.8)	灰石・石英・雲母	橙	普通	周知状 1 種付加 2 条 底部本葉痕	覆土中	10%

第89号竪穴建物跡 (第41・42図 PL 9・10)

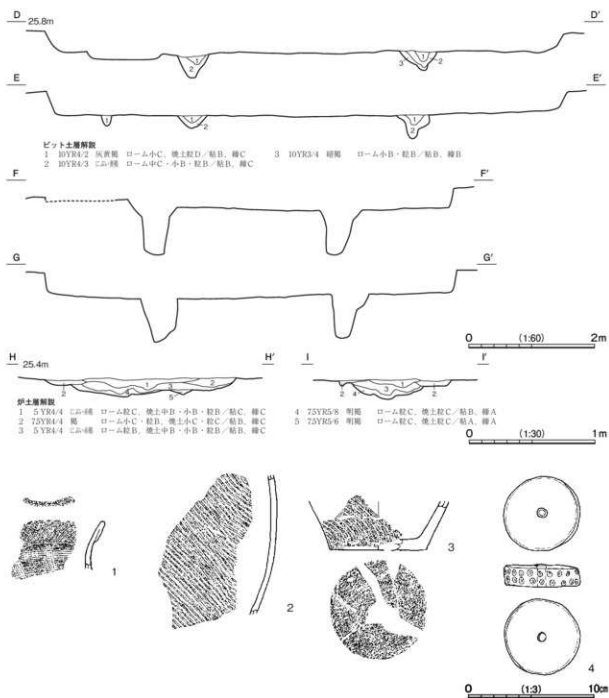
位置 調査区中央部のM 8g4区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第96号竪穴建物跡を掘り込み、第22号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸880m、短軸660mの隅丸長方形で、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は24~38cm



第41図 第89号竪穴建物跡実測図



第42図 第89号堅穴建物跡・出土遺物実測図

で、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。床面を浅く皿状に掘りくぼめて使用した地床炉である。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 13か所。P1～P4は深さ105～120cmで、配置から支柱穴と考えられる。P11～P13は深さ5～9cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。その他のピットは深さ5～17cmで、性格は不明である。

覆土 9層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片50点(壺)、土製品1点(紡錘車)、石英片1点(77.21g)が出土している。3・

4は床面から出土しており、廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。1・2は覆土中から出土しており、埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期前半と考えられる。

第23表 第89号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(3.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	幾何口縁、附加状1種付加2条	肩部6条1車	覆土中	5% PL32
2	弥生土器	壺	-	(11.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	附加状1種付加2条	内面劣化により不明	覆土中	5% PL32
3	弥生土器	壺	-	(3.9)	(7.7)	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	附加状1種付加2条		床面	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
4	紡錘車	6.0	1.85	0.7	78.58	長石・石英・雲母	にぶい橙	両面ナゲ 側面部竹管による刺突文	床面	PL45

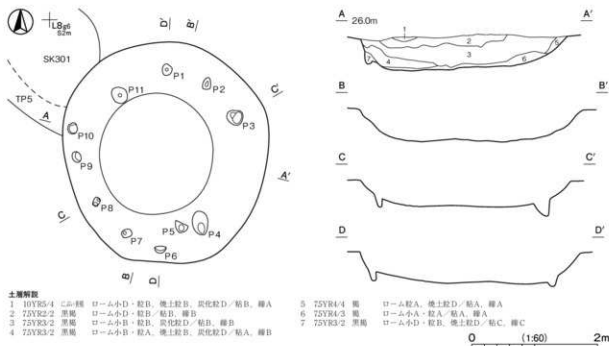
第24表 弥生時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長径×短径(m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考	
								柱穴	竪口	ヒト	貯蔵					
12	M 8 c)	N-48°-W	楕長3形	5.56×5.04	36-56	平坦	-	3	-	27	地成砂	-	丸瓦	弥生土器、石器	後期前半	本跡→SD 5
66	L 7 j)	N-37°-W	楕長3形	4.80×3.94	12-18	平坦	-	4	1	-	地成砂	-	不明	弥生土器	後期前半	本跡→SBQ2
69	N 9 g)	N-18°-W	楕長3形	4.38×(4.34)	16-20	平坦	-	-	-	-	-	-	丸瓦	弥生土器	後期前半	本跡→SBQ3・24, SB222
89	M 8 g)	N-37°-W	楕長3形	8.80×6.60	24-38	平坦	-	4	3	6	地成砂	-	自然	弥生土器、土製品	後期前半	SBQ6→B跡→SB22

(2) 土坑

第217号土坑 (第43・44図 PL10)

位置 調査区中央部のL 8 h 6区、標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。



第43図 第217号土坑実測図

重複関係 第301号土坑、第5号陥し穴を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は径3.24～3.48mの円形である。底面は径1.80～1.90mの円形で、平坦である。確認面からの深さは48cmで、壁は緩やかに外傾している。



ピット 11か所。ピットは深さ11～24cmで、縁の部分に円形に配置されている。特にP3～P5は深さ20cm以上あり、柱穴の可能性がある。

覆土 7層に分層できる。多くの層にロームブロックを含むことから、埋め戻されている。

遺物出土状況 弥生土器片15点（壺類）、石英片1点（20.81g）が出土している。いずれも覆土中から出土しており、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 規模と形状から、上屋構造の土坑と考えられる。時期は、出土土器から後期前半と考えられる。

第44図 第217号土坑
出土遺物実測図

第25表 第217号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色澤	地成	文様の特徴	ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(48)	4.3	長石・石英	にぶい碧	普通	輪縄不明の附加条縄文	底面木葉痕	覆土中	20% PL32

第314号土坑（第45図）

位置 調査区南部のM9e4区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

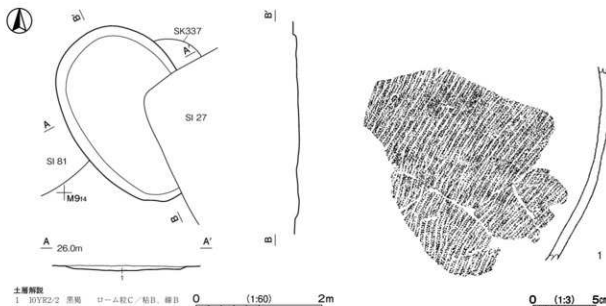
重複関係 第81号壑穴建物跡、第337号土坑を掘り込み、第27号壑穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.94m、短径1.95mの楕円形で、長軸方向はN-28°-Wである。後世の削平を受けており、確認面からの深さは6cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに外傾している。

覆土 単一層である。削平により、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 弥生土器片3点（壺）が出土している。いずれも覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前半と考えられる。



第45図 第314号土坑・出土遺物実測図

第26表 第314号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(15.5)	-	長石・石英・赤味	碧	普通	附加状1種付加2条 内面横位のナデ	覆土中	10% PL32

第27表 弥生時代土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		傾 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
217	L 8h6	-	円形	3.48×3.24	48	緩斜	平坦	人角	弥生土器	SK202, TP 5 →本誌
314	M 9e4	N-28°-W	楕円形	2.94×1.95	6	緩斜	平坦	不明	弥生土器	S18, SK277 本誌→S27

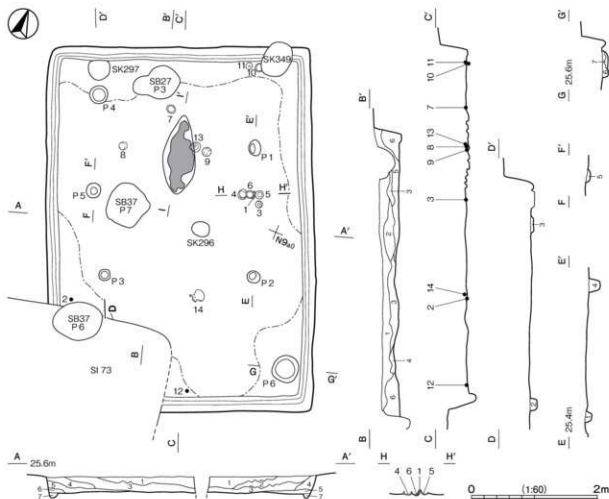
3 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡1棟、鍛冶工房跡1棟、土坑3基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第10号竪穴建物跡 (第46～48図 PL10)

位置 調査区南部のM 9 9 区、標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。



第46図 第10号竪穴建物跡実測図

重複関係 第73号竪穴建物、第27・37号掘立柱建物、第296・297・349号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.80 m、短軸4.26 mの長方形で、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は28～40 cmで、ほぼ直立している。

床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周している。

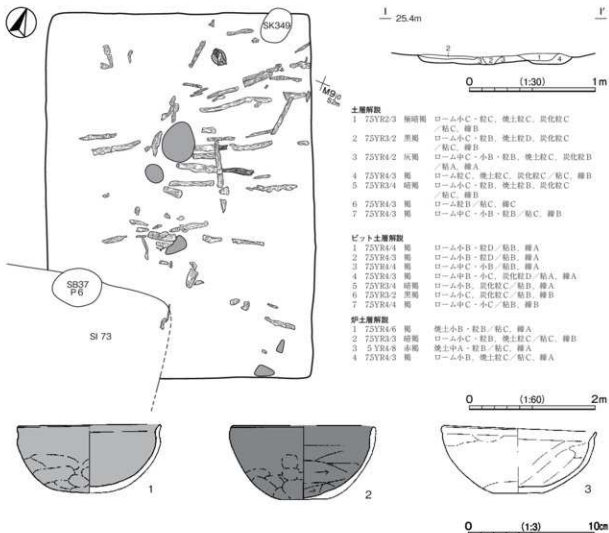
炉 中央部北寄りに付設されている。長径130 cm、短径50 cmほどの楕円形を呈する地床炉である。床面から20 cmほど皿状に掘りくぼめて構築されている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 6か所。P1・P2・P3はそれぞれ深さ20 cm・10 cm・12 cmで、配置から主柱穴と考えられる。P4～6は深さ5～10 cmで、性格は不明である。

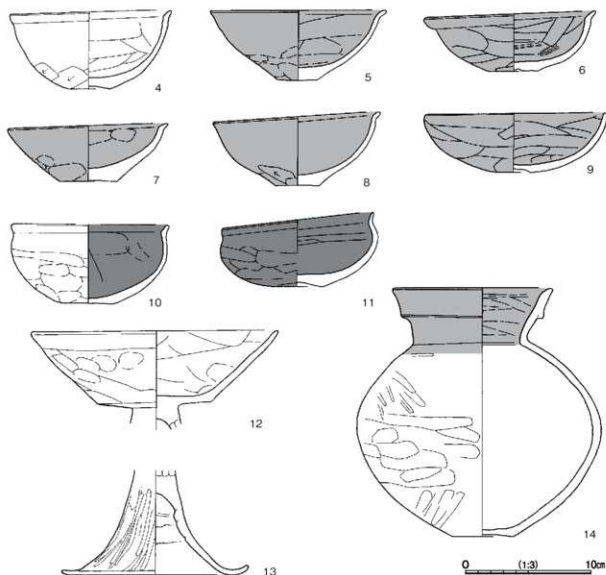
覆土 7層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていること、不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片59点(坏13、高坏7、甕12、甕27)が出土している。1～7・10～12・14はいずれも床面から出土しており、廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。

所見 床面から炭化材が多数確認され、焼失家屋と考えられる。時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第47図 第10号竪穴建物跡・出土遺物実測図



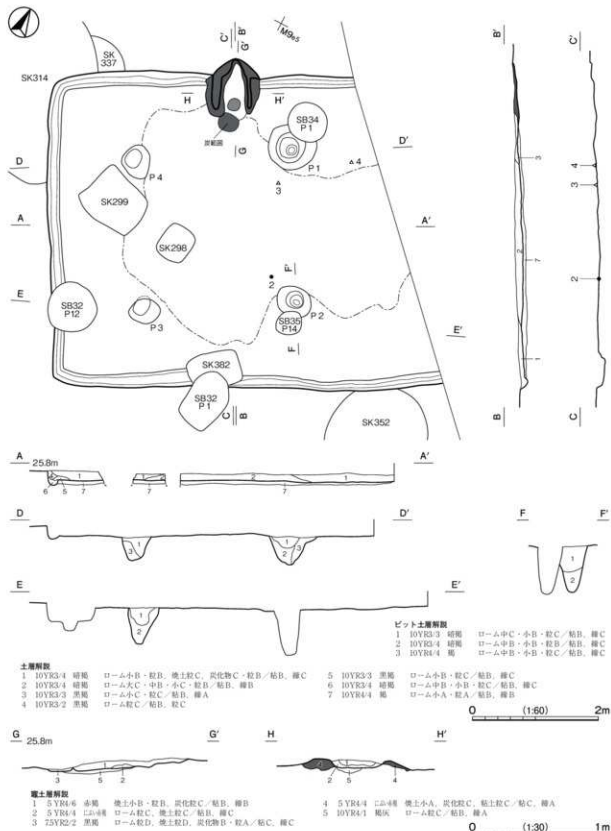
第 48 図 第 10 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 28 表 第 10 号竪穴建物跡出土遺物一覽

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	杯	11.2	5.3	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面へつ刷りの後ナデ 全面赤褐色	床面	90% PL.33 片・内面一部付着
2	土師器	杯	[11.2]	5.4	3.5	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面へつ刷りの後ナデ 指刷り肌 全面黒色処理	床面	60%
3	土師器	杯	12.3	5.4	3.9	長石・石英	褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面厚減のため調整不明 内面横紋のナデ	床面	90% PL.33 片・内面一部付着
4	土師器	杯	12.6	6.2	3.3	長石・石英	褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面下縁手持ちへつ刷りの 内面ナデ	床面	100% PL.33 片・内面一部付着
5	土師器	杯	13.8	5.6	3.1	長石・石英	赤褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ナデ 指面正装 体部が刷りナデ 全面赤褐色	床面	90% PL.33 片・内面一部付着
6	土師器	杯	13.6	4.8	3.7	長石・石英	赤褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面横紋のへつ刷り 内面ナデ	床面	90% PL.33 片・内面一部付着
7	土師器	杯	12.6	4.7	4.4	長石・石英	赤褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面厚減のため調整不明 内面ナデ 全面赤褐色	床面	95% PL.33 片・内面一部付着
8	土師器	杯	13.2	5.9	3.5	長石・石英	赤褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外・内面ナデ 体部外面 下縁手持ちへつ刷り 全面赤褐色	覆土下層	100% PL.33 片・内面一部付着
9	土師器	杯	14.3	4.8	2.8	長石・石英・ 赤色粘土	明赤褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面へつ刷りの後ナデ 内面ナデ 全面赤褐色	覆土下層	100% PL.33 片・内面一部付着
10	土師器	杯	[12.3]	6.3	3.9	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面へつ刷りの後ナデ 内面ナデ 内面黒色処理	床面	70% PL.33 片・内面一部付着
11	土師器	杯	12.0	6.0	4.0	長石・石英	黒褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面へつ刷りの後ナデ 内 面横紋のナデ 全面黒色処理	床面	95% PL.33
12	土師器	高杯	19.4	(8.1)	-	長石・石英	褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ナデ 指面正装 内面ナデ	床面	50% PL.33 片・内面一部付着
13	土師器	高杯	-	(8.6)	12.6	長石・石英	褐色	普通	外面へつ刷り 内面横紋のナデ	覆土下層	40% PL.33 片・内面一部付着
14	土師器	壺	12.4	19.7	4.7	長石・石英・ 赤色粘土	赤褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面へつ刷りの後ナデ 体部上 へつ刷り 下へつ刷りナデ 口縁部外・内面赤褐色	床面	95% PL.33 片・内面一部付着

第 27 号竪穴建物跡 (第 49・50 図 PL10)

位置 調査区中央部の M 9e5 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。



第 49 図 第 27 号竪穴建物跡実測図

重複関係 第314・337・352号土坑を掘り込み、第32・34・35号掘立柱建物、第298・299・382号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、長軸6.12 m、短軸4.98 mしか確認できなかった。平面形は長方形と推定できる。主軸方向はN-28°-Wである。壁高は3～13 cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部を中心に踏み固められている。貼床は全体に、深さ5～10 cmほどをロームブロックやローム粒子を含む第7層を埋土して構築されている。壁溝は調査区域内では全周している。

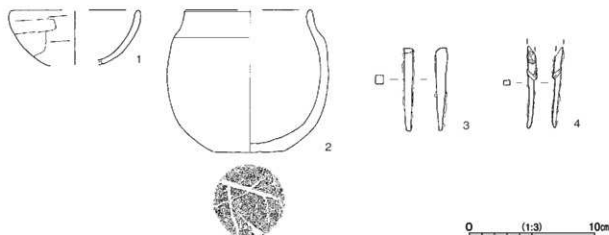
竈 北壁に付設されており、上部が割平されているため袖の痕跡がわずかに残っている。焚口部から煙道部まで100 cmほどで、燃焼部幅は30 cmである。袖部は地山の上に粘土粒子などを含む第4層を積み上げて構築されている。火床部は床面をやや掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に30 cmほど掘り込まれている。

ピット 4か所。P1～P4は深さ40～75 cmで、規模や配置から支柱穴と考えられる。

覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。第7層は貼床の構築土である。

遺物出土状況 土師器片68点（坏9、高坏2、鉢3、壺1、小型甕4、甕49）、金属製品4点（釘）、鉄滓19点（1.456.65 g）が出土している。2～4は床面からの出土であり、廃絶の際に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉から7世紀前葉と考えられる。



第50図 第27号竪穴建物跡出土遺物実測図

第29表 第27号竪穴建物跡出土遺物一覧

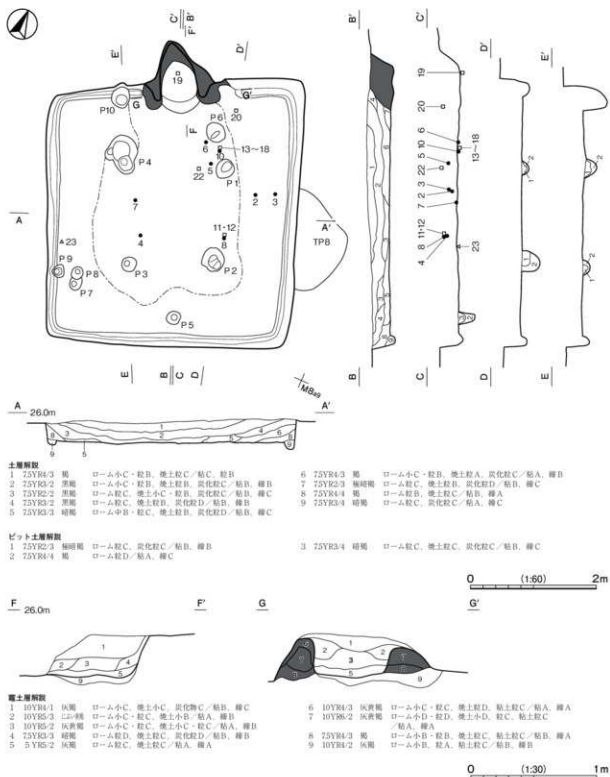
番号	種別	器種	口径	器高	底径	貼土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考		
1	土師器	坏	[102]	[43]	-	長石・石英・赤色粘土	に濃い橙	普通	口縁部外・内面ナデ 内面ナデ	体部外面へう閉り後ナデ	覆土中	30% 口縁部外・内面ナデ	
2	土師器	鉢	[101]	11.3	5.7	長石・石英・赤色粘土	に濃い橙	普通	口縁部外面ナデ 不明	体部外・内面準減のため裏割不明 底辺木葉重	床面	60% 口縁部外・内面ナデ	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考		
3	釘	6.6	0.85	0.95	13.28	鉄	断面正方形				床面	PL48	
4	釘	(6.6)	0.80	0.60	(5.53)	鉄	基部欠損	断面長方形				床面	PL48

第 35 号竪穴建物跡 (第 51 ~ 53 図 PL11)

位置 調査区中央部の L 8 8 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 8 号陥し穴を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 4.28 m、短軸 4.05 m の方形で、主軸方向は $N - 20^\circ - W$ である。壁高は 24 ~ 32 cm で、ほぼ直立している。



第 51 図 第 35 号竪穴建物跡実測図

床 平坦で、竈前面から中央部を中心に踏み固められている。壁溝が全周している。

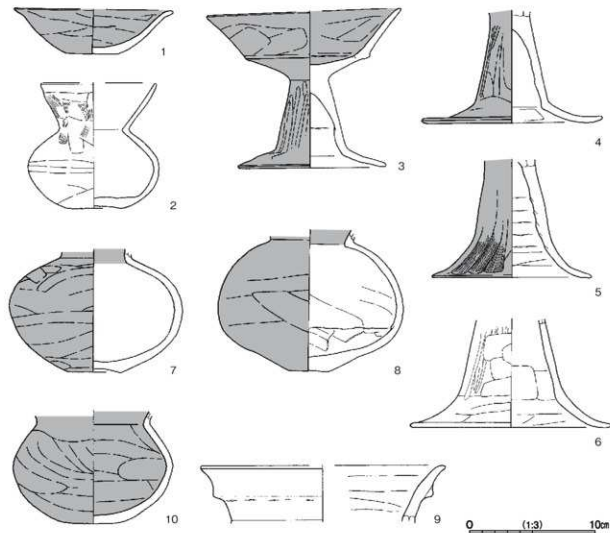
竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで120 cmで、燃焼部の幅は55 cmである。右袖部は焚口部から奥壁までを浅く掘りくぼめ、第9層を埋土して整地した後、ロームブロックや粘土粒子を含む第6～8層を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さを使用していたと考えられるが、明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に60 cmほど掘り込まれ、奥壁で外傾して立ち上がっている。

ピット 10か所。P 1～P 4は深さ15～40 cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ26 cmで、出入口施設に伴うピットである。P 6～P 10は深さ10～40 cmで、性格は不明である。

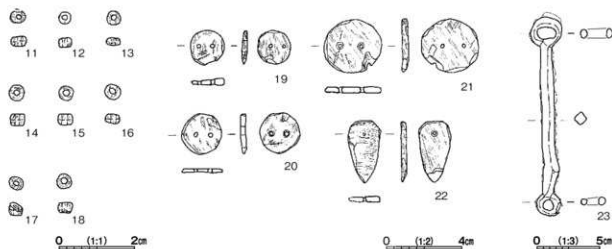
覆土 9層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片629点（坏4、椀100、埴54、高坏155、鉢7、壺53、小型壺24、甕209、瓶23）、石製品12点（白玉8、有孔円板3、剣形品1）、金属製品1点（釦）が出土している。床面からは6・7・10・13～18・23が、19は竈内からそれぞれ出土した。特に石製模造品はまとめて確認された。これらの遺物は廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。2～5は覆土下層から、8・11・12・22は覆土中層から、20は覆土上層からそれぞれ出土した。埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第52図 第35号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第53図 第35号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)

第30表 第35号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[126]	35	40	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	外・内面ナテ 全面赤彩	覆土中	40%
2	土師器	埴	[91]	100	36	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナテ 内面ナテ 体部外面ハケナテ	覆土下層	80% PL34
3	土師器	高坏	[154]	126	[118]	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	体部外・内面ナテ 脚部外面へラ磨き 外面・坏部内面赤彩	覆土下層	60% PL34
4	土師器	高坏	-	(89)	[143]	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	外面縦位のナテ 外面赤彩	覆土下層	30%
5	土師器	高坏	-	(94)	125	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	外面ハケ目調整 外面赤彩	覆土下層	40%
6	土師器	高坏	-	(87)	157	長石・石英・赤色粒子・塵	橙	普通	外面へラ磨き後 横位のナテ 内面ナテ	40% 5.1% 一部残存	
7	土師器	壺	-	(48)	42	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	外面ナテ 口縁部外・内面赤彩 体部外面赤彩	床面	90% PL34 5.1% 一部残存
8	土師器	壺	-	(118)	32	長石・石英・赤色粒子	赤	普通	外面ナテ 内面へラ磨り残ナテ 口縁部外・内面赤彩 体部外面赤彩	覆土中層	50% 5.1% 一部残存
9	土師器	壺	[194]	(45)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面ナテ	覆土中	5%
10	土師器	小型壺	[91]	(90)	48	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	外・内面ナテ 全面赤彩	床面	50% 5.1% 一部残存

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴		出土位置	備考
11	白玉	0.40	0.25	0.10	0.05	滑石	側面に縦位の磨痕	側面にやや磨らみ	覆土中層	PL47
12	白玉	0.35	0.25	0.15	0.05	滑石	側面に縦位の磨痕	側面にやや磨らみ	覆土中層	PL47
13	白玉	0.35	0.21	0.15	0.04	滑石	側面にやや磨らみ		床面	PL47
14	白玉	0.38	0.31	0.15	0.06	滑石	側面にやや磨らみ		床面	PL47
15	白玉	0.29	0.30	0.15	0.06	滑石	側面にやや磨らみ		床面	PL47
16	白玉	0.29	0.26	0.15	0.06	滑石	側面にやや磨らみ		床面	PL47
17	白玉	0.38	0.30	0.10	0.06	滑石	側面に縦位の磨痕	側面にやや磨らみ	床面	PL47
18	白玉	0.29	0.26	0.15	0.06	滑石	側面にやや磨らみ		床面	PL47

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
19	有孔円板	1.85	1.75	0.30	1.39	滑石	全面研磨	孔2か所 孔径0.15cm	床面	PL47
20	有孔円板	3.30	3.20	0.25	2.18	滑石	全面研磨	孔2か所 孔径0.20cm	覆土上層	PL47
21	有孔円板	3.05	2.80	0.30	5.04	滑石	全面研磨	孔2か所 孔径0.15cm	覆土中	PL47
22	刺形品	3.22	1.70	0.27	2.53	粘板岩	全面研磨	孔1か所	覆土中層	PL47

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
23	骨	15.9	2.50	1.05	45.53	鉄	小環部	二進部 捻りなし 引手。	床面	PL48

第 62 号竪穴建物跡 (第 54・55 図 PL11)

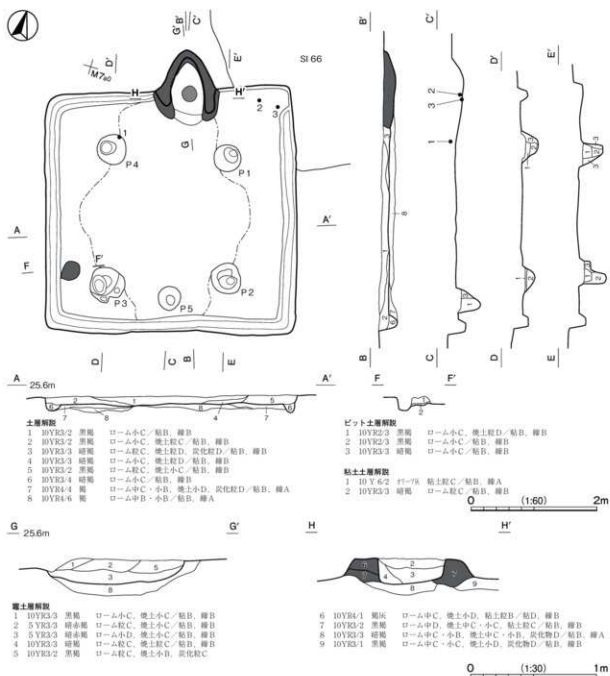
位置 調査区北部の M 7 a0 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 66 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 3.98 m、短軸 3.80 m の方形で、主軸方向は N - 15° - W である。壁高は 12 ~ 16 cm で、直立している。

床 平坦で、竈前面から中央部を中心に入出口付近まで踏み固められている。貼床は、深さ 10 cm ほどロームブロックを含む第 7・8 層を埋土して構築されている。壁溝は北東コーナー部を除いて回っている。

竈 北壁中央部のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 120 cm で、燃焼部の幅は 40 cm である。竈は焚口部から奥壁までを浅く掘りくぼめ、ロームブロックや焼土ブロックを含む第 8・9 層を埋土



第 54 図 第 62 号竪穴建物跡実測図

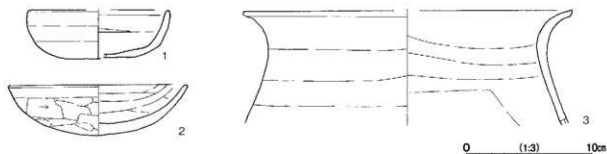
して整地した後、袖部はロームブロックや粘土ブロックを含む第6・7層を積み上げて構築されている。火床部は浅い皿状にくぼんでいる。火床面は第8層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に65cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

ピット 5か所。P1～P4は深さ50～65cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ35cmで、出入口施設に伴うピットである。

覆土 6層に分層できる。多くの層にロームブロックや焼土粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片136点（坏21、碗1、高坏4、壺1、小型甕5、甕104）、須恵器片1点（甕）、金属製品1点（釘）が出土している。2・3は北東コーナ部付近の床面から、1は覆土下層からそれぞれ出土している。これらは、埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。南西部からは、覆土下層で粘土塊が確認されたが、埋め戻される過程で投げ込まれたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第55図 第62号堅穴建物跡出土遺物実測図

第31表 第62号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴はか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[112]	39	[52]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面に横・内面ナデ	覆土下層	40%
2	土師器	坏	141	41	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 指線3枚・内面ナデ	床面	70% 底部内面埋付着
3	土師器	甕	[260]	[92]	-	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ・内面ヘナデ	床面	5%

第65号堅穴建物跡（第56・57図 PL11・12）

位置 調査区中央部のM8d2区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第16号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.00m、短軸3.78mの方形で、主軸方向はN-3°-Wである。壁高は27～32cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部を中心に踏み固められている。貼床は、部分的で、深さ5～15cmほどロームブロックを含む第7層を埋土して構築されている。壁溝が全周している。

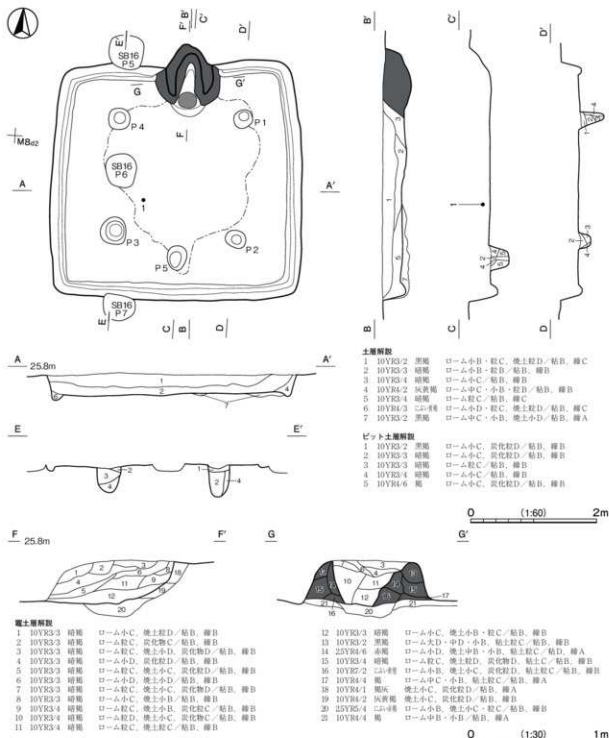
竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで115cmで、燃焼部の幅は40cmである。竈は袖部の基部をつくり、火床部から奥壁までを20cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第18～21層を埋土して整地した後、袖部はロームブロックや粘土粒子を含む第13～17層を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さを使用している。火床面は第20層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に40cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ20～55cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ30cmで、出入口施設に伴うピットである。

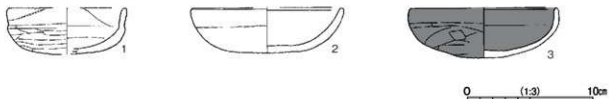
覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片76点(坏25, 高坏5, 鉢1, 壺2, 甕43)が出土している。1は覆土下層から出土しており、埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。2・3は覆土中からの出土である。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第56図 第65号堅穴建物跡実測図



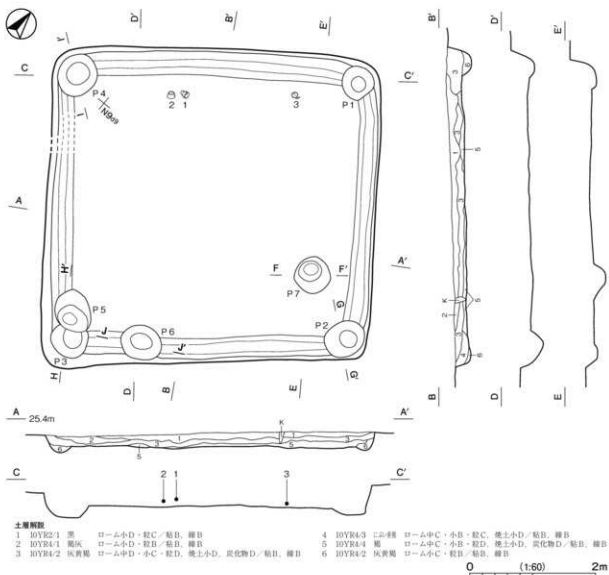
第57図 第65号竪穴建物跡出土遺物実測図

第32表 第65号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	杯	[9.2]	3.7	-	長石・石英・雲母	褐	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部内面へラ削り残ナテ 内面ナテ	覆土下層	40% P4,34 内面横位置
2	土師器	杯	[11.9]	3.6	[5.0]	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外・内面ナテ	覆土中	30%
3	土師器	杯	[11.6]	3.9	-	長石・石英	に赤・黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部内面へラ削り残ナテ 内面ナテ 全面黒色処理	覆土中	30%

第67号竪穴建物跡 (第58・59図 PL12)

位置 調査区南部のN9d9区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。



第58図 第67号竪穴建物跡実測図

規模と形状 長軸 5.22 m, 短軸 5.00 m の方形で, 主軸方向は $N-51^{\circ}-E$ である。壁高は 14~35 cm で, ほほ直立している。

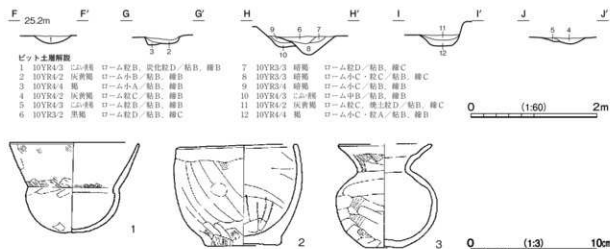
床 平坦で, 明確な硬化面は確認できなかった。壁溝が全周している。

ピット 7か所。P 1~P 4 は深さ 10~17 cm で, 配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 30 cm で, P 3 からの柱の据え直しに伴うピットと考えられる。P 6・P 7 はそれぞれ深さが 10 cm・12 cm で, 性格は不明である。

覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ, 不規則に堆積していることから, 埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片 52 点 (埴 5, 鉢 1, 小型壺 1, 甕 45), 須恵器片 5 点 (坏 2, 蓋 2, 甕 1) が出土している。1~3 はいずれも覆土下層から出土しており, 埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 4 世紀後葉と考えられる。壁溝上に柱穴が確認できた以外は, 炉等の屋内施設は確認できなかった。柱穴が浅く, 簡易的な作業場や倉庫であった可能性が高い。



第 59 図 第 67 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 33 表 第 67 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
1	土師器	埴	10.1	7.3	1.3	灰石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ	95% PL34 5%赤土-黒土	覆土下層	
2	土師器	鉢	9.5	8.1	5.6	灰石・石英・赤色粒子・土塵	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面・口ナデ	100% PL34 6%赤土-黒土	覆土下層	
3	土師器	小型壺	7.4	8.2	2.7	灰石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ	80% PL34 5%赤土-黒土	覆土下層	

第 68 号竪穴建物跡 (第 60~63 図 PL12)

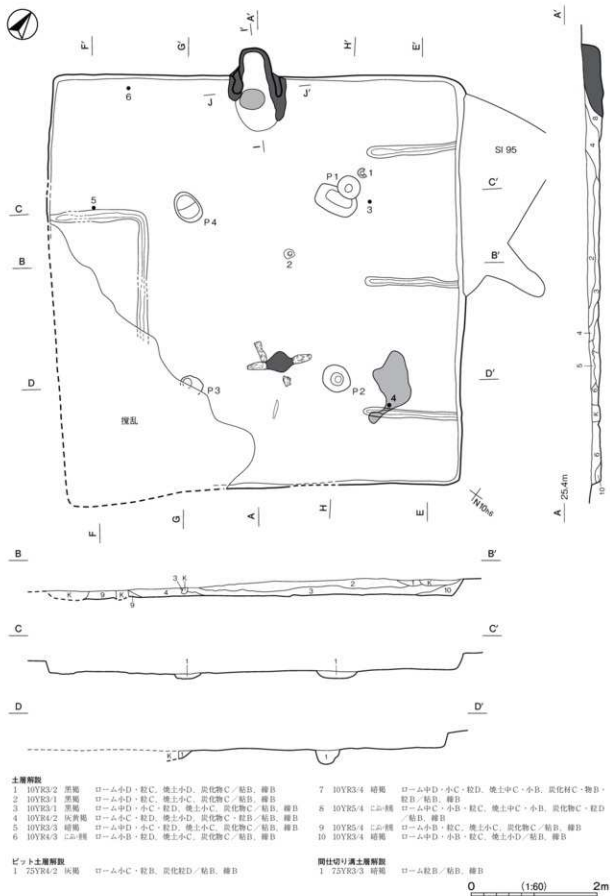
位置 調査区南部の N 10g4 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上の縁辺部に位置している。

重複関係 第 95 号竪穴建物に掘り込まれている。

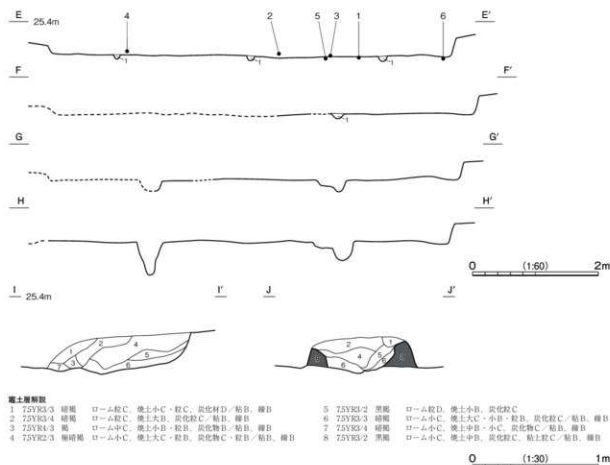
規模と形状 南部が削平されている。長軸 6.56 m, 短軸 6.44 m の方形で, 主軸方向は $N-36^{\circ}-W$ である。壁は高さ 16~32 cm で, ほほ直立している。

床 平坦で, 全面が硬化している。壁溝は確認できず, 間仕切り溝が 4 か所確認された。南部から南東部にかけて炭化材や焼土がまとまって出土した。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 130 cm で, 燃焼部の幅は 50 cm である。袖部は地山の上にロームブロックや粘土粒子を含む第 8 層を積み上げて構築されている。火床部はやや凹凸があり, 火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 50 cm ほど掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。



第60図 第68号堅穴建物跡実測図(1)



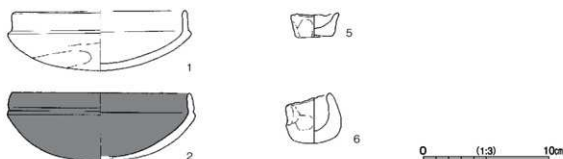
第61図 第68号竪穴建物跡実測図(2)

ピット 4か所。P 1～P 4は深さ10～22cmで、配置から支柱穴と考えられる。

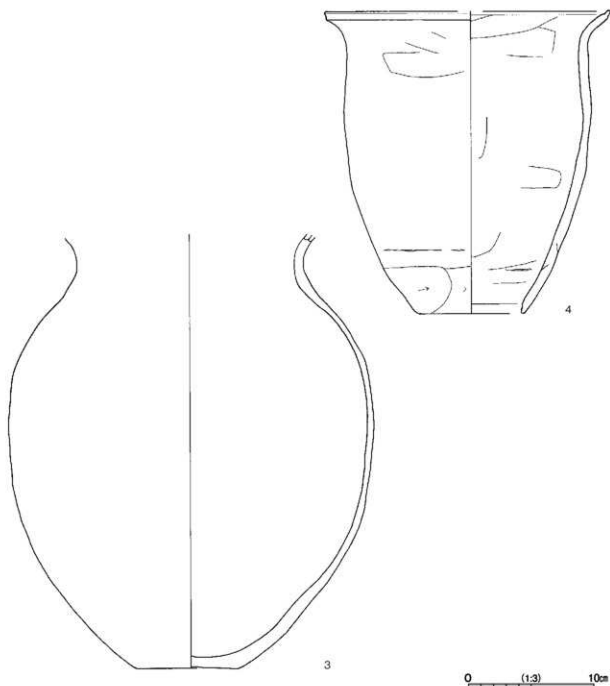
覆土 10層に分層できる。各層にロームブロックや焼土ブロック・炭化物が含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片201点(坏7、碗18、高坏2、小型甕3、甕163、甌5、ミニチュア土器1、手捏土器2)、須恵器片5点(坏1、蓋1、甕2、甌1)が出土している。1・3・5・6は床面から出土しており、3は中央部の床面から一括で出土した。2・4は覆土下層から出土しており、4は焼土中から出土したものが接合した。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。南東部を中心に焼土と炭化材が確認され、焼失住居と考えられる。



第62図 第68号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



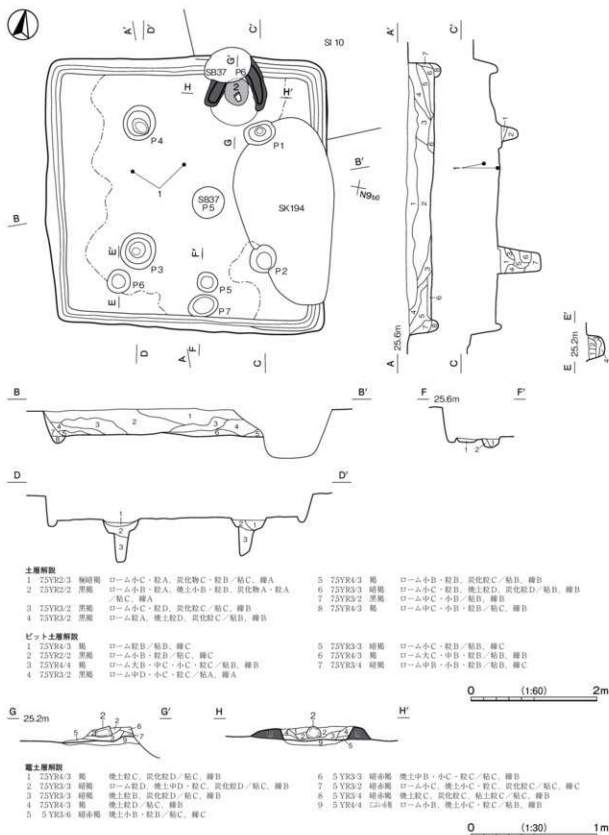
第63図 第68号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)

第34表 第68号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	杯	113.5	4.8	-	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	床面	70%
2	土師器	杯	139	5.4	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデのため調整不明 全面黒色処理	覆土下層	90% PL34
3	土師器	甕	-	131.6	8.0	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面厚減のため調整不明	床面	40%
4	土師器	瓶	22.6	24.1	8.3	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラ刷り 横ナデ	覆土下層	30% PL34 再測厚計算
5	土師器	手捏土器	3.5	1.9	2.9	長石・石英	橙	普通	外・内面指頭圧痕	床面	100% PL34
6	土師器	手捏土器	3.4	4.0	2.1	長石・石英・ 赤色粒子	明黄褐色	普通	外・内面指頭圧痕	床面	100% PL34

第73号竪穴建物跡 (第64・65図 PL12)

位置 調査区南部のN 9b9区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。



第64図 第73号竪穴建物跡実測図

重複関係 第10号竪穴建物跡を掘り込み、第37号掘立柱建物、第194号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.46m、短軸4.30mの方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は32～38cmで、直立している。

床 はほぼ平坦で、中央部を中心に硬化している。壁溝が全周している。

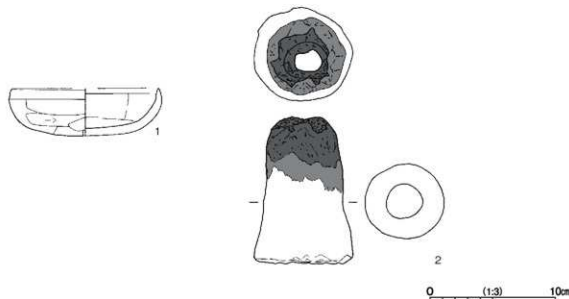
竈 北壁のやや東寄りに付設されている。第37号掘立柱建物に掘り込まれているため確認できた規模は、焚口部から火床部まで58cmで、燃焼部幅は65cmである。袖部は地山の上に焼土粒子や粘土粒子を含む第8層を積み上げて構築されている。火床部は床面を浅く掘りくぼめている。火床面は第9層上面で、赤変硬化している。

ピット 7か所。P1～P4は深さ35～70cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P5・P7は、深さ5・14cmで、出入口施設に伴うピットである。P6は深さ30cmで、性格は不明である。

覆土 8層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片197点（坏18、碗1、高坏8、壺1、甕169）、須恵器片6点（蓋1、瓶2、甕3）、土製品2点（羽口）が出土している。1は、中央部の覆土下層と中層から出土した破片2点が接合したもので、住居廃絶時の埋土に混入したものと考えられる。2の羽口は、竈内の中央部火床面上から出土している。下端部を平坦に再加工しており、羽口が支脚として転用されたものである。焚口部に向かって倒れて確認されており、据えられていた場所は特定できない。

所見 時期は、出土土器から7世紀中葉と考えられる。



第65図 第73号竪穴建物跡出土遺物実測図

第35表 第73号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	物成	手法の特徴	口部	出土位置	備考		
1	土師器	坏	[116]	37	-	長石・石英・雲母・赤鉄粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナギ	体部内面へつ張り残ナギ	覆土下層・中層	30% PL35		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴			出土位置	備考		
2	支脚	11.8	7.8	7.4	457.69	長石・石英・雲母・磁鉄	橙	径7.8	孔径2.9	羽口を転用	先端部硬化	灰色	床面	PL45

第75号竪穴建物跡 (第66・67図 PL12)

位置 調査区南部のN9e7区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第23号竪柱建物に掘り込まれている。

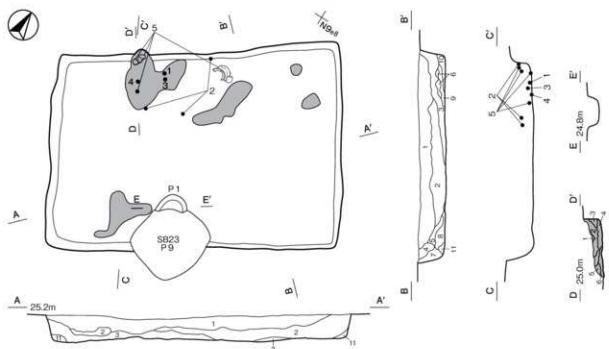
規模と形状 長軸4.64m、短軸3.16mの長方形で、主軸方向はN-31°-Wである。壁高は36~44cmで、直立している。

床 ほほ平坦で、全面が硬化している。北壁際で焼土塊を確認した。

ピット P1は深さ25cmで、性格は不明である。

覆土 11層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片117点(坏15, 碗1, 埴13, 高坏19, 壺4, 小型甕1, 甕62, ミニチュア土器1, 手捏土器1), 須恵器片2点(坏, 甕), 土製品1点(土玉)が出土している。1・4は北部焼土下の床面から出土している。これらは廃絶時に遺棄されたものと考えられる。3は北部焼土中の覆土下層から出土している。5は焼土の上、覆土中層から下層にかけて出土した破片と床面から出土した破片が接合したものである。2は北部の覆土中層から出土した破片3点が接合したものである。6~8は覆土中からそれぞれ出土している。これらは、埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。



土層解説

- 1 75YK2/3 焼燼層 ローム粒B/粘B, 練A
- 2 75YK2/3 焼燼層 ローム小B・粒B/粘B, 練B
- 3 75YK2/3 焼燼層 ローム粒B, 焼土粒B, 炭化粒D/粘B, 練A
- 4 75YK2/2 黒層 ローム粒D, 炭化粒D, 粘A, 練A
- 5 75YK2/3 焼燼層 ローム小B・粒B/粘B, 練B
- 6 75YK2/2 黒層 ローム粒C/粘A, 練A

- 7 75YK2/2 黒層 ローム小C・粒B/粘A, 練B
- 8 10YK2/2 黒層 ローム粒C/粘A, 練A
- 9 75YK2/2 黒土層 焼土小B・粒A/粘A, 練A
- 10 75YK2/3 焼燼層 ローム小B・粒B, 炭化粒D/粘A, 練B
- 11 75YK4/3 黒層 ローム小A・粒B/粘A, 練A

焼土土層解説

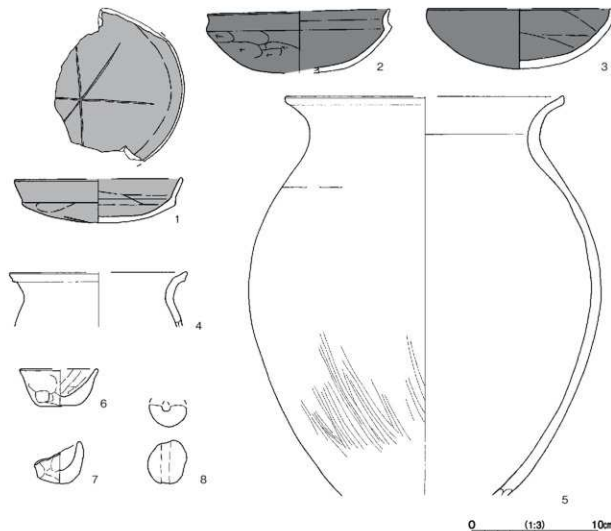
- 1 5YK2/2 黒層 焼土小B, 炭化粒C/粘D, 練C
- 2 5YK2/3 緑赤層 焼土大B・中B・小A・粒A/粘D, 練A
- 3 5YK2/3 緑赤層 焼土粒C/粘D, 練C

- 4 75YK2/3 焼燼層 ローム小C・粒B, 焼土中D・粒C/粘B, 練B
- 5 5YK4/3 緑赤層 ローム粒C, 焼土大C・粒B/粘B, 練B
- 6 75YK2/3 焼燼層 ローム粒C, 焼土粒B, 炭化粒D/粘B, 練A

0 (1:60) 2m

第66図 第75号竪穴建物跡実測図

所見 ビットが1か所確認できた以外は、主だった施設は確認できなかったことから、簡易な作業場や倉庫の可能性が高い。北壁際に確認した焼土塊は、床面まで火熱を受けていることと、出土土器にも被熱痕が見られることから、建物廃絶後に火を焚いたものと考えられる。時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第 67 図 第 75 号堅穴建物跡出土遺物実測図

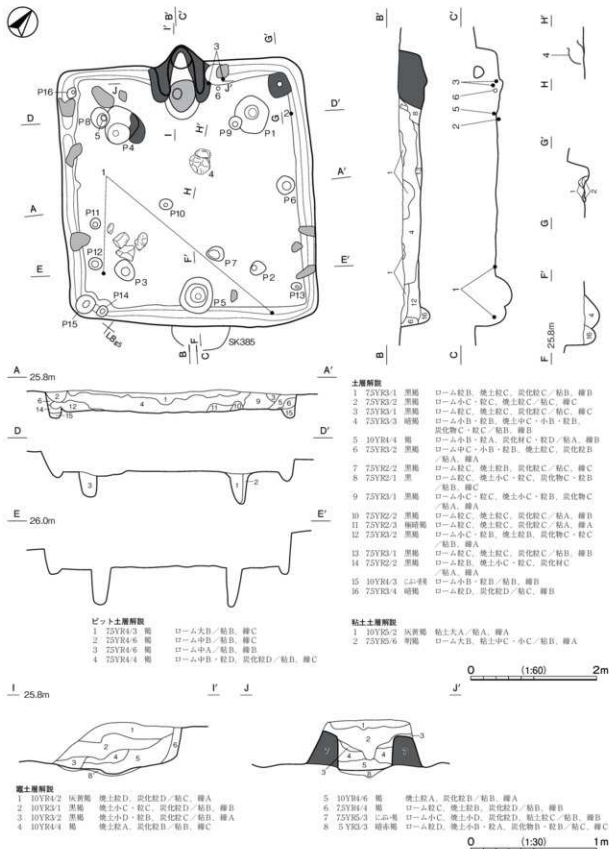
第 36 表 第 75 号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地文	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	杯	[132]	3.5	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 内面気泡散見あり 全面赤彩	床面	40% 外面傷付着
2	土師器	杯	[145]	5.1	-	長石・石英	にぶい・赤橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り残ナデ 内面ナデ 全面黒色地文	覆土中層	30% PL35
3	土師器	杯	[144]	4.8	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい・橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 全面黒色地文	覆土下層	80% PL35
4	土師器	小型壺	[140]	(4.4)	-	長石・石英	赤橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面厚減により調整 不明 体部内面ナデ	床面	5%
5	土師器	壺	[220]	(31.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい・橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面厚減により調整 体部外面下部に黒位のへう磨き 内面ナデ	覆土中層 一下層	40% 外面傷付着
6	土師器	土師	[62]	3.0	3.8	長石・石英	橙	普通	口縁部ナデ 体部外・内面ナデ	覆土中	50% PL35
7	土師器	手捏土器	3.9	3.3	-	長石	にぶい・橙	普通	外・内面面取圧痕	覆土中	100% PL35

番号	器種	径	高さ	孔径	重厚	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
8	土玉	3.0	3.4	0.8	[16.7]	長石・赤色粒子	にぶい・橙	外面ナデ 穿孔	覆土中	PL45

第79号竪穴建物跡 (第68～70図 PL13)

位置 調査区中央部のL 84区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。



第68図 第79号竪穴建物跡実測図

重複関係 第385号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.20m、短軸3.96mの方形で、主軸方向はN-40°-Wである。壁は高さ22～52cmで、ほぼ直立している。

床 はほぼ平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。壁溝が全周している。壁際の覆土下層で焼土を確認した。

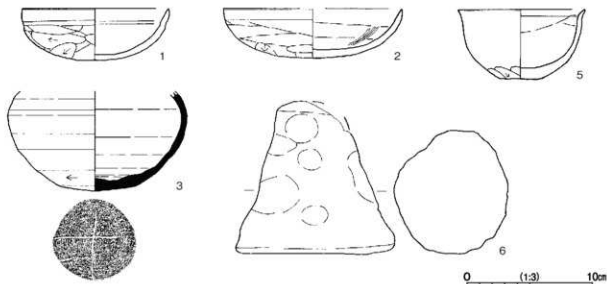
竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで120cmで、燃燒部の幅は44cmである。竈は焚口部から奥壁までを浅く掘りくぼめ、焼土ブロックや炭化物を含む第8層を埋土して整地した後、袖部はロームブロックや粘土粒子を含む第7層を積み上げて構築されている。火床部はやや凹凸があり、火床面は第8層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に27cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がり、奥壁ではほぼ直立している。

ピット 16か所。P1～P4は深さ35～65cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ28cmで、出入口施設に伴うピットである。P6～P16は深さ9～22cmで、性格は不明である。

覆土 16層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片183点（坏28、埴1、高坏3、鉢1、壺8、甕140、瓶1、ミニチュア土器1）、須恵器片2点（短頸壺）、土製品1点（支脚）、金属製品1点（釘）が出土している。1は南コーナー部と東コーナー部の床面と壁溝から出土した破片2点が接合したものである。2は北コーナー部、4は竈前面の床面から出土しており、建物が廃絶した際に遺棄されたものと考えられる。3・5・6は覆土下層から、3・6は竈の右袖の東からそれぞれ出土している。いずれも埋め戻される過程で混入したものと思われる。北コーナー部及びP8付近の床面から粘土塊を、また、中央部では火熱を受けた礫群を確認した。床面が火熱を受けていないことから、これらは廃絶に際して投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第69図 第79号竈穴建物跡出土遺物実測図(1)



第70図 第79号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第37表 第79号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	116	4.1	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へう張り	内面ナデ	床面 90% PL35 裏面・内面(裏)
2	土師器	坏	[141]	3.9	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へう張り後ナデ	内面ナデ	床面 70% PL35
3	須恵器	短頸壺	-	(8.0)	6.2	長石	灰	普通	外・内面口クロナデ	体部下端部へう張り	底面へう張り	覆土下層 30% PL35
4	土師器	甕	24.8	32.1	[116]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面上位ナデ	下位部位のへう張り	床面 90% PL35 外面・底面(裏)
5	土師器	じょうぶろ 土罎	100	4.1	3.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面下層へう張り	内面ナデ	覆土下層 95% PL35 内面・底面(裏)
番号	部種	高さ	細小径	最大径	重量	胎土	色調	特 徴		出土位置	備考	
6	支脚	12.1	(4.4)	12.6	(1.98)g	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	指頭痕	焼熱痕	覆土下層	PL45	

第82号竪穴建物跡 (第71図 PL13)

位置 調査区南部のM9fl区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.45m、短軸3.46mの長方形で、主軸方向はN-62°-Eである。上面が削平を受けているため、壁の高さは4cmである。

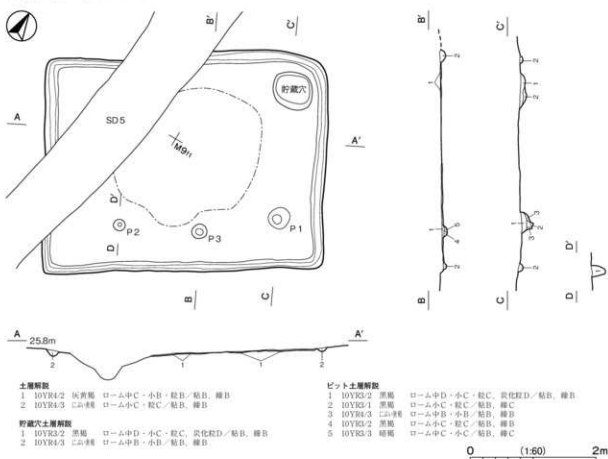
床 平坦で、中央部が硬化している。壁溝が全周している。

ピット 3か所。P1・P2は深さ20cm・22cmで、規模や配置から支柱穴と考えられる。P3は深さ10cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径70cm、短径60cmの楕円形で、深さは11cmである。底面は凹凸があり、壁は外傾している。

覆土 確認できた覆土が薄く、堆積状況は不明である。

所見 遺物は出土していないが、主軸方向や内部施設の状況が5世紀前葉の第75号竪穴建物跡に近似しており、同時期と考えられる。



第71図 第82号竪穴建物跡実測図

第84号竪穴建物跡（第72～74図 PL13）

位置 調査区中央部のM S d9区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第19号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.64m、短軸3.60mの方形で、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は20～28cmで、直立している。

床 平坦で、竈前面から中央部を中心に踏み固められている。壁溝は西壁の一部を除いて回っている。

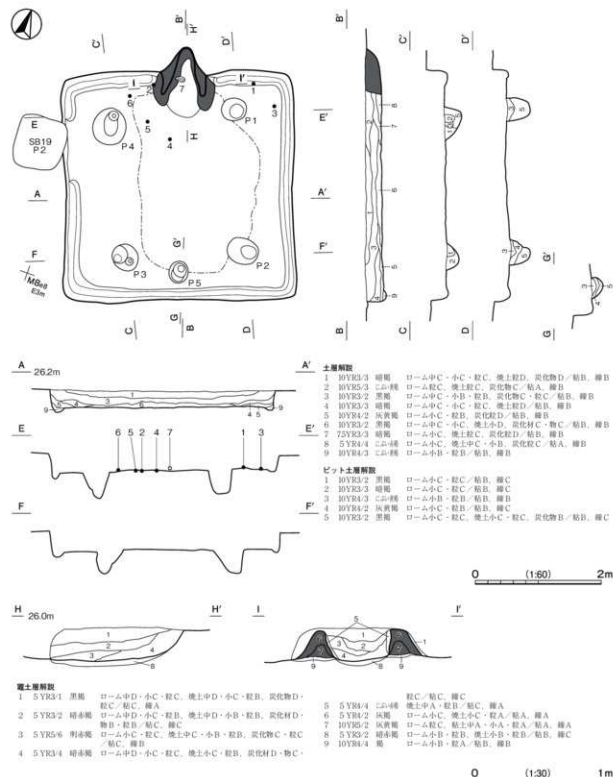
竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで110cmで、燃焼部幅は55cmである。竈は袖部の基部を作った後、焚口部から奥壁までを浅く掘りくぼめ、第8・9層を埋土して整地し、袖部をロームブロックや粘土ブロックを含む第6・7層を積み上げて構築している。火床部は床面と同じ高さを使用したと考えられるが、明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に42cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

ピット 5か所。P1～P4は深さ34～42cmで、規模や配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで、出入口施設に伴うピットである。第1層から第5層は抜きとり後の覆土である。

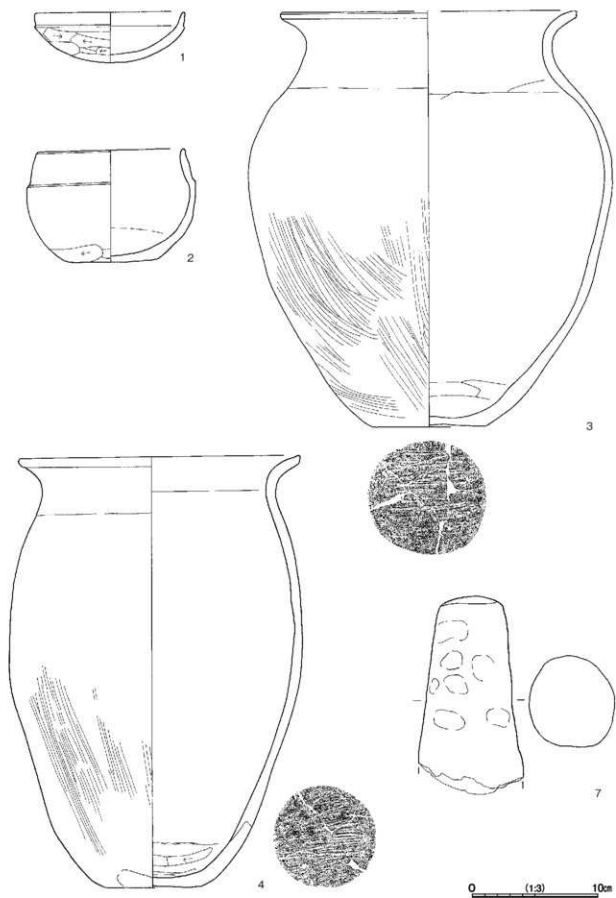
覆土 9層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片 35 点 (坏 4, 椀 1, 高坏 4, 甕 24, 瓶 2), 土製品 1 点 (支脚) が出土している。1・3 は覆土下層から出土しており, 建物が埋没する過程で廃棄されたものと考えられる。2・4~6 は床面から, 7 は意に据えられた状態で出土している。これらの遺物は残存率が高いものが多く, 建物の廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。

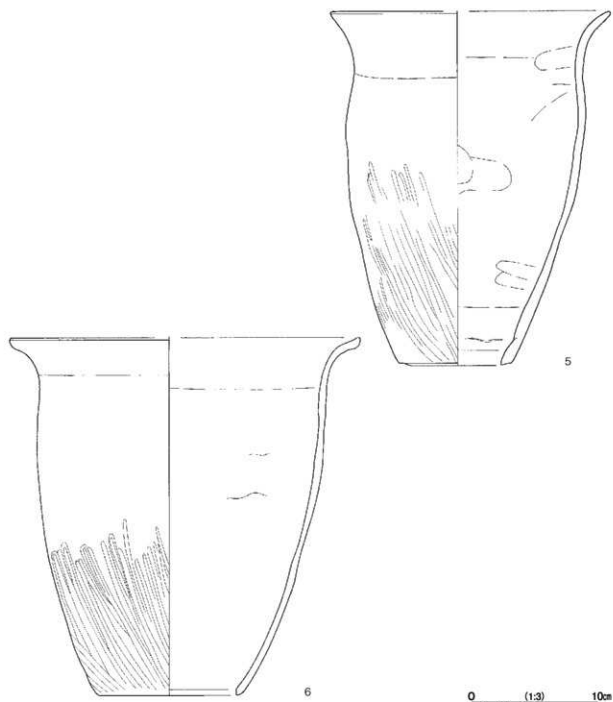
所見 時期は, 出土土器から 6 世紀中葉と考えられる。



第 72 図 第 84 号堅穴建物跡実測図



第73图 第84号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第74図 第84号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)

第38表 第84号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	形種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	杯	11.8	4.0	-	長石・石英・赤色粘土	1:0.5~赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ削り内面ナデ	礎土下層	70% P1.37 30%内面(直)
2	土師器	碗	11.7	9.0	6.7	長石・石英・赤色粘土	1:0.5~赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ削り内面ナデ	床面	80% P1.37
3	土師器	甕	[23.5]	33.1	8.7	長石・石英・雲母	1:0.5~橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 下部底位のへラ磨き 体部内面ナデ	礎土下層	60% P1.36 40%内面(直)
4	土師器	甕	22.3	34.4	7.8	長石・石英・雲母	1:0.5~赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 下部底位のへラ磨き 内面上位ナデ 下段へラ削りナデ	床面	90% P1.36 10%内面(直)
5	土師器	甕	[21.9]	28.2	[7.5]	長石・石英・雲母	1:0.5~橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 下部底位のへラ磨き 体部内面ナデ	床面	60% P1.36 40%内面(直)
6	土師器	甕	[27.5]	28.5	11.0	長石・石英・雲母・赤色粘土	1:0.5~橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 下部底位のへラ磨き 体部内面ナデ	床面	80% P1.36 20%内面(直)

番号	器種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
7	支脚	(157)	5.4	(84)	(781)	長石・石英・赤鉄粒子	橙	曲頸部 被熱痕	竈火床面	PL45

第85号竪穴建物跡 (第75図 PL13)

位置 調査区中央部のM8d7区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第19号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.26m、短軸3.08mの長方形で、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は8~17cmで、外傾して立ち上がっている。

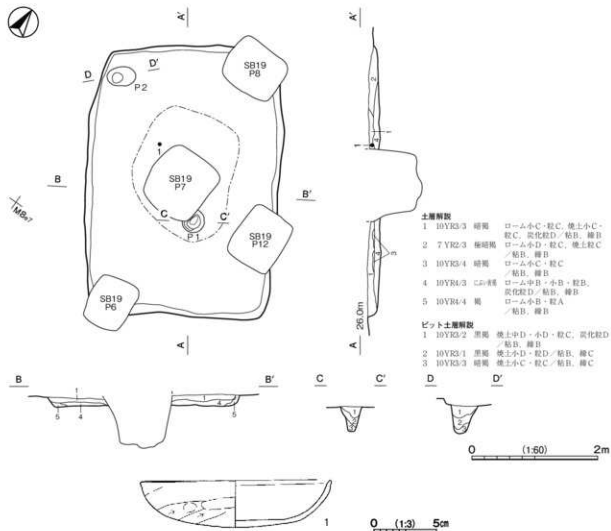
床 平坦で、中央部が硬化している。

ピット 2か所。P1・P2は深さ40cm・45cmで、性格は不明である。

覆土 5層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片10点(坏4、甕6)、須恵器片1点(坏)が出土している。1は覆土中層から出土しており、埋没する過程で投棄されたものと考えられる。

所見 簡易的な作業場か倉庫であった可能性が高い。時期は、出土土器から6世紀後半と考えられる。



第75図 第85号竪穴建物跡・出土遺物実測図

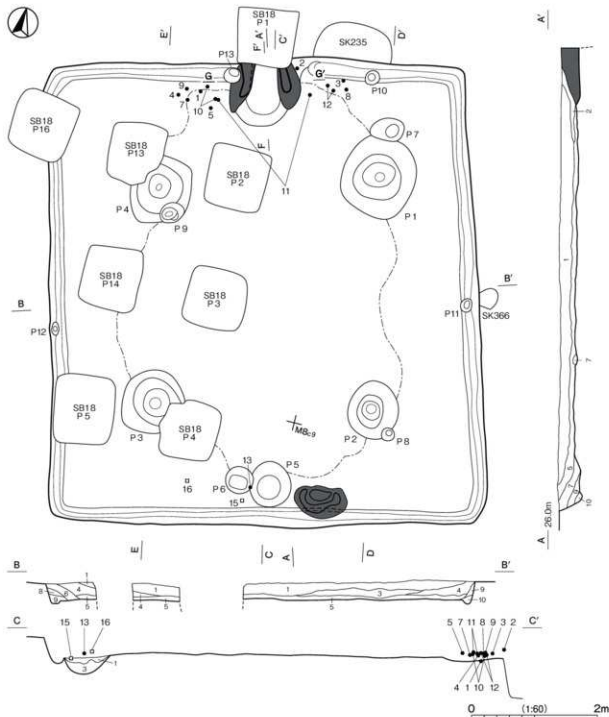
第39表 第85号堅穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	形態	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土陶器	杯	15.1	3.9	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横子字 内面キズ	体部外面へラ面り残子	覆土中層 70% PL37

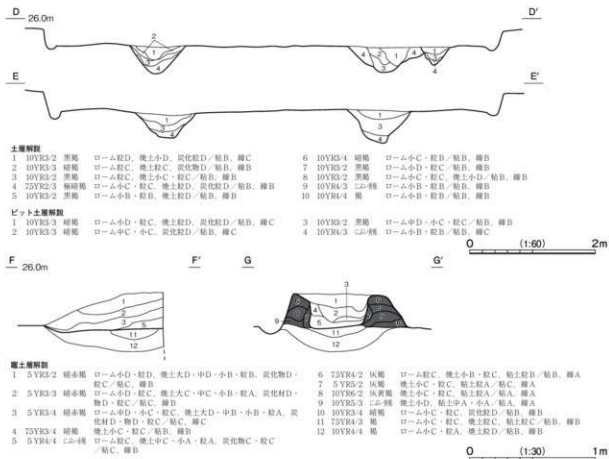
第86号堅穴建物跡 (第76～79図 PL13)

位置 調査区中央部のM 8b8区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第235・366号土坑を掘り込み、第18号掘立柱建物に掘り込まれている。



第76図 第86号堅穴建物跡実測図(1)



第77図 第86号竪穴建物跡実測図(2)

規模と形状 長軸7.24m、短軸6.76mの方形で、主軸方向はN-15°-Wである。壁の高さは24～28cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、竈前面から中央部を中心に出入り口付近まで踏み固められている。壁溝が全周している。出入口ピット東側の床面で粘土塊を確認した。

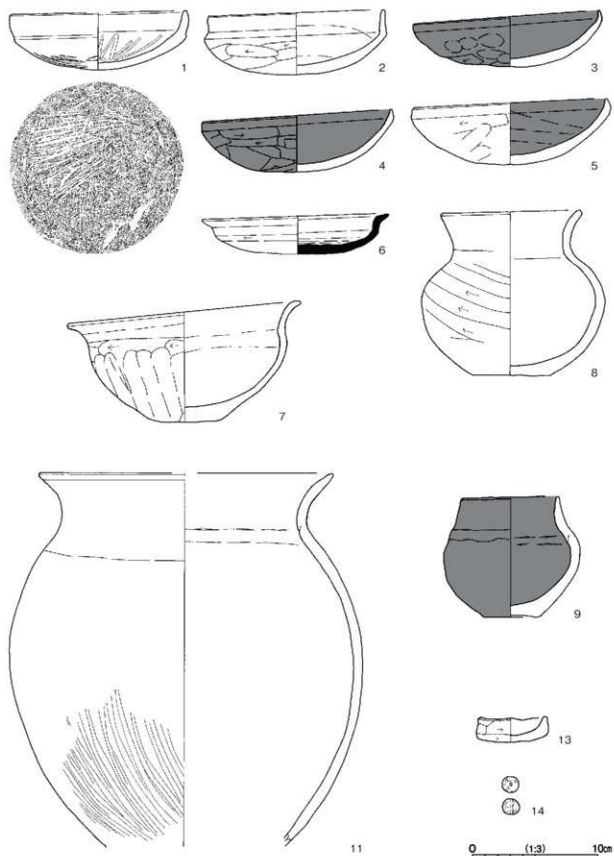
竈 北壁の中央部に付設されている。第18号掘立柱建物のP1によって掘り込まれ、北半分が壊されている。燃焼部幅は50cmである。焚口部から掘りくぼめ、第11・12層を埋土して整地した後、袖部はロームブロックや粘土ブロックを含む第6～10層を積み上げて構築されている。明確な火床部は確認できなかった。

ピット 13か所。P1～P4は深さ40～51cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P5・P6はいずれも深さ25cmで、出入口施設に伴うピットである。P7～P13は深さ12～49cmで、性格は不明である。

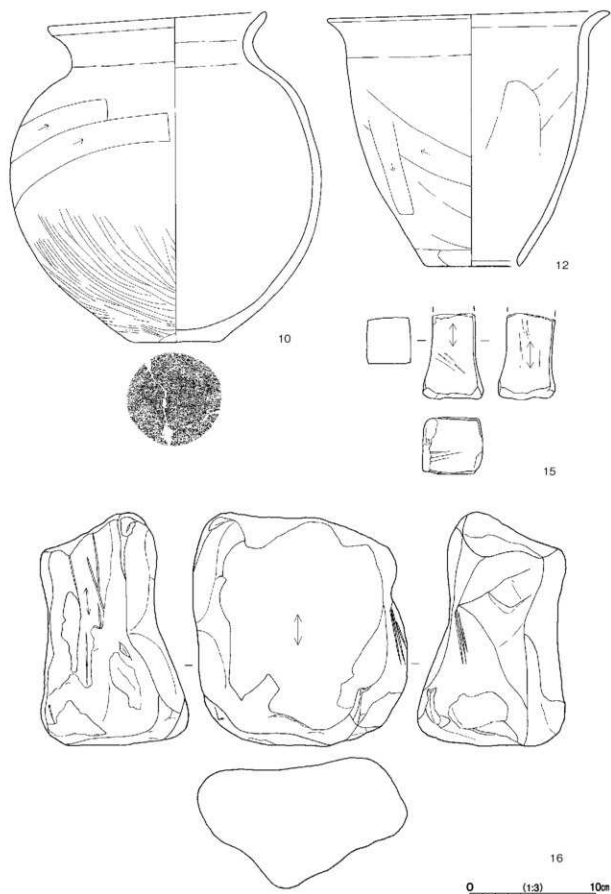
覆土 10層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片159点(坏57、埴1、高坏22、鉢1、壺14、小型甕1、甕57、甗4、手捏土器2)、須恵器片1点(坏)、土製品1点(土玉)、石器2点(砥石)、鉄滓1点(19.10g)が出土している。1は床面から出土しており、建物が廃絶した際に遺棄されたものと考えられる。3～5・7～13・15・16は覆土下層から、2は覆土中層から、6・14は覆土中からそれぞれ出土している。いずれも埋没する過程で投棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後半と考えられる。出入口ピット東側の粘土塊は、建物廃絶に際して遺棄されたものと考えられるが、性格は不明である。



第78图 第86号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第79图 第86号竖穴建物出土遺物実測図(2)

第40表 第86号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	140	4.7	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ後へう張り 紅斑石として内面ナデ	床面	95% PL37 外面一部残存
2	土師器	坏	138	5.2	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ	覆土中層	90% PL47 外面一部残存
3	土師器	坏	148	4.5	-	長石・石英・編織 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 指摺圧痕 内面ナデ 全面黒色処理	覆土下層	100% PL37
4	土師器	坏	149	4.9	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ 全面黒色処理	覆土下層	95% PL37 外面一部残存
5	土師器	坏	153	5.3	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ 内面黒色処理	覆土下層	100% PL37 外面一部残存
6	須恵器	坏	150	3.3	-	長石	灰	普通	外・内面クロコナデ	覆土中	80% PL37
7	土師器	鉢	182	9.3	44	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後縁部ナデ 内面ナデ	覆土下層	90% PL37 外面一部残存
8	土師器	皿	110	13.2	62	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	80% PL47 内面残存
9	土師器	小型壺	7.6	9.6	4.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 全面黒色処理	覆土下層	95% PL37
10	土師器	壺	17.1	26.3	6.9	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 下位段位のへう張り 内面ナデ	覆土下層	80% PL37 外面一部残存
11	土師器	壺	[23.2]	[29.8]	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 下位段位のへう張り 内面ナデ	覆土下層	90% PL37 外面一部残存
12	土師器	瓶	22.1	20.4	7.4	長石・石英・赤色粒子・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	80% PL38 外面一部残存
13	土師器	手拭器	5.2	2.1	5.3	長石	浅黄橙	普通	外面へう張り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	100% PL37 外・内面残存

番号	器種	径	高さ	口径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
14	土玉	1.4	1.2	0.2	(2.16)	砂粒	灰黄褐	外面ナデ 穿孔	覆土中	PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
15	砥石	(6.9)	4.8	4.5	(202.9)	硬質砂岩	紙面5面	覆土下層	PL47
16	砥石	18.7	17.1	11.7	433g	砂岩	紙面3面	覆土下層	

第87号竪穴建物跡 (第80・81図 PL14)

位置 調査区中央部の M 8b5区、標高 26 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第261号土坑を掘り込み、第308号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 7.44 m、短軸 7.40 mの方形で、主軸方向はN-40°-Wである。壁の高さは20～40 cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬化面は南コーナー付近に確認した。壁溝が全周している。

炉 中央部北寄りに付設されている。長径 115 cm、短径 65 cmほどの楕円形を呈する地床炉である。床面から 10 cmほど皿状に掘りくぼめて構築されている。炉床面は火熱を受けて、赤変硬化している。

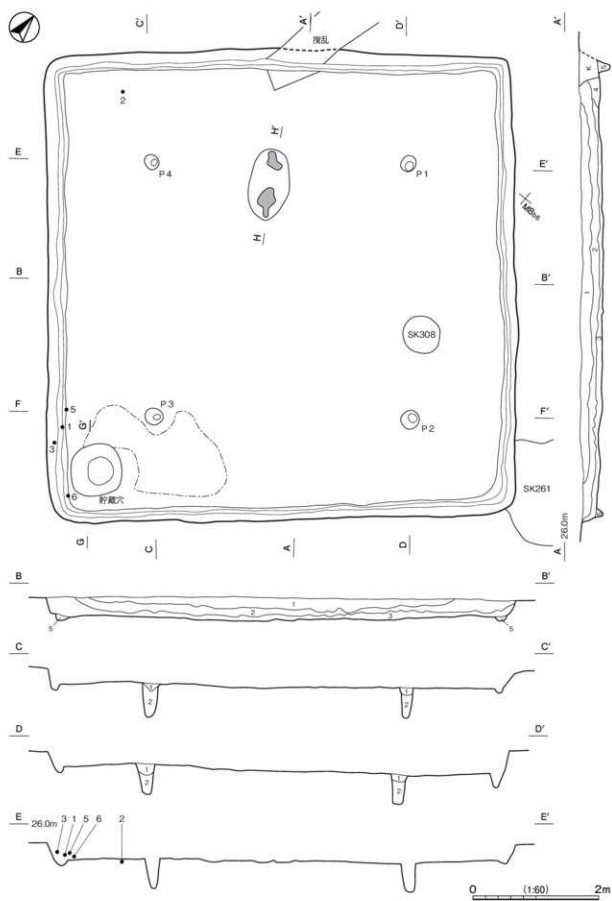
ピット 4か所。P1～P4は深さ 45～53 cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南コーナー部に付設されている。長径 85 cm、短径 80 cmの円形で、深さは 70 cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

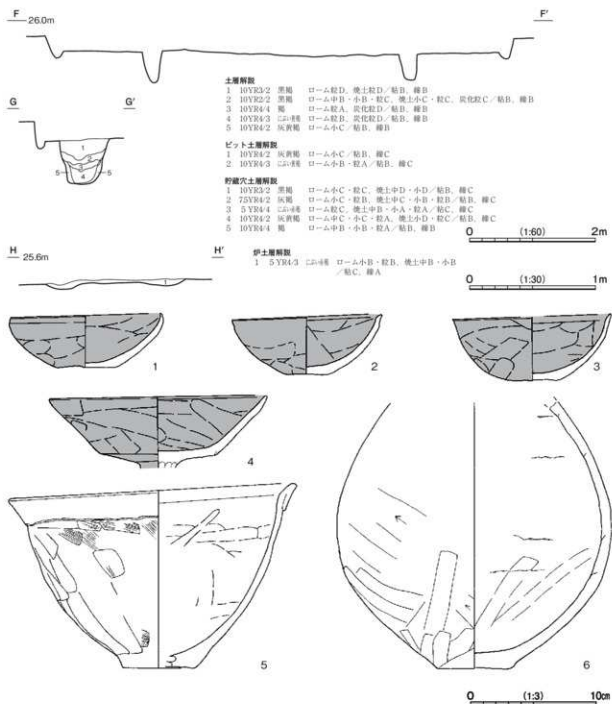
覆土 5層に分層できる。多くの層にロームブロックや炭化粒子が含まれており、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片 116点 (坏10、碗26、高坏46、鉢1、壺3、小型壺3、壺27) が出土している。2は西コーナー付近の床面から出土している。1・3・5・6はいずれも南コーナー付近の覆土下層から、4は覆土中からそれぞれ出土している。いずれも床面や、床面やや上位から出土しており、建物の廃絶に伴って遺棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第80图 第87号竖穴建物跡实测图



第81図 第87号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第41表 第87号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	技法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	甗	11.9	4.3	4.4	灰石、石英、赤色粒土	赤	普通 口縁器外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 全面赤彩	覆土下層	100% PL28 5号-一部保存
2	土師器	甗	11.8	4.8	3.3	灰石、石英	赤	普通 口縁器外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 全面赤彩	床面	95% PL28
3	土師器	甗	[12.4]	5.2	3.5	灰石、石英、赤色粒土	赤	普通 口縁器外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 全面赤彩	覆土下層	95% PL28
4	土師器	高杯	17.3	(5.6)	-	灰石、石英、赤色粒土	赤	普通 杯部外・内面ナデ 全面赤彩	覆土中	50%
5	土師器	鉢	22.5	14.7	5.3	灰石、石英	にぶい粉	普通 口縁部折り返し体外・内面横ナデ 体部内面ハケ目調整ナデ 内面へつ開り残ナデ	覆土下層	70% PL28 6号-一部保存
6	土師器	甗	-	(21.2)	5.6	灰石、石英、赤色粒土	橙	普通 体部外・内面へつ開り残ナデ	覆土下層	40% PL28 6号-一部保存

第 88 号竪穴建物跡 (第 82 図 PL14)

位置 調査区中央部の M 8 5 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 西部が削平を受けており、確認できた長軸は 3.56 m、短軸は 3.04 m である。平面形は長方形で、主軸方向は $N-58^{\circ}-W$ と推定できる。壁の高さは 10~16 cm で、外傾して立ち上がっている。

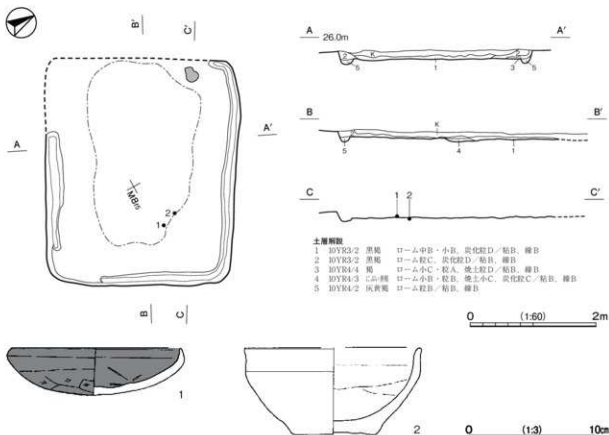
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝がほぼ全周していると推定できる。

竈 北壁の東コーナー付近で、火床部のみを確認した。煙道部や袖部は削平により検出できなかった。

覆土 5 層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片 28 点 (坏 10、高坏 2、鉢 1、小型甕 2、甕 13) が出土している。1・2 共に中央部の床面から出土しており、建物の廃絶に伴って遺棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 6 世紀後葉と考えられる。



第 82 図 第 88 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 42 表 第 88 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	134	40	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面へう面ナゲナゲ 内面へうナゲ 全面塗色処理	床面	95% PL38 5% 一部埋付
2	土師器	鉢	[138]	69	66	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外・内面ナゲ	床面	30% 70% 一部埋付

第 91 号竪穴建物跡 (第 83 図 PL14)

位置 調査区南部の M 9 b2 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 38 号掘立柱建物、第 264 号土坑、第 10 号柱穴列に掘り込まれている。

規模と形状 東部の大半が調査区域外に延びており、長軸1.76 m、短軸1.26 mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-23°-Wと推定できる。壁は高さ27 cmで、直立している。

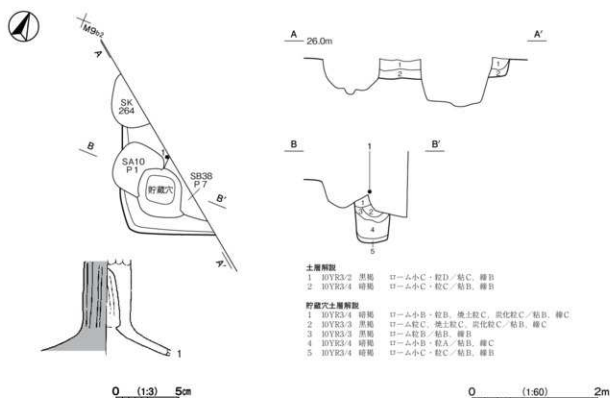
床 確認できた範囲は平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。長軸80 cm、短軸71 cmの隅丸方形で、深さは84 cmである。底面は平坦で、壁は直立している。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片2点（高坏、甕）が出土している。1は床面から出土している。建物の廃絶に伴って遺棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第83図 第91号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第43表 第91号竪穴建物跡出土遺物一覧

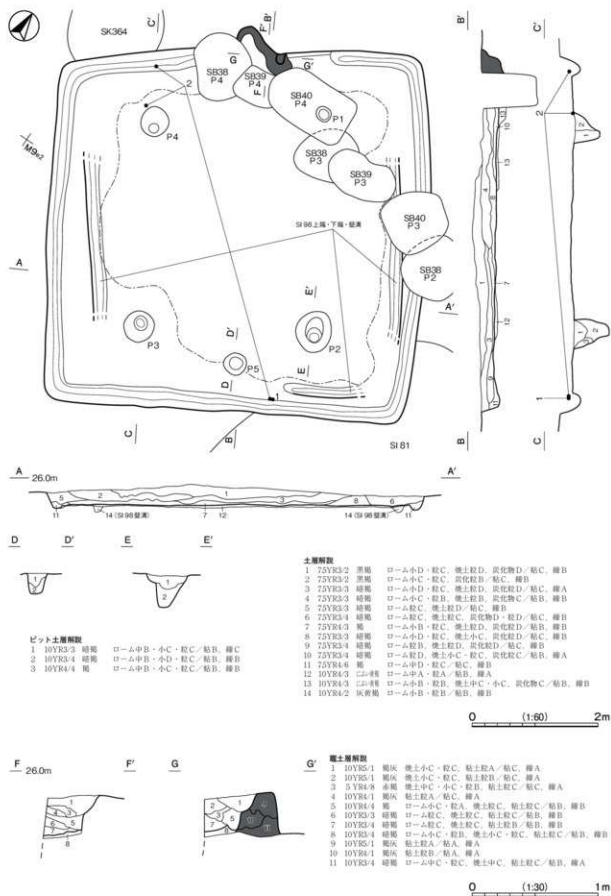
番号	種類	形種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
1	土師器	高坏	-	(7.6)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	脚部外面副位のナデ	外面赤彩	床面	30%

第92号竪穴建物跡（第84・85図 PL14）

位置 調査区南部のM9d2区、標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第81・98号竪穴建物跡、第364号土坑を掘り込み、第38～40号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.91 m、短軸5.85 mの方形で、主軸方向はN-30°-Wである。壁は高さ15～20 cmで、ほぼ直立している。



第84図 第92・98号竪穴建物跡実測図

床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。貼床は床面の下層に均一に確認され、ロームブロックを含む第12・13層を埋土して構築されている。壁溝が全周している。

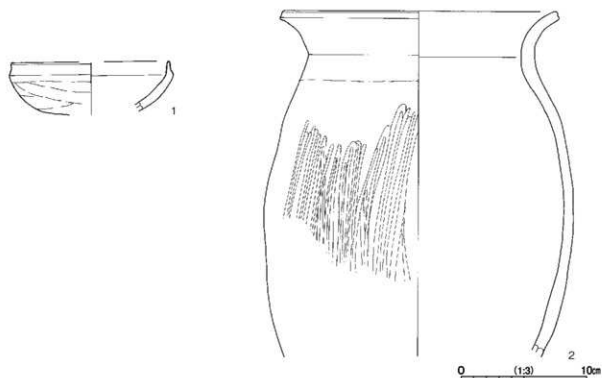
竈 北壁の中央部に付設されている。後世の掘立柱建物により掘り込まれており、焚口部及び左袖部は確認できなかった。袖部は、地山の上にロームブロックや粘土粒子を含む第9～11層を積み上げて構築されている。煙道部は壁外に40cmほど掘り込まれ、奥壁で直立し、出口で外傾している。

ピット 5か所。P1～P4は深さ40～60cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ32cmで、出入口施設に伴うピットである。

覆土 11層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片228点(坏1, 碗37, 高坏1, 壺1, 甕188), 須恵器片8点(坏1, 甕7), 土製品1点(羽口), 鉄滓4点(499.85g)が出土している。1・2共に床面近くから出土しており、いずれも埋め戻される早い段階で投棄されたものと考えられる。2は南北それぞれの壁溝から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第85図 第92号竪穴建物跡出土遺物実測図

第44表 第92号竪穴建物跡出土遺物一覧

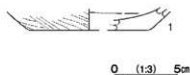
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.4	(4.2)	-	長石・石英・赤色粘土	に灰い橙	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外・内面ナテ	床面	70% PL38 外面一部縦行着
2	土師器	甕	21.6	(27.5)	-	長石・石英・赤母・赤色粘土	橙	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面縦位のヘラ着き 内面ナテ	床面	60% PL38 内面一部縦行着

第98号竪穴建物跡 (第84・86図)

位置 調査区南部のM9d2区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第92号竪穴建物、第38～40号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 第92号竪穴建物により大規模な削平を受けており、壁溝の痕跡を残すのみの形で検出した。東西軸は5.00mで、南北軸は不明である。



第86図 第98号竪穴建物跡
出土遺物実測図

床 平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。壁溝は全周していたものと考えられる。

覆土 壁溝の土層1層のみ確認した。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片1点(甕)が出土している。

所見 時期は、出土土器の特徴や周囲の竪穴建物跡との関係などから、6世紀中葉と考えられる。

第45表 第98号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
1	土師器	甕	(L8)	[94]		灰白・石灰・赤色胎子	橙	普通	体部外面下へラ磨き 内面ナデ		土層中	3% 一部露出

第46表 古墳時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形状	規模 長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考	
								土柱穴	土口	ピット	貯・置若蔵穴					
10	M9j9	N-21°-W	長方形	5.80×4.26	28-40	平坦	[全面]	3	-	3	焼灰	-	人為	土師器	5世紀中葉	本跡→S171, S192・S193, S196・S197・S199
27	M9e5	N-28°-W	長方形	6.12×4.98	3-13	平坦	[全面]	4	-	-	北側	-	人為	土師器, 金属製品	5世紀後半	本跡→本跡→S192・S193, S194, S195, S196, S197
35	L8j8	N-29°-W	方形	4.28×4.05	24-32	平坦	全周	4	1	5	北側	-	人為	土師器, 石製品, 金属製品	5世紀後半	TP8→本跡
62	M7a6	N-15°-W	方形	3.98×3.80	12-16	平坦	[土柱全周]	4	1	-	北側	-	人為	土師器, 須恵器, 金属製品	7世紀前半	S166→本跡
65	M8d2	N-3°-W	方形	4.00×3.78	27-32	平坦	全周	4	1	-	北側	-	人為	土師器	6世紀後半	本跡→S116
67	N9d9	N-51°-E	方形	5.22×5.00	14-35	平坦	全周	4	-	3	-	-	人為	土師器, 須恵器	4世紀後半	
68	N10e4	N-36°-W	方形	6.56×6.44	16-32	平坦	-	4	-	-	北側	-	人為	土師器, 須恵器	7世紀前半	本跡→S195
73	N9d9	N-10°-W	方形	4.46×4.30	32-38	平坦	全周	4	2	1	北側	-	人為	土師器, 須恵器, 土製品	7世紀中葉	S114→本跡→S193, S194
75	N9d7	N-31°-W	長方形	4.64×3.16	36-44	平坦	全周	-	-	1	-	-	人為	土師器, 須恵器, 土製品	7世紀前半	本跡→S123
79	L8j4	N-40°-W	方形	4.20×3.96	22-32	平坦	[土柱全周]	4	1	11	北側	-	人為	土師器, 須恵器	6世紀中葉	SK385→本跡
82	M9j1	N-62°-E	長方形	4.45×3.46	4	平坦	全周	2	-	1	-	1	不明		5世紀前半	本跡→SD5
84	M8d9	N-21°-W	方形	3.64×3.60	20-28	平坦	[土柱全周]	4	1	-	北側	-	人為	土師器, 土製品	6世紀中葉	本跡→S119
85	M8d7	N-35°-W	長方形	4.26×3.08	8-17	平坦	-	-	-	2	-	-	人為	土師器, 須恵器	6世紀後半	本跡→S119
86	M8j6	N-15°-W	方形	7.24×6.76	24-28	平坦	全周	4	2	7	北側	-	自然	土師器, 須恵器	6世紀後半	SK235・396→ 本跡→S118
87	M8j6	N-40°-W	方形	7.44×7.40	20-40	平坦	全周	4	-	-	焼灰	1	人為	土師器	5世紀中葉	SK391→本跡→ SK308
88	M8j5	N-58°-W	長方形	3.56×3.04	10-16	平坦	[土柱全周]	-	-	-	西側	-	自然	土師器	6世紀後半	
91	M9j2	[N-23°-W] [方形]	[方形]	[1.76×1.26]	27	平坦	-	-	-	-	1	自然	土師器	5世紀前半	本跡→S128, SK364, S310	
92	M9d2	N-30°-W	方形	5.91×5.85	15-20	平坦	全周	4	1	-	北側	-	人為	土師器, 須恵器	7世紀前半	S191・S198, S194 →本跡→S128(一部)
98	M9d2	[N-38°-W] [方形]	[方形]	5.00×-	-	平坦	[全面]	-	-	-	-	-	不明	土師器	6世紀中葉	SK391→S192, S193(一部)

(2) 鍛冶工房跡

微細な鍛冶関連遺物を採取するため、50 cmのグリッドを設定し、グリッドごとに土壌を取り上げた。土壌は、5 mm、3 mm、1 mmの篩を用いて水洗作業を行い、微細遺物を採取した。篩作業で採取された微細遺物については、滓の成分分析を行った。この成果については、(4) 金田西坪B遺跡出土鉄滓の自然科学分析で示した。

第1号鍛冶工房跡（第87～90図 PL14・15）

位置 調査区中央部のM 9g6区、標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第33・35号掘立柱建物、第62号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、確認できた規模は南北軸5.37 m、東西軸4.73 mの方形または長方形で、主軸方向はN-29°-Wである。壁高は5～13 cmで、ほぼ直立している。

床 やや凹凸があり、硬化面は認められない。貼床は、深さ10 cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第5～10層を埋土して構築されている。壁溝は、確認出来た範囲で回っている。

竈 北壁に付設されている。焚口部から煙道部まで110 cmで、燃焼部幅は45 cmである。竈は焚口部から奥壁までを浅く掘りくぼめ、第6～8層を埋土して構築した後、袖部は粘土粒子などを含む第5層を積み上げて構築されている。火床部は床面をやや掘りくぼめて浅い皿状を呈しており、明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に30 cmほど掘り込まれている。

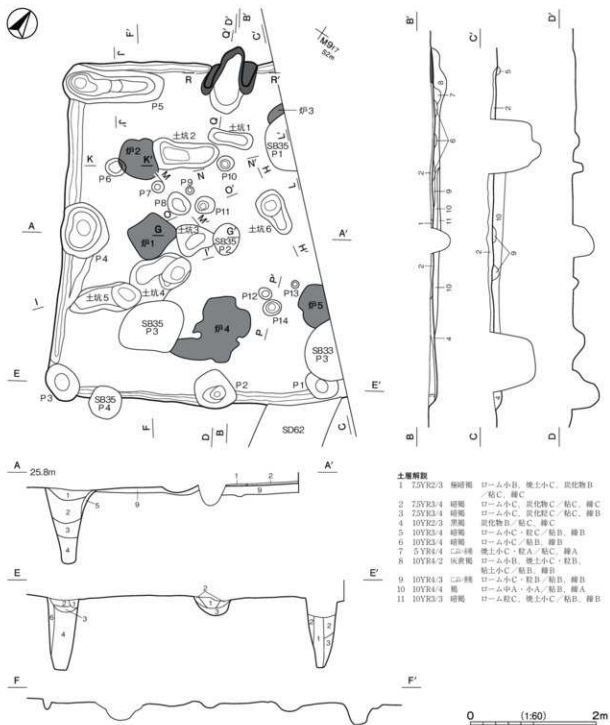
炉 5か所。炉1は西部に位置し、長径70 cm、短径60 cmの不整楕円形である。炉底は床面から深さ12 cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第2・3層を埋土して構築されている。第1層は鍛冶炉内の覆土である。第2層は火熱を受けて赤変硬化している。炉2は西コーナー部付近に位置し、長径60 cm、短径50 cmの不整楕円形である。炉底は床面から深さ30 cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第5・6層を埋土して構築されている。第1層は鍛冶炉内の覆土である。第2～4層は火熱を受けて赤変硬化している。炉3は北部に位置している。第35号掘立柱建物に掘り込まれており、焼土が一部確認できたのみであった。炉4は南壁付近に位置し、長径90 cm、短径70 cmの不整楕円形である。炉底は床面から深さ18 cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第3・4層を埋土して構築されている。第1・2層は鍛冶炉内の覆土である。第3層は火熱を受けて赤変硬化している。炉5は東部に位置し、長径50 cm、短径40 cmの不整楕円形である。炉底は床面から深さ20 cmほど掘りくぼめ、ロームブロックを含む第3・4層を埋土して構築されている。第1・2層は鍛冶炉内の覆土である。第3・4層は火熱を受けて赤変硬化している。

土坑 6基。土坑1は、覆土中に粒状滓、鍛造剥片が含まれており、炉3に伴う作業用土坑と考えられる。土坑2は、炉2に近接していることから、これに伴う作業用土坑と考えられる。土坑3は、炉1に近接していることから、これに伴う作業用土坑と考えられる。土坑5は土坑4を掘り込んでいる。いずれも鉄滓が出土しており、廃滓土坑と考えられる。土坑6も土坑1同様、覆土中に粒状滓、鍛造剥片が含まれており、作業用の土坑と考えられる。

ピット 23か所。P 1～P 5は深さ32～136 cmで、規模や配置から壁柱穴と考えられる。P 6～P 14は深さ6～25 cmで、性格は不明である。さらに掘方調査に伴って9か所確認した。P 15～P 18は深さ55～76 cmで、主柱穴と考えられる。P 19は深さ40 cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 20～P 23は深さ12～18 cmで、性格は不明である。

覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

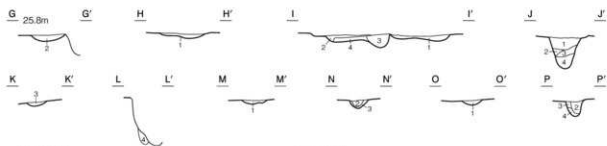
遺物出土状況 土師器片 37 点 (坏 5, 高坏 1, 甕 31), 須恵器片 2 点 (蓋), 土製品 2 点 (羽口), 礫 3 点 (花崗岩 1, 砂岩 2) のほか, 鍛冶関連遺物が出土している。1~4 はいずれも覆土中からの出土であり, 埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。5・6 は P 6 覆土中から出土しており, 炉 2 から廃棄されたと考えられる。
所見 微細遺物についての分類・集計を試みた。結果は第 48 表 出土鉄滓集計表のとおりで, 鉄滓のほか, 粒状滓や鍛造剥片が出土した。本跡からは鑪の羽口も出土しており, 精錬鍛冶と鍛練鍛冶を行った鍛冶工房跡と考えられる。本跡の時期は, 出土土器から 7 世紀中葉と考えられる。また, 時期を大きく違えずに四本柱の建物から壁柱穴へと作りかえ, 作業面積を広げて本格的に操業したものと考えられる。



第 87 図 第 1 号鍛冶工房跡実測図 (1)

土層解説

- | | | | |
|----|---------|--------|----------------------------|
| 1 | 25YR2/3 | 粉砂層 | ロ-ム小粒, 焼土小C, 炭化物B / 粘C, 雜C |
| 2 | 25YR3/4 | 砂層 | ロ-ム小C, 炭化物C / 粘C, 雜C |
| 3 | 25YR3/4 | 砂層 | ロ-ム小C, 炭化物C / 粘C, 雜C |
| 4 | 10YR2/3 | 赤層 | 炭化物B, 粘C, 雜C |
| 5 | 10YR3/4 | 砂層 | ロ-ム小C, 粘C / 粘B |
| 6 | 10YR2/4 | 砂層 | ロ-ム中C, 粘B, 雜B |
| 7 | 5YR4/4 | 2cm 雑層 | 焼土小C, 粘A / 粘C, 雜A |
| 8 | 10YR4/2 | 灰褐色層 | ロ-ム小B, 焼土小C, 粘B |
| 9 | 10YR4/3 | 2cm 雑層 | 焼土小C, 粘B, 雜B |
| 10 | 10YR4/4 | 粘 | ロ-ム中A, 小A / 粘B, 雜A |
| 11 | 10YR3/3 | 砂層 | ロ-ム粒C, 焼土小C / 粘B, 雜B |



土坑土層解説

- 1 10YR4-2 灰黄層 ローム小B・粒B、焼土小C、炭化物A・粒B
 / 粘B、雜B
 2 10YR3-4 暗褐色層 ローム小C・粒C、炭化粒C / 粘B、雜B
 3 10YR4-3 暗褐色層 ローム小B・粒B、焼土小C、炭化物C
 / 粘B、雜C
 4 10YR4-2 暗褐色層 ローム小B・粒A / 粘B、雜B

ピット土層解説

- 1 10YR3-3 暗褐色層 ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D / 粘B、雜B
 2 10YR3-3 暗褐色層 ローム粒D / 粘B、雜B
 3 10YR3-2 暗褐色層 ローム粒C、炭化粒D / 粘B、雜B
 4 10YR3-3 暗褐色層 ローム小D・粒C、炭化粒D / 粘B、雜B
 5 10YR4-4 暗褐色層 ローム小B・粒A / 粘B、雜B
 6 10YR4-4 暗褐色層 ローム小A・粒A / 粘B、雜B

0 (1:60) 2m

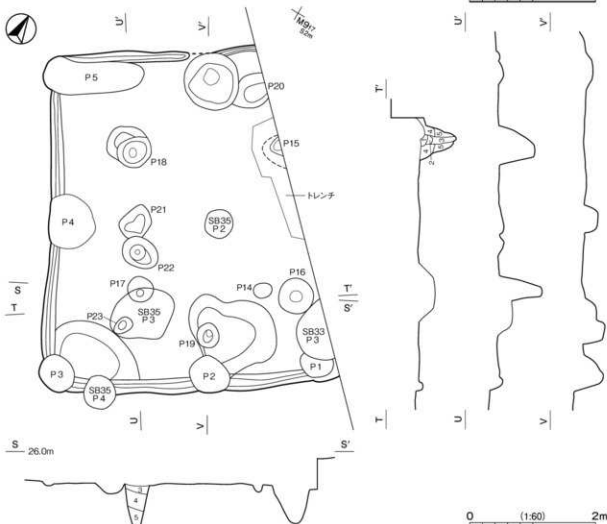


礎土層解説

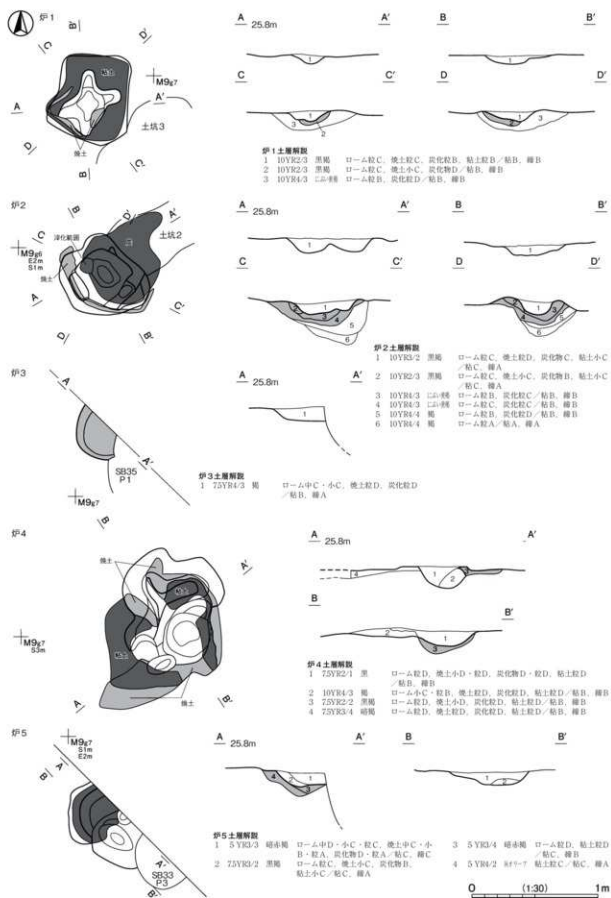
- 1 5YR4-3 暗褐色層 焼土粒B、炭化粒D / 粘C、雜C
 2 5YR4-6 暗褐色層 焼土小C・粒A / 粘C、雜B
 3 25YR4-3 暗褐色層 焼土粒C / 粘C、雜B
 4 25YR4-4 暗褐色層 ローム粒D、粘土粒D / 粘B、雜B

- 5 10YR6-2 灰黄層 ローム粒C、粘土粒B / 粘A、雜A
 6 5YR3-2 暗褐色層 焼土小C・粒B、炭化粒C / 粘B、雜C
 7 10YR4-3 暗褐色層 ローム小C・粒B、粘土粒C / 粘B、雜B
 8 10YR4-4 暗褐色層 ローム粒A / 粘B、雜B

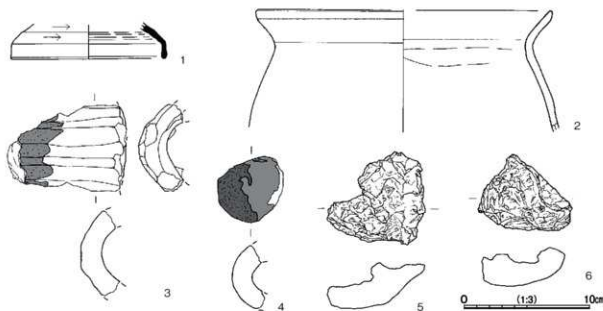
0 (1:30) 1m



第88図 第1号鍛冶工房跡掘方実測図(2)



第89图 第1号锻造工房炉跡实测图(3)



第90図 第1号鍛冶工房跡出土遺物実測図

第47表 第1号鍛冶工房跡出土遺物一覧

番号	種別	図様	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
1	煎麦器	蓋	(28)	(122)	-	長石・石英	黄灰	普通	天身部割れへラ削り	覆土中	5%
2	土師器	釜	(23.4)	(96)	-	長石・石英・雲母・赤鉄粒子	黄灰	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	覆土中	10% PL30 外底一部削り着
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴		出土位置	備考
3	器口	(7.0)	(3.6)	4.7	(14.1)	長石・石英・細礫	橙	先端部浄化	灰褐色	覆土中	PL45
4	器口	(5.0)	(2.5)	2.2	(5.27)	長石・石英・雲母・細礫	橙	先端部浄化	褐色	覆土中	PL45
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
5	輪形滓	7.4	7.8	3.7	154.19	鉄	縦面アリ	底面砂付着	P 6 覆土中	PL48	
6	輪形滓	6.1	7.5	3.1	244.57	鉄	縦面アリ	底面砂付着	P 6 覆土中	PL48	

第48表 第1号鍛冶工房跡出土鉄滓集計表

区・遺物	輪形鉄滓 (g)	不定形滓 (g)	鉄塊系遺物 (g)	粒状滓	鋼渣滓片	全体の重量 (g)
II区		56.90		3.49	31.12	91.51
2I区		186.79	5.44	1.32	11.70	205.25
3I区	96.44	99.35	8.38	20.11	209.85	434.13
4I区		93.84		1.86	29.43	125.13
P.3		140.47				140.47
P.6		441.37		15.17	206.93	663.47
P.7		87.71				87.71
P.8				0.69	4.27	4.96
P.9				0.37	1.24	1.61
PI1				0.02	0.12	0.14
PI2				0.20	1.06	1.26
PI3				0.06		0.06
PI5				0.09	0.84	0.93
土塊1				0.01	0.35	0.36
土塊4		40.12		1.00	4.22	45.34
土塊5		19.51		2.62	4.65	26.78
土塊6				0.20	0.26	0.46

(K-遺構)	検定量(g)	不定形分 (g)	炭灰系遺物 (g)	粒状分	鍛冶屑*	全体合計重量 (g)
9P1		108.73		4.31	71.79	184.83
9P2		319.41		10.38	248.64	578.43
9P3		8.85		0.83	2.20	11.88
9P4		49.14	26.05	8.39	5.17	88.75
9P5	117.11			1.70	1.76	120.57
合計	213.55	1632.19	39.87	72.82	835.60	2814.03

(3) 土坑

第276号土坑からは、第1号鍛冶工房跡同様、鍛冶関連遺物が出土した。そのため、5mm、3mm、1mmの篩を用いて水洗作業を行い、微細遺物を採取した。篩作業で採取された微細遺物については、滓の成分分析を行った。この成果については第1号鍛冶工房跡同様、(4) 金田西坪B遺跡出土鉄滓の自然科学分析で示した。

第154号土坑 (第91図 PL15)

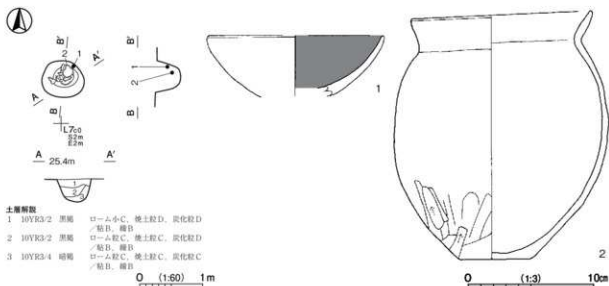
位置 調査区中央部のL7c0区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径0.69m、短径0.52mほどの楕円形で、長軸方向はN-72°-Wである。確認面からの深さは38cmである。底面は皿状で、壁はほぼ直立している。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含んでいることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片17点(坏1、椀3、甕13)が出土している。いずれも最下層の第3層から出土している。埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第91図 第154号土坑・出土遺物実測図

第49表 第154号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考	
1	土師器	坏	[129]	49	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面種子 内面ナデ・黒色処理	体部外面へラブリ残ナデ	覆土下層	20%
2	土師器	甕	143	198	58	長石・石英・雲母	にぶ・暗	普通	口縁部外・内面種子 内面へラブリ	体部外面へラブリ残ナデ	覆土下層	70% PL39

第276号土坑 (第92・93図 PL15)

位置 調査区南部のN 9a7区、標高26 mほどの平坦な台地上に位置している。

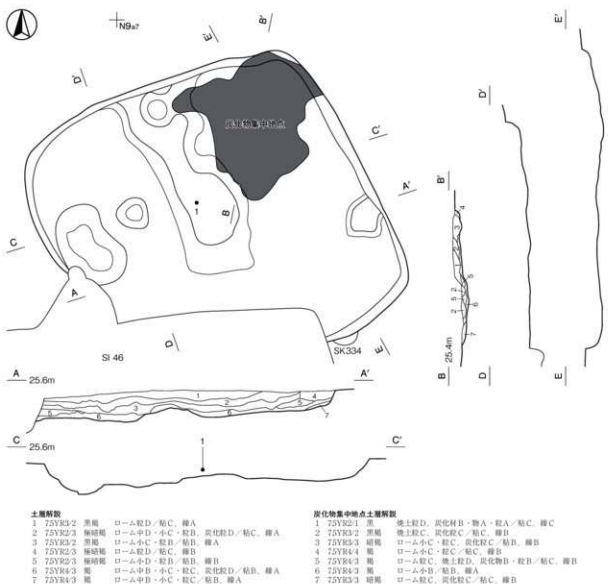
重複関係 第334号土坑を掘り込み、第46号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.08 m、短軸4.82 mの隅丸方形で、長軸方向はN-68°-Eである。底面は凹凸がある。確認面からの深さは48 cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

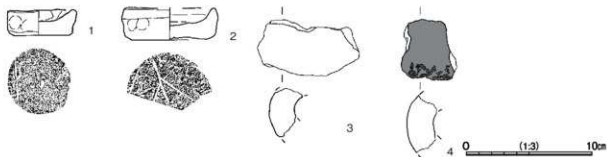
覆土 7層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片22点(坏2、碗1、甕16、手捏土器3)、土製品3点(羽口)、鍛冶関連遺物は鉄滓87点(1.623.75 g)、粒状滓(11.84 g)、鍛造剥片(7.18 g)が出土している。1は、やや盛り上がった底面の覆土下層から、2~4は覆土中から出土している。

所見 鍛冶関連遺物が出土しており、第1号鍛冶工房跡に伴う廃棄土坑と考えられる。形状が隅丸長方形を呈しており、廃棄土坑として利用される前は、鍛冶工房として操業していた可能性がある。時期は、第1号鍛冶工房跡と同じ7世紀中葉と考えられる。



第92図 第276号土坑実測図



第93図 第276号土坑出土遺物実測図

第50表 第276号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
1	土師器	手捏土器	50	21	45	長石・石英・赤色粒子	にじみ青	普通	外面指圧痕	内面ヘラナデ	覆土下層	90% PL29
2	土師器	手捏土器	[68]	25	[60]	長石・赤色粒子	にじみ青	普通	外面指圧痕	ヘラナデ 内面ナデ 底部木葉痕	覆土中	50% PL39
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴		出土位置	備考	
3	甕口	[60]	[26]	[24]	[73.24]	長石・石英・細礫	明赤地	外面硬化	褐色色	覆土中		
4	甕口	[70]	[23]	[30]	[89.70]	長石・石英・細礫	橙	外面硬化	灰白色 鉄滓付着	覆土中		

第365号土坑 (第94図 PL16)

位置 調査区南部のM 9h7区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径0.35m、短径0.30mの楕円形で、長軸方向はN-34°-Wである。確認面からの深さは26cmである。底面はU字状で、壁はほぼ直立している。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片2点(碗、壺)が出土している。1は覆土上層から出土した。

所見 時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第94図 第365号土坑・出土遺物実測図

第51表 第365号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
1	土師器	碗	116	54	36	長石・石英・細礫	にじみ青	普通	口縁部外・内面種子ナデ	体部内面へう張り後子ナデ 指圧痕 内面ナデ	覆土上層	95% PL29

第52表 古墳時代土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
154	L 7.0	N-72°-W	楕円形	0.69 × 0.52	38	ほぼ直立	單状	人為	土師器	
276	N 9.47	N-68°-E	楕円形	5.08 × 4.82	48	傾斜	凹凸	人為	土師器、土製品、鍛冶関連遺物	SK334 → 不詳 → SH66
365	M 9.17	N-34°-W	楕円形	0.35 × 0.30	26	ほぼ直立	U字状	人為	土師器	

(4) 金田西坪 B 遺跡出土鉄滓の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、古墳時代後期の第 28 号鍛冶工房跡と第 276 号土坑より出土した鉄滓 11 点について顕微鏡組織分析・化学組成分析を実施し、当時の鍛冶工程に関わる資料を得る。

1 試料

試料は古墳時代後期の第 28 号鍛冶工房跡より出土した鉄滓 8 点（試料番号 1～8）と第 276 号土坑より出土した鉄滓 3 点（試料番号 9～11）の計 11 点である（表 1）。

表 1 資料一覧と調査項目

番号	遺構名	遺物番号	名称	推定年代	計測値		金属探知機反応	顕微鏡	化学分析	
					大きさ (mm)	重量 (g)				
1	第 1 号 鍛冶工房跡	No.3	陶形鍛冶滓	古墳時代 後期	64 × 60 × 30	132.6	×	○	○	
2		No.45	伊壁		96 × 77 × 25	148.9	×	○	○	
3		伊 1	No.52		鍛冶滓	35 × 28 × 24	31.4	×	○	○
4			陶製 土器 土師 器 土師 器		鍛冶滓 (流動状)	-	-	×	○	○
5		伊 2	No.37		陶形鍛冶滓	102 × 75 × 28	181.5	×	○	○
6		伊 4	No.96		粒状滓・金属鉄粒・鍛造 屑片	-	-	×	○	○
7					鍛冶滓 (流動状)	86 × 38 × 6	32.8	×	○	○
8-1					陶形鍛冶滓	47 × 44 × 15	23.9	×	○	○
8-2-6		第 276 号土坑	No.23		粒状滓・金属鉄粒・鍛造 屑片	-	-	×	○	-
9					陶形鍛冶滓 (含鉄)	82 × 58 × 34	131.0	○	○	○
10					No.35	伊壁	87 × 50 × 18	66.7	×	○
11	No.71	製煉滓	58 × 29 × 43	94.7	×	○	○			

2 分析方法

(1) 肉眼観察

遺物の外観の特徴など、調査前の所見を記載した。

(2) 顕微鏡組織

鉱物組成や金属部の組織観察を目的とする。外観の特徴から断面観察位置を決めて、試料を切り出し、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の 3 μm と 1 μm で順を追って研磨した。その後金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真を撮影した。また金属鉄部の組織観察には 3% ナイタル（硝酸アルコール）液を腐食に用いた。

(3) 化学組成分析

定量分析を以下の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO)：容量法。

二酸化硅素 (SiO₂)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、二酸化チタン (TiO₂)、酸化バナジウム (V₂O₅)：ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)：誘導結合プラズマ発光分光分析法。

3 結果

(1) 肉眼観察

・ 椀形鍛冶滓 (試料番号1: 第1号鍛冶工房跡 No.3)

やや小形で完形の椀形鍛冶滓 (132.6g) である。上下面とも細かい木炭痕による凹凸が目立つ。表面は黄～茶褐色の鉄錆や土砂で覆われる。着磁性はあるが金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。また気孔は少なく緻密な滓である。

・ 炉壁 (試料番号2: 第1号鍛冶工房跡 No.45)

強い熱影響を受けて、内面が黒色ガラス質化した炉壁片 (148.9g) である。内面表層には部分的に薄く茶褐色の鉄錆が付着するが、着磁性はない。外面側には灰褐色の炉壁粘土がごく薄く残存する。粘土中には砂粒が多量に混和されている。

・ 鍛冶滓 (試料番号3: 第1号鍛冶工房跡 炉1 No.52)

ごく小形の鍛冶滓破片 (31.4g) である。側面4面は破面。色調は暗灰色で着磁性はごく弱い。滓中の気孔は少なく緻密である。

・ 微細遺物 (試料番号4: 第1号鍛冶工房跡 炉1)

第1号鍛冶工房跡の炉1の覆土から回収された微細な鍛冶関連遺物である。微細な鍛冶滓片や、数mm大の金属粒 (またはその錆化物)、粒状滓⁽⁸²⁾ や鍛造剥片⁽⁸²⁾ が多数混在する。

1) 粒状滓

やや大形で断面楕円状 (長径3.5mm) の粒状滓である。地の色調は暗灰色で着磁性がある。表面に若干茶褐色の鉄錆が付着する。また表面は平滑であるが、微細な棘状の突起が点在する。

2) 粒状滓

僅かに歪な球状 (1.8mm) である。地の色調は黒灰色で、表面は比較的平滑である。

3) 金属鉄粒

やや歪な球状の金属鉄粒 (3.3mm) である。表面は茶褐色の土砂に覆われる。金属探知器反応があり、内部に金属鉄が残存すると推定される。

4) 金属鉄粒 (錆化)

歪な形状の鉄粒 (2.2mm) と推測される。表面は茶褐色の鉄錆で覆われる。金属探知器反応はなく、全体が錆化していると考えられる。

5) 鍛冶滓片

大形で厚手 (5.2 × 3.6 × 0.6mm) の剥片様遺物である。色調は暗灰色で、片面の表層には薄く茶褐色の鉄錆が付着する。

6) 鍛造剥片

大形でやや薄手の (5.1 × 2.4 × 0.25mm) 平坦な剥片である。表面は光沢の強い銀灰色、裏面側は光沢のない暗灰である。

・ 椀形鍛冶滓 (試料番号5: 第1号鍛冶工房跡 炉2 No.37)

やや大形で完形の椀形鍛冶滓 (181.5g) である。滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。表面には茶褐色の鉄錆が薄く付着するが、まとまった鉄部はみられない。上下面とも細かい木炭痕による凹凸が著しく、木炭破片も複数付着している。気孔は少なく緻密な滓である。

・微細遺物（試料番号6：第1号鍛冶工房跡 炉2）

第28号鍛冶工房跡の炉2の覆土から回収された微細な鍛冶関連遺物である。炉1から回収された微細遺物（試料番号7）と同様に、微細な鍛冶滓片、数mm大の金属粒（またはその錆化物）、粒状滓や鍛造剥片が多数混在する。

1) 粒状滓

1箇所突起がみられるが、比較的きれいな球状（2.8mm）の粒状滓である。色調は暗灰色で着磁性がある。

2) 金属鉄粒

大形でやや歪な球状（5.0mm）の金属鉄粒である。表面全体が茶褐色の鉄錆で覆われる。金属探知器反応があるため、内部に金属鉄が残存すると考えられる。

3) 金属鉄粒

やや歪な球状（4.8mm）の金属鉄粒である。表面全体が茶褐色の鉄錆で覆われ、両端には2箇所錆瘤がみられる。しかし金属探知器反応があるため、内部に金属鉄が残存すると考えられる。

4) 粒状滓（含鉄）

やや歪な球状（3.8mm）の粒状滓と推定される。表面は茶褐色の鉄錆で覆われるが、金属探知器反応はなく着磁性も弱い。

5) 鍛造剥片

大形（7.5×5.5×0.3mm）でやや平坦な鍛造剥片である。表裏面とも光沢のない暗灰色で、茶褐色の鉄錆が薄く付着する。

6) 鍛造剥片

やや小形で平坦（3.8×3.0×0.25mm）な鍛造剥片である。表裏面とも光沢のない暗灰色である。

・鍛冶滓（含鉄）（試料番号7：第1号鍛冶工房跡 炉4 No.46）

やや小形で不定形の鍛冶滓破片（32.8g）と推測される。滓の色調は黒灰色で着磁性はごく弱い。複数条の細い流動状の滓が接した状態で凝固したものと考えられる。全体に気孔は少なく緻密である。

・椀形鍛冶滓・微細遺物（試料番号8：第1号鍛冶工房跡 炉4）

1) 椀形鍛冶滓

完形でごく小形の椀形鍛冶滓（23.9g）である。表面には薄く茶褐色の鉄錆が付着する。着磁性はあるが金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。また上下面とも細かい木炭痕による凹凸が著しい。

2) 粒状滓

やや歪な球状（2.5mm）の粒状滓であった。表面に薄く茶褐色の鉄錆が付着するが着磁性は弱く、まとまった鉄部はみられない。

3) 粒状滓（含鉄）

歪な球状（2.3mm）の粒状滓であった。滓の色調は黒灰色で、表面は平滑である。また端部に1箇所茶褐色の錆瘤が付着するが、金属探知器反応はみられない。

4) 粒状滓

比較的きれいな球状（1.7mm）の粒状滓である。色調は暗灰色で、表面には微細な気孔が点在する。また表面には部分的に茶褐色の鉄錆が付着する。

5) 鍛冶滓片

やや厚手で平坦な剥片推定物（3.7×1.6×0.5mm）である。表裏面とも光沢のない暗灰色で、ごく薄く茶褐色の鉄錆が付着する。

6) 鍛冶滓片

表表面とも微細な凹凸のある薄片様遺物 (3.8 × 3.5 × 0.3 mm) である。表面には茶褐色の鉄錆が付着する。

・ 碗形鍛冶滓 (含鉄) (試料番号 9 : 第 276 号土坑 No.23)

やや小形で完形の碗形鍛冶滓 (131.0g) である。表面には広い範囲で茶褐色の鉄錆が付着する。金属探知器反応もあるため、内部に金属鉄が残存する可能性が高い。一方滓の色調は黒灰色で、上下面とも微細な木炭痕による凹凸が著しい。気孔は少なく緻密な滓である。

・ 炉壁 (試料番号 10 : 第 276 号土坑 No.35)

強い熱影響を受けて、内面が黒色ガラス質化した炉壁片 (66.7g) である。内面表層には部分的に薄く茶褐色の鉄錆が付着しており、弱磁性がある。一方、外面側には灰褐色の炉壁粘土がごく薄く残存する。粘土中には小礫や砂粒が多量に混和されている。

・ 製錬滓 (試料番号 11 : 第 276 号土坑 No.71)

やや小形の製錬滓 (炉内滓) の破片 (94.7g) と推定される。上面と側面は全面破面である。色調は灰褐色で磁性は弱い。内部には中小の気孔が散在するが、緻密な滓である。

(2) 顕微鏡組織

・ 碗形鍛冶滓 (試料番号 1 : 第 1 号鍛冶工房跡 No.3)

図版 1 ①～③に示す。滓中には白色粒状結晶ウスタイト (Wustite : FeO) が晶出する。鉄酸化物主体の鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。また滓中の微小白色粒は金属鉄、不定形青灰色部は錆化鉄である。

・ 炉壁 (試料番号 2 : 第 1 号鍛冶工房跡 No.45)

図版 1 ④～⑥に示す。炉壁内面表層部の素地 (灰色部) はガラス質滓 (非晶質硅酸塩) である。内部には微細な石英等の砂粒が多量混在する。また滓中の灰褐色多角形結晶はマグネタイト (Magnetite:FeO・Fe₂O₃)、微細な淡灰色結晶ファヤライト (Fayalite : 2FeO・SiO₂) である。鉄材の酸化に伴う反応副生物と推測される。

・ 鍛冶滓 (試料番号 3 : 第 1 号鍛冶工房跡 炉 1 No.52)

図版 2 ①～③に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル (Ulvöspinel : 2FeO・TiO₂)、白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖である。

・ 微細遺物 (試料番号 4 : 第 1 号鍛冶工房跡 炉 1)

1) 粒状滓

図版 2 ④⑤に示す。素地 (暗灰色部) はガラス質滓 (非晶質硅酸塩) で、白色粒状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

2) 粒状滓

図版 2 ⑥⑦に示す。素地 (暗灰色部) はガラス質滓 (非晶質硅酸塩) で、淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

3) 金属鉄粒

図版 3 ①②に示す。全体に腐食 (錆化) が進んでいるが、内部に若干金属鉄が残存する (①の左側。②はその拡大)。金属鉄部の素地は層状のパーライト (Pearlite) で、白色針状のセメンタイト (Cementite : Fe₃C) および黒色片状の黒鉛 (GraphiteC) が析出する。わずみ鑄鉄組織が確認された。

4) 金属鉄粒 (錆化)

図版 3 ③④に示す。全体が錆化しているが、蜂の巣状のレデブライイト (Ledeburite) が残存する。この特徴から亜共晶組成白鑄鉄と推定される。

5) 鍛冶滓片

図版3⑤⑥に示す。白色粒状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。鉄材の吹き減り（酸化に伴う損失）による鍛錬鍛冶滓と推定される。

6) 鍛造剥片

図版3⑦⑧に示す。表層（写真上側）に部分的に確認される明白色層はヘマタイト（ $\text{Hematite:Fe}_2\text{O}_3$ ）、中間の灰褐色層はマグネタイト（ $\text{Magnetite:FeO}\cdot\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）、内側の灰色層はウスタイト（ Wustite ）である。

今回断面観察を実施した微細遺物6点のうち、粒状滓2点はそれぞれ精錬鍛冶（試料番号4.1）～鍛錬作業（試料番号4.2）で生じた反応副生物と推定される。また鉄粒2点はともに鑄鉄粒（試料番号4.3, 4）であった。これは炭素含有量の高い鉄（鑄鉄）を脱炭して鍛打可能な鍛冶原料としていたことを示す遺物といえる。さらに微細な板状の鍛冶滓（試料番号4.5）や鍛造剥片（試料番号4.6）も1点ずつ確認された。

・碗形鍛冶滓（試料番号5：第1号鍛冶工房跡 炉2 No.37）

図版4①～③に示す。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖である。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（ $\text{Ulvöspinel:2FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）、白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖である。

・微細遺物（試料番号6：第1号鍛冶工房跡 炉2）

1) 粒状滓

図版4④⑤に示す。素地（暗灰色部）はガラス質滓（非晶質硫酸塩）で、淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

2) 金属鉄粒

図版4⑥⑦に示す。亜共晶組成白鑄鉄組織が確認された。

3) 金属鉄粒

図版5①②に示す。内部に金属鉄が残存しており、過共析～亜共晶組成白鑄鉄組織が確認された。

4) 粒状滓（含鉄）

図版5③④に示す。素地（暗灰色部）はガラス質滓で、滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（ $\text{Ulvöspinel:2FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）が晶出する。一方青灰色部は錆化鉄で、亜共晶組成白鑄鉄組織痕跡が残存する。鍛冶原料（砂鉄製錬滓が付着した鑄鉄塊）を溶融して不純物を除去する際に生じた微細遺物と推定される。

5) 鍛造剥片

図版5⑤⑥に示す。写真上側の明白色層はヘマタイト、中間の灰褐色層はマグネタイト、内側の灰色層はウスタイトである。

6) 鍛造剥片

図版5⑦⑧に示す。写真上側の明白色層はヘマタイト、中間の灰褐色層はマグネタイト、内側の灰色層はウスタイトである。

今回断面観察を実施した微細遺物6点のうち、粒状滓2点（試料番号6.1, 4）は精錬鍛冶作業で生じた反応副生物と推定される。このうち1点（試料番号6.4）は滓中に微細な鑄鉄粒が確認された。さらに鉄粒2点のうち1点（試料番号6.2）は鑄鉄粒で、もう1点（試料番号6.3）も過共析～亜共晶組成白鑄鉄組織が確認された。これは炭素含有量の高い鉄（鑄鉄）を脱炭して鍛打可能な鍛冶原料としたことを示す遺物である。また鍛造剥片（試料番号6.5, 6）も2点確認された。

・鍛冶滓（含鉄）（試料番号7：第1号鍛冶工房跡 炉4 No.46）

図版6①～③に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖である。また③中央の青灰色粒は錆化鉄である。内部には過共析組織の痕跡が残存する。

・椀形鍛冶滓・微細遺物（試料番号8：第1号鍛冶工房跡 炉4）

1) 椀形鍛冶滓

図版6④～⑥に示す。発達した白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。また滓中の微細な明白色粒は金属鉄、不定形の青灰色部は錆化鉄である。

2) 粒状滓

図版7①～③に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

3) 粒状滓（含鉄）

図版7④～⑥に示す。素地（灰色部）はガラス質滓（非晶質硅酸塩）で、内部の微細な明白色粒は金属鉄である。これは炉表面や羽口先端、または鉄材表面の酸化防止や鍛接剤に用いた粘土の溶融物と推定される。一方写真右側の青灰～黒灰色部は錆化鉄である。内部には黒鉛が残存しており、わずかに錳鉄であったことが確認された。

4) 粒状滓

図版7⑦⑧に示す。白色粒状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また滓中の微細な明白色粒は金属鉄、不定形の青灰色部は錆化鉄である。

5) 鍛冶滓片

図版8①②に示す。素地（暗灰色部）はガラス質滓（非晶質硅酸塩）で、白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。熱間での鍛打に伴う吹き減り（酸化に伴う損失）で生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。

6) 鍛冶滓片

図版8③④に示す。ウスタイトが凝集して晶出する。また内部の微細な明白色部は金属鉄、④右下の暗灰色部はガラス質滓（非晶質硅酸塩）である。

微細遺物5点（試料番号8-2～6）を選択して、断面観察を実施した。粒状滓3点は、1点（試料番号8-2）が精錬鍛冶作業に伴う遺物であった。1点は粘土溶融物（ガラス質滓）で、わずかに錳鉄（錳化）が溶着することから、銑（錳鉄）の脱炭作業に伴う遺物と判断される。1点は鉄材の酸化による鉄酸化物主体の遺物（試料番号8-4）、鍛錬鍛冶作業に伴う遺物であった。また板状の2点（試料番号8-5、6）は、鉄酸化物主体の鍛錬鍛冶滓と推定される。

・椀形鍛冶滓（含鉄）（試料番号9：第276号土坑 No.23）

図版8⑤～⑦に示す。滓中にはやや歪な粒状（約15×9mm）の金属鉄が確認された。鉄部は過共析～亜共晶組成白錳鉄組織が確認された。また⑥中央は滓部で、淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

・炉壁（試料番号10：第276号土坑 No.35）

図版9①～③に示す。不定形青灰色部は錆化鉄である。一方炉壁内面表層の素地（灰色部）は、ガラス質滓（非晶質硅酸塩）である。内部には微細な石英等の砂粒が多数混在する。また滓中には淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。酸化雰囲気での鉄材と炉材粘土の反応副生物と推測される。

・製錬滓（試料番号11：第276号土坑 No.71）

図版9④～⑥に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色針状結晶イルメナイト（Ilmenite: $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ）が晶出する。比較的高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖である。また滓中には、外周にウルボスピネルが晶出した被熱砂鉄（含チタン鉄鉱）⁽⁹³⁾が複数点在する。

(3) 化学組成分析

・碗形鍛冶滓（試料番号1：第1号鍛冶工房跡 No.3）

表2に示す。全鉄分（Total Fe）の割合が59.67%と高い。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.07%、酸化第1鉄（FeO）が34.53%、酸化第2鉄（ Fe_2O_3 ）46.84%であった。造滓成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ ）は9.14%と低めで、このうち塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）は1.50%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（ TiO_2 ）は0.75%、酸化バナジウム（ V_2O_5 ）が0.07%と低値であった。

当鉄滓は鉄酸化物主体で、製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（ TiO_2 、 V_2O_5 ）の低減傾向が顕著であった。この特徴から、鉄材を熱間で鍛打加工した時の吹き減り（酸化に伴う損失）で生じた反応副生物（鍛錬鍛冶滓）と推定される。

・炉壁（試料番号2：第1号鍛冶工房跡 No.45）

表2に示す。全鉄分（Total Fe）の割合は13.67%であった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.17%、酸化第1鉄（FeO）が8.47%、酸化第2鉄（ Fe_2O_3 ）9.89%の割合であった。造滓成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ ）の割合は75.47%で、このうち塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）は5.52%であった。二酸化チタン（ TiO_2 ）1.12%、酸化バナジウム（ V_2O_5 ）は0.05%であった。これは炉壁粘土中の砂粒（含チタン鉄鉱）の影響があると考えられる

当炉壁は鍛冶作業に伴う炉壁破片の可能性が考えられる。内面表層のガラス質滓中には被熱砂鉄や製錬滓は溶着していない。

表2 化学組成分析結果

番号	遺構名	名称	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化硅素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化バナジウム (V_2O_5)	
1	第1号 鍛冶工房跡	覆土中	碗形鍛冶滓	59.67	0.07	34.53	46.84	4.90	2.74	1.03	0.47	0.75	0.07
2			伊壁	13.67	0.17	8.47	9.89	51.06	18.89	3.91	1.61	1.12	0.05
3		伊1	鍛冶滓	30.58	0.06	52.97	13.36	16.16	5.52	3.24	1.06	2.30	0.12
4			陶磁遺物	62.61	0.42	43.14	40.97	5.11	2.73	1.15	0.94	3.20	0.20
5		伊2	碗形鍛冶滓	46.24	0.17	43.88	17.10	15.86	4.85	2.86	1.89	10.06	0.32
6			陶磁遺物	61.8	0.33	47.88	34.68	6.11	3.18	0.95	0.64	2.00	0.11
7		伊4	鍛冶滓（流動状）	45.95	0.25	51.55	8.05	20.87	7.51	3.01	1.37	3.53	0.16
8-1			碗形鍛冶滓	67.03	0.06	52.79	37.08	2.62	1.31	0.27	0.33	1.00	0.05
9			碗形鍛冶滓（含鉄）	60.71	7.29	30.51	42.47	7.05	2.41	0.72	0.33	0.97	0.05
10		第276号土坑	伊壁	12.53	0.13	6.24	10.79	95.31	19.24	1.59	1.49	1.60	0.07
11			製錬滓	29.09	0.30	28.22	9.80	23.74	5.85	4.07	3.01	30.96	0.55

・鍛冶滓（試料番号3：第1号鍛冶工房跡 炉1 No.52）

表2に示す。全鉄分（Total Fe）50.58%に対して、このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.06%、酸化第1鉄（FeO）が52.97%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）13.36%の割合であった。造滓成分（SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO）25.98%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は4.30%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は2.30%、酸化バナジウム（V₂O₅）が0.12%であった。

滓中に製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO₂、V₂O₅）の影響が残ることから、当鉄滓は精錬鍛冶滓と推定される。

・微細遺物（試料番号4：第1号鍛冶工房跡 炉1）

表2に示す。全鉄分（Total Fe）の割合は62.61%と高い。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.42%、酸化第1鉄（FeO）が43.14%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）は40.97%であった。造滓成分（SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO）の割合は9.93%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は2.09%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は3.20%、酸化バナジウム（V₂O₅）が0.20%であった。

以上の化学分析結果から、当遺物中の微細な鍛冶滓や粒状滓には、砂鉄起源の鉄チタン酸化物を含むものが一定量混在すると考えられる。

・碗形鍛冶滓（試料番号5：第1号鍛冶工房跡 炉2 No.37）

表2に示す。全鉄分（Total Fe）46.24%に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.17%、酸化第1鉄（FeO）が43.88%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）17.10%の割合であった。造滓成分（SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO）25.46%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は4.75%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は10.06%、酸化バナジウム（V₂O₅）が0.32%と高値であった。

当鉄滓は精錬鍛冶滓と推定される。鍛冶滓としては砂鉄起源の脈石成分（TiO₂、V₂O₅）の割合が非常に高い。金属鉄と製錬滓の分離が悪い鉄塊が鍛冶原料で、その不純物（砂鉄製錬滓）の除去作業（精錬鍛冶）に伴う反応副生物と考えられる。

・微細遺物（試料番号6：第1号鍛冶工房跡 炉2）

表2に示す。全鉄分（Total Fe）61.80%に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.33%、酸化第1鉄（FeO）が47.88%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）34.68%の割合であった。造滓成分（SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO）は10.88%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は1.59%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は2.00%、酸化バナジウム（V₂O₅）が0.11%であった。

以上の化学分析結果から、炉1出土遺物（試料番号4）と同じく、当遺物中の微細な鍛冶滓や粒状滓にも砂鉄起源の鉄チタン酸化物を含むものが一定量混在すると考えられる。

・鍛冶滓（含鉄）（試料番号7：第1号鍛冶工房跡 炉4 No.46）

表2に示す。全鉄分（Total Fe）45.95%に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.25%、酸化第1鉄（FeO）が51.55%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）8.05%の割合であった。造滓成分（SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO）32.76%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は4.38%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は3.53%、酸化バナジウム（V₂O₅）が0.16%であった。

滓中に製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO₂、V₂O₅）の影響が残ることから、当鉄滓は精錬鍛冶滓と推定される。

・碗形鍛冶滓・微細遺物（試料番号8：第1号鍛冶工房跡 炉4）

1) 碗形鍛冶滓

表2に示す。全鉄分 (Total Fe) の割合が67.03%と高い。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.06%、酸化第1鉄 (FeO) が52.79%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 37.08%であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO) の割合は45.3%と低く、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は0.60%であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は1.00%、酸化バナジウム (V₂O₅) が0.05%と低値であった。

当鉄滓は梶形鍛冶滓 (試料番号1) と同様、鉄化合物主体で製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の脈石成分 (TiO₂, V₂O₅) の低減傾向が顕著であった。この特徴から、鉄材を熱間で鍛打加工した時の吹き減り (酸化に伴う損失) で生じた反応副産物 (鍛錬鍛冶滓) と推定される。

・梶形鍛冶滓 (含鉄) (試料番号9 : 第276号土坑 No.23)

表2に示す。全鉄分 (Total Fe) 60.71%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は7.29%、酸化第1鉄 (FeO) が30.51%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 42.47%の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO) の割合は10.51%と低く、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は1.05%であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.97%、酸化バナジウム (V₂O₅) が0.05%と低値であった。

当鉄滓中にはウルボスピネル (Ulvöspinel : 2FeO・TiO₂) が晶出する。この特徴から、滓部は精錬鍛冶滓と推定される。また滓中には小形の (過共析-亜共晶組成白錆鉄組織の) 金属鉄が確認された。鍛打加工前の鍛冶原料が滓中に取り残されたものと考えられる。

・炉壁 (試料番号10 : 第276号土坑 No.35)

表2に示す。全鉄分 (Total Fe) 12.53%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.13%、酸化第1鉄 (FeO) が6.24%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 10.79%の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO) の割合は77.63%で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は3.08%であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は1.60%、酸化バナジウム (V₂O₅) が0.07%であった。これは炉壁粘土中の砂粒 (含チタン鉄鉱) の影響があると考えられる。

当炉壁は鍛冶作業に伴う炉壁破片の可能性が考えられる。内面表層のガラス質滓中には被熱砂鉄や製錬滓は溶着していない。

・製錬滓 (試料番号11 : 第276号土坑 No.71)

表2に示す。全鉄分 (Total Fe) の割合は29.09%と低い。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.30%、酸化第1鉄 (FeO) が28.22%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 9.80%の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO) は36.67%で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は7.08%であった。また製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は20.96%、バナジウム (V₂O₅) が0.55%と高値であった。

当鉄滓は砂鉄製錬滓に分類される。滓中には熱影響を受けた砂鉄粒子が複数確認され、砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の脈石成分 (TiO₂, V₂O₅) も高値傾向が顕著であった。

4 考察

金田西坪B遺跡から出土した鍛冶関連遺物を調査した結果、当遺跡には高チタン砂鉄を製錬してつくられた鍛冶原料鉄 (未加工の製錬塊塊系遺物) が搬入され、精錬-鍛錬鍛冶作業が行われていたことが明らかとなった。この特徴から鍛冶工房跡 (第1号鍛冶工房跡) は、地域周辺も含む東日本の広い範囲で鉄生産が行われるようになった、7世紀後半以降の遺構の可能性が高いと考えられる。詳細は以下の通りである。

(1) 今回調査を実施した鉄滓のうち1点 (試料番号11) は、チタニアの割合が高く砂鉄製錬滓に分類される (TiO₂ : 20.96%)。茨城県内かすみがうら市 (旧千代田村) 栗田かなくそ山製鉄遺跡の炉に伴う出土鉄滓もチタニアの割合が高く (TiO₂ : 10.14 ~ 23.39%)⁽³⁴⁾、同様の高チタン砂鉄を製鉄原料とした鉄産地から、鍛冶原

料鉄が搬入されていたと推定される。

(2) 鉄滓4点(試料番号3, 5, 7, 9)は、チタニアの影響が残ることから、精錬鍛冶滓に分類される。また粒状滓中にもウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)が晶出するものが複数(試料番号4-2, 6-1, 4, 8-2)確認された。これも遺跡内で鍛冶原料の不純物除去(精錬鍛冶)が行われたことを示す遺物といえる。

(3) 鉄滓2点(試料番号1, 8-1)は鉄酸化物主体で、鉄材を熱間で加工した時の吹き減り(酸化に伴う損失)で生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。同様の鉄酸化物主体の微細遺物も複数(試料番号4-1, 5-6, 6-5, 6, 8-4 ~ 6)確認された。これらは遺跡内で鍛冶鉄器が製作されたことを示唆する遺物群である。

(4) 碗形鍛冶滓(試料番号9)中には、ごく小形の金属鉄部が確認された。精錬鍛冶作業中に滓中に取り残されたものと推定される。金属組織は過共析～亜共晶組成白鉄組織と高炭素材であった。

さらに微細遺物中に鉄粒も複数確認された。(試料番号4-3, 4, 6, 2, 3)。これらも鑄鉄の割合が高く、鉄(鑄鉄)を鍛冶炉で脱炭して鍛打加工可能な状態にする際、溶融状態の鉄(鑄鉄)表面から飛散した微細な粒が、炉周辺で冷却・凝固したものと推測される。こうした遺物の報告例は少ないが、奈良県明日香村検限寺周辺遺跡の鍛冶関連遺物の調査^(8, 9)で報告されている。以上の調査結果から、当遺跡には鍛冶原料として鉄(鑄鉄)が相当量搬入されていたと考えられる。

(5) 炉壁2点(試料番号2, 10)は、内面表層のガラス質滓中に被熱砂鉄や製煉滓は溶着していない。鍛冶作業に伴う炉壁破片の可能性が考えられる。

(注)

(1) 粒状滓は熱間での鍛冶作業に伴って生じる、微細な球状の遺物である。鉄酸化物主体のものや、粘土溶融物(ガラス質滓)主体のものがある。

(2) 鍛造薄片は、熱間で鍛打したときに剥離・飛散した、鉄素材の表面の鉄酸化膜を指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鍛造薄片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト(Hematite: Fe_2O_3)、中間層マグネタイト(Magnetite: Fe_3O_4)、大部分は内層ウスタイト(Wustite: FeO)の3層から構成される。

(3) J.B. Macchiesney and A. Muraw: American Mineralogist, 46 (1961), 572

[イルメナイト(Ilmenite: $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、シュードブルッカイト(Pseudobrookite: $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$)の晶出は $\text{FeO} - \text{TiO}_2$ 二元平衡状態図から高温化作業が推定される。]

(4) 高塚秀治「栗田がなくその山遺跡出土鉄滓の分析結果について」『栗田がなくその山製鉄遺跡調査報告』千代田村教育委員会 1990

(5) 大澤正己・鈴木瑞穂「検限寺周辺出土鍛冶関連遺物の分析調査」『キトラ公園内遺跡発掘調査報告書』明日香村教育委員会 2013

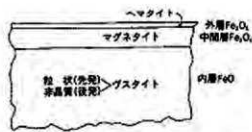


図1 鍛造薄片3層分離型模式図

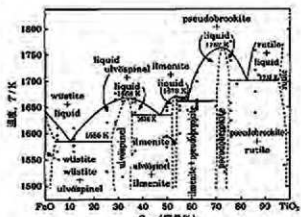


図2 $\text{FeO} - \text{TiO}_2$ 二元平衡状態図

図版1 橢形鍛冶滓・炉壁の顕微鏡組織

No1 橢形鍛冶滓
 ①～③滓部：ウツバ、
 青灰色部：錆化鉄、
 微小明白色粒金屬鉄



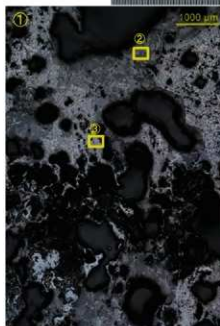
No2 炉壁
 ④～⑥内面表層が珪質滓（石英粒混在）、
 滓部：ウツバ・フヤウツバ



図版2 鍛冶滓・粒状滓の顕微鏡組織

No3 鍛冶滓

①~③滓部:ウツバ・
ウタ・スビ・サビ・イササ
不定形青灰色部:酸化鉄



No4-1 粒状滓

④⑤滓部:ウツバ



No4-2 粒状滓

⑥⑦滓部:ウタ・スビ
・ウツバ

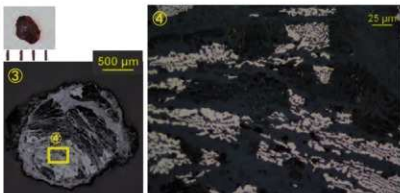


図版3 金属鉄粒・鍛造剥片の顕微鏡組織

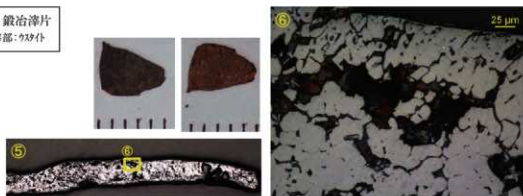
No4-3 金属鉄粒
①②金属鉄部：ねずみ
鑄鉄



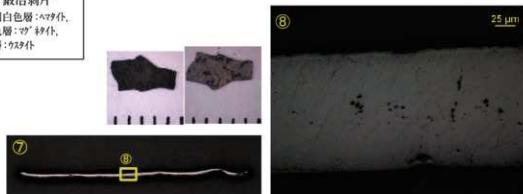
No4-4 金属鉄粒
③④錆化鉄：亜共晶組成
白鑄鉄組織痕跡



No4-5 鍛冶薄片
⑤⑥薄部：9294



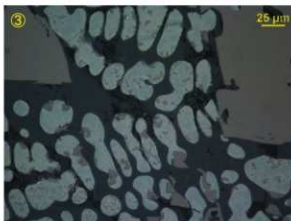
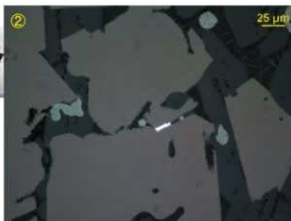
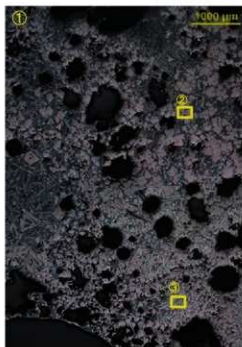
No4-6 鍛冶剥片
⑦⑧明白色層：9294
灰褐色層：9294
灰色層：9294



図版4 椀形鍛冶滓・粒状滓・金属鉄粒の顕微鏡組織

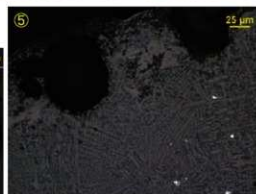
No5 椀形鍛冶滓

①～③滓部: 929付・944' ス
ビ' 林・7ナヤ付,
微小明白色
粒: 金属鉄



No6-1 粒状滓

④⑤滓部: 929付・944' ス
ビ' 林・7ナヤ付,
微小明白色粒: 金属鉄



No6-2 金属鉄粒

⑥⑦金属鉄部: 亜共
晶組成白鑄鉄組織

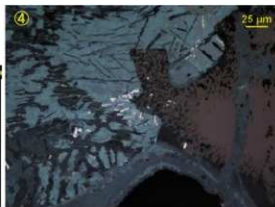
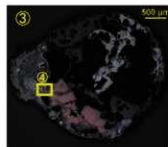


図版5 金属鉄粒・粒状滓・鍛造剥片の顕微鏡組織

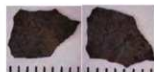
No6-3 金属鉄粒
①②金属鉄部：過共析組織～亜共晶組成白鑄鉄組織



No6-4 粒状滓
(含鉄) ③④錳化鉄部：亜共晶組成白鑄鉄組織。滓部：944'スビ14



No6-5 鍛造剥片
⑤⑥明白色層：77'件、
灰褐色層：77' 77' 件、
灰色層：77' 77' 件



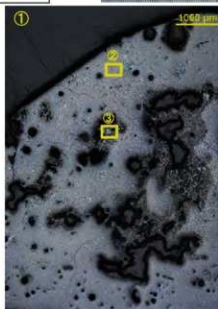
No6-6 鍛造剥片
⑦⑧明白色層：77'件、
灰褐色層：77' 77' 件、
灰色層：77' 77' 件



図版6 鍛冶滓・塊形鍛冶滓の顕微鏡組織

No7 鍛冶滓

①～③滓部：928μm→
 44°2'±14.77μm付、
 微小明白色粒：金属鉄
 ③錆化鉄粒：過共析
 組織痕跡



No8-1 塊形鍛冶滓

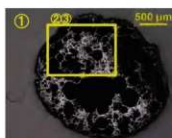
④～⑥滓部：928μm、青灰色部：
 錆化鉄（金属組織痕跡不明瞭）、
 微小明白色部：金属鉄



図版7 粒状滓の顕微鏡写真

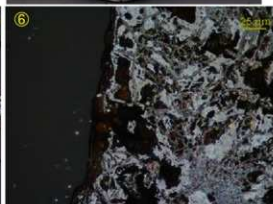
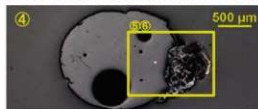
No8-2 粒状滓

①～③滓部：948'21'4
8・929付・779付



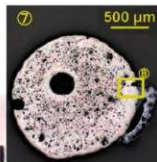
No8-3 粒状滓

④～⑥滓部：ガラス質滓、
微小金属鉄粒、酸化鉄
部（ねずみ銹鉄組織痕跡）

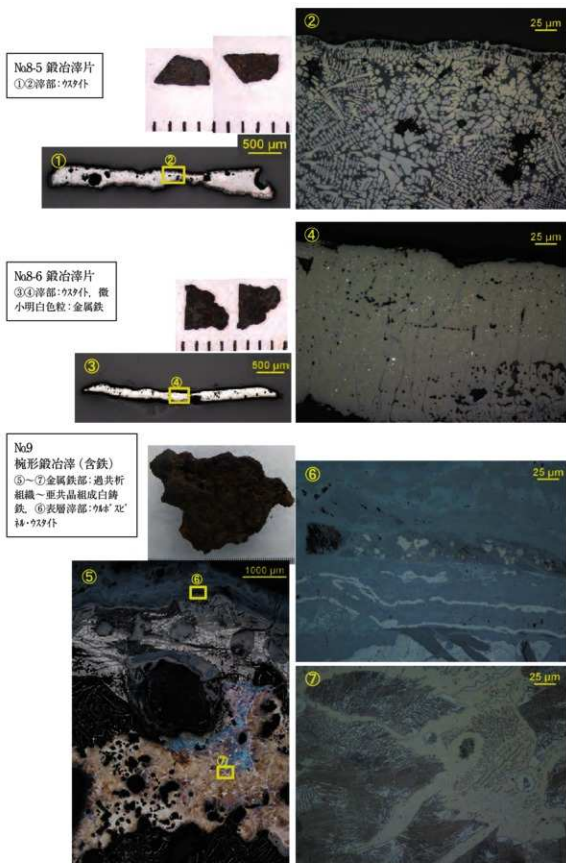


No8-4 粒状滓

⑦⑧滓部：929付



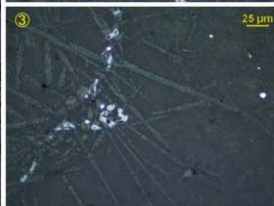
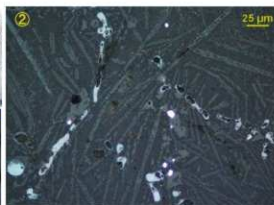
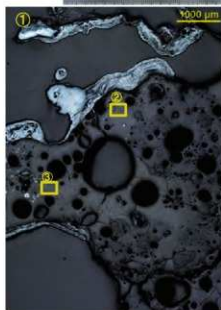
図版8 鍛造薄片・椀形鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織



図版9 炉壁・精錬滓の顕微鏡組織

No10 炉壁

①～③内面表層ガラス質滓(石英粒混在)、滓部:779付



No11 製錬滓

④～⑥滓部:968'2' 14・保付付、被熱砂鉄(含矽鉄鉱)



4 奈良時代の遺構と遺物

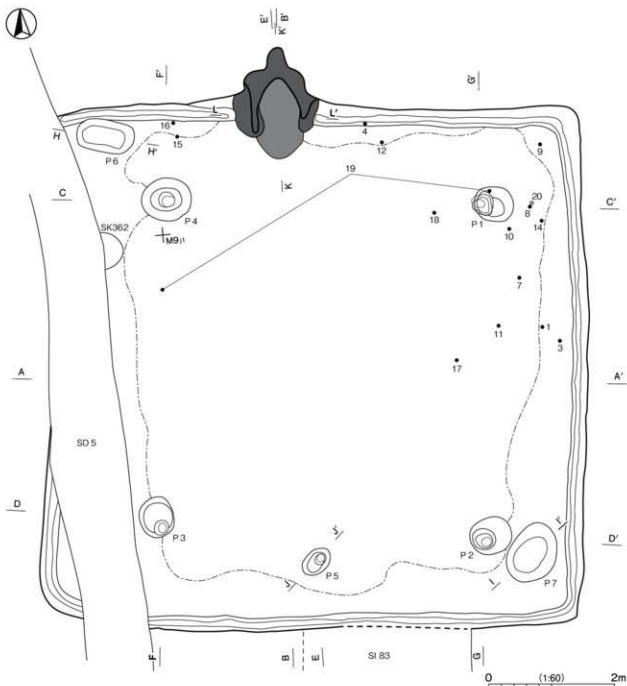
当時代の遺構は、竪穴建物跡 13 棟、掘立柱建物跡 25 棟、大型円形土坑 1 基、土坑 2 基、柱穴列 2 条、溝跡 1 条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

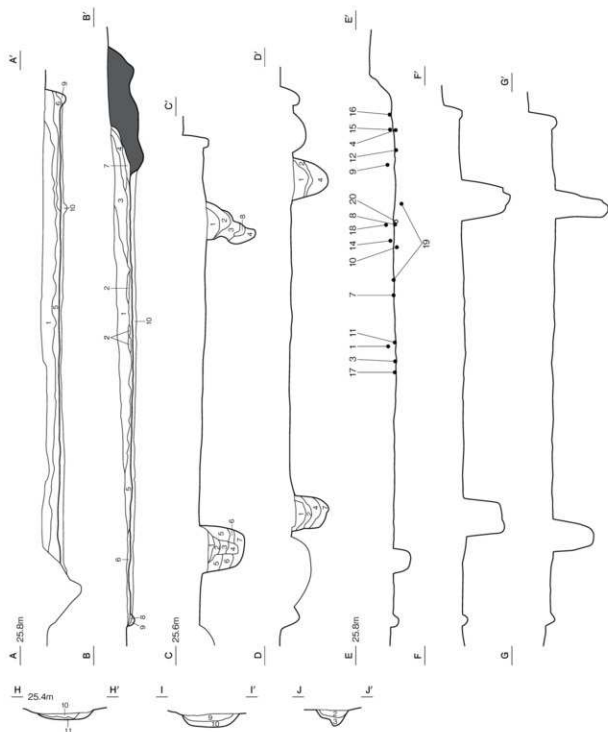
第 11 号竪穴建物跡 (第 95 ~ 100 図 PL16)

位置 調査区南部の M 9j1 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 83 号竪穴建物、第 362 号土坑、第 5 号溝に掘り込まれている。



第 95 図 第 11 号竪穴建物跡実測図 (1)



土層解説

- | | | |
|----|-------------|-------------------------------------|
| 1 | 10YR4/2 灰青層 | ローム中D・小C・粒B、焼土小D・粒D、炭化粒D
/ 粒B、雜B |
| 2 | 10YR4/3 二毛雑 | 焼土中C・粒C、炭化粒D、粘土小B / 粒B、雜B |
| 3 | 10YR3/2 暗褐色 | ローム小B、焼土中C、炭化粒D、粘土小C / 粒B、雜B |
| 4 | 10YR3/4 暗褐色 | ローム小C・粒B、焼土小C・粒C、炭化粒C / 粒B、雜B |
| 5 | 10YR3/2 赤褐色 | ローム中C・小B・粒C、焼土小D、炭化粒D / 粒B、雜B |
| 6 | 10YR3/2 赤褐色 | ローム中C・粒C、炭化粒D / 粒B、雜B |
| 7 | 10YR3/2 赤褐色 | ローム小D・粒C、焼土小C・粒C、炭化粒C / 粒B、雜B |
| 8 | 10YR4/1 暗灰 | ローム小B、焼土粒D / 粒B、雜C |
| 9 | 10YR4/2 灰青層 | ローム小B・粒B、雜B |
| 10 | 10YR4/2 灰青層 | ローム粒C / 粒B、雜B |

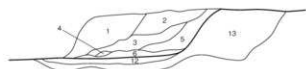
ピット土層解説

- | | | |
|----|-------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR3/3 暗褐色 | ローム小C・粒C、焼土粒D / 粒B、雜C |
| 2 | 10YR3/4 暗褐色 | ローム小B・粒B、粒B、雜C |
| 3 | 10YR4/2 灰青層 | ローム小A / 粒B、雜A |
| 4 | 10YR4/3 二毛雑 | ローム中A・小A / 粒B、雜C |
| 5 | 10YR4/4 暗 | ローム小B・粒A / 粒B、雜B |
| 6 | 10YR4/4 暗 | ローム中A・小A / 粒B、雜B |
| 7 | 10YR5/6 青褐色 | ローム小C・粒A / 粒B、雜B |
| 8 | 10YR6/1 暗灰 | ローム中B・小B / 粒B、雜C |
| 9 | 25YR3/3 暗褐色 | ローム小C・粒C、炭化粒D / 粒B、雜B |
| 10 | 5YR4/4 二毛雑 | ローム小C・粒B、焼土中C・小B・粒A / 粒C、雜B |
| 11 | 10YR4/4 暗 | ローム小C・粒A、焼土粒C / 粒B、雜B |

0 (1:60) 2m

第96図 第11号竪穴建物跡実測図(2)

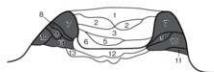
K 25.8m



K

L

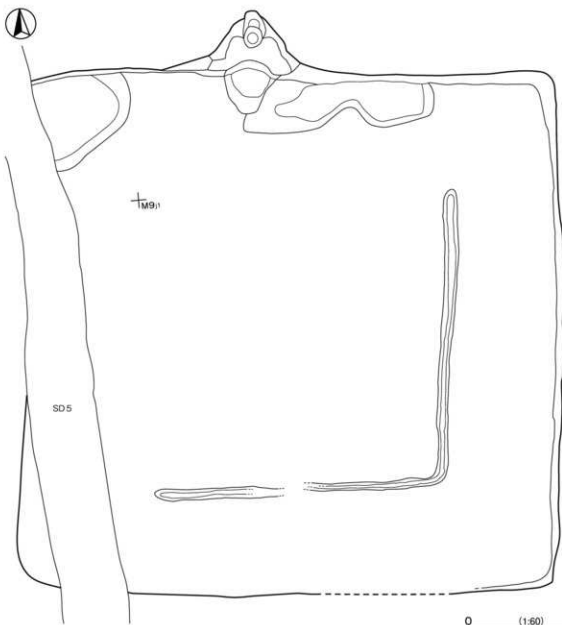
L'



壁土層解説

- | | | | |
|----------------|-----------------------------|------------------|-------------------------------------|
| 1 10YR5/4 暗褐色 | ローム小C・粘B、焼土小C・粒C、炭化粒C/粘B、雜B | 9 5YR5/4 淡赤褐色 | ローム大D・粒C、焼土中B・小B・粒A、炭化粒D、粘土小D/粘B、雜A |
| 2 10YR5/3 赤褐色 | ローム小D・粒D、粘土大A/粘A、雜B | 10 5YR6/2 灰青褐色 | ローム小C、焼土粒D、粘土小A/粘A、雜A |
| 3 10YR5/3 赤褐色 | 焼土中C・小B、炭化物C/粘B、雜B | 11 10YR5/3 赤褐色 | ローム小C・粒B、焼土粒C、炭化物D・粒D、粘土小B/粘A、雜A |
| 4 7.5YR5/1 暗灰 | 焼土小B/粘B、雜C | 12 2.5YR4/4 淡赤褐色 | 焼土中C・粒A、雜A |
| 5 7.5YR5/2 灰褐色 | 焼土小B・粒C、炭化物C、粘土小B/粘A、雜C | 13 7.5YR5/4 淡赤褐色 | ローム中B・小B・粒A、焼土小C・粒B/粘B、雜B |
| 6 5YR4/1 暗灰 | 焼土小B・粒C、粘土小C/粘B、雜C | | |
| 7 10YR5/3 赤褐色 | ローム粒C、焼土小C、炭化粒C、粘土小A/粘A、雜A | | |
| 8 10YR6/2 灰青褐色 | 粘土小A・粘A、雜A | | |

0 (1:30) 1m



第 97 图 第 11 号竖穴建物跡掘方実測图 (3)

規模と形状 第5号溝により堅穴建物の西側が掘り込まれているが、規模は南北軸8.35m、東西軸8.25mの方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は3～34cmで、ほぼ直立している。

床 平出で、中央部が踏み固められている。確認できた範囲では壁溝が全周している。貼床は床面の下層に均一に確認され、ロームブロックを含む第10層を埋土して構築されている。

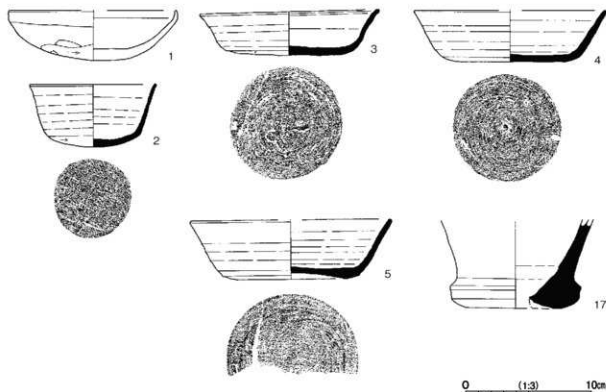
竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで180cmで、燃焼部の幅は65cmである。竈は、10cmほど掘りくぼめ、第12・13層で整地している。袖部は整地面の上にロームブロックや粘土ブロックを含む第7～11層を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さを使用しており、火床面は第12層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に80cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

ピット 7か所。P1～P4は深さ55～80cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ25cmで、配置から出入口に伴うピットと考えられる。P6・P7はそれぞれ深さ10cm・25cmで、性格は不明である。

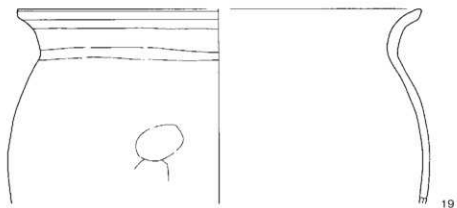
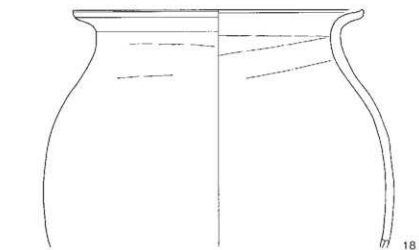
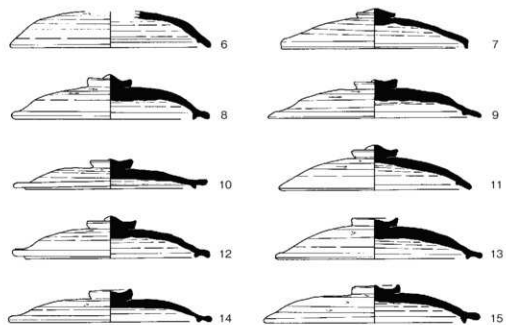
覆土 9層に分層できる。不規則な堆積状況を示すことから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片1071点（坏206、壺1、甕861、甕3）、須恵器片415点（坏196、蓋187、盤2、鉢3、控鉢2、壺1、瓶類1、甕23）、土製品2点（土玉、羽口）、石器2点（砥石）、金属製品3点（刀子1、不明2）が出土している。3・4・7・8・10～12・16・17・19・20はいずれも床面から出土しており、廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。19はP1出土の破片と床面から出土した破片が接合したものである。1・9・14・15・18は覆土下層から出土している。2・5・6・13は覆土中から出土している。いずれも建物の埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀前半と考えられる。本跡の掘方調査の際、床面下より溝状の掘り込みを確認した。本跡に先行する建物跡の壁溝の可能性があるので、遺物がなく、ピットや竈などの内部施設の痕跡は確認できなかった。

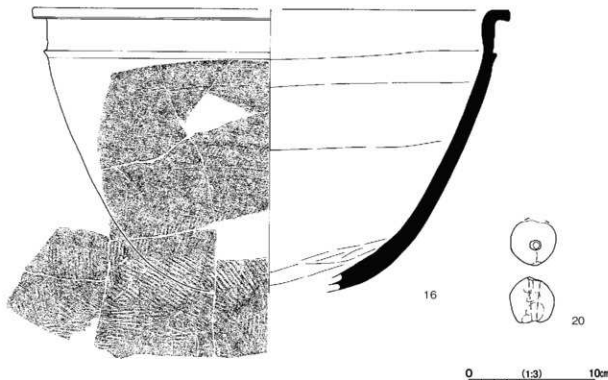


第98図 第11号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)



0 (1:3) 10m

第 99 图 第 11 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)



第 100 図 第 11 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (3)

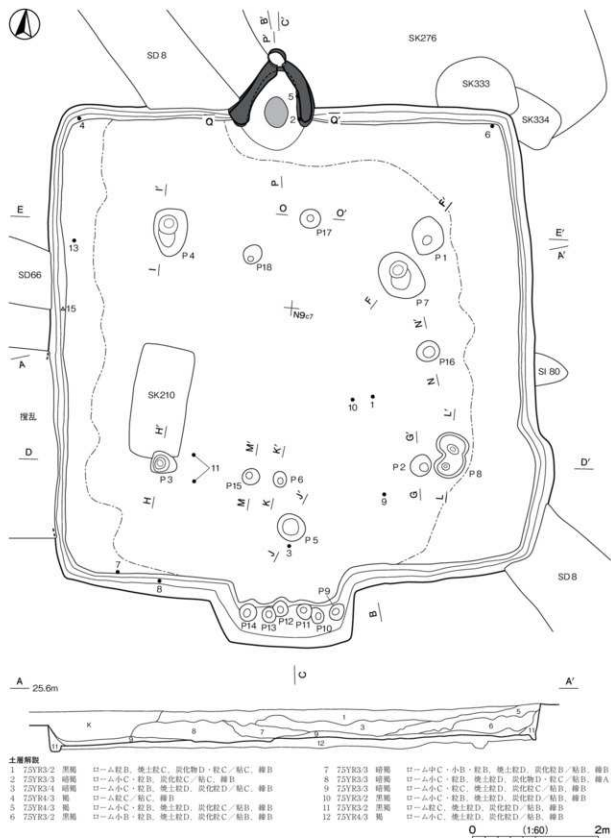
第 53 表 第 11 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[133]	4.0	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	70% PL39 95% 新治産
2	須恵器	坏	99	5.0	63	長石・石英・粗礫	灰	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下層回転へラ削り 底部回転へラ削り後ナデ	覆土中	80% PL29
3	須恵器	坏	143	3.7	92	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下層・底部回転へラ削り	床面	70% 新治産
4	須恵器	坏	[152]	4.1	80	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下層・底部回転へラ削り	床面	60% PL39 80% 新治産
5	須恵器	坏	[157]	4.7	[86]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下層・底部回転へラ削り 底部中央凹み	覆土中	40% PL39 新治産
6	須恵器	蓋	[160]	(29)	-	長石・石英	灰	普通	天舟部回転へラ削り	覆土中	50%
7	須恵器	蓋	148	3.2	-	長石・石英	灰白	普通	天舟部回転へラ削り	床面	80% PL40
8	須恵器	蓋	158	3.5	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい褐色	普通	天舟部回転へラ削り	床面	70% 新治産
9	須恵器	蓋	[169]	3.0	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天舟部回転へラ削り	覆土下層	60% 新治産
10	須恵器	蓋	154	2.4	-	長石・石英・雲母・礫	灰白	普通	天舟部回転へラ削り	床面	90% PL40 新治産
11	須恵器	蓋	149	3.5	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天舟部回転へラ削り	床面	90% PL40 新治産
12	須恵器	蓋	157	3.3	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	天舟部回転へラ削り	床面	100% PL40 新治産
13	須恵器	蓋	162	3.3	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	天舟部回転へラ削り	覆土中	70%
14	須恵器	蓋	162	2.6	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	天舟部回転へラ削り	覆土下層	90% PL40 新治産
15	須恵器	蓋	172	3.1	-	長石・石英・雲母・礫	灰黄	普通	天舟部回転へラ削り	覆土下層	100% PL40 新治産
16	須恵器	鉢	[280]	(225)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外面斜位の平行凹み 内面ナデ	床面	30% PL29 新治産
17	須恵器	散鉢	-	(70)	101	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外・内面ナデ	床面	50% PL40 新治産
18	土師器	甕	230	(189)	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 内面ナデ	覆土下層	30%
19	土師器	甕	[318]	(155)	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	床面	20%

番号	器種	径	長さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
20	土玉	3.6	3.7	0.9	(409)	長石・石英	にぶい褐色	外面ナデ 穿孔	床面	PL45

第 46 号竪穴建物跡 (第 101 ~ 104 図 PL16・17)

位置 調査区南部の N 9b6 区、標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

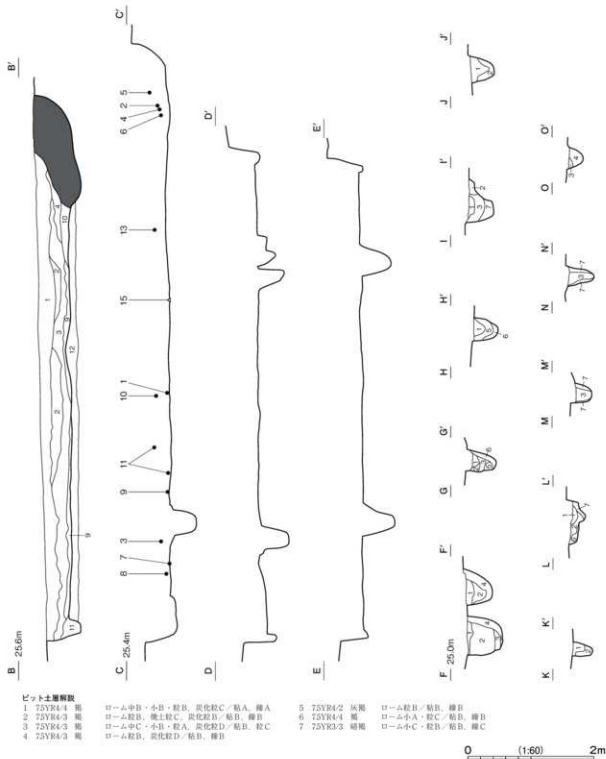


第 101 図 第 46 号竪穴建物跡実測図 (1)

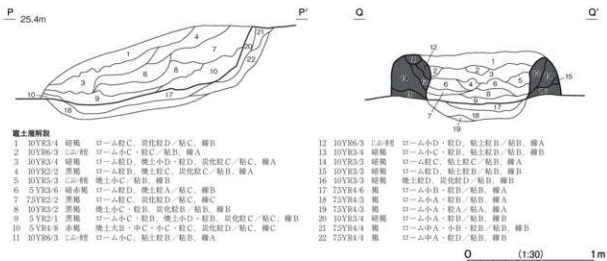
重複関係 第80号竪穴建物跡、第276・333・334号土坑を掘り込み、第210号土坑、第8・66号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.68m、短軸7.64mの方形で、主軸方向はN-7'-Wである。壁高は32～48cmで、ほぼ直立している。南壁中央部には出入口施設に伴う張り出しが設けられている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周している。貼床は床面の下層に均一に確認され、ルームブロックを含む第12層を埋土して構築されている。



第102図 第46号竪穴建物跡実測図(2)



第103図 第46号竪穴建物跡実測図(3)

竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで160cmで、燃焼部の幅は80cmである。袖部は地山の上にロームブロックや粘土ブロックを含む第11～16層を積み上げて構築されている。火床部から煙道部にかけては14cmほど掘り込み、ロームブロックを含む第17～22層を埋土して構築されている。床面とはほぼ同じ高さを使用しており、火床面は第17層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に110cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

ピット 18か所。P1～P4は深さ40～50cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5・P9～P14は深さ15～38cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6～P8・P15～P18は深さ22～42cmで、性格は不明である。

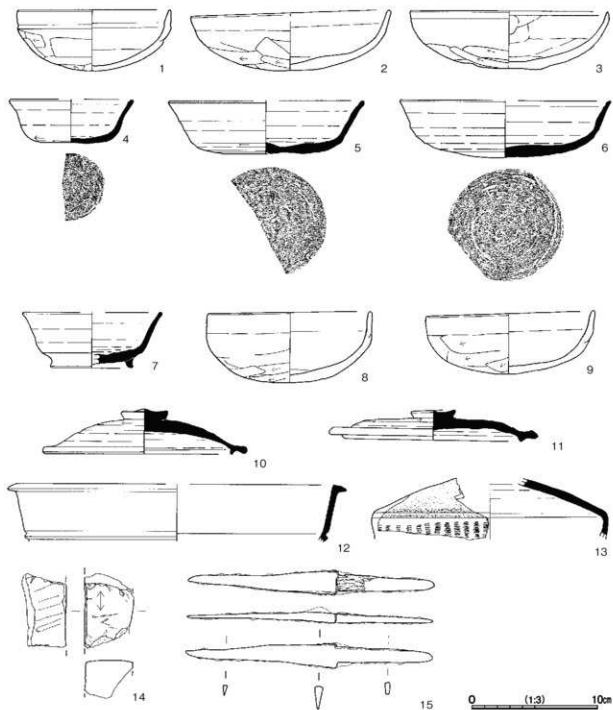
覆土 11層に分層できる。不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片917点(坏164, 碗7, 甕746)、須恵器片184点(坏68, 高台付坏2, 釜67, 盤1, 鉢7, 壺2, 甕37)、金属製品3点(鉄鍋, 鐵, 釘)が出土している。1・7・9・15は床面から出土しており、底壁に伴って遺棄されたものと考えられる。4・6・8は覆土下層から、2・3・5・10・13は覆土中層からそれぞれ出土している。11は覆土下層と中層から出土した破片が接合したものである。12・14は覆土中から出土している。これらは埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀初頭と考えられる。

第54表 第46号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
1	土師器	坏	120	49	-	灰石・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面種子ナ 体部外面へ張り付く種子ナ 内面ナナ	40%	床面	95% PL41
2	土師器	坏	158	48	-	灰石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面種子ナ 体部外面へ張り付く種子ナ 内面ナナ 底部内面内ナ	40%	覆土中層	95% PL41
3	土師器	坏	156	46	-	灰石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面種子ナ 体部内面へ張り付く種子ナ 内面ナナ	40%	覆土中層	95% PL41
4	須恵器	坏	[97]	35	[56]	灰石・石英・雲母	灰白	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下端部へ張り付く。底壁部へ張り付く。底壁部外ナナ	40%	覆土下層	66% PL41 新出遺
5	須恵器	坏	[154]	43	98	灰石・石英・雲母	灰黄	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部部へ張り付く	40%	覆土中層	PL41 新出遺
6	須恵器	坏	[167]	45	88	灰石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄	普通	体部外・内面ロクロナデ 体部下端部へ張り付く	66%	覆土下層	PL41 新出遺
7	須恵器	高台付坏	[109]	44	[64]	灰石・石英	灰	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部部へ張り付く高台付	40%	床面	PL41



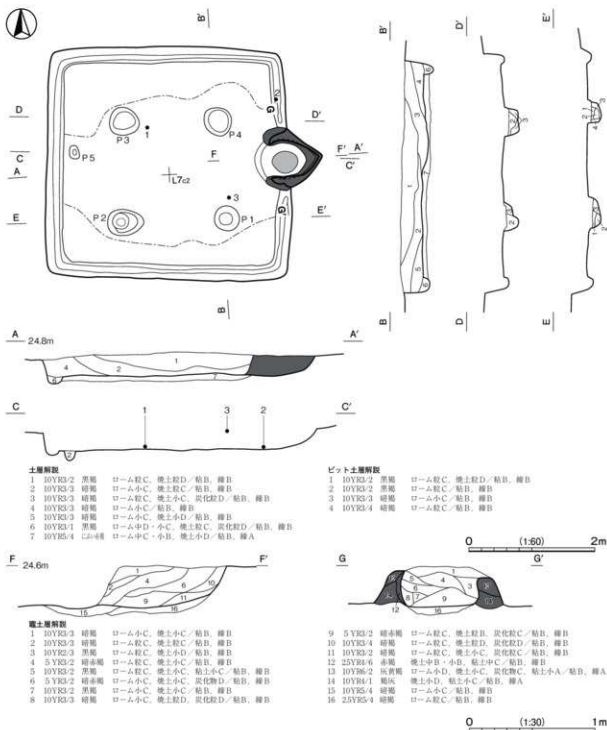
第104図 第46号竪穴建物跡出土遺物実測図

番号	種別	型種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
8	土師器	碗	128	5.7	-	長石・石英・赤色砂子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へツ削り後ナデ 内面ナデ 底部内面凹込	覆土下層	100% PL41
9	土師器	碗	133	5.0	-	長石・石英・赤色砂子	黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へツ削り後ナデ 内面ナデ	床面	100% PL41
10	須恵器	蓋	[15.8]	3.6	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部割取へツ削り	覆土中層	80% PL41 新治産
11	須恵器	蓋	[16.5]	2.4	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部割取へツ削り	覆土下層 ~中層	30% 新治産
12	須恵器	鉢	[25.0]	(4.6)	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	に灰い橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中	5% 新治産
13	須恵器	長胴壺	-	(4.8)	-	長石	灰白	普通	自然輪	覆土中層	5% PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
14	磁石	(5.9)	(3.9)	(3.5)	94.83	硬質砂岩	紙面2面	覆土中	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
15	刀子	19.6	1.9	0.8	39.11	鉄	刃部断面三角形 基部断面四角形 両側 木質付着	床面	PL48

第 61 号竪穴建物跡 (第 105・106 図 PL17)

位置 調査区中央部の L7 b2 区、標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。



第 105 図 第 61 号竪穴建物跡実測図

規模と形状 長軸3.92 m、短軸3.68 mの方形で、主軸方向はN-92°-Eである。壁高は28~32 cmで、ほぼ直立している。

床 やや凹凸があり、竈の前方から出入口に向かって中央部が踏み固められている。貼床は床面の下層に均一に確認され、ロームブロックを含む第7層を埋土して構築されている。獣溝が全周している。

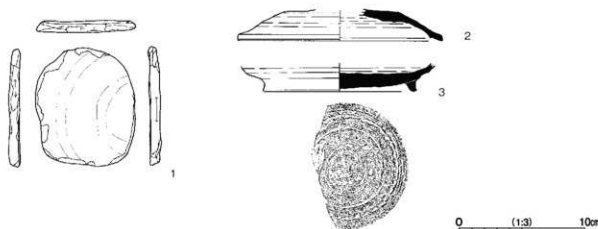
竈 東壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで110 cmで、燃焼部の幅は50 cmである。袖部は地山の上にロームブロックや粘土ブロックを含む第12~14層を積み上げて構築されている。火床部は全体に6 cmほど掘り込み、ロームブロックを含む第15・16層を埋土して構築されている。床面とはほぼ同じ高さを使用しており、火床面は第16層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に65 cmほど掘り込まれ、火床部から外積して立ち上がっている。

ピット 5か所。P1~P4は深さ25~30 cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さは15 cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片252点(坏3、碗3、甕246)、須恵器片25点(坏4、蓋12、盤1、壺2、甕5、転用砥石1)が出土している。1は床面から、2は覆土下層から、3は覆土上層から出土している。1は床面のほぼ中央から確認され、廃絶に際して遺棄されたものである。2・3は建物が埋まる過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第106図 第61号竪穴建物跡出土遺物実測図

第55表 第61号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母	灰青	普通	須恵器底部を転用 割れ口を底面として使用	床面	転用転用 瓦割跡の産
2	須恵器	蓋	[162]	25	-	長石・石英・雲母	灰青	普通	天井部割れ口ヘラ削り	覆土下層	20% 産出産
3	須恵器	壺	-	(23)	120	長石・石英・雲母	灰青	普通	体形外・内面ロタロナデ 底部割れ口ヘラ削り 高台部削付	覆土上層	30% PL40 産出産

第 63 号竪穴建物跡 (第 107・108 図 PL17)

位置 調査区中央部の L 7 d8 区、標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 56 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.82 m、短軸 3.78 m の方形で、主軸方向は N-3°-E である。壁高は 6 cm で、ほぼ直立している。

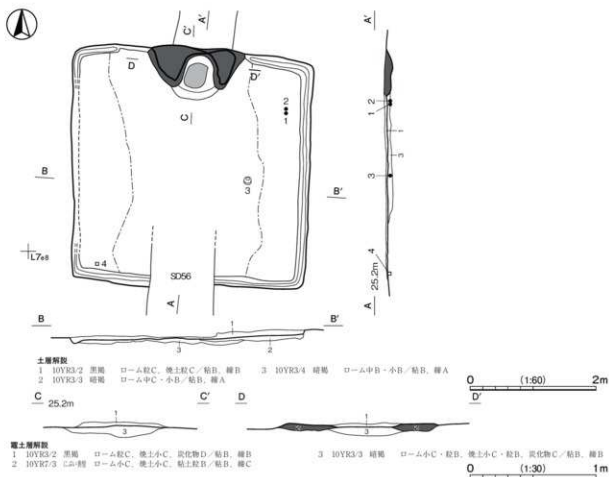
床 平坦で、中央部が踏み固められている。貼床は床面の下層に 8 cm ほど確認され、ロームブロックを含む第 2・3 層を埋土して構築されている。壁溝が全周している。

竈 北壁の中央部に付設されている。第 56 号溝により掘り込まれており、焚口部から煙道部までの 135 cm しか確認できなかった。燃焼部の幅は 55 cm である。袖部は地山の上にロームブロックや粘土粒子を含む第 2 層を積み上げて構築されている。火床部は全体に 4 cm ほど掘り込み、ローム粒子や焼土粒子を含む第 3 層を埋土して構築し、床面と同じ高さを使用しており、火床面は第 3 層上面で赤変硬化している。煙道部は第 56 号溝によって掘り込まれているため、火床部からの立ち上がりは確認できなかった。

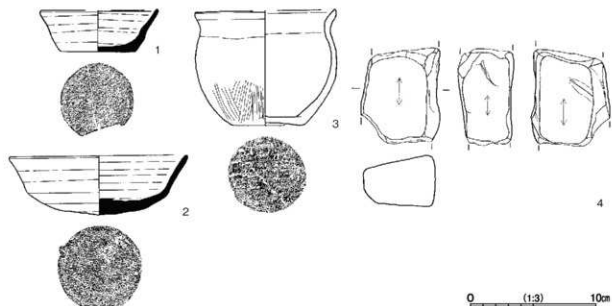
覆土 単 1 層である。層厚が薄いことから、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片 9 点 (椀 3、小型鉢 1、鉢 1、甕 4)、須恵器片 2 点 (坏)、石器 1 点 (砥石) が出土している。1~4 は全て床面から出土しており、廃絶時に遺棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀初頭と考えられる。



第 107 図 第 63 号竪穴建物跡実測図



第108図 第63号竪穴建物跡出土遺物実測図

第56表 第63号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	形態	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
1	須臾部	環	[92]	3.4	5.8	長石・石英・雲母	にじみ状	普通	体部外・内面ロクロナデ	底部多方向のナデ	床面	50% PL41 新治産
2	須臾部	環	142	4.7	6.5	長石・石英	灰	普通	体部外・内面ロクロナデ	体部下端回転ヘラ削り 底部多方向のナデ	床面	70% PL41
3	土師器	小型鉢	[110]	9.2	5.9	長石・石英・雲母	滑	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面下半部位のヘラ削り 内面ナデ	床面	80% PL41
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考		
4	砥石	(72)	6.2	4.4	316g	砂岩	砥面3面		床面	PL47		

第64号竪穴建物跡 (第109・110図 PL17)

位置 調査区中央部のL70区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第189号土坑を掘り込み、第14号掘立柱建物、第190号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.22m、短軸5.20mの方形で、主軸方向はN-10°-Eである。壁高は16～22cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。貼床は全体に5～10cmほど掘り込まれ、ロームブロックを含む第9・10層を埋土して構築されている。壁溝が全周している。

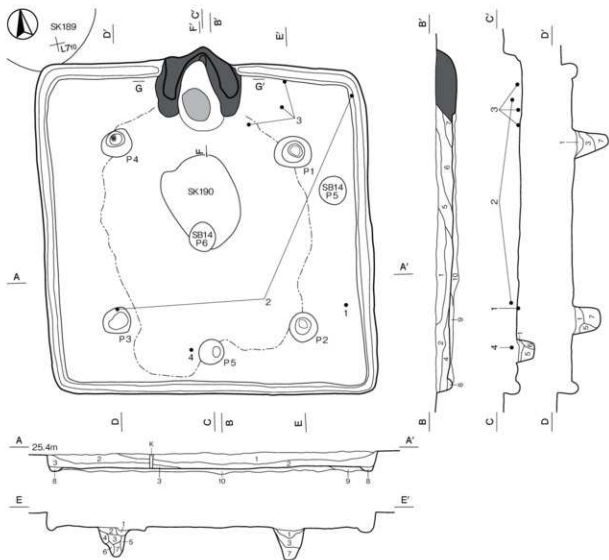
竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで135cmで、燃焼部の幅は67cmである。竈は15cmほど掘りくぼめ、第17～19層を埋土して整地されている。袖部は整地面の上にロームブロックや粘土ブロックを含む第13～16層を積み上げて構築されている。火床部は床面よりやや下がっており、火床面は第17層上面で、赤変硬化している。煙道部は壁外に25cmほど掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がり、奥壁で直立している。

ピット 5か所。P1～P4は深さ45～55cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ30cmで、南壁際中央部に位置することから、出入口施設に伴うピットである。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロック、炭化粒子が含まれていることから埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片171点(坏40, 碗1, 鉢10, 小型甕7, 甕113), 須恵器片31点(坏10, 蓋4, 甕14, 瓶3)が出土している。1は床面から出土しており、廃絶時に遺棄されたものである。3・4は覆土下層から、2は覆土中層から確認され、2と3はそれぞれ離れて出土した破片が接合したものである。これらは埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀初頭と考えられる。



土層解説

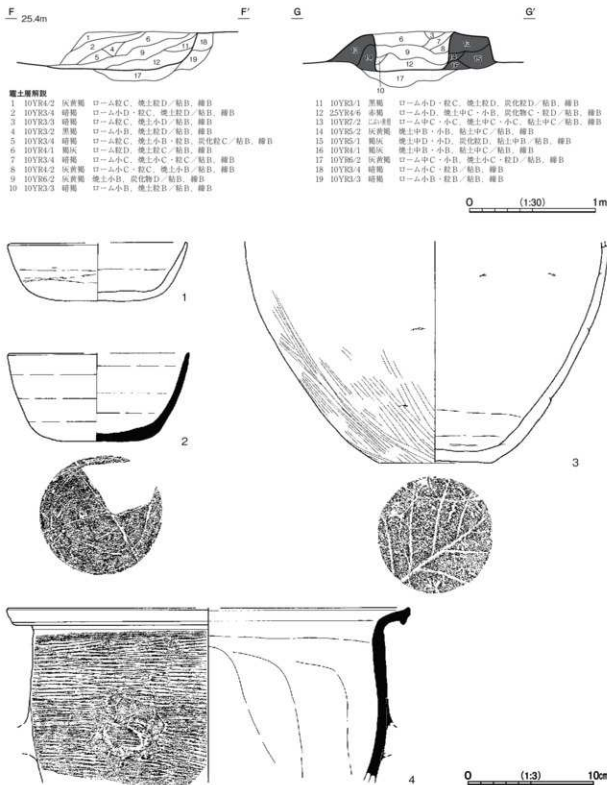
- | | | | | | |
|----|---------|----|-------|-----------|-----------|
| 1 | 30YK3-2 | 黒堀 | ローム小C | 焼土小D / 粘B | 雜B |
| 2 | 30YK3-3 | 暗堀 | ローム小C | 焼土小D | 炭化粒D / 粘B |
| 3 | 30YK3-4 | 暗堀 | ローム小C | 焼土粒D | 炭化粒D / 粘B |
| 4 | 30YK3-3 | 暗堀 | ローム小C | 炭化粒C | 粘B |
| 5 | 30YK3-2 | 黒堀 | ローム粒D | 焼土小D | 粘B |
| 6 | 30YK3-2 | 黒堀 | ローム粒C | 焼土小C | 粘B |
| 7 | 30YK3-3 | 暗堀 | ローム粒C | 焼土粒C | 粘B |
| 8 | 30YK3-2 | 黒堀 | ローム小C | 焼土小D | 炭化粒D / 粘B |
| 9 | 30YK3-3 | 暗堀 | ローム中C | 小B | 粒D / 粘B |
| 10 | 30YK3-4 | 暗堀 | ローム中C | 小C | 粘B |

ピット土層解説

- | | | | | | |
|---|---------|-----|-------|----|-----------|
| 1 | 10YK3-1 | 黒堀 | ローム小C | 粒C | 焼土小D / 粘B |
| 2 | 10YK3-3 | 暗堀 | ローム中C | 小D | 粒D |
| 3 | 10YK3-4 | 暗堀 | ローム中C | 小B | 粘B |
| 4 | 10YK3-3 | 土中掘 | ローム中C | 小B | 粘B |
| 5 | 10YK3-8 | 異堀 | ローム穴B | 中B | 小A |
| 6 | 10YK3/4 | 土中掘 | ローム中B | 小C | 粘B |
| 7 | 10YK3/2 | 異堀 | ローム穴D | 中B | 小C |

0 (1:60) 2m

第109図 第64号竪穴建物跡実測図



第110図 第64号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第57表 第64号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[14.0]	4.7	6.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナナ 体部外・内面ナナ	床面	60% PL41
2	須恵器	坏	[14.2]	7.1	6.1	長石・石英・雲母	灰濁	普通	体部口ケロナナ 底部多方向のナナ 底部外周へラ記号	甕土中層	60% PL41 新治産

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
3	土師器	甕	-	(176)	90	長石・石灰・雲母・赤色粒子	にひ・赤褐色	普通	体部外面下層縦位のヘラ磨き 内面ナデ 編積 土器木炭灰	覆土下層	50%
4	須恵器	瓶	[320]	[139]	-	長石・石灰・雲母	にひ・褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位の平行引き 内面ナデ	覆土下層	30% PL18 背面直

第71号竪穴建物跡 (第111図 PL18)

位置 調査区南部のN10c3区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第63号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北東部が調査区域外に延びているため、東西軸2.76m、南北軸2.32mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-5°-Eと推定できる。壁高は20~40cmで、ほぼ直立している。

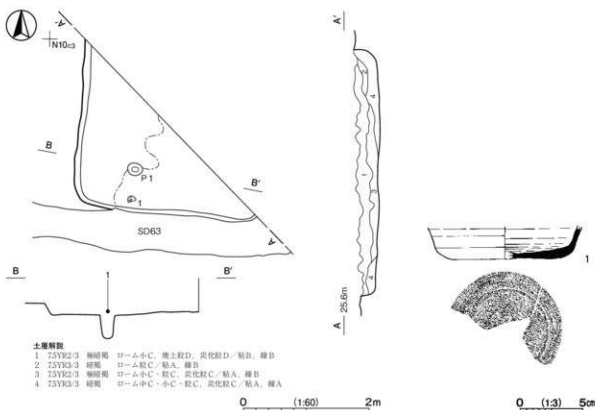
床 平坦で、南壁際から中央部にかけて踏み固められている。

ピット P1は深さ40cmで、配置と形状から主柱穴の可能性がある。

覆土 4層に分層できる。不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片11点(坏2、甕9)、須恵器片3点(坏、甕、甕)が出土している。1は床面から出土しており、廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第111図 第71号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第58表 第71号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(26)	[90]	長石・石灰	灰白	普通	体部口ナデ 体部下層縦位のヘラ磨き 底面	床面	30%

第74号竪穴建物跡 (第112・113図 PL18)

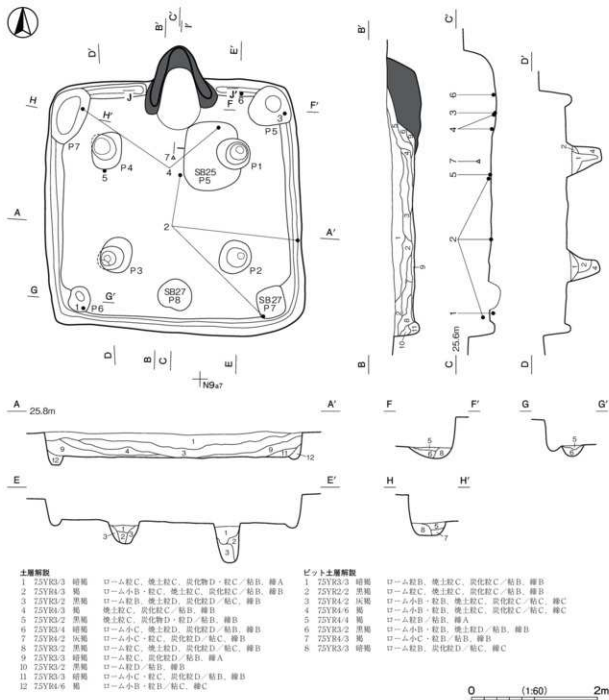
位置 調査区南部のM9j6区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第25・27号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.06m、短軸4.00mの方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は34~44cmで、ほぼ直立している。

床 平坦である。明確な硬化面は確認できなかった。壁溝が全周している。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで135cmで、燃焼部の幅は70cmである。竈は煙道部を5~20cmほど掘り込み、第13~16層を埋土している。袖部は地山の上にローム粒子や粘土粒子



第112図 第74号竪穴建物跡実測図

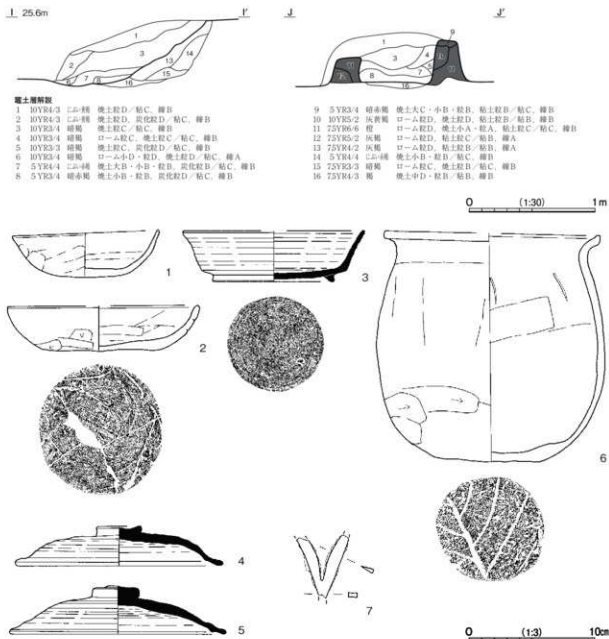
を含む第9～12層を積み上げて構築されている。火床部は床面よりやや下がっており、明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に55cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

ピット 7か所。P1～P4は深さ35～60cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5～P7は深さ15～20cmで、性格不明である。

覆土 12層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子、炭化物を含んでいることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片144点(坏17, 甕127)、須恵器片37点(坏17, 蓋8, 瓶1, 甕11)、金属製品4点(鉄錐1, 釘2, 不明1)が出土している。3・5は床面から出土しており、廃絶に伴い遺棄されたものと考えられる。その他の遺物は埋め戻しに際して投棄されたものであり、2は破片3点が、4は破片2点が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第113図 第74号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 59 表 第 74 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	116	3.8	57	長石・石英・雲母・赤鉄粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へう張り残ナデ	覆土下層	70% PL42
2	土師器	坏	[352]	3.6	94	長石・石英・赤鉄粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へう張り残ナデ 内面ナデ	覆土下層	60%
3	須恵器	高台付埴	[144]	4.1	95	長石	灰白	普通	体部口ロナデ	底部回転へう張り後高台付	床面	50% PL42
4	須恵器	蓋	166	3.2	-	長石・石英・雲母	にじみ潰橙	普通	天井部回転へう張り		覆土下層	80% PL42 新治産
5	須恵器	蓋	[169]	3.8	-	長石・石英・雲母	にじみ潰橙	普通	天井部回転へう張り		床面	70% PL42 新治産
6	土師器	壺	[170]	18.5	85	長石・石英・雲母・赤鉄粒子	明赤黒	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へう張り残ナデ 下部横段のへう張り	覆土下層	70% PL42

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	鉄鏝	(5.1)	(4.1)	(0.4)	(9.90)	鉄	鎌身部彫刻式 鎌身部断面三角形 鋸部断面四角形 基部欠損	覆土下層	PL48

第 77 号竪穴建物跡 (第 114・115 図 PL18)

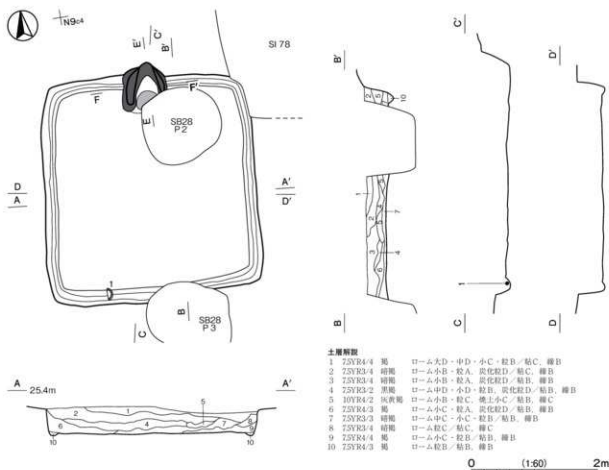
位置 調査区南部の N 9c4 区、標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 78 号竪穴建物、第 28 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.56 m、短軸 3.32 m の方形で、主軸方向は N-6°-E である。壁高は 16~40 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦である。明確な硬化面は確認できなかった。壁溝が全周している。

竈 北壁の中央部に付設されている。第 28 号掘立柱建物 P 2 に掘り込まれているため、確認できた焼成部の



第 114 図 第 77 号竪穴建物跡実測図

E 25.4m

E'

F

F'



埋土層解説

1	10YR2/3	暗褐色	ローム粒C、粘土、細砂	10	7.5YR2/3	暗褐色	埋土小C、小C、粒土、炭化粒D、粘土、細砂
2	10YR2/4	暗褐色	ローム小C、粒C、粘土、細砂	11	7.5YR2/2	暗褐色	ローム小C、粒C、埋土粒C、粘土、細砂
3	7.5YR4/2	灰褐色	埋土小C、粒C、粘土、細砂	12	5YR3/3	暗赤褐色	ローム粒C、埋土小C、粘土、細砂
4	10YR4/2	灰青褐色	ローム小B、粒C、埋土小C、粘土、細砂	13	5YR4/4	赤褐色	ローム中C、小C、埋土小B、粒土、粘土、細砂
5	10YR6/3	赤褐色	ローム小C、粒C、埋土小C、粘土、細砂	14	10YR5/4	赤褐色	埋土小B、粒土、炭化粒C、粘土、細砂
6	10YR4/2	灰青褐色	ローム小C、粒C、埋土小C、炭化物B、粘土、細砂	15	7.5YR4/6	暗褐色	ローム粒D、埋土粒B、炭化粒C、埋土大A、粒土、細砂
7	7.5YR2/3	暗褐色	ローム粒D、埋土粒D、粘土、細砂	16	7.5YR2/3	暗褐色	ローム小D、粒C、埋土粒D、炭化粒D、粘土、細砂
8	5YR2/3	暗褐色	埋土粒B、炭化粒B、粘土、細砂	17	7.5YR2/2	暗褐色	埋土小C、粒土、炭化粒C、粘土小C、粘土、細砂
9	7.5YR2/3	暗褐色	ローム粒D、埋土粒D、粘土、細砂	18	10YR6/2	灰青褐色	ローム粒D、炭化粒D、粘土、細砂

0 (1:30) 1m



0 (1:3) 10m

第115図 第77号竪穴建物跡・出土遺物実測図

幅は40cmである。袖部は地山の上に焼土ブロックや粘土ブロックを含む第17層を積み上げて構築されている。火床部は床面を浅く掘りくぼめ、第18層を埋土して整地している。火床面は第18層上面で、赤変硬化している。煙道部は壁外に25cmほど掘り込まれ、奥壁で外傾している。

覆土 10層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロック、炭化粒子を含んでいることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片39点(坏7、甕32)、須恵器片7点(坏1、甕4、甕2)が出土している。1は壁溝床面から出土しており、廃絶に伴い遺棄されたものと考えられる。それ以外の小片は、埋め戻しに際して投棄されたものである。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。

第60表 第77号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地味	手法の特徴	備考
1	須恵器	甕	115(9)	27	-	長石・石灰・雲母・炭化粒子	灰白	普通	天井部回転ヘラ張り	床面 30% PL42 器高

第78号竪穴建物跡 (第116・117図 PL18)

位置 調査区南部のN9b5区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

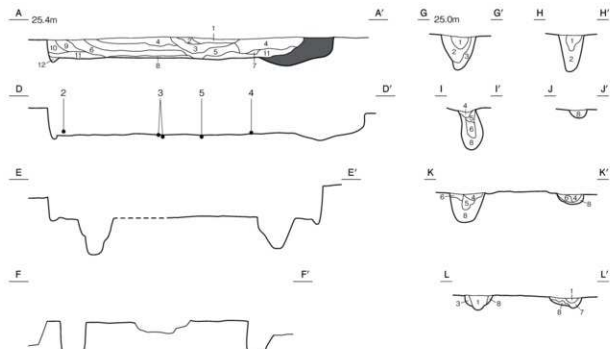
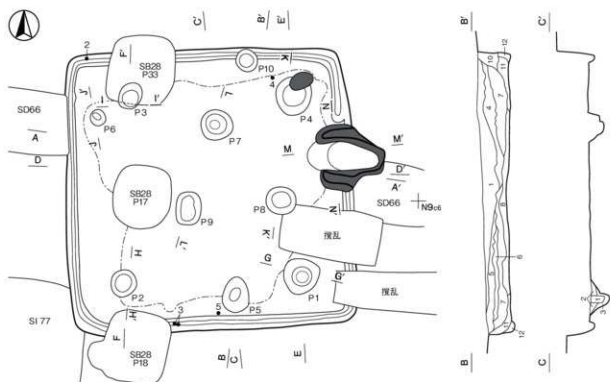
重複関係 第77号竪穴建物跡を掘り込み、第28号掘立柱建物、第66号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.56m、短軸4.45mの方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は32～48cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部を中心に踏み固められている。壁溝が全周している。

竈 東壁のやや北寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで125cmで、燃焼部の幅は45cmである。竈は地山を削り出して整地されている。袖部は整地面の上にロームブロックや粘土ブロックを含む第17～20層を積み上げて構築されている。火床部は床面よりややくぼんでおり、明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に55cmほど掘り込まれ、奥壁で直立している。

ビット 10か所。P1～P4は深さ50～65cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5～P10は深さ12～28



土層解説

- | | | | |
|----|---------|----|--------------------------|
| 1 | 25YK3-4 | 埴埴 | ローム小粒、焼土粒D/粘C、雜A |
| 2 | 25YK3-2 | 赤埴 | ローム粒C/粘C、雜B |
| 3 | 25YK4-4 | 埴 | ローム中粒・粘B/粘B、雜A |
| 4 | 25YK4-3 | 埴 | ローム中粒・粘C/粘B/粘C、雜A |
| 5 | 25YK3-3 | 埴埴 | ローム小粒・粘B、炭化粒D/粘B、雜A |
| 6 | 25YK3-3 | 埴埴 | ローム中粒・粘C・粘B/粘C、雜A |
| 7 | 25YK3-3 | 埴埴 | ローム中粒・粘C、炭化粒D/粘B、雜A |
| 8 | 25YK3-2 | 赤埴 | ローム中粒・小粒・粘B/粘B、雜A |
| 9 | 25YK3-2 | 赤埴 | ローム小粒・粘C、焼土粒D、炭化物C/粘B、雜A |
| 10 | 25YK4-4 | 埴 | ローム小粒・粘A・粘C、雜A |
| 11 | 25YK4-6 | 埴 | ローム小粒・粘A、焼土粒D、炭化粒D/粘C、雜B |
| 12 | 25YK3-2 | 赤埴 | ローム粒A/粘C、雜B |

ピット土層解説

- | | | | |
|---|---------|----|--------------------------|
| 1 | 25YK4-3 | 埴 | ローム中粒・粘C、焼土粒D、炭化粒D/粘C、雜C |
| 2 | 25YK4-4 | 埴 | ローム中粒・粘C・粘C/粘B、雜B |
| 3 | 25YK4-4 | 埴 | ローム中粒・粘C/粘B、雜B |
| 4 | 25YK3-2 | 赤埴 | ローム中粒・粘C/粘B、雜B |
| 5 | 25YK3-2 | 赤埴 | ローム粒B/粘B、雜C |
| 6 | 25YK4-3 | 埴 | ローム小粒・粘A/粘B、雜C |
| 7 | 25YK3-3 | 埴埴 | ローム小粒・粘B、雜B |
| 8 | 25YK4-4 | 埴 | ローム中粒・粘B/粘B、雜B |

0 (1:50) 2m

第116図 第78号竪穴建物跡実測図

cmで、性格は不明である。

覆土 12層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子を含み、不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

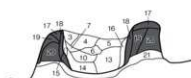
遺物出土状況 土師器片91点(坏28、椀1、甕62)、須恵器片4点(坏2、甕2)が出土している。3～5は床面から出土しており、廃絶に伴い遺棄されたものと考えられる。3は南側壁溝床面から出土しており、破片2点が接合したものである。2は埋め戻しに際して投棄されたものである。

所見 時期は、出土土器から7世紀末葉と考えられる。

M 25.4m



M'



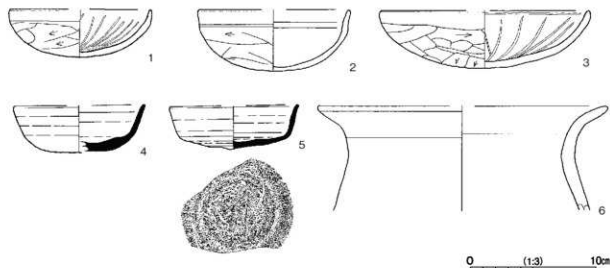
N

N'

甕土器解説

- 1 75YR3-4 埴輪 ローム粒C、焼土中C・粒D/粒C、練A
- 2 75YR4-3 胎 ローム粒D、焼土粒D/粒C、練A
- 3 5YR3-2 須恵器片 ローム粒C、焼土小A・粒A/粒C、練A
- 4 10YR4-3 土師器片 ローム粒C、焼土粒D、炭化粒D・粒C、練A
- 5 75YR3-2 須恵器片 ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粒C、練A
- 6 75YR3-2 須恵器片 ローム粒D、焼土小C・粒C、炭化粒D/粒C、練A
- 7 75YR3-2 須恵器片 ローム粒D、焼土粒D/粒C、練A
- 8 75YR3-2 須恵器片 ローム粒D、焼土粒C、炭化粒D/粒C、練A
- 9 75YR3-4 須恵器片 ローム粒D、焼土粒D/粒C、練A
- 10 75YR4-3 胎 ローム粒C、焼土粒D/粒C、練A
- 11 75YR3-4 埴輪 ローム粒D、焼土粒B/粒C、練B

- 12 75YR3-3 埴輪 ローム小C・粒C、炭化粒D/粒B、練A
- 13 75YR3-2 須恵器片 ローム小C・粒C、焼土小D・粒C、炭化粒C/粒C、練A
- 14 75YR3-3 埴輪 ローム粒D、焼土粒D/粒B、練A
- 15 5YR4-6 赤黒 焼土大A・粒C、練A
- 16 75YR4-4 胎 ローム粒D、焼土粒D・粒B、練A
- 17 10YR3-2 須恵器片 ローム粒C、焼土粒C、焼土粒B/粒A、練A
- 18 25YR4-2 土師器片 焼土小C・粒B、焼土粒B/粒A、練A
- 19 5YR3-2 須恵器片 ローム小C・粒C、焼土小C、焼土小C・粒B/粒A、練A
- 20 10YR6-2 須恵器片 ローム粒D、炭化粒D、焼土粒B/粒A、練A
- 21 75YR4-4 胎 ローム小D・粒B、胎B、練A



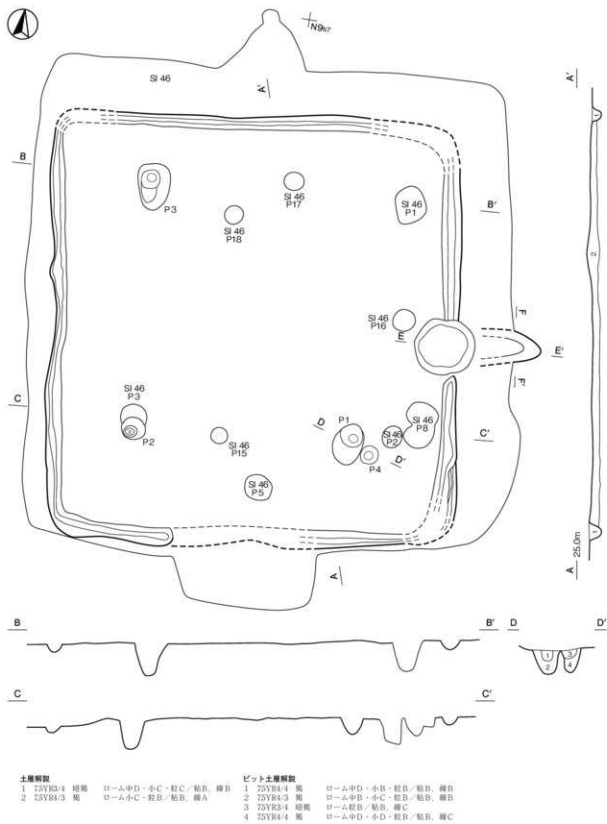
第117図 第78号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第61表 第78号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考	
1	土師器	坏	[112]	37	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部内面へう張り残ナデ	腹面放射状の磨き	覆土中	50%
2	土師器	坏	[120]	49	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部内面へう張り残ナデ	内面磨きによる不明	覆土下層	40%
3	土師器	坏	[164]	46	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部内面へう張り残ナデ	内面放射状の磨き	床面	60% PL42
4	須恵器	坏	[104]	37	[60]	長石・石英	橙	普通	体部口ロナデ	底部回転へう切り残多方向ナデ	底面放射状の磨き	床面	40%
5	須恵器	坏	[102]	35	7.5	長石・石英	灰	普通	体部口ロナデ	底部回転へう切り残多方向ナデ		床面	40%
6	土師器	甕	[228]	(83)	-	長石・石英・雲母	明焼	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外・内面ナデ		覆土中	10%

第80号竪穴建物跡 (第118・119図 PL18・19)

位置 調査区南部のN9c7区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。



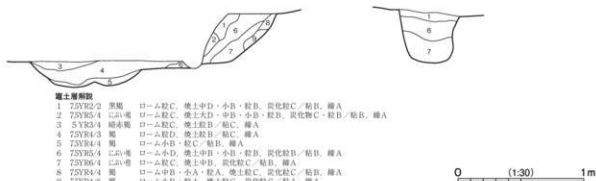
第118図 第80号竪穴建物跡実測図(1)

E 25.4m

E'

F

F'



第119図 第80号竪穴建物跡実測図(2)

重複関係 第46号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた規模は、長軸6.80m、短軸6.54mの方形で、主軸方向は $N-83^{\circ}-E$ である。第46号竪穴建物に掘り込まれているため、壁の立ち上がりは確認できなかった。

床 平坦である。明確な硬化面は確認できなかった。壁溝がほぼ全周し、土層一層のみを確認した。

竈 東壁の中央部に付設されている。竈は遺存状態が悪く、煙道部の一部を確認したのみである。火床部は床面より20cmほどくぼんでおり、明確な火床面は認められない。煙道部は壁外に推定で130cmほど掘り込まれ、奥壁で外傾している。

ピット 4か所。P1～P3は深さ40～55cmで、配置から主柱穴と考えられる。P3は第46号竪穴建物の主柱穴と共通するものと考えられる。P4は深さ35cmで、性格不明である。

遺物出土状況 土師器片53点(坏13、甕40)、須恵器片8点(坏1、蓋2、鉢1、甕4)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器から8世紀初頭と考えられる。本跡を掘り込んでいる第46号竪穴建物と床面の高さがほぼ一致する。二つの竪穴建物に時期差があまりないことや第46号竪穴建物と本跡の柱穴の配置などから、本跡は第46号竪穴建物へ建て替える前の竪穴建物跡の可能性がある。

第83号竪穴建物跡(第120図 PL19)

位置 調査区南部のN9a1区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第11号竪穴建物跡を掘り込み、第66号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西側半分は削平を受け、南側は第66号溝に掘り込まれており、確認できた規模は南北軸3.46m、東西軸2.08mのみである。平面形は長方形で、主軸方向は $N-3^{\circ}-E$ と推定できる。壁高は7cmで、ほぼ直立している。

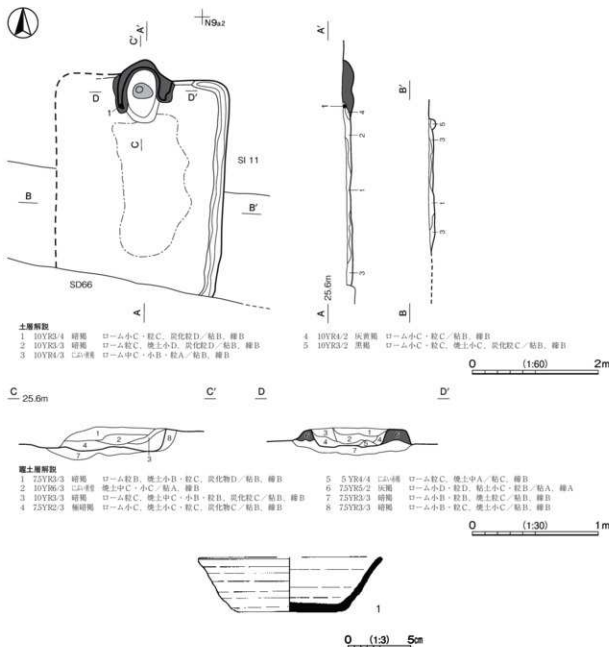
床 平坦で、中央部が硬化している。壁溝は確認できた範囲で回っている。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで100cmで、燃焼部の幅は50cmである。竈は全体を浅く掘りこぼめ、第7・8層を埋土して整地されている。袖部は整地面の上にロームブロックや粘土ブロックを含む第6層を積み上げて構築されている。火床部は床面よりやや下がっており、火床面は第7層上面で、赤変硬化している。煙道部は壁外に30cmほど掘り込まれ、奥壁で外傾している。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロック、炭化粒子を含んでおり、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片 22 点 (坏 5, 甕 17), 須恵器片 3 点 (坏) が出土している。1 は甕の左袖上から出土している。廃絶の際に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土遺物から 8 世紀後葉と考えられる。



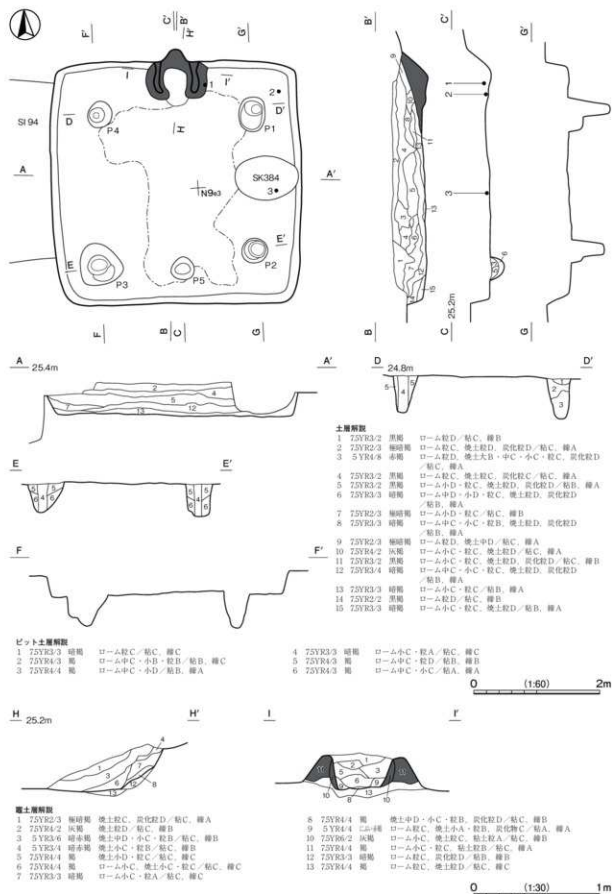
第 120 図 第 83 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 62 表 第 83 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[14.4]	4.4	8.5	長石・石英・雲母	灰青	普通	体部ロクロナデ 底部多方向のナデ	甕土層	50% 器出度

第 93 号竪穴建物跡 (第 121・122 図 PL19)

位置 調査区南部の N 9d2 区, 標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。



第121図 第93号竪穴建物跡実測図

重複関係 第94号竪穴建物跡を掘り込み、第384号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.92 m、短軸3.84 mの方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁高は32~40 cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

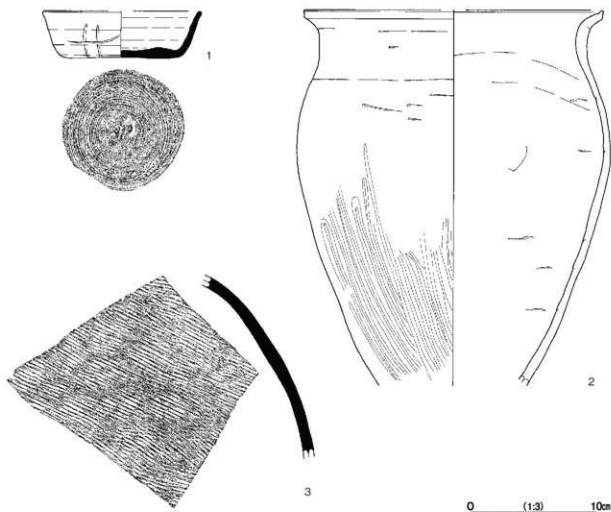
竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで90 cmで、燃焼部の幅は30 cmである。竈は全体に5 cmほど掘りくぼめ、第12・13層を埋土して整地されている。袖部は整地面の上にロームブロックや粘土粒子を含む第10・11層を積み上げて構築されている。火床部は床面とはほぼ同じ高さで、明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に20 cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

ピット 5か所。P 1~P 4は深さ45~65 cmで、配置から主柱穴と考えられる。第1~3層は抜き取り後の覆土、第4層は柱痕、第5・6層は掘方への埋土である。P 5は深さ25 cmで、南壁際付近に位置していることから、出入口施設に伴うピットである。

覆土 15層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片58点(坏3、甕55)、須恵器片21点(坏4、蓋1、壺1、甕15)が出土している。1~3はいずれも覆土下層から出土しており、廃絶に伴って投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第122図 第93号竪穴建物跡出土遺物実測図

第63表 第93号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法	特徴	ほか	出土位置	備考	
1	須恵器	杯	[123]	3.8	9.8	長石・石英・雲母	灰	普通	体部シロコロナダ	外面ヘラ記号	底部回転ヘラ削り	覆土下層	60% PL記号位置	
2	土師器	甕	[237]	[298]	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・内面横ナダ	体部外面上位ヘラ削り残ナダ	中位から下位縦方向のヘラ削き	内面ナダ	覆土下層	40%
3	須恵器	甕	-	[156]	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面斜位の平行叩き	内面ナダ		覆土下層	5% 内面一部重積遺物	

第94号竪穴建物跡 (第123図 PL19)

位置 調査区南部のN9d2区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第93号竪穴建物、第28号掘立柱建物、第335号土坑に掘り込まれている。

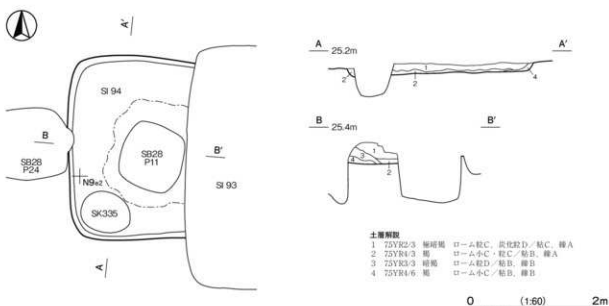
規模と形状 確認できた規模は南北軸2.92m、東西軸1.90mのみである。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-3°-Eと推定できる。壁高は12~16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片9点(甕)、須恵器片1点(甕)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、主軸方向や8世紀前葉の第93号竪穴建物との重複関係から、7世紀末葉と考えられる。



第123図 第94号竪穴建物跡実測図

第64表 奈良時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面 構造	内 部 施 設				覆土	主な出土遺物	時 期	備 考	
				長軸×短軸 (m)	厚さ			柱穴	土間	土間	土間					土間
11	M9	N-0°	方 形	8.35 × 8.25	3~34	平坦	全周	4	1	2	北焼	-	土師器、須恵器、土師器 土師器、金銅製品	8世紀前葉	本跡→SBK1 SK302、SK305	
46	N946	N-7°-W	方 形	7.68 × 7.64	32~48	平坦	全周	4	7	7	北焼	-	土師器、須恵器、 土師器、須恵器、 土師器	8世紀前期	SK126、SK127、SK128→SK201、SK128-46	
61	L712	N-92°-E	方 形	3.92 × 3.68	28~32	凹凸	全周	4	1	-	東焼	-	自然	土師器、須恵器	8世紀前期	
63	L748	N-3°-E	方 形	3.82 × 3.78	6	平坦	全周	-	-	-	北焼	-	土師器、須恵器、 石葺	8世紀前期	本跡→SDE6	
64	L740	N-10°-E	方 形	5.22 × 5.20	16~22	平坦	全周	4	1	-	北焼	-	土師器、須恵器	8世紀前期	SK189→本跡 →SB14、SK190	
71	N103	N-5°-E	方 形 (長方形)	(2.76 × 2.32)	20~40	平坦	-	1	-	-	-	-	土師器、須恵器	8世紀前期	本跡→SD63	

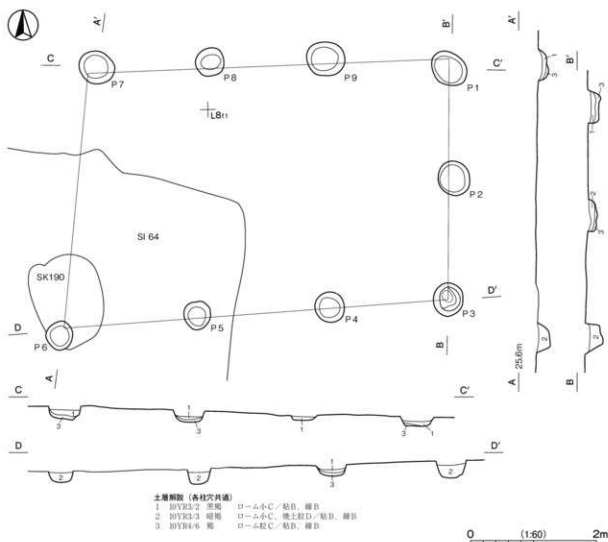
番号	位置	主軸方向	平面形 長軸×短軸 (m)	規模 (m)	床面 構造	内部施設				瓦土	主要出土遺物	時期	備考			
						柱・梁 口	土	礎	礎							
74	M9j6	N-1°-W	方形	4.06×4.00	34~44	平坦	全周	4	-	3	北壁	-	八高	土師器、須恵器、 家屋製品	8世紀前半	本跡→SH25・27
77	N9c4	N-6°-E	方形	3.56×3.32	16~40	平坦	全周	-	-	-	北壁	-	八高	土師器、須恵器	8世紀前半	本跡→SH75、 SH29
78	N9b5	N-90°-E	方形	4.56×4.45	32~48	[L12] 平坦	全周	4	-	6	東壁	-	八高	土師器、須恵器	7世紀末	SH77→本跡、 SH28、SH66
80	N9c7	N-83°-E	方形	6.80×6.54	-	平坦	[全周]	3	-	1	東壁	-	-	土師器、須恵器	8世紀前半	本跡→SH46
83	N9a1	N-3°-E	[長方形]	(3.46×2.08)	7	平坦	一部	-	-	-	北壁	-	八高	土師器、須恵器	8世紀前半	SH11→本跡 →SK66
93	N9d2	N-3°-E	方形	3.92×3.84	32~40	平坦	-	4	1	-	北壁	-	八高	土師器、須恵器	8世紀前半	SH4→本跡 →SK264
94	N9d2	N-3°-E	[方形・ 長方形]	2.92×1.90	12~16	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	土師器、須恵器	7世紀末	本跡→SH3、 SH28、SK335

(2) 掘立柱建物跡

第14号掘立柱建物跡 (第124・125図 PL19)

位置 調査区中央部のL8街区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第64号竪穴建物跡、第190号土坑を掘り込んでいる。



第124図 第14号掘立柱建物跡実測図

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-88°-Eの東西棟である。規模は桁行6.16m、梁行4.28mで、面積は26.36㎡である。柱間寸法は、桁行が2.00m（7尺）、梁行が2.00m（7尺）である。西妻側はP6とP7の間の柱穴が確認できなかったため、P6-P7間が4.00m（13尺）である。柱筋はP6がやや南西側に寄っているものの、それ以外は概ね揃っている。

柱穴 9か所。掘方の平面形は円形または楕円形で、長径45～65cm、短径45～50cmである。深さは8～28cmで、掘方の壁はほぼ直立している。第1～3層はいずれもロームブロックやローム粒子が微量に含まれ、抜き取り後の堆積土と考えられる。

遺物出土状況 土師器片2点（坏、埴）、須恵器片2点（蓋、甕）が出土している。1はP5の覆土中から出土している。

所見 時期は、7世紀末葉の第64号竪穴建物跡、8世紀前葉の第190号土坑との切り合い関係や主軸方向、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第125図 第14号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第65表 第14号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種類	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	地成	手法の特徴	備考
1	須恵器	蓋	[122]	(07)	-	長石・石英・雲母	にみ	普通	大井部回転ヘラ削り	P.5覆土中 5%

第16号掘立柱建物跡（第126図 PL19）

位置 調査区中央部のM 8a1区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

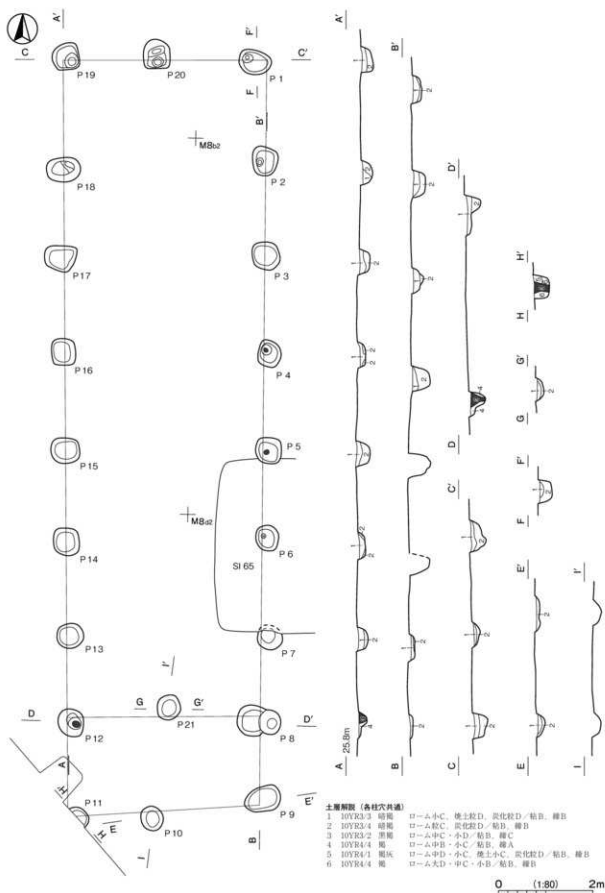
重複関係 第65号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行8間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-2°-Wの南北棟である。南妻から1か所目の側柱の柱筋状に間仕切柱穴1か所が配置されている。規模は桁行16.12m、梁行4.08mで、面積は65.77㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.10m（7尺）を基本とし、ほぼ揃っている。梁行も2.10m（7尺）を基本とし、ほぼ揃っている。間仕切柱穴は柱間がいずれも2.10m（7尺）である。

柱穴 21か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸（径）50～76cm、短軸（径）48～56cm、深さは4～48cmで、掘方の断面はほぼ直立または外傾している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3層は柱痕跡、第4～6層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片4点（坏2、甕2）が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

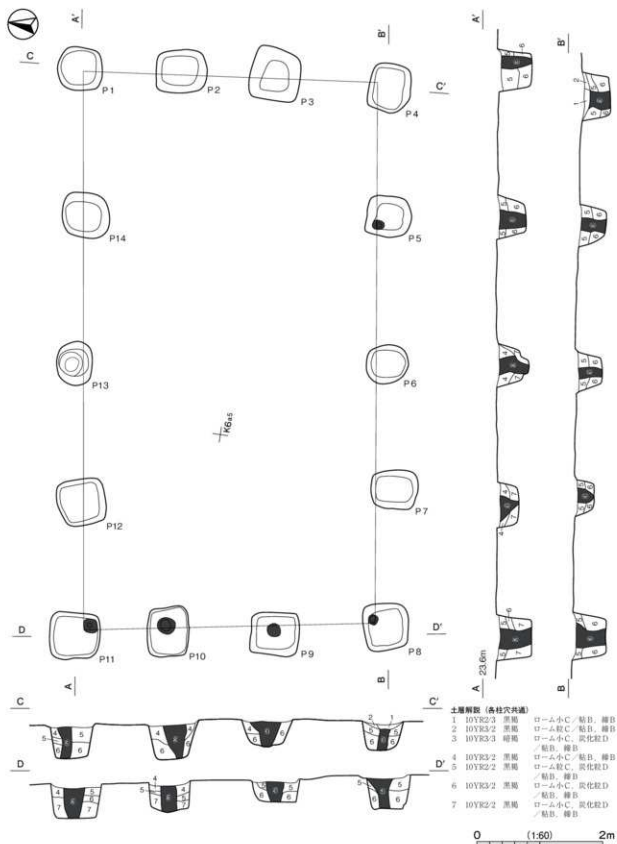
所見 時期は、主軸方向や出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第 126 图 第 16 号独立柱建物跡実測图

第17号掘立柱建物跡 (第127図 PL20)

位置 調査区北部のJ6街区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。



第127図 第17号掘立柱建物跡実測図

規模と構造 桁行4間、梁行3間の側柱建物跡で、桁行方向がN-85°-Eの東西棟である。規模は桁行8.92m、梁行5.04mで、面積は44.96㎡である。柱間寸法は、桁行が2.10m（7尺）を基本とし、揃っている。梁行は1.60m（5尺）を基本とし、概ね揃っている。

柱穴 14か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸（径）70～85cm、短軸（径）55～80cmである。深さは30～55cmで、掘方の断面はほぼ直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3層は柱痕跡、第4～7層は掘方への埋土と考えられる。

遺物出土状況 土師器片2点（壺、甕）が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀初頭と考えられる。

第18号掘立柱建物跡（第128～130図 PL20）

位置 調査区南部のM8b7区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

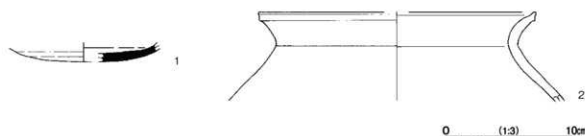
重複関係 第86号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間、梁行3間の総柱建物跡で、桁行方向がN-5°-Wの南北棟である。規模は桁行6.40m、梁行4.80mで、面積は30.72㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.10m（7尺）、梁行が1.60m（5尺）で、柱筋は揃っている。全てのピットの底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 16か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸90～115cm、短軸85～105cmである。深さは60～97cmで、掘方の断面は直立している。第1～4層は柱抜き取り後の覆土、第5層は柱痕跡、第6～20層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

遺物出土状況 土師器片108点（坏22、高坏3、甕83）、須恵器片4点（坏3、蓋1）、土製品1点（羽口）、石器2点（磨製石斧、砥石）、鉄滓1点（14.78g）が出土している。1はP16の掘方埋土中、2はP11の掘方埋土中から出土している。

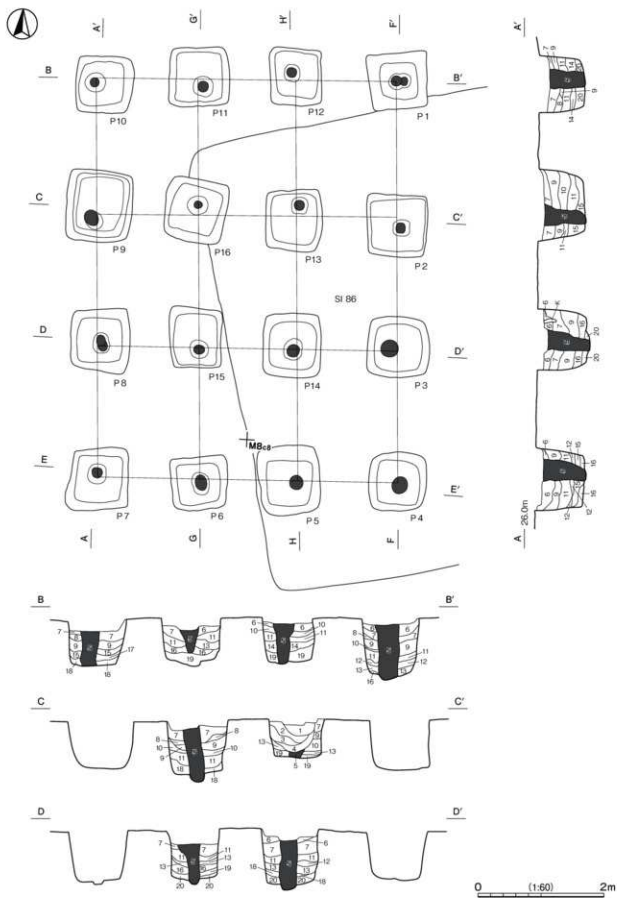
所見 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀前葉と考えられる。



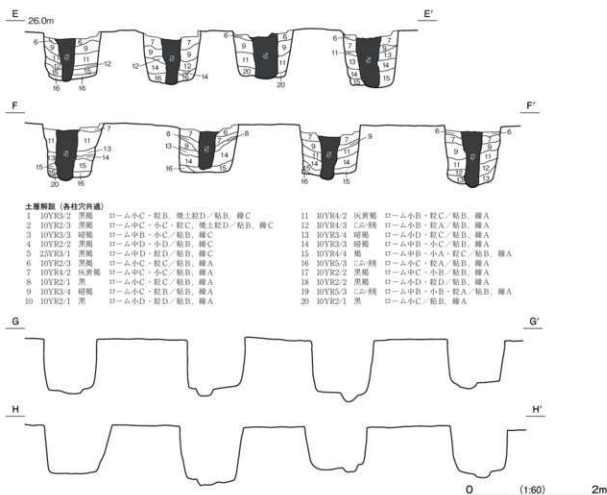
第128図 第18号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第66表 第18号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(1.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	にじみ濃緑	普通	底部回転ヘラ切り後多方向のナデ	P16埋土中	10% 調査率
2	土師器	甕	(22.0)	(7.1)	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外・内面ナデ	P11埋土中	5%



第 129 图 第 18 号掘立柱建筑物迹实测图 (1)



第130図 第18号掘立柱建物跡実測図(2)

第19号掘立柱建物跡 (第131・132図 Pl.20)

位置 調査区南部のMSd8区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

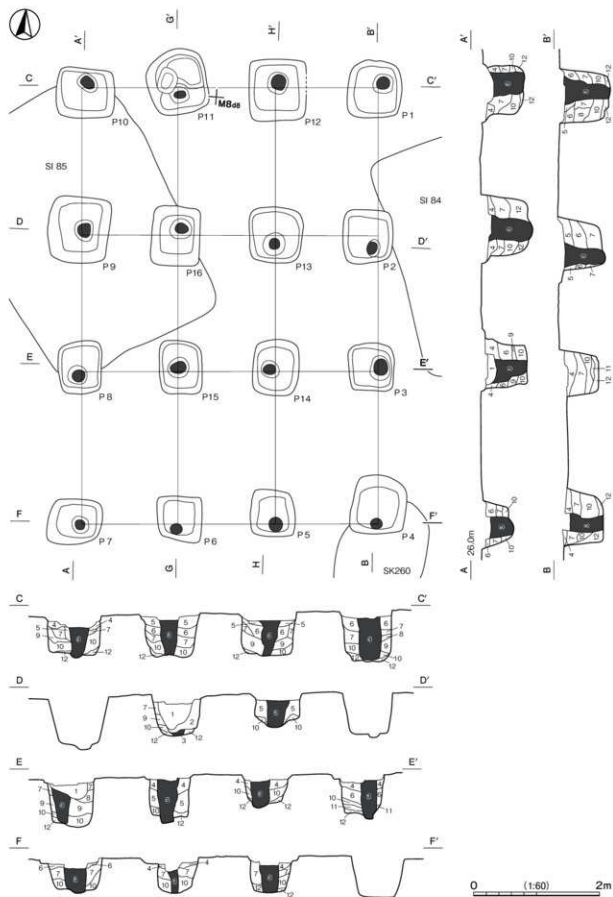
重複関係 第84・85号竪穴建物跡、第260号土坑を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間、梁行3間の総柱建物跡で、桁行方向がN-3°-Wの南北棟である。規模は桁行700m、梁行4.68mで、面積は32.76㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.40m(8尺)を基本とし、揃っている。梁行は1.60m(5尺)を基本とし、柱筋は揃っている。全てのピットの底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 16か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸75~105cm、短軸65~100cmである。深さは52~72cmで、掘方の断面は直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土。第3層は柱痕跡、第4~12層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

遺物出土状況 土師器片67点(坏18, 高坏1, 甕48)、須恵器片5点(坏1, 蓋2, 甕2)、金属製品1点(不明)、鉄滓1点(3496g)が出土している。1・2はそれぞれP7・P4の掘方埋土中から出土している。3はP8の覆土中から出土している。

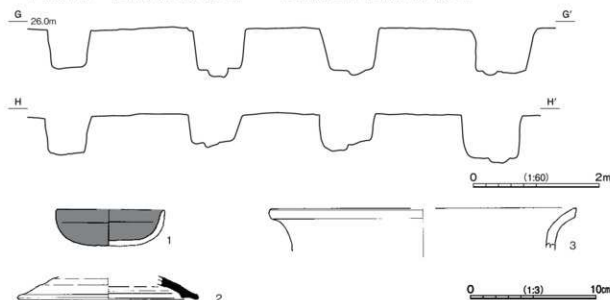
所見 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀前葉と考えられる。



第 131 图 第 19 号掘立柱建物跡実測図

土器解説 (各柱穴外周)

1	25Y3/2	黒陶	ローム小D・横土粒D/粘B・緑C	7	75YR4/2	灰陶	ローム中C・小B・粘B/粘B・緑A
2	25Y3/3	赤褐色	ローム中B・小B/粘B・緑C	8	10YR2/2	黒陶	ローム小C・粘C・横土粒D/粘B・緑A
3	10YR3/3	緑陶	ローム小C・粘C/粘B・緑C	9	10YR2/1	黒	ローム中B・小D/粘B・緑A
4	10YR3/2	黒陶	ローム中C・小C/粘B・緑A	10	10YR4/4	黒	ローム中B・小C・粘C/粘B・緑A
5	10YR3/3	緑陶	ローム中C・小C/粘B・緑A	11	10YR3/2	黒陶	ローム小C・粘D/粘B・緑C
6	10YR4/4	黒	ローム中B・小A・粘B/粘B・緑A	12	10YR5/3	土赤黒	ローム小A・粘A/粘B・緑A



第132図 第19号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第67表 第19号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
1	土師器	杯	[8.5]	2.9	3.5	長石・石英・雲母・赤色粘土	明赤色	普通	口縁部外・内面横ナデ	全面黒色処理	P 9埋土中	40% PL42
2	須恵器	蓋	[3.4]	(1.8)	-	長石・石英・雲母	灰青	普通	天井部斜転ヘリ削り		P 4埋土中	5%
3	土師器	甕	[24.4]	(3.4)	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口縁部外・内面ナデ		P 8埋土中	5%

第20号掘立柱建物跡 (第133・134図 PL20)

位置 調査区南部のM8g8区、標高36mほどの平坦な台地上に位置している。

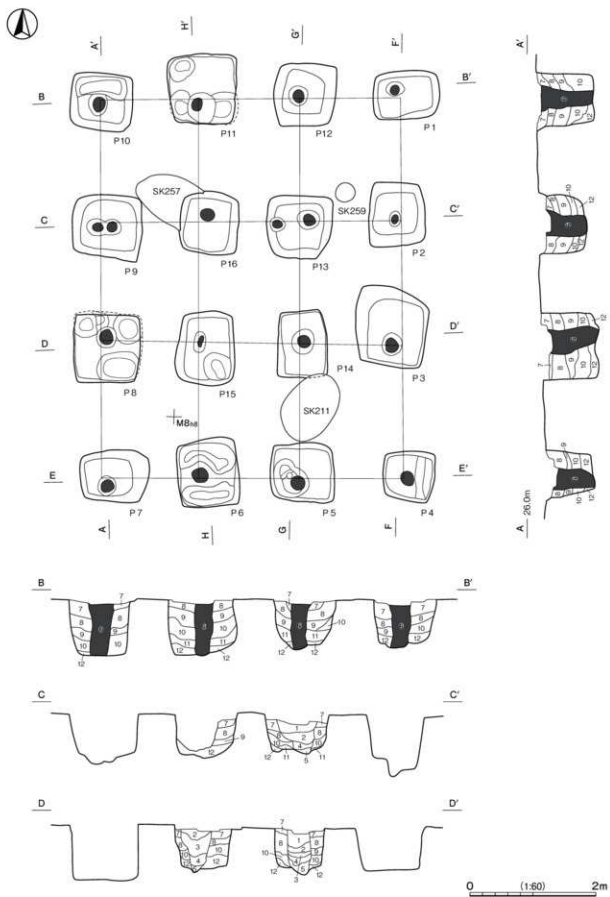
重複関係 第211・257号土坑に掘り込まれている。また、本跡の範囲内に第259号土坑が位置しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行3間、梁行3間の総柱建物跡で、桁行方向がN-2°-Wの南北棟である。規模は桁行6.16m、梁行4.76mで、面積は29.32㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.00m(7尺)、2.00m(7尺)、2.20m(7尺)とほぼ揃っている。梁行は1.80m(6尺)を基本とし、柱筋は揃っている。全てのピットの底面で、柱のあたりを確認した。

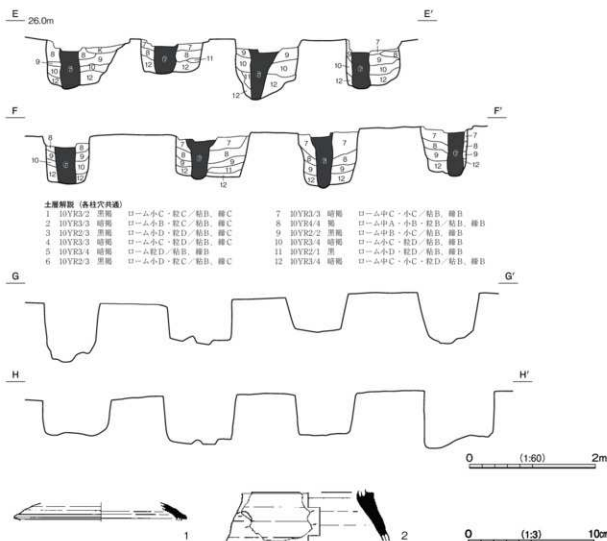
柱穴 16か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸75～105cm、短軸65～100cmである。深さは52～92cmで、掘方の断面は直立している。第1～5層は柱抜き取り後の覆土、第6層は柱痕跡、第7～12層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

遺物出土状況 土師器片70点(杯13、碗1、埴1、高杯1、甕54)、須恵器片2点(蓋、円面硯)が出土している。1・2ともにそれぞれP10・P7の掘方埋土中から出土している。

所見 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀前葉と考えられる。



第 133 图 第 20 号掘立柱建物迹实测图



第134図 第20号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第68表 第20号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	壺	-	(1.4)	-	長石・赤色粒子	灰青	普通	天井部回転ヘラ削り	F10埋土中	5%
2	須恵器	円面碗	-	(3.9)	-	長石・石英・黒緑・赤色粒子	にが・黄緑	普通	脚部 円形の透かし孔	F7埋土中	5%

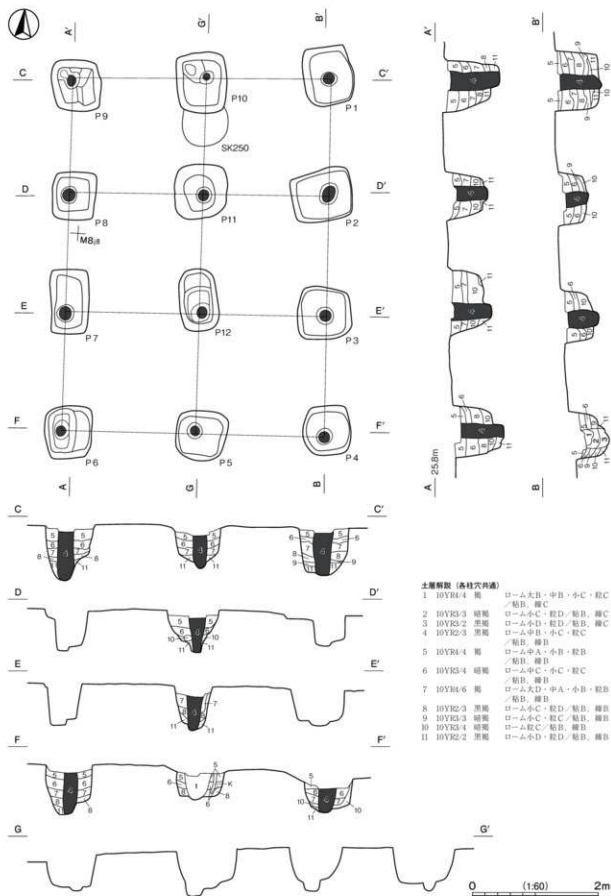
第21号掘立柱建物跡 (第135・136図 PL20)

位置 調査区南部のM8i8区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第250号土坑を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の総柱建物跡で、桁行方向がN-3°-Wの南北棟である。規模は桁行5.64m、梁行4.12mで、面積は23.24㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から1.90m(6尺)、梁行が2.00m(7尺)で、柱筋は揃っている。全てのピットの底面で、柱のあたりを確認した。

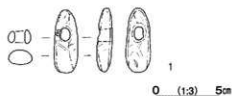
柱穴 12か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸40～52cm、短軸30～43cmである。深さは52～91cmで、掘方の断面は直立している。第1～3層は柱抜き取り後の覆土、第4層は柱痕跡、第5～11層は掘方への埋土で、版築状を呈している。



第 135 图 第 21 号掘立柱建物跡实测图

遺物出土状況 土師器片 14点 (坏11, 甕3), 石製品1点 (垂飾り) が出土している。1はP10の掘方埋土中より出土している。縄文時代の遺物が混入したものと考えられる。

所見 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀前葉と考えられる。



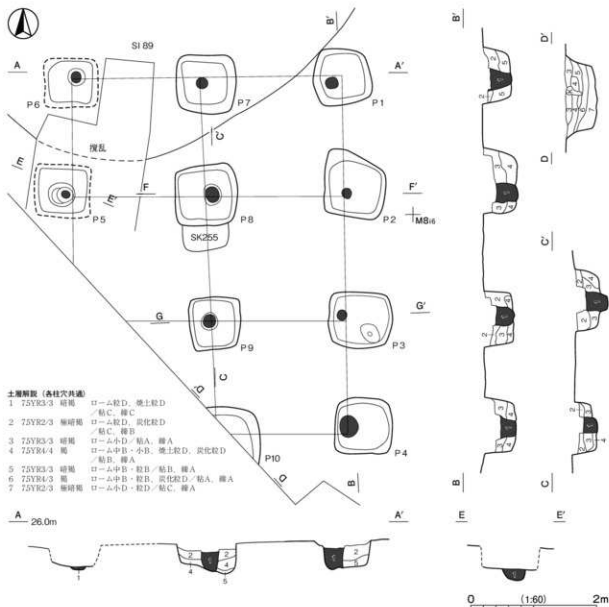
第136図 第21号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第69表 第21号掘立柱建物跡出土遺物一覧

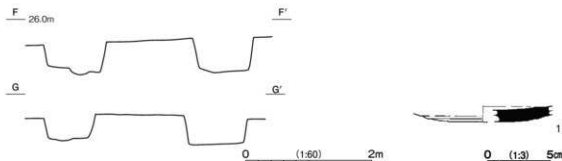
番号	部種	長さ	幅	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	垂飾り	5.1	1.9	1.2	16.18	滑石	表面研磨精緻 孔径0.8~1.1cm	P10埋土中	

第22号掘立柱建物跡 (第137・138図 PL21)

位置 調査区南部のM85区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。



第137図 第22号掘立柱建物跡実測図



第138図 第22号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

重複関係 第89号竪穴建物跡、第255号土坑を掘り込んでいる。

規模と構造 南西部が調査区域外に延びているため、すべての柱穴を確認することができなかった。桁行3間、梁行2間の竪柱建物跡で、桁行方向がN-3°-Wの南北棟と推定できる。規模は桁行5.45m、梁行4.43mで、面積は24.14㎡と推定できる。柱間寸法は、桁行が北妻から1.80m（6尺）、梁行が2.20m（7尺）で、柱筋は揃っている。P10以外のピットの底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 10か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸85～105cm、短軸80～95cmである。深さは45～55cmで、掘方の断面は直立している。第1層は柱痕跡、第2～7層は掘方への埋土で、版築状を呈している。P5・P6の上層は攪乱により、柱痕跡の最下層のみが確認できた。

遺物出土状況 土師器片16点（坏8、甕8）、須恵器片1点（坏）が出土している。1はP1の掘方埋土中から出土している。

所見 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀前葉と考えられる。

第70表 第22号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	備考	出土位置
1	須恵器	坏	-	(0)9	[90]	長石・石英・雲母	灰青	普通	底面副軸へラ切り後一方向のナゲ		P1埋土中 10% 調査済

第23号掘立柱建物跡（第139・140図）

位置 調査区南部のN98区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

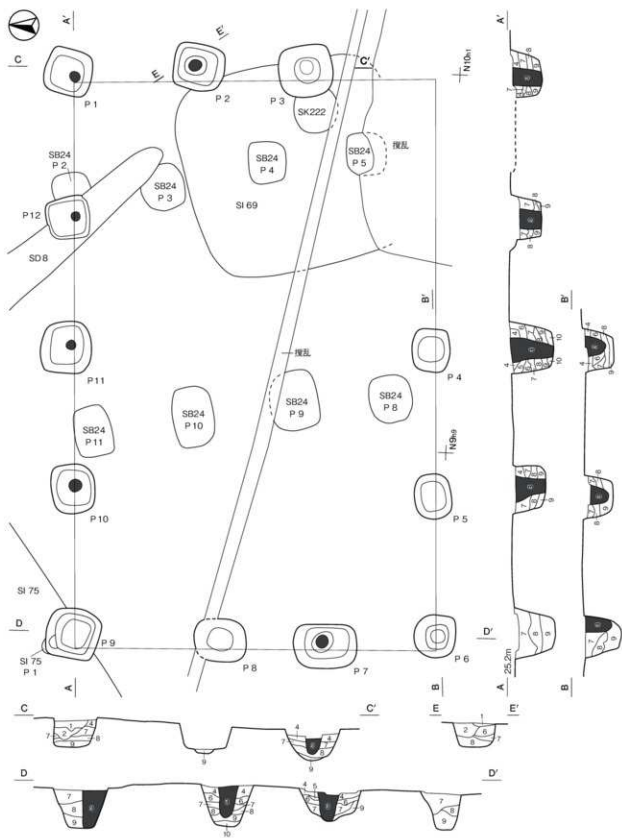
重複関係 第69・75号竪穴建物跡、第24号掘立柱建物跡、第222号土坑を掘り込み、第8号溝に掘り込まれている。

規模と構造 桁行4間、梁行3間の竪柱建物跡で、桁行方向がN-88°-Eの東西棟である。南東にある角柱は、後世の攪乱のために失われていた。規模は桁行12.00m、梁行7.80mで、面積は93.60㎡と推定できる。柱間寸法は、桁行が3.00m（10尺）、梁行が2.40m（8尺）を基本とし、柱筋は揃っている。P1・P2・P7・P10～P12の底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 12か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸88～136cm、短軸80～112cmである。深さは48～92cmで、掘方の断面は外傾または直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3層は柱痕跡、第4～10層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

遺物出土状況 土師器片42点（坏10、高坏1、壺1、甕30）、須恵器片16点（坏9、蓋1、甕6）、鉄滓1点（15.71g）が出土している。1はP4の掘方埋土中、2・3はP1の覆土中から出土している。

所見 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀前葉と考えられる。



土层解説 (高柱穴共通)

- 1 75YR4/2 灰褐色土、炭化粒D、粘土、粘A
 2 75YR3/2 黒褐色土、炭化粒D、粘土、粘A
 3 75YR2/2 黒褐色土、炭化粒C、粘土、粘A
 4 75YR2/3 黒褐色土、炭化粒C、粘土、粘A
 5 75YR3/2 黒褐色土、炭化粒D、粘土、粘A

- 6 75YR3/2 黒褐色土、炭化粒D、粘土、粘A
 7 75YR2/2 黒褐色土、炭化粒D、粘土、粘A
 8 75YR4/3 黒褐色土、炭化粒D、粘土、粘A
 9 75YR2/3 黒褐色土、炭化粒C、粘土、粘A
 10 75YR4/4 黒褐色土、炭化粒C、粘土、粘A

第139図 第23号独立柱建物跡実測図



第140図 第23号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第71表 第23号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(20)	[7.6]	長石	灰白	普通	体部ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	P 4 覆土中	5%
2	須恵器	蓋	-	(12)	-	長石・石英	靑灰	普通	天舟部回転ヘラ削り	P 1 覆土中	5%
3	須恵器	甕	[160]	(29)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	口縁部外・内面ロクロナデ	P 1 覆土中	5%

第24号掘立柱建物跡 (第141・142図 PL21)

位置 調査区南部のN99区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

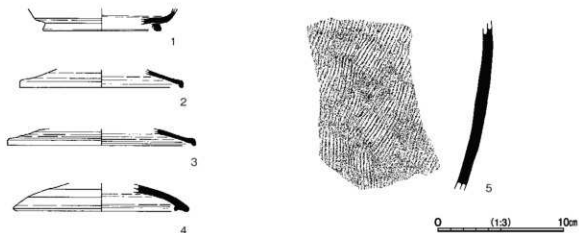
重複関係 第69号竪穴建物跡を掘り込み、第23号掘立柱建物、第8号溝に掘り込まれている。

規模と構造 桁行5間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-8°-Wの南北棟である。南東部が攪乱を受けており、南東の角柱とP5・P6の一部を確認することができなかった。規模は桁行11.04m、梁行4.92mで、面積は54.32㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.20m(7尺)、梁行は2.60m(9尺)を基本とし、柱筋は揃っている。P1・P2・P4・P5・P7・P9～P11の底面で、柱のあたりを確認した。

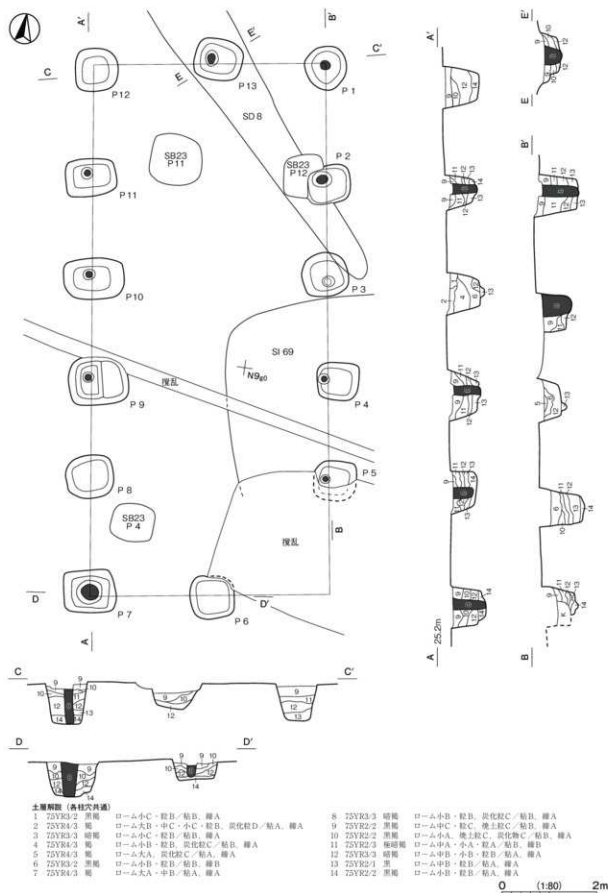
柱穴 13か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸88～128cm、短軸80～104cmである。深さは36～84cmで、掘方の断面は直立している。第1～7層は柱抜き取り後の覆土、第8層は柱痕跡、第9～14層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

遺物出土状況 土師器片54点(坏21、鉢1、甕32)、須恵器片14点(坏4、高台付坏1、蓋6、甕3)、鉄滓3点(328.60g)が出土している。1・3はP12、2・4・5はそれぞれP2・P11・P13の掘方埋土中から出土している。

所見 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀初頭と考えられる。



第141図 第24号掘立柱建物跡出土遺物実測図



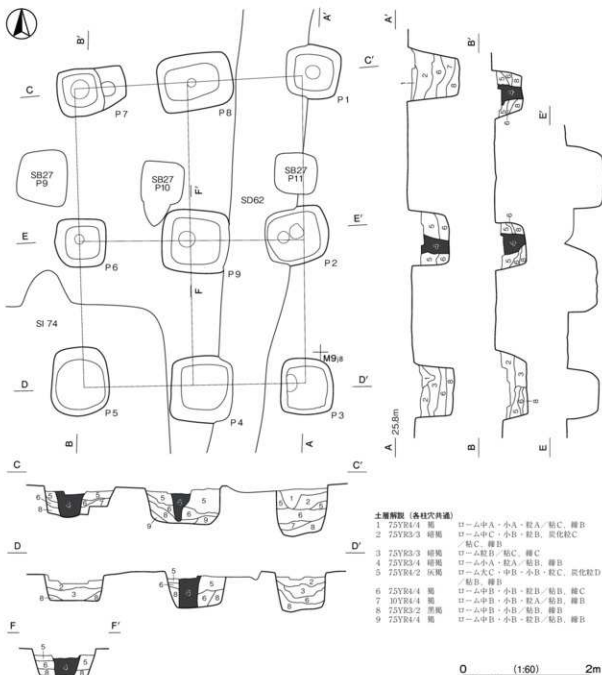
第142图 第24号独立柱建物跡灭面图

第72表 第24号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	高付杯	-	(1.8)	[9.2]	長石	褐色	普通	体部シコロナデ 底部回転へう切り隆高付唇付	P12 埋土中	5%
2	須恵器	蓋	[12.9]	(1.4)	-	砂粒	黄褐色	普通	天井部回転へう飾り	P 2 埋土中	5%
3	須恵器	蓋	[14.8]	(1.3)	-	砂粒	灰黄	普通	天井部回転へう飾り	P12 埋土中	5%
4	須恵器	蓋	[13.6]	(2.2)	-	灰石・石英	灰	普通	天井部回転へう飾り	P11 埋土中	5%
5	須恵器	葉	-	(13.5)	-	長石	灰	普通	体部外面斜位の平行叩き 内面ナデ	P13 埋土中	5%

第25号掘立柱建物跡 (第143・144図 PL21)

位置 調査区南部のM9区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。



第143図 第25号掘立柱建物跡実測図

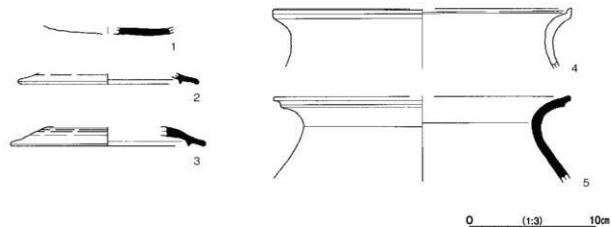
重複関係 第74号竪穴建物跡を掘り込み、第27号掘立柱建物、第62号溝に掘り込まれている。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の総柱建物跡で、桁行方向がN-2°-Eの南北棟である。規模は桁行5.00m、梁行3.76mで、面積は18.80㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.60m(9尺)、2.30m(8尺)、梁行が1.80m(6尺)、1.90m(6尺)で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 9か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸80～120cm、短軸75～100cmである。深さは45～85cmで、掘方の断面はほぼ直立している。第1～3層は柱抜き取り後の覆土、第4層は柱痕跡、第5～9層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

遺物出土状況 土師器片76点(坏8、椀1、増3、高坏9、鉢1、甕54)、須恵器片6点(坏3、蓋2、甕1)、土製品1点(羽口)、金属製品1点(釘)が出土している。また、付近に古墳時代の第1号鍛冶工跡が存在することから、混入したとみられる椀形鍛冶滓1点(68.58g)と鉄滓11点(512.18g)を確認した。1はP7の覆土中から、2・3はそれぞれP9・P2の掘方埋土中から、4・5はP5の覆土中から出土した。

所見 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀前葉と考えられる。



第144図 第25号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第73表 第25号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(0.8)	[103]	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ削り	P 7 覆土中	5%
2	須恵器	蓋	[140]	(0.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい橙	普通	天舟部回転ヘラ削り	P 9 埋土中	5%
3	須恵器	蓋	[154]	(1.5)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	天舟部回転ヘラ削り	P 2 埋土中	5%
4	土師器	甕	[238]	(4.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	橙	普通	口縁部外・内面ナデ	P 5 覆土中	5% 外面一部原形
5	須恵器	甕	[256]	(6.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	橙	普通	口縁部外・内面口コナデ 内面ナデ	P 5 覆土中	5% 外面一部原形

第26号掘立柱建物跡 (第145図 PL.21・22)

位置 調査区南部のM9区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

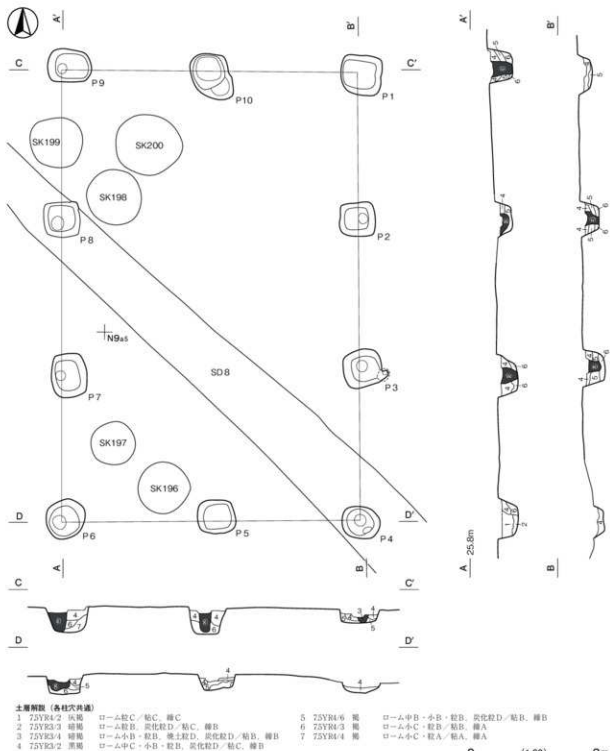
重複関係 第8号溝に掘り込まれている。また、本跡の範囲内に第196～200号土坑が位置しているが、堆積状況での新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-0°の南北棟である。規模は桁行7.18m、梁行4.76mで、面積は34.18㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.40m(8尺)で、梁行は2.40m(8尺)と揃っている。

柱穴 10か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸（径）55～85cm、短軸（径）55～66cmである。深さは20～45cmで、掘方の断面は直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3層は柱痕跡、第4～7層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片27点（坏4、高坏3、甕20）、土製品1点（羽口）、鉄滓2点（2233g）が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

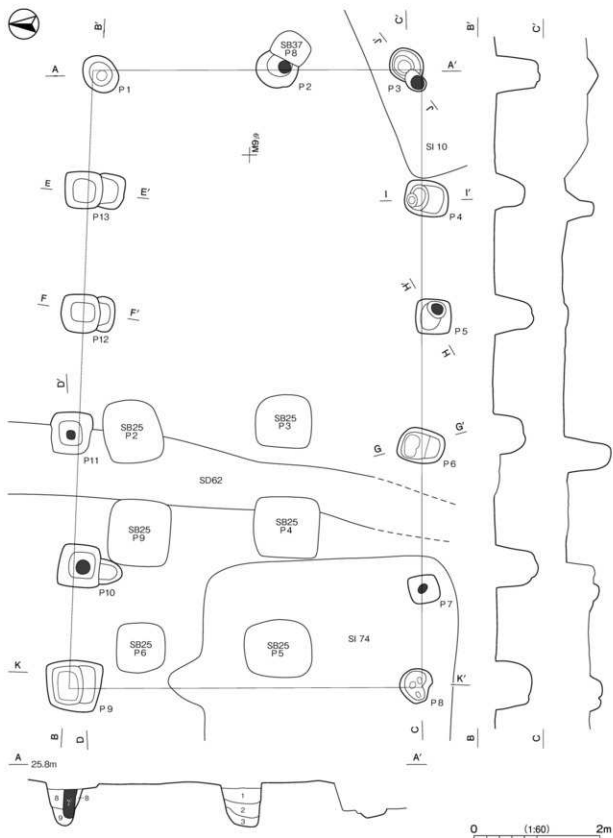
所見 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀前葉と考えられる。



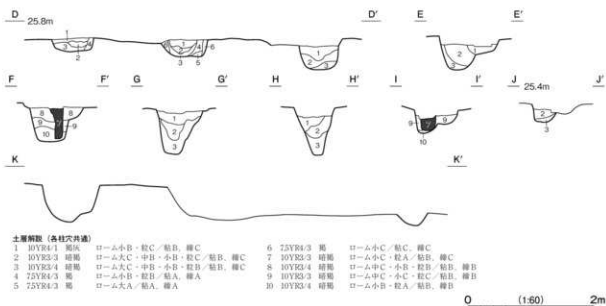
第145図 第26号掘立柱建物跡実測図

第27号掘立柱建物跡 (第146・147図 PL22)

位置 調査区南部のM97区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。



第146図 第27号掘立柱建物跡実測図(1)



第147図 第27号掘立柱建物跡実測図(2)

重複関係 第10・74号竪穴建物跡を掘り込み、第25・37号掘立柱建物、第62号溝に掘り込まれている。

規模と構造 桁行5間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-90°の東西棟である。規模は桁行9.82m、梁行5.46mで、面積は53.62㎡である。柱間寸法は、桁行が1.90m(6尺)、1.90m(6尺)、2.00m(7尺)、2.10m(7尺)、2.00m(7尺)で概ね揃っている。梁行は2.80m(9尺)、2.30m(8尺)で、西妻側はP8とP9の間の柱穴が確認できなかったため、P8-P9間が5.60m(19尺)で、概ね揃っている。P2・P3・P5・P7・P10・P11の底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 13か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸(径)50～105cm、短軸(径)45～80cmである。深さは20～76cmで、掘方の断面は直立または外傾している。第1～6層は柱抜き取り後の覆土、第7層は柱痕跡、第8～10層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片16点(坏5、小型甕1、甕10)、須臾器片1点(坏)、鉄滓3点(107.24g)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀中葉と考えられる。

第28号掘立柱建物跡(第148～150図 PL22)

位置 調査区南部のN9c2区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第77・78・93・94号竪穴建物跡、第29号掘立柱建物跡、第213号土坑を掘り込み、第30号掘立柱建物、第215号土坑、第61・66号溝に掘り込まれている。また、本跡の範囲内に第203・376号土坑が位置しているが、新旧関係は不明である。

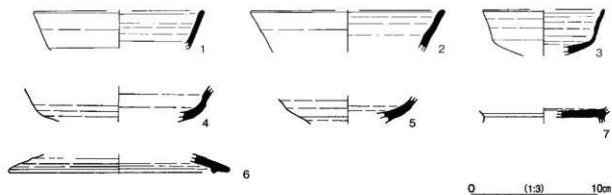
規模と構造 桁行5間、梁行3間の身舎に、四面庇が付く側柱建物跡で、桁行方向がN-4°-Eの南北棟である。規模は身舎が桁行14.5m、梁行7.2mで、面積は104.4㎡である。庇の出は東西2.0m(7尺)、南北

1.6 m (5 尺) で、底を含めた桁行は 17.80 m、梁行は 10.50 m で、面積は 186.90 m² である。身舎の柱間寸法は、桁行が北妻から 3.00 m (10 尺)、梁行が 2.50 m (8 尺) を基本とし、揃っている。庇の柱間寸法は、桁行が北妻より 2.00 m (7 尺)、2.50 m (8 尺)、3.00 m (10 尺)、3.00 m (10 尺)、2.60 m (9 尺)、2.60 m (9 尺)、2.40 m (8 尺) と概ね揃っている。梁行は 2.70 m (9 尺)、2.20 m (7 尺)、2.40 m (8 尺)、1.70 m (6 尺)、2.00 m (7 尺) と概ね揃っている。P 1・P 11・P 14・P 16～P 20・P 22～P 24・P 27・P 30～P 33・P 36 の底面で、柱のあたりを確認した。なお、第 66 号溝によって P 36 の上層は削平を受けているが、形状や配列から、P 28 と同一の柱穴であったものと考えられる。

柱穴 36 か所。P 1～P 16 は身舎の柱穴である。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸 (径) 100～180 cm、短軸 (径) 100～130 cm、深さは 70～100 cm で、掘方の断面は直立している。P 17～P 36 は庇の柱穴である。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸 (径) 75～155 cm、短軸 (径) 80～120 cm である。深さは 30～90 cm で、掘方の断面は直立している。第 1～3 層は柱の抜き取り痕、第 4 層は柱痕跡、第 5～14 層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

遺物出土状況 土師器片 173 点 (坏 34、高台付坏 1、高坏 2、鉢 1、甕 1、甕 133、瓶 1)、須恵器片 37 点 (坏 16、高台付坏 1、甕 8、盤 1、甕 11)、鉄滓 5 点 (478.27 g) が出土している。1～7 はそれぞれ P 9・P 13・P 14・P 16・P 19・P 25・P 30 の掘方埋土中から出土している。

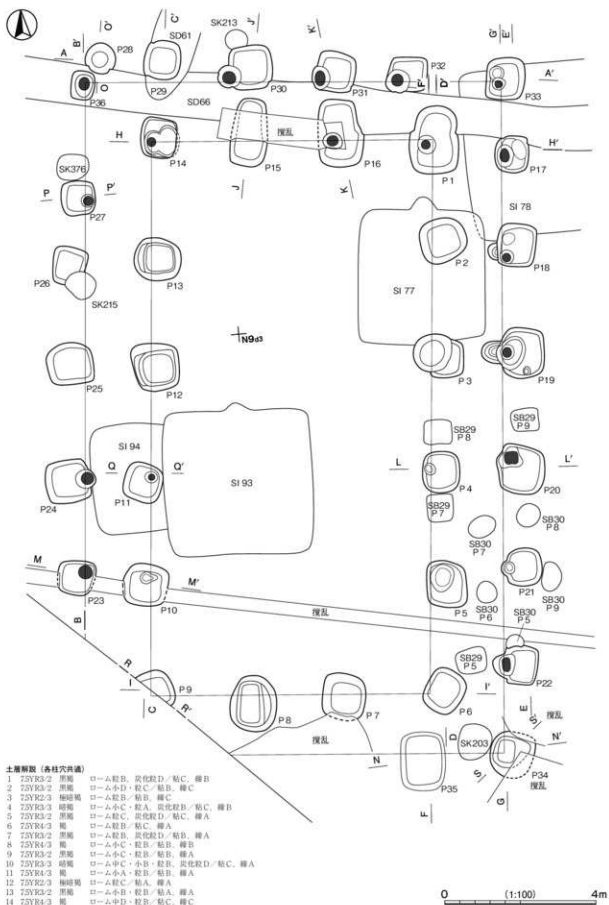
所見 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8 世紀中葉と考えられる。



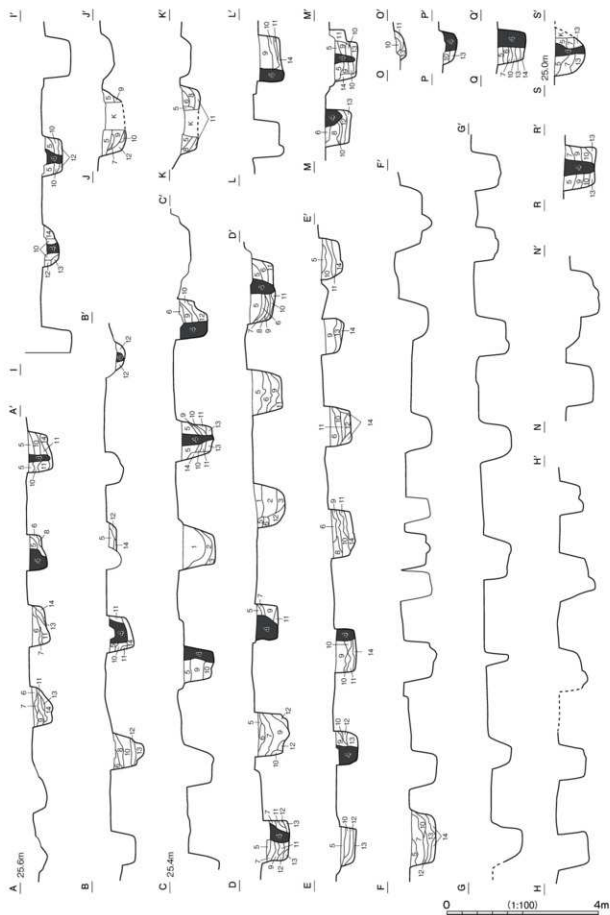
第 148 図 第 28 号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第 74 表 第 28 号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[13.4]	(3.1)	-	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	体部ロクロナデ	P 9 埋土中	5%
2	須恵器	坏	[15.3]	(3.3)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部ロクロナデ	P13 埋土中	5%
3	須恵器	坏	[9.6]	3.6	[7.8]	長石・石英	灰	普通	体部ロクロナデ 底部回転へう切り後多方向のナデ	P14 埋土中	20%
4	須恵器	坏	-	(2.7)	-	長石・石英	にみ濃褐	普通	体部ロクロナデ 体部下端回転へう割り	P16 埋土中	5%
5	須恵器	坏	-	(2.1)	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	体部ロクロナデ	P19 埋土中	5%
6	須恵器	甕	[17.4]	(1.5)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	天井部回転へう割り	P25 埋土中	5%
7	須恵器	盤	-	(1.2)	-	長石	灰白	普通	底部回転へう切り後高台版付	P30 埋土中	5%



第149図 第28号掘立柱建物跡実測図(1)



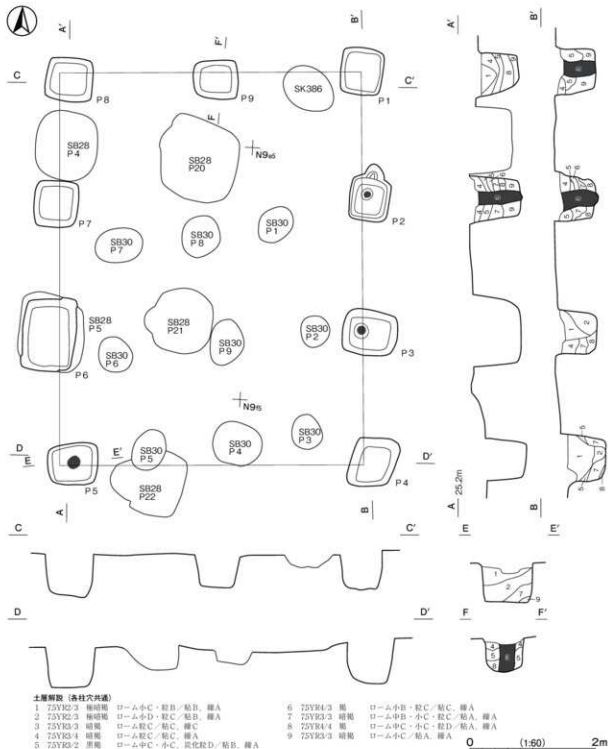
第 150 图 第 28 号孤立柱建物踏实测图 (2)

第29号掘立柱建物跡 (第151・152図 PL22)

位置 調査区南部のN9e4区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第28・30号掘立柱建物に掘り込まれている。また、本跡の範囲内に第386号土坑が位置しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の欄柱建物跡で、桁行方向がN-4°-Wの南北棟である。規模は桁行6.20m、梁行4.80mで、面積は29.76㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.10m(7尺)、梁行は2.40m



第151図 第29号掘立柱建物跡実測図

(8尺)と揃っている。P2・P3・P5の底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 9か所。掘方の平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸72～115cm、短軸63～90cmである。深さは48～80cmで、掘方の断面は直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3層は柱痕跡、第4～9層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

遺物出土状況 土師器片40点(坏8、椀3、高坏2、甕27)、須恵器片8点(坏5、蓋3)、鉄滓1点(94.51g)が出土している。1はP7、2はP2の掘方埋土中から、3・4はP5の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀初頭と考えられる。



第152図 第29号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第75表 第29号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	形種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[94]	(1.9)	-	長石・石英	灰	普通	体部クロコナテ	P7埋土中	5%
2	須恵器	蓋	-	(1.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にみ-濃橙	普通	天舟部回転ヘラ削り	P2埋土中	5%
3	須恵器	蓋	[164]	(1.3)	-	長石・石英・赤緑	にみ-濃橙	普通	天舟部回転ヘラ削り	P5覆土中	5%
4	須恵器	蓋	[162]	(1.0)	-	長石・石英	にみ-濃橙	普通	天舟部回転ヘラ削り	P5覆土中	5%

第32号掘立柱建物跡 (第153～155図 PL22・23)

位置 調査区南部のM9g4区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第27・36号竪穴建物跡、第6・7号陥し穴を掘り込み、第35号掘立柱建物、第61号溝に掘り込まれている。また、本跡の範囲内に第318・329号土坑が位置しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行4間、梁行2間の隅柱建物跡で、桁行方向がN-3°-Eの南北棟である。規模は桁行10.60m、梁行5.48mで、面積は58.09㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.80m(9尺)を基本とし、ほぼ揃っている。梁行は2.70m(9尺)を基本とし、揃っている。P2～P7、P9～P12の底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 12か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸(径)75～110cm、短軸(径)65～85cmである。深さは20～36cmで、掘方の断面は直立している。第1層は柱痕跡、第2～4層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片21点(坏7、甕14)、須恵器片4点(坏2、蓋2)、鉄滓2点(125.61g)が出土している。1はP11、2はP1のいずれも掘方埋土中から出土した。

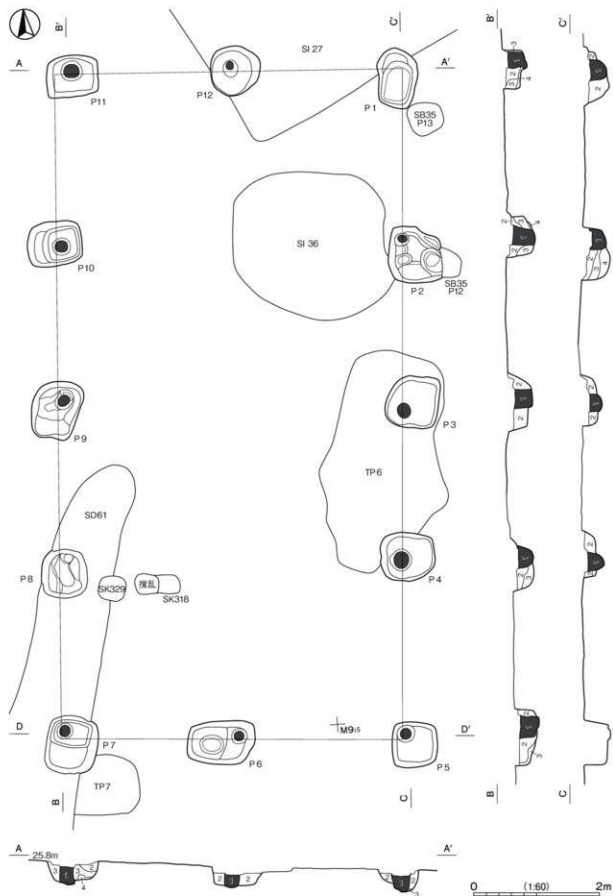
所見 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀中葉と考えられる。



第153図 第32号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第76表 第32号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	形種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[90]	(2.2)	-	長石	灰白	普通	体部クロコナテ	P11埋土中	5%
2	須恵器	蓋	[156]	(0.8)	-	長石・石英・赤緑	にみ-濃橙	普通	クロコナテ	P1埋土中	5%



第 154 图 第 32 号掘立柱建物跡実測図 (1)

第77表 第33号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法	特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	杯	-	(12)	[7.6]	灰石・石灰・雲母・赤色胎子	灰青陶	普通	底部回転ヘラ切り後多方向のナデ		P1埋土中	10% 割合

第34号掘立柱建物跡 (第157図 PL23)

位置 調査区南部のM9d4区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

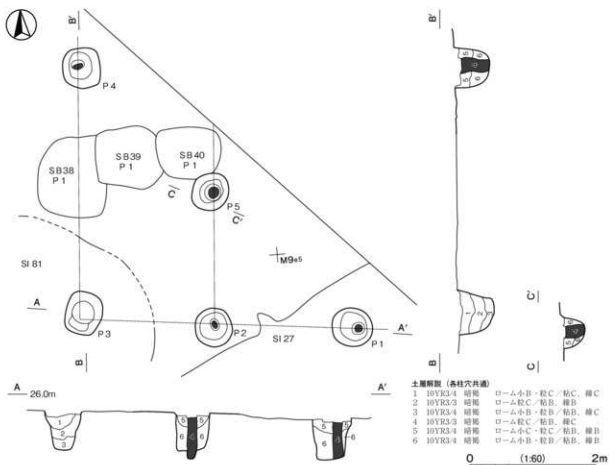
重複関係 第27・81号竪穴建物跡、第38～40号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造 東部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行、梁行ともに不明だが、P3～P4の柱穴が第38号掘立柱建物に掘り込まれていると推定できることから、桁行、梁行ともに2間以上の東西棟の総柱建物跡と考えられる。確認できた規模は桁行4.30m、梁行4.00mで、面積は8.60㎡である。柱間寸法は、桁行、梁行ともに220m(7尺)を基本としている。P1・P2・P4・P5の底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 5か所。掘方の平面形は円形または隅丸長方形で、長軸(径)60～70cm、短軸(径)60～65cmである。深さは36～72cmで、掘方の断面は直立している。第1～3層は柱抜き取り後の覆土、第4層は柱痕跡、第5～6層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片11点(欠)、鉄滓1点(7.73g)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀中葉と考えられる。



第157図 第34号掘立柱建物跡実測図

第 36 号掘立柱建物跡 (第 158 図 PL23)

位置 調査区南部の N 1044 区、標高 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。

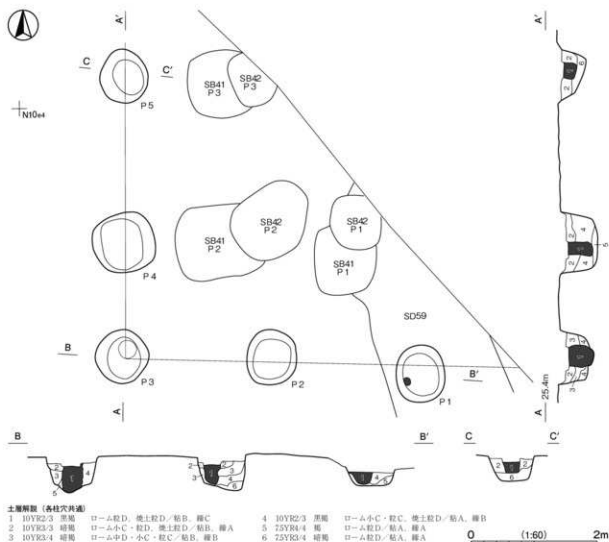
重複関係 第 59 号溝に掘り込まれている。また、本跡の範囲内に第 41・42 号掘立柱建物跡が位置しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 東部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行、梁行ともに 2 間以上の東西棟の掘立柱建物跡と考えられる。確認できた規模は東西 4.80 m、南北 4.50 m で、面積は 10.80 m² である。柱間寸法は、東西が 2.40 m (8 尺) で、南北が P 3 - P 4 間が 1.80 m (6 尺)、P 4 - P 5 間が 2.70 m (9 尺) である。P 1 の底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 5 か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸 (径) 85 ~ 100 cm、短軸 (径) 75 ~ 95 cm である。深さは 24 ~ 60 cm で、掘方の断面は直立している。第 1 層は柱痕跡、第 2 ~ 6 層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

遺物出土状況 土師器片 3 点 (坏 1、甕 2) が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、主軸方向や出土土器から、8 世紀中葉と考えられる。

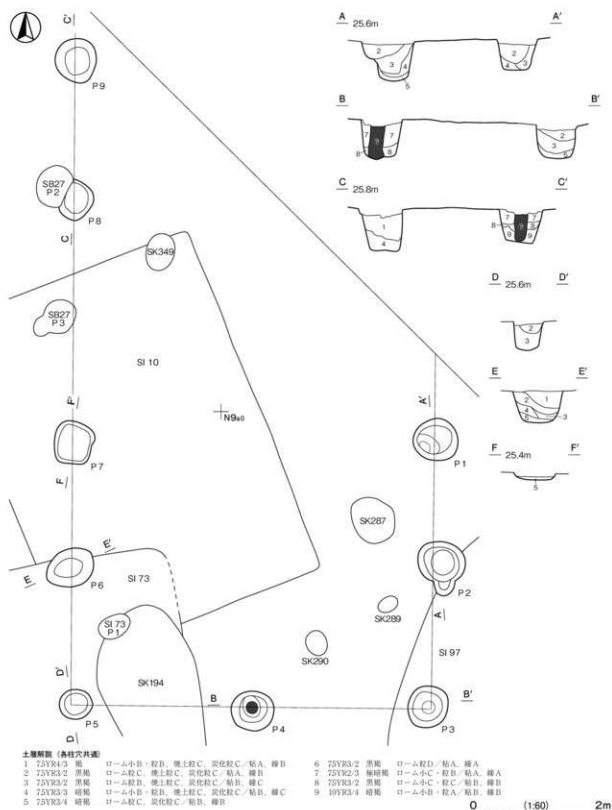


第 158 図 第 36 号掘立柱建物跡実測図

第 37 号据立柱建物跡 (第 159・160 図)

位置 調査区南部の M9 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 10・73・97 号堅穴建物跡を掘り込み、第 27 号据立柱建物に掘り込まれている。また、本跡の範囲内に第 194・287・289・290・349 号土坑が位置しているが、新旧関係は不明である。



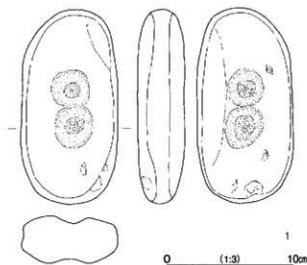
第 159 図 第 37 号据立柱建物跡実測図

規模と構造 北部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行4間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-0°の南北棟である。規模は桁行10.18m、梁行5.60mで、面積は57.01㎡と推定できる。柱間寸法は、桁行が南妻から2.20m（7尺）を基本とし、ほぼ揃っている。P7-P8間のみが3.80m（13尺）であるが、第27号掘立柱建物によって間にあった柱穴が掘り込まれている可能性が高い。梁行は2.90m（10尺）と揃っている。P4の底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 9か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸（径）55～90cm、短軸（径）50～80cmである。深さは10～62cmで、掘方の断面は直立している。第1～5層は柱抜き取り後の覆土、第6層は柱痕跡、第7～9層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

遺物出土状況 土師器片6点（坏2、椀1、甕3）、石製品1点（凹石・砥石）、鉄滓2点（20.82g）が出土している。1は縄文時代の遺物であるが、P4の掘方埋土に混入していた。

所見 時期は、重複関係や主軸方向及び出土土器から、8世紀前葉と考えられる。



第160図 第37号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第78表 第37号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	凹石・砥石	15.5	7.6	3.8	64653	安山岩	表裏面に凹み痕 表裏に砥面	P4埋土中	PL47

第38号掘立柱建物跡（第161・162図 PL23）

位置 調査区南部のM9c2区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

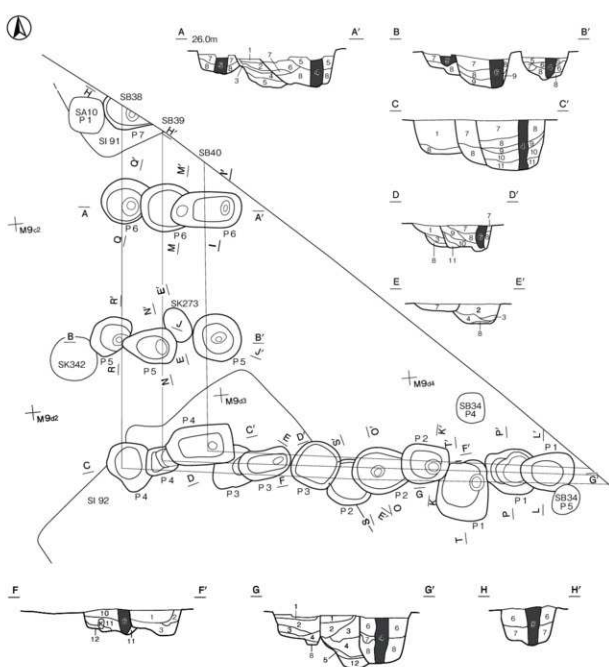
重複関係 第91・92号竪穴建物跡、第342号土坑を掘り込み、第34・39・40号掘立柱建物に掘り込まれている。また、本跡の範囲内に第273号土坑が位置しているが、堆積状況での新旧関係は不明である。

規模と構造 東部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行、梁行ともに3間以上の側柱建物跡で、桁行の方向がN-8°-Eの南北棟と考えられる。確認できた規模は東西7.20m、南北7.60mで、面積は27.36㎡である。柱間寸法は、東西が2.40m（8尺）で、南北がP4-P5間が2.80m（9尺）、P5-P6間が2.80m（9尺）、P6-P7間が2.00m（7尺）である。P6の底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 7か所。掘方の平面形は隅丸方形または不整形楕円で、長軸（径）96～130cm、短軸（径）72～110cmである。深さは40～80cmで、掘方の断面はほぼ直立している。第1～4層は柱抜き取り後の覆土、第5層は柱痕跡、第6～8層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片15点（坏2、壺1、甕12）、須恵器片2点（甕）、土製品1点（羽口）、金属製品1点（不明）、鉄滓3点（138.05g）が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀中葉と考えられる。



SB38 土層解数 (各柱穴共通)

- | | | |
|---|------------|-------------------|
| 1 | 10YR4-3 埴土 | ロ-ム中C・小B・粒C/粘B、雜土 |
| 2 | 10YR3-3 埴土 | ロ-ム小C・粒C/粘B、雜土 |
| 3 | 10YR4-4 埴土 | ロ-ム中B・小B・粒B/粘B、雜土 |
| 4 | 10YR3-3 埴土 | ロ-ム小C・粒C/粘C、雜土 |

SB39 土層解数 (各柱穴共通)

- | | | |
|---|------------|-------------------|
| 1 | 10YR3-4 埴土 | ロ-ム小C・中C・粒C/粘B、雜土 |
| 2 | 10YR3-4 埴土 | ロ-ム小C・粒B/粘B、雜土 |
| 3 | 10YR4-4 埴土 | ロ-ム中B・粒A/粘B、雜土 |
| 4 | 10YR3-3 埴土 | ロ-ム小C・粒C/粘B、雜土 |
| 5 | 10YR3-4 埴土 | ロ-ム小C・粒B/粘A、雜土 |
| 6 | 10YR3-3 埴土 | ロ-ム小C・粒C/粘C、雜土 |

SB40 土層解数 (各柱穴共通)

- | | | |
|---|-------------|----------------|
| 1 | 2.5YR4-3 埴土 | ロ-ム粒C/粘C、雜土 |
| 2 | 2.5YR3-4 埴土 | ロ-ム小C・粒C/粘C、雜土 |
| 3 | 2.5YR3-3 埴土 | ロ-ム小C・粒C/粘B、雜土 |
| 4 | 10YR3-3 埴土 | ロ-ム小C・粒C/粘C、雜土 |
| 5 | 10YR3-4 埴土 | ロ-ム小B・粒B/粘B、雜土 |
| 6 | 10YR3-4 埴土 | ロ-ム小A・粒A/粘B、雜土 |

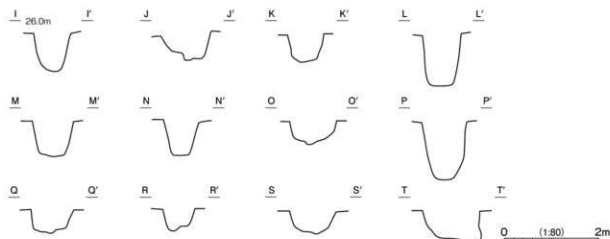
- | | | |
|---|------------|-------------------|
| 5 | 10YR3-3 埴土 | ロ-ム小B・粒C/粘B、雜土 |
| 6 | 10YR3-4 埴土 | ロ-ム小B・粒B/粘B、雜土 |
| 7 | 10YR4-4 埴土 | ロ-ム中B・小B・粒B/粘B、雜土 |
| 8 | 10YR4-4 埴土 | ロ-ム中C・小A・粒A/粘B、雜土 |

- | | | |
|----|------------|-------------------|
| 7 | 10YR3-3 埴土 | ロ-ム小C・粒C/粘C、雜土 |
| 8 | 10YR3-4 埴土 | ロ-ム中C・小B・粒B/粘B、雜土 |
| 9 | 10YR3-3 埴土 | ロ-ム小B・粒B/粘B、雜土 |
| 10 | 10YR4-4 埴土 | ロ-ム小A・粒A/粘B、雜土 |
| 11 | 10YR4-4 埴土 | ロ-ム中B・小A・粒A/粘B、雜土 |
| 12 | 10YR3-3 埴土 | ロ-ム小C・粒C/粘C、雜土 |

- | | | |
|----|------------|-------------------|
| 7 | 10YR3-3 埴土 | ロ-ム小B・粒C/粘B、雜土 |
| 8 | 10YR4-4 埴土 | ロ-ム小B・粒A/粘B、雜土 |
| 9 | 10YR3-4 埴土 | ロ-ム中B・小C・粒B、雜土 |
| 10 | 10YR3-3 埴土 | ロ-ム中C・小C・粒C/粘B、雜土 |
| 11 | 10YR3-4 埴土 | ロ-ム小A・粒B/粘B、雜土 |

0 (1:80) 2m

第161图 第38~40号掘立柱建物跡実測图(1)



第162図 第38～40号掘立柱建物跡実測図(2)

第39号掘立柱建物跡 (第161～163図 PL23)

位置 調査区南部のM9c2区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第92号竪穴建物跡、第38号掘立柱建物跡、第273号土坑を掘り込み、第34・40号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造 東部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行3間以上、梁行2間以上の側柱建物跡で、桁行方向がN-8°-Eの南北棟と考えられる。確認できた規模は東西7.50m、南北5.40mで、面積は20.25㎡である。柱間寸法は、東西が2.40m(8尺)で、南北が2.40m(8尺)である。P6の底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 6か所。掘方の平面形は楕円形で、長径72～120cm、短径56～100cmである。深さは48～120cmで、掘方の断面はほぼ直立している。第1～5層は柱抜き取り後の覆土、第6層は柱痕跡、第7～12層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片11点(坏2, 甕9)、須恵器片12点(坏6, 蓋4, 長頸瓶1, 甕1)、鉄滓1点(13.70g)が出土している。1・2はP6の覆土中から出土している。

所見 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀中葉と考えられる。



第163図 第39号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第79表 第39号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[12.4]	(1.8)	-	長石	灰黄	普通	体部外・内面ロケロナデ	P6覆土中	5%
2	須恵器	蓋	[12.4]	(2.2)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	天身部割継ヘウ張り	P6覆土中	5%

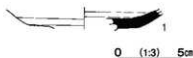
第40号掘立柱建物跡 (第161・162・164図 PL23)

位置 調査区南部のM9c2区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第92号竪穴建物跡、第38・39号掘立柱建物跡を掘り込み、第34号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造 東部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行3間以上、梁行2間以上の側柱建物跡で、桁行方向がN-S°-Eの南北棟と考えられる。確認できた規模は東西7.40m、南北5.00mで、面積は18.50㎡である。柱間寸法は、東西が2.50m（8尺）で、南北が2.40m（8尺）である。P6の底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 6か所。掘方の平面形は隅丸方形または楕円形で、長軸（径）100～152cm、短軸（径）72～104cmである。深さは16～104cmで、掘方の断面はほぼ直立している。第1～3層は柱抜き取り後の覆土。第4層は柱痕跡。第5～11層は掘方への埋土である。



第164図 第40号掘立柱建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片15点（坏4、甕11）、須恵器片3点（蓋、高盤、鉢）、鉄滓2点（70.96g）が出土している。1はP6の掘方埋土中から出土している。

所見 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀中葉と考えられる。

第80表 第40号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
1	須恵器	高盤	-	(18)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部外・内面クロナテ		P6埋土中	5%

第41号掘立柱建物跡（第165図 PL23）

位置 調査区南部のN10e4区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第42号掘立柱建物、第59号溝に掘り込まれている。

規模と構造 東部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行、梁行ともに1間以上の側柱建物跡で、桁行方向がN-0°の南北棟と考えられる。確認できた規模は東西2.00m、南北2.50mで、面積は2.50㎡である。柱間寸法は、東西が2.00m（7尺）で、南北が2.50m（8尺）である。

柱穴 3か所。掘方の平面形は隅丸方形で、長軸110～130cm、短軸64～120cmである。深さは40～90cmで、掘方の断面はほぼ直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土。第3層は柱痕跡。第4～11層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片2点（甕）、礎盤1点（14.47g）が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、主軸方向や出土土器から、8世紀中葉と考えられる。

第42号掘立柱建物跡（第165図 PL23）

位置 調査区南部のN10e5区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

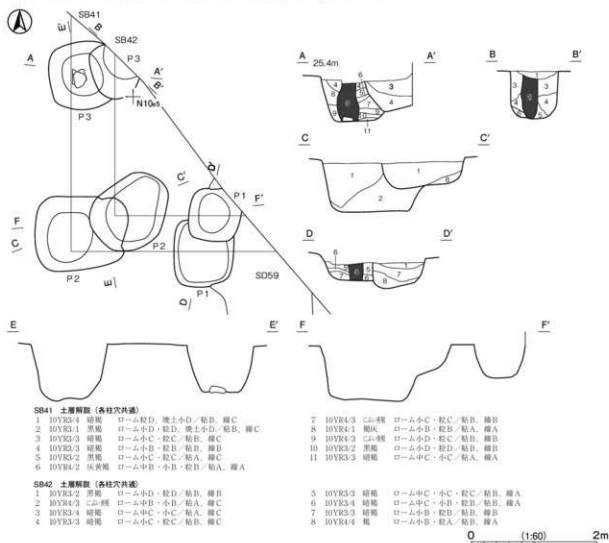
重複関係 第41号掘立柱建物跡を掘り込み、第59号溝に掘り込まれている。

規模と構造 東部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行、梁行ともに1間以上の側柱建物跡で、桁行方向がN-2°-Wの南北棟と考えられる。確認できた規模は東西1.40m、南北2.50mで、面積は1.75㎡である。柱間寸法は、東西が1.40m（5尺）で、南北が2.50m（8尺）である。

柱穴 3か所。掘方の平面形は隅丸方形で、長軸90～135cm、短軸70～108cmである。深さは40～75cmで、掘方の断面はほぼ直立している。第1層は柱抜き取り後の覆土。第2層は柱痕跡。第3～8層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片4点(甍), 須恵器片1点(甍)が出土している。いずれも細片のため, 図示できなかった。

所見 時期は, 主軸方向や出土土器から, 8世紀中葉と考えられる。



第165図 第41・42号掘立柱建物跡実測図

第81表 奈良時代掘立柱建物跡一覧

番号	位置	方位方向	柱間数	規模	面積	柱間寸法		柱穴	柱穴	主な出土遺物	時期	備考	
						桁×幅 (間)	面積(m ²)						構造
14	L 8 f1	N-88°-E	3×2	6.16×4.28	26.36	176-216	172-188	欄柱	9	円形・楕円形	8-28	土師器, 須恵器	8世紀中葉 SB64, SK190 →本跡
16	M 8 a1	N-2°-W	8×2	16.12×4.08	65.77	158-230	151-236	欄柱	21	隅丸方形・楕円形	4-68	土師器	8世紀前期 SD65 →本跡
17	J 6 j1	N-85°-E	4×3	8.92×5.04	44.96	200-240	144-180	欄柱	14	隅丸方形・楕円形	30-55	土師器	8世紀前期
18	M 8 b7	N-5°-W	3×3	6.40×4.80	30.72	190-235	140-170	礎柱	16	隅丸方形・隅丸長方形	60-97	土師器, 須恵器	8世紀前期 SD66 →本跡
19	M 8 c8	N-3°-W	3×3	7.00×4.68	32.76	188-236	141-166	礎柱	16	隅丸方形・隅丸長方形	52-72	土師器, 須恵器	8世紀前期 SD81, 85, SK200 →本跡
20	M 8 g8	N-2°-W	3×3	6.16×4.76	29.32	140-172	126-236	礎柱	16	隅丸方形・隅丸長方形	52-92	土師器, 須恵器	8世紀前期 本跡, SK211-275, SK299 遺構
21	M 8 i8	N-3°-W	3×2	5.64×4.12	23.24	182-188	194-218	礎柱	12	隅丸方形・隅丸長方形	52-91	土師器, 石製品	8世紀前期 SK250 →本跡
22	M 8 i5	N-3°-W	3×2	5.45×4.43	24.14	175-202	205-236	礎柱	10	隅丸方形・隅丸長方形	45-55	土師器, 須恵器	8世紀前期 SD89, SK253 →本跡
23	N 9 f8	N-88°-E	4×3	12.00×7.80	93.60	300-330	230-312	欄柱	12	隅丸方形・隅丸長方形	48-92	土師器, 須恵器	8世紀前期 SD99-75, SD24, SK227 →本跡 →SD 8
24	N 9 f9	N-8°-W	5×2	11.04×4.92	54.32	208-248	240-266	欄柱	13	隅丸方形・隅丸長方形	36-84	土師器, 須恵器	8世紀前期 SD91 →本跡 →SD23, SD2
25	M 9 i7	N-2°-E	2×2	5.00×3.76	18.80	238-236	170-195	礎柱	9	隅丸方形・隅丸長方形	45-85	土師器, 須恵器	8世紀前期 SD71 →本跡 →SD2, SD22

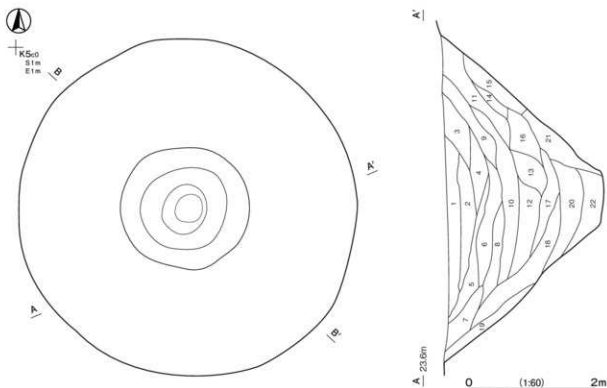
番号	位置	桁行方向	柱間数	規模		面積	柱間寸法			構造	柱	穴	主出土遺物	時期	備考
				幅×深	幅×深		桁間(m)	壁間(m)	構造						
26	M9j5	N-0°	3×2	7.18×4.76	34.18	221~248	222~256	欄柱	10	隅丸方形・楕円形	20~45	土師器	8世紀前半	本館→SD 8 SK196~200 重覆	
27	M9j7	N-90°	5×2	9.82×5.96	53.62	165~230	230~288	欄柱	13	隅丸方形・楕円形	20~76	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SD10・74→本館→ SD55・37, SD92, SD7・8・9・14, SD2, SD11・48・50, SD3, SD4・6, SD10・15重覆	
28	N9c2	N-4°-E	7×5	17.80×10.50	186.00	170~300	210~260	四脚柱	36	隅丸方形・楕円形	30~90	土師器, 須恵器	8世紀中葉	439→SD28・30 SK286重覆	
29	N9e4	N-4°-W	3×2	6.20×4.80	29.76	200~220	240~480	欄柱	9	隅丸方形・隅丸長方形	48~80	土師器, 須恵器	8世紀初葉	SD2・5, 17・7, 7・48 →SD1, SD2, SD3 SD3重覆	
32	M9d4	N-3°-E	4×2	10.60×5.48	58.09	240~280	240~320	欄柱	12	隅丸方形・楕円形	20~36	土師器, 須恵器	8世紀中葉	439→SD28・30 SK286重覆	
33	M9d7	-	(1×1)	(3.50×3.00)	(5.25)	3.50	3.00	欄柱	3	隅丸長方形	58~80	土師器	8世紀中葉	第1号掘削工房跡 →本館→SD62	
34	M9d4	-	(2×1)	(4.30×4.00)	(6.60)	4.30	4.00	柱	5	隅丸長方形・内形	36~72	土師器	8世紀中葉	SD7・8, SK28~40 →本館	
36	N10d4	-	(2×2)	(4.80×4.50)	(3.80)	4.80	4.50	欄柱	5	隅丸方形・楕円形	24~60	土師器	8世紀中葉	439→SD59 SD41・42重覆	
37	M9j9	N-0°	(4×2)	(10.18×5.60)	(37.01)	200~380	280~290	欄柱	9	隅丸方形・楕円形	10~62	土師器	8世紀前半	439→SD59 SK194・267・289・ 290・349重覆	
38	M9c2	N-8°-E	(3×3)	(7.60×7.20)	(27.36)	208~288	224~248	欄柱	7	隅丸方形・不整形円形	40~80	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SD1・62, SK242→ 439→SD34・39→ SD2, SK28, SK273 →本館→SD34・40	
39	M9c2	N-8°-E	(3×2)	(7.50×5.40)	(20.25)	234~280	240~296	欄柱	6	楕円形	48~120	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SD92, SK28・39 →本館→SD34	
40	M9c2	N-8°-E	(3×2)	(7.40×5.00)	(18.50)	240~260	232~288	欄柱	6	隅丸方形・楕円形	16~104	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SD92, SK28・39 →本館→SD34	
41	N10d4	N-0°	(1×1)	(2.50×2.00)	(2.50)	2.50	2.00	欄柱	3	隅丸方形	40~90	土師器	8世紀中葉	本館→SD42, SD59	
42	N10d5	N-2°-W	(1×1)	(2.50×1.40)	(1.75)	2.50	1.40	欄柱	3	隅丸方形	40~75	土師器, 須恵器	8世紀中葉	SD41→本館→ SD59	

(3) 大型円形土坑

第2号大型円形土坑 (第166・167図 PL23)

位置 調査区南部のK5c0区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径5.48m、短径5.28mの円形で、深さ296cmの掘り鉢状である。壁は外傾している。底面は径2.07mの円形で、中央部は径68cmの円形状に32cmほど掘り込まれている。



第166図 第2号大型円形土坑実測図

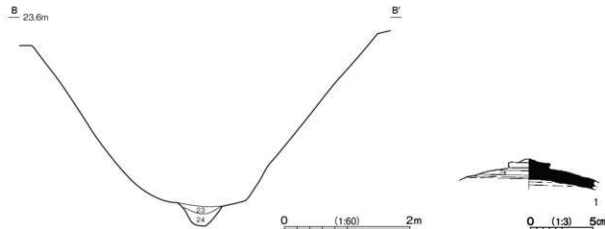
覆土 24層に分層できる。第1・2層はレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。第3～24層はロームブロックや焼土ブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片40点(坏5、甕35)、須恵器片8点(坏2、蓋2、壺1、甕2、瓶1)、鉄滓1点(11.56g)が出土している。1は覆土中から出土した。

所見 時期は、出土土器から8世紀前半と考えられる。底面にくぼきをもつ掘り鉢状の大型の土坑である。性格は、氷室や貯蔵施設、井戸などが考えられるが、詳細は不明である。埋め戻しの覆土は焼土や炭化物を含んでおり、最終的に廃棄土坑として使用されたと考えられる。

土層解説

1	10YR3-2	黄褐色	ローム粒C、焼土粒D、粘土、雜土	13	10YR3-2	黄褐色	ローム粒C、焼土粒D、炭化物粒、粘土小C/粘土、雜土
2	10YR3-2	黄褐色	ローム粒C、焼土小D、粘土、雜土	14	10YR3-3	暗褐色	ローム粒C、焼土粒C、粘土、雜土
3	10YR3-2	黄褐色	ローム粒C、焼土粒D、炭化物D/粘土、雜土	15	10YR3-3	暗褐色	ローム小C、焼土小D、炭化物D/粘土、雜土
4	10YR3-2	暗褐色	ローム粒C、焼土粒D/粘土、雜土	16	10YR3-4	暗褐色	ローム粒C、炭化物粒、焼土粒C/粘土、雜土
5	10YR3-2	暗褐色	ローム粒C、焼土粒C、炭化物C/粘土、雜土	17	10YR5-6	黄褐色	ローム小C、粘土小C/粘土、雜土
6	10YR3-2	黄褐色	ローム小C、炭化物C/粘土、雜土	18	10YR3-3	暗褐色	ローム小C、炭化物粒、粘土小B/粘土、雜土
7	10YR3-2	黄褐色	ローム中C、炭化物粒、粘土粒B/粘土、雜土	19	10YR5-6	黄褐色	ローム小C、焼土小D、粘土小B/粘土、雜土
8	10YR3-2	暗褐色	ローム粒C、炭化物粒、粘土小C/粘土、雜土	20	10YR3-4	暗褐色	ローム小C、炭化物粒、粘土小C/粘土、雜土
9	10YR3-3	暗褐色	ローム粒C、炭化物粒C、粘土小C/粘土、雜土	21	10YR3-4	暗褐色	ローム小C、炭化物粒C、粘土小C/粘土、雜土
10	10YR3-2	暗褐色	ローム小C、焼土粒D、炭化物粒、粘土小D/粘土、雜土	22	10YR3-4	暗褐色	ローム小C、炭化物粒、粘土粒C/粘土、雜土
11	10YR3-2	黄褐色	ローム小C、焼土粒D、炭化物粒C、粘土小C/粘土、雜土	23	10YR3-3	暗褐色	ローム粒C、粘土小C/粘土、雜土
12	10YR3-2	黄褐色	ローム粒D、炭化物粒C、粘土小C/粘土、雜土	24	10YR5-3	こげ茶	ローム粒C、粘土小D、炭化物粒D、粘土粒C/粘土、雜土



第167図 第2号大型円形土坑・出土遺物実測図

第82表 第2号大型円形土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置
1	須恵器	蓋	-	(24)	-	長石・石英・雲母	褐色	普通	天井部回転ヘラ削り		覆土中

(4) 土坑

第190号土坑 (第168図 PL23)

位置 調査区中央部のL70区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

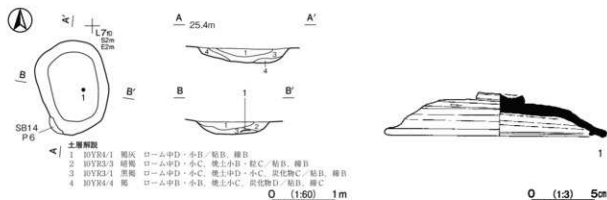
重複関係 第14号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.44m、短径1.08mの楕円形で、長径方向はN-8°-Wである。確認面からの深さは20cmである。底面は皿状で、壁は外傾している。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片3点(坏1, 甕2), 須恵器片3点(蓋)が出土している。1は最下層の第3層から出土している。埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第168図 第190号土坑・出土遺物実測図

第83表 第190号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	[171]	35	-	長石・石英・雲母・炭化粒子	白	普通	天井部回転へう張り	覆土下層	70% PL42 調査票

第213号土坑 (第169図 PL24)

位置 調査区南部のN9b3区, 標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第28号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径0.62m, 短径0.52mの楕円形で, 長径方向はN-47°-Eである。確認面からの深さは16cmである。底面は皿状で, 壁は緩やかに外傾している。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含み不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

遺物出土状況 須恵器片1点(蓋)が出土している。1は覆土下層から出土しており, 埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第169図 第213号土坑・出土遺物実測図

第84表 第213号土坑出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	-	(25)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部回転へう張り	覆土下層	80% PL42 調査票

第85表 奈良時代土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
190	L710	N-8°-W	楕円形	1.44×1.08	20	外雜	皿状	人瓦	土師器、須恵器	本跡→SB14
213	N9a	N-47°-E	楕円形	0.62×0.52	16	外雜	皿状	人瓦	須恵器	本跡→SB28

(5) 柱穴列

第9号柱穴列 (第170図 PL24)

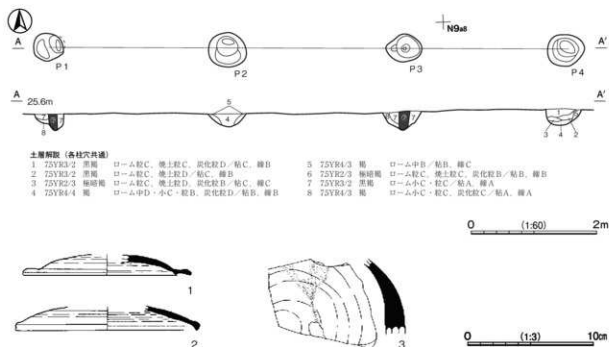
位置 調査区南部のN9a7区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と構造 東西方向8.20mの間に並ぶ柱穴4か所を確認した。配列方向はN-88°-Wである。柱間寸法は2.80m(9尺)と等間隔である。

柱穴 4か所。平面形は円形または楕円形で、長径47~60cm、短径45~55cmである。深さは20~40cmで、掘方の壁はほぼ直立もしくは外傾している。8層に分層でき、第1~5は柱抜き取り後の覆土。第6層は柱痕跡。第7・8層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片6点(坏2、甕4)、須恵器片6点(坏2、蓋3、横瓶1)、鉄滓3点(48.87g)が出土している。1はP1の掘方埋土中から、2はP2、3はP4の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第170図 第9号柱穴列・出土遺物実測図

第86表 第9号柱穴列出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	[13.2]	(1.6)	-	長石・石英・雲母	にじみ焼成	普通	天舟部回転ヘタ削り	P1埋土中	5%
2	須恵器	蓋	[14.4]	(1.9)	-	黒色粒子	灰白	普通	天舟部回転ヘタ削り	P2覆土中	5%
3	須恵器	横瓶	-	(7.0)	-	長石	灰	普通	ロクロナデ	P4覆土中	5%

第 10 号柱穴列 (第 171 図)

位置 調査区南部の M 9b2 区、標高 26 m ほどの平坦な台地上に位置している。

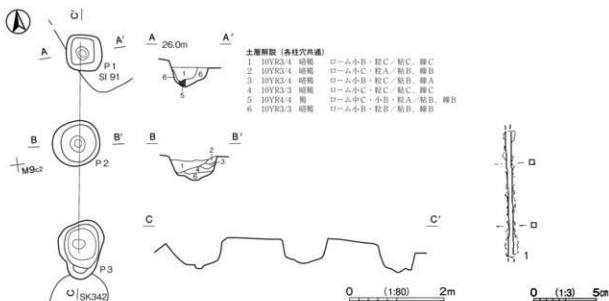
重複関係 第 91 号竪穴建物跡、第 342 号土坑を掘り込んでいる。

規模と構造 南北方向 4.20 m の間に並ぶ柱穴 3 か所を確認した。配列方向は N-9°-E である。柱間寸法は 2.20 m (7 尺) と等間隔である。

柱穴 3 か所。平面形は方形または楕円形で、長軸 (径) 76 ~ 128 cm、短軸 (径) 75 ~ 96 cm である。深さは 36 ~ 52 cm で、掘方の壁はほぼ直立もしくは外傾している。6 層に分層でき、第 1 ~ 4 は柱抜き取り後の覆土、第 5 層は柱痕跡、第 6 層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片 8 点 (甕)、金属製品 2 点 (釘、不明)、鉄滓 2 点 (56.62 g) が出土している。

所見 時期は、軸と出土土器から 8 世紀中葉と考えられる。



第 171 図 第 10 号柱穴列・出土遺物実測図

第 87 表 第 10 号柱穴列出土遺物一覧

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	不明金属品	110.0	0.4	0.4	0.59	鉄	断面正方形	P 2 覆土中	PL48

第 88 表 奈良時代柱穴列一覧

番号	位置	主軸方向	長さ(m)	柱間(m)	柱穴				主な出土遺物	備考	
					柱穴数	平面形	長径(cm)	短径(cm)			深さ(cm)
9	N 9a7	N-88°-W	8.20	2.80-2.80	4	円形・楕円形	47-60	45-55	20-40	土師器・須恵器	
10	M 9b2	N-9°-W	4.24	2.00-2.20	3	方形・楕円形	76-128	75-96	36-52	土師器・金属製品	SB9L, SK342 → 本誌

(6) 溝跡

第5号溝跡 (第172図 PL24)

位置 調査区中央部のL8j0～N8d0区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

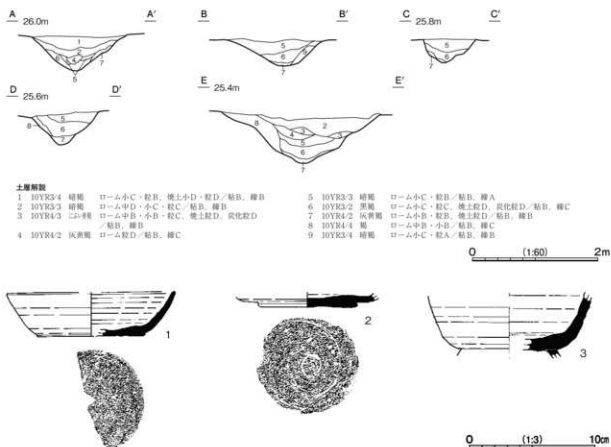
重複関係 第11・12・82号竪穴建物跡、第362号土坑を掘り込み、第66号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 L8j0区から南方向(N-173'-W)へ延び、N8d0区まで至っている。確認できた長さは55.66mで、上幅76～188cm、下幅9～22cm、深さ36～80cmである。断面形はV字状を呈している。

覆土 9層に分層できる。ロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片66点(坏7, 甕59)、須志器片16点(坏5, 鉢1, 瓶1, 甕9)が出土している。1～3はいずれも覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第172図 第5号溝跡・出土遺物実測図

第89表 第5号溝跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須志器	坏	[3.2]	3.5	[8.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子	に灰・黄褐色	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転へつ割り後多方向のナデ	覆土中	30% PL42
2	須志器	坏	-	(1.2)	7.8	長石・石英	に灰・黄褐色	普通	底部回転へつ切り後多方向のナデ	覆土中	20%
3	須志器	長頸瓶	-	(5.2)	-	長石・石英・赤色粒子	灰青褐色	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転へつ割り後両面輪付	覆土中	10%

5 平安時代の遺構と遺物

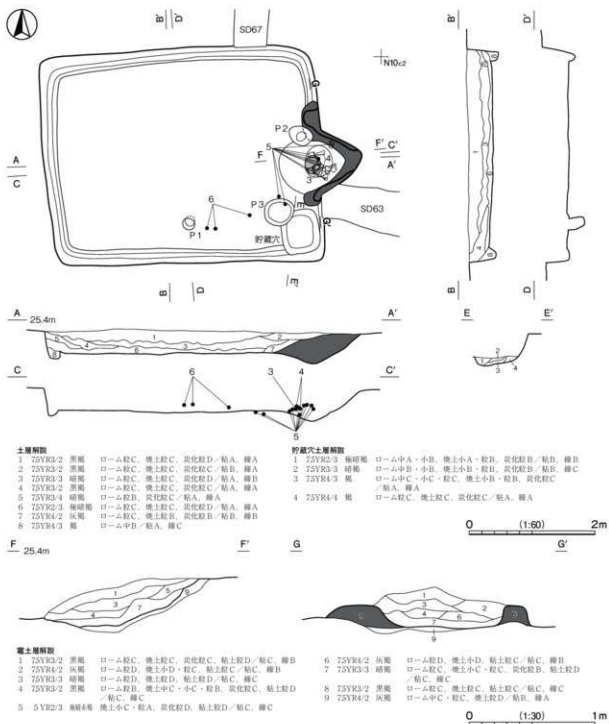
当該時代の遺構は、竪穴建物跡4棟を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

竪穴建物跡

第24号竪穴建物跡（第173～175図 PL24）

位置 調査区南部のN10c1区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第63・67号溝に掘り込まれている。



第173図 第24号竪穴建物跡実測図

規模と形状 長軸4.40 m、短軸3.40 mの長方形で、主軸方向はN-85°-Eである。壁高は32 cm～40 cmで、直立している。

床 平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。壁溝が全周している。

竈 東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで132 cmで、燃焼部の幅は75 cmである。竈は焚口部から煙道部にかけて浅く掘りくぼめ、第9層を埋土して整地している。袖部は地山の上に粘土粒子を含む第8層を積み上げて構築されている。火床部は床面よりやや下がっており、火床面は第9層上面で火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に67 cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第6・7層は、焼土粒子や粘土粒子などを含む天井部の崩落土である。

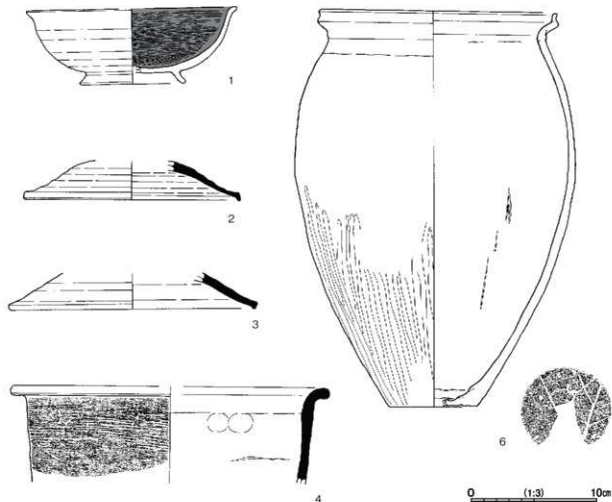
ピット 3か所。P1～P3は深さ10～28 cmで、いずれも性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長軸70 cm、短軸60 cmの長方形で、深さは15 cmである。底面はやや凹凸があり、壁は外傾している。

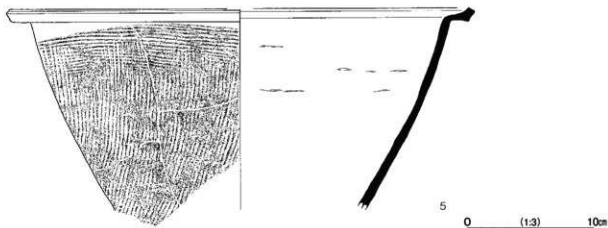
覆土 8層に分层できる。不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片79点(坏10、高台付坏1、甕68)、須恵器片58点(坏8、高台付坏2、蓋8、鉢2、甕38)、石器2点(砥石・剥片)、金属製品1点(不明)、鉄滓7点(137.19 g)が出土している。3～6はいずれも覆土下層または中層から出土しており、廃絶に際して投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第174図 第24号竈穴建物跡出土遺物実測図(1)



第175図 第24号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第90表 第24号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高付杯	[166]	60	[82]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ロタロナデ 内面へラ磨き 黒色瓦瑠 底部回転へラ磨き 接高直胎付	覆土中	40% 外壁一部埋没
2	須恵器	蓋	[172]	[11]	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転へラ磨り	覆土中	20%
3	須恵器	蓋	[195]	[29]	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰	普通	天井部回転へラ磨り	覆土下層	30% 新直壁
4	須恵器	鉢	[250]	[77]	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部内面横位平行叩き 内面ナデ 内部磨ナデ 輪積み肌	覆土下層	10% 新直壁
5	須恵器	鉢	[366]	[160]	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部内面横位平行叩き 内面ナデ 輪積み肌	覆土下層	20% PL43 新直壁
6	土師器	甕	185	31.5	7.0	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部内面ナデ 中径から下径面 底かつ磨き 丸底のナデ 輪積み肌 底注木葉	覆土下層一 中層	70% PL43

第47号竪穴建物跡 (第176～178図 PL24・25)

位置 調査区南部のN9d6区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第76号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.29m、短軸4.40mの長方形で、主軸方向はN-94°-Eである。壁高は38cmで、直立している。

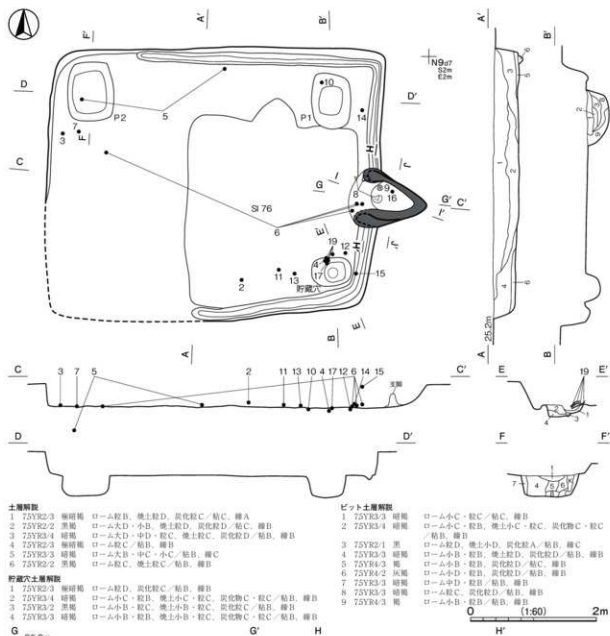
床 平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。壁溝は東壁と北壁、南壁の一部に回っている。

竈 東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで125cmで、燃焼部の幅は45cmである。袖部は地山の上にロームブロックや粘土粒子を含む第12～15層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は赤変硬化していない。煙道部は壁外に76cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第4・6～8・11層は、焼土ブロックや粘土粒子などを含む天井部の崩落土である。竈中央部には熱を受けた痕跡のみられる雲母片岩(27cm×19cm×5.65cm 4.36kg、16cm×15cm×13cm 5.09kg)が2点確認でき、横並び二つ掛け竈の支脚として使用されたと考えられる。

ピット 2か所。P1・P2はそれぞれ深さが35cm・30cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長軸65cm、短軸45cmの隅丸長方形で、深さは20cmである。底面はやや凹凸があり、壁は外傾している。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子などが含まれていることから、埋め戻されている。



土層解説

- 1 25YR2-3 無明礫 ローム粒B、焼土粒D、炭化粒C/粘C、礫A
- 2 25YR2-2 赤礫 ローム大D・小B、焼土粒D、炭化粒D、粘C、礫B
- 3 25YR3-4 暗礫 ローム大D・中D・粒C、焼土粒C、炭化粒D/粘B、礫B
- 4 25YR2-3 無明礫 ローム粒C/粘B、礫B
- 5 25YR3-3 暗礫 ローム大B・中C・小C、粘B、礫C
- 6 25YR2-2 赤礫 ローム粒C、焼土粒C、粘B、礫B

貯蔵穴土層解説

- 1 25YR2-3 無明礫 ローム粒D、炭化粒C/粘B、礫B
- 2 25YR3-4 暗礫 ローム小C・粒B、焼土小C・粒C、炭化物C・粒C/粘B、礫B
- 3 25YR3-2 赤礫 ローム小B・粒C、焼土小B・粒C、炭化粒C/粘B、礫B
- 4 25YR3-3 暗礫 ローム小B・粒B、焼土小B・粒C、炭化物C・粒C/粘B、礫B

ビツ土層解説

- 1 25YR3-3 暗礫 ローム小C・粒C/粘C、礫B
- 2 25YR3-4 暗礫 ローム小C・粒B、焼土小C・粒C、炭化物C・粒C/粘B、礫B
- 3 25YR2-1 赤礫 ローム粒D、焼土小D、炭化粒A/粘B、礫C
- 4 25YR3-3 暗礫 ローム小B・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、礫B
- 5 25YR4-3 暗礫 ローム小B・粒B、炭化粒D/粘C、礫B
- 6 25YR4-2 赤礫 ローム小D・粒B、炭化粒D/粘C、礫B
- 7 25YR3-3 暗礫 ローム中D・粘B、礫B
- 8 25YR3-3 暗礫 ローム粒C、炭化粒D/粘B、礫B
- 9 25YR4-3 暗礫 ローム小B・粒B/粘B、礫B

G 25.2m



墓土層解説

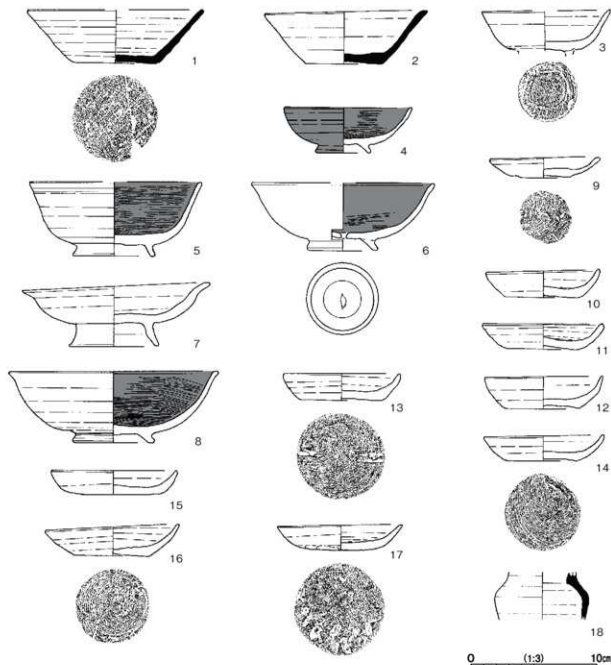
- 1 25YR2-3 無明礫 ローム粒C、焼土粒C/粘C、礫B
- 2 25YR3-2 赤礫 ローム粒D、焼土粒C、炭化粒C/粘C、礫B
- 3 25YR2-3 無明礫 ローム粒B、焼土粒B、炭化粒D/粘A、礫A
- 4 25YR3-2 赤礫 ローム粒C、焼土小C・粒B、炭化粒C/粘C、礫B
- 5 25YR3-2 赤礫 ローム粒C、焼土小C・粒B、炭化粒C/粘B、礫B
- 6 25YR2-3 無明礫 ローム粒C、焼土小B・粒B、炭化物C・粒C、粘土粒D/粘B、礫B
- 7 25YR3-3 暗礫 ローム粒B、焼土小B・粒B、炭化物C・粒C、粘土粒D/粘B、礫B
- 8 25YR3-4 暗礫 ローム粒C、焼土小C・粒C、炭化粒C、粘土粒D/粘B、礫B

- 9 25YR3-3 暗礫 ローム粒B、焼土粒C/粘B、礫B
- 10 25YR3-4 暗礫 ローム粒C、焼土粒B、炭化粒D/粘B、礫B
- 11 25YR2-2 赤礫 ローム粒C、焼土粒C、炭化粒C、粘土粒C/粘A、礫B
- 12 25YR3-8 赤礫 ローム大A・粒C、焼土粒B、炭化粒C、粘土粒C/粘A、礫A
- 13 25YR3-3 暗礫 ローム粒C、焼土粒C、炭化物C・粒C、粘土粒C/粘B、礫B
- 14 25YR3-3 暗礫 ローム粒C、焼土小C・粒B、炭化物C・粒C、粘土粒C/粘B、礫B
- 15 25YR4-6 礫 ローム大A・粒C、焼土粒C、炭化粒C、粘土粒C/粘A、礫A

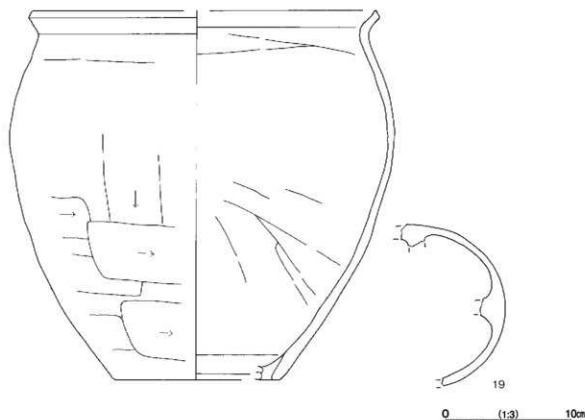
第176図 第47号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片 167 点 (坏 22, 高台付坏 12, 小皿 13, 鉢 2, 甕 115, 瓶 3), 須恵器片 36 点 (坏 8, 高台付坏 2, 蓋 15, 鉢 1, 壺 1, 甕 9), 石製品 3 点 (支脚), 金属製品 1 点 (刀子), 鉄滓 2 点 (672.03 g) が出土している。3～5・7・10・12・13・16・17 はいずれも床面から出土しており, 廃絶に際して遺棄されたものと考えられる。2・6・8・9・11・14 は覆土下層から, 15 は覆土上層から出土しており, 埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 10 世紀後半と考えられる。



第 177 図 第 47 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第 178 図 第 47 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第 91 表 第 47 号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種別	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
1	甕蓋部	環	[132]	4.3	6.4	長石・石英・雲母・赤色砂子	明赤褐色	普通	体部外・内面ロクロナデ	底部一方向のナデ	覆土中	30% 断面劣
2	甕蓋部	環	12.8	4.3	6.0	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい褐色	普通	体部外・内面ロクロナデ	底部一方向のナデ	覆土下層	断面劣 断面欠損 断面劣
3	土師部	高台付杯	[30.1]	3.3	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	床面	50% 内面一部保存者
4	土師部	高台付杯	10.0	3.6	4.3	長石・石英・雲母・赤色砂子	黒	普通	体部外面ロクロナデ	内面ヘラ磨き 全面黒色処理	床面	60% PL43
5	土師部	高台付杯	[13.6]	6.9	6.1	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	体部外面可化著しい	内面ヘラ磨き 黒色処理 底部穿孔	床面	60%
6	土師部	高台付杯	[14.4]	5.4	5.4	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	体部下端回転ヘラ削り	床面	60% PL43
7	土師部	高台付杯	14.8	5.1	7.0	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	内面ヘラ磨き	床面	90% PL43 断面一部保存者
8	土師部	高台付杯	16.4	5.7	6.3	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい橙	普通	体部外面ロクロナデ	内面ヘラ磨き 黒色処理	覆土下層	80% PL43
9	土師部	小皿	8.6	1.7	4.1	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい褐色	普通	体部外・内面ロクロナデ	底部回転糸切り	覆土下層	100% PL43
10	土師部	小皿	8.9	2.3	6.0	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	底部回転糸切り	床面	100% PL43
11	土師部	小皿	9.4	2.1	5.7	長石・石英・雲母・赤色砂子	浅黄褐色	普通	体部外・内面ロクロナデ	底部回転糸切り	覆土下層	95% PL43
12	土師部	小皿	9.3	2.6	5.8	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	底部回転糸切り	床面	100% PL43
13	土師部	小皿	9.2	2.1	6.5	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	底部回転糸切り	床面	100% PL43
14	土師部	小皿	9.4	2.1	5.8	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	底部回転糸切り	覆土下層	100% PL43
15	土師部	小皿	10.0	2.0	6.1	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	底部回転糸切り	覆土上層	80% PL43
16	土師部	小皿	10.6	2.6	6.0	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい褐色	普通	体部外・内面ロクロナデ	底部回転糸切り	床面	80% PL43
17	土師部	小皿	10.0	2.1	7.0	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	底部回転糸切り後ヘラ削り	床面	90% PL43
18	甕蓋部	壺	-	(3.8)	-	長石	灰白	普通	体部外・内面ロクロナデ		覆土中	5% PL44
19	土師部	瓶	[27.3]	29.4	[132]	長石・石英・雲母・赤色砂子	橙	普通	口縁部外・内面積子ナデ	体部外面回転削り 下部積子の削り 内面ナデ 底部穿孔	貯蔵穴上層	50% PL44

第76号竪穴建物跡 (第179図 PL25)

位置 調査区南部のN9e6区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第47号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 遺構上部が掘り込まれているため、確認できた規模は、長軸2.95m、短軸2.69mの方形で、主軸方向はN-4°-Eである。壁高は10cmで、ほぼ直立している。

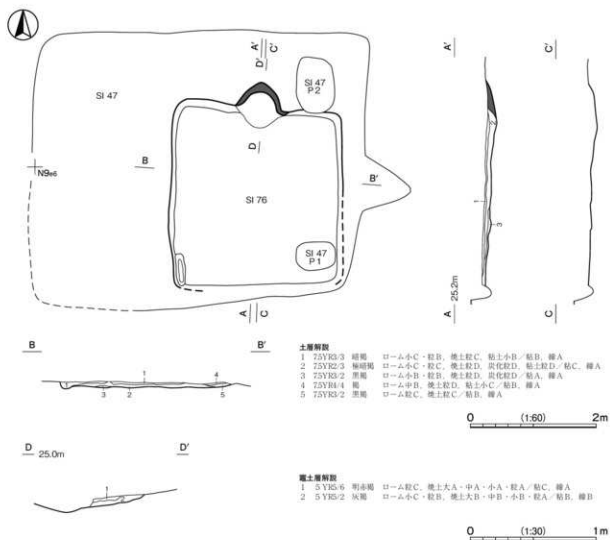
床 平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。西壁下の一部で獣溝を確認した。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで76cmで、燃焼部の幅は50cmである。火床部は床面よりやや下がっており、火床面は確認できなかった。煙道部は壁外に41cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子などが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片14点(坏2、甕12)、須恵器片6点(坏1、盤1、長頸壺1、瓶類1、甕2)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器や規模から、10世紀前葉と考えられる。



第179図 第76号竪穴建物跡実測図

第95号竪穴建物跡 (第180・181図 PL25)

位置 調査区南部のN10g5区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第68号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南北軸240m、東西軸1.60mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-89°-Eと推定できる。壁高は12cmで、直立している。

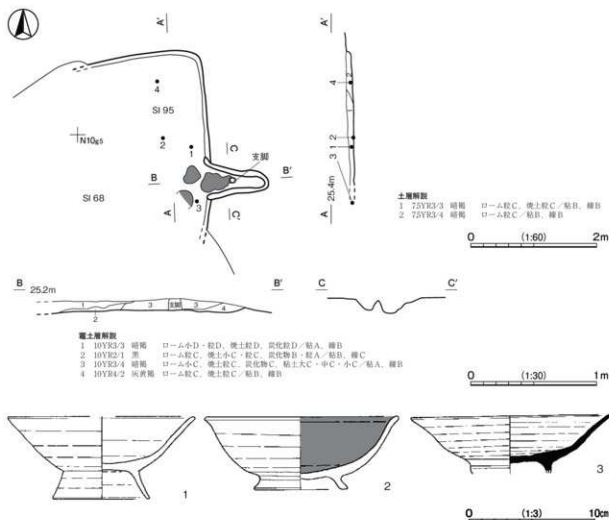
床 確認できた範囲では平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。

竈 東壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで135cmで、燃焼部の幅は40cmである。火床部は床面よりやや下がっており、火床部は床面とはほぼ同じ高さを使用している。火床面は、赤変硬化している。煙道部は壁外に92cmほど掘り込まれ、火床部からは水平に延び、奥壁で緩やかに立ち上がっている。竈中央部には支脚の一部が据えられた状態で確認できた。

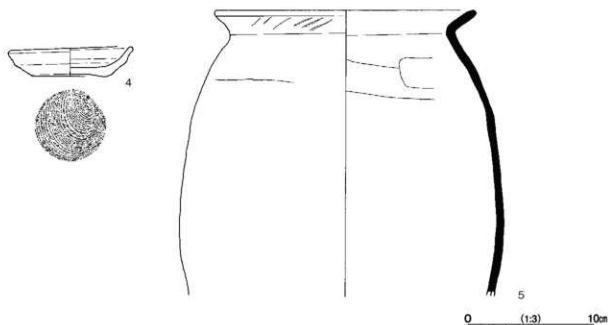
覆土 2層に分層できる。ローム粒子や焼土粒子などが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片8点(坏4、高台付坏2、小皿1、甕1)、須恵器片21点(高台付坏2、甕19)が出土している。1~4はいずれも床面から出土しており、腐蝕に際して遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第180図 第95号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第181図 第95号竪穴建物跡出土遺物実測図

第92表 第95号竪穴建物跡出土遺物一覧

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高付杯	[148]	65	[75]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	床面	60% PL44
2	土師器	高付杯	152	58	73	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面へう磨き摩滅 黒色地層	床面	60% PL44
3	須恵器	高付杯	158	(46)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部刷毛へう磨り長石を削付	床面	70% PL44 器首直
4	土師器	小皿	9.5	24	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	床面	100% PL44
5	須恵器	甕	204	(228)	-	長石・石英・雲母	にぶ・黄褐色	普通	口縁部外・内面襷ナデ 体部外面劣化により不明 内面襷ナデ	甕土中	3% 器首直

第93表 平安時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				積土	主な出土遺物	時期	備考	
								土間	土間	土間	土間					
24	N10c1	N-85°-E	長方形	4.40×3.40	32~40	平田	全周	-	-	3	東障	1	人為	土師器, 須恵器	9世紀後半	本跡→SD63・67
47	N9d6	N-94°-E	長方形	5.29×4.40	38	平田	一部	-	-	2	東障	1	人為	土師器, 須恵器, 金属製品	10世紀後半	SI76→本跡
76	N9e6	N-4°-E	[方形]	(2.95×2.69)	(10)	平田	一部	-	-	-	北障	-	人為	土師器, 須恵器	10世紀前半	本跡→SI47
95	N10d6	N-80°-E	[方形]	(2.40×1.60)	12	平田	-	-	-	-	東障	-	人為	土師器, 須恵器	10世紀後半	SI68→本跡

6 中・近世の遺構と遺物

当時代の遺構は、掘立柱建物跡4棟、土坑8基、溝跡3条、道路跡2条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

当遺跡は縄文時代から近世までの遺構が複合して同一面で確認されており、特に掘立柱建物跡の遺物は少量で、時期判断が困難であるため、位置や主軸方向、柱掘方の形状、出土遺物などから時期判断を行った。

第15号掘立柱建物跡 (第182図 PL25)

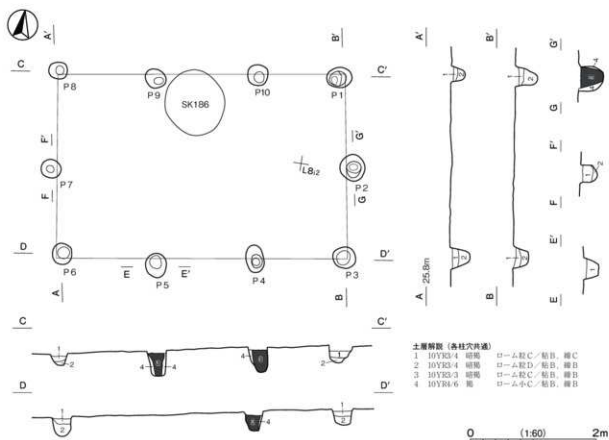
位置 調査区中央部のL 8i1区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 本跡の範囲内に第186号土坑が位置しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-80°-Eの東西棟である。規模は桁行4.40m、梁行2.92mで、面積は12.85㎡である。柱間寸法は、桁行が1.50m(5尺)、梁行が1.40m(5尺)で、柱筋は概ね揃っている。

柱穴 10か所。掘方の平面形は円形または楕円形で、長径30~45cm、短径25~40cmである。深さは20~40cmで、掘方の壁はほぼ直立している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土である。第3層は柱痕跡で、第4層は掘方への埋土と考えられる。

遺物出土状況 土師器片2点(甕)、陶器片1点(碗)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。所見 陶器片が出土していることや掘方の規模などから、中・近世に属すると考えられる。



第182図 第15号掘立柱建物跡実測図

第30号掘立柱建物跡 (第183図 PL26)

位置 調査区南部のN 9e4区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

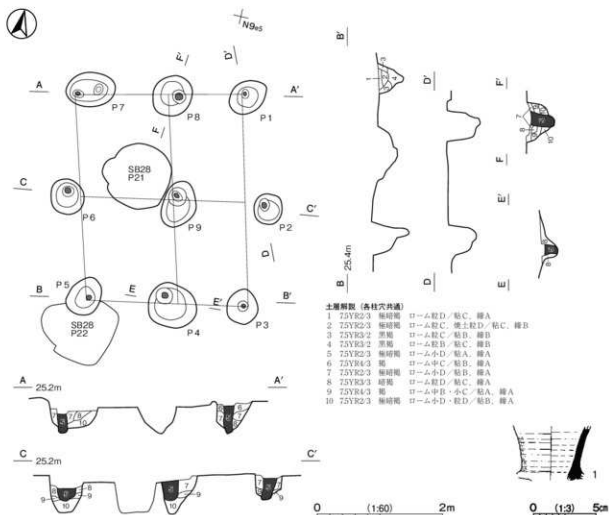
重複関係 第28号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の総柱建物跡で、桁行方向がN-12°-Wの南北棟である。規模は桁行3.36m、梁行2.52mで、面積は8.47㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から1.70m(6尺)、梁行が1.20m(4尺)であり、P2とP6がややはずれている。全てのピットの底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 9か所。掘方の平面形は円形または楕円形で、長径50～80cm、短径45～70cm、深さは28～60cmである。第1～4層は柱の抜き取り痕、第5層は柱痕跡、第6～10層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

遺物出土状況 土師器片7点（坏4、甕3）、須恵器片1点（長頸瓶）が出土している。1はP7の掘方埋土中から出土し、混入と考えられる。

所見 正方形に近く、総柱の倉庫と考えられる。時期は、掘方の規模や主軸方向から、中・近世に属すると考えられる。



- 土層時期（各柱穴内通）**
- 1 75YR2-3 新埴陶 ローム粒D、粒C、線A
 - 2 75YR2-3 新埴陶 ローム粒C、焼土粒D、粒C、線B
 - 3 75YR2-3 新埴陶 ローム粒C、粒B、線B
 - 4 75YR2-3 新埴陶 ローム粒B、粒C、線B
 - 5 75YR2-3 新埴陶 ローム小D、粒A、線A
 - 6 75YR4-3 肥 ローム中C、粒B、線A
 - 7 75YR2-3 新埴陶 ローム小D、粒B、線A
 - 8 75YR2-3 新埴陶 ローム粒D、粒C、線A
 - 9 75YR4-3 肥 ローム中B・小C、粒B、線A
 - 10 75YR2-3 新埴陶 ローム小D、粒D、粒B、線A

第183図 第30号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第94表 第30号掘立柱建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	長頸瓶	-	(43)	-	長石	灰白	普通	体部ロクロナデ 内面自然軸付着	P7埋土中	5%

第31号掘立柱建物跡（第184図 PL26）

位置 調査区南部のM87区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。

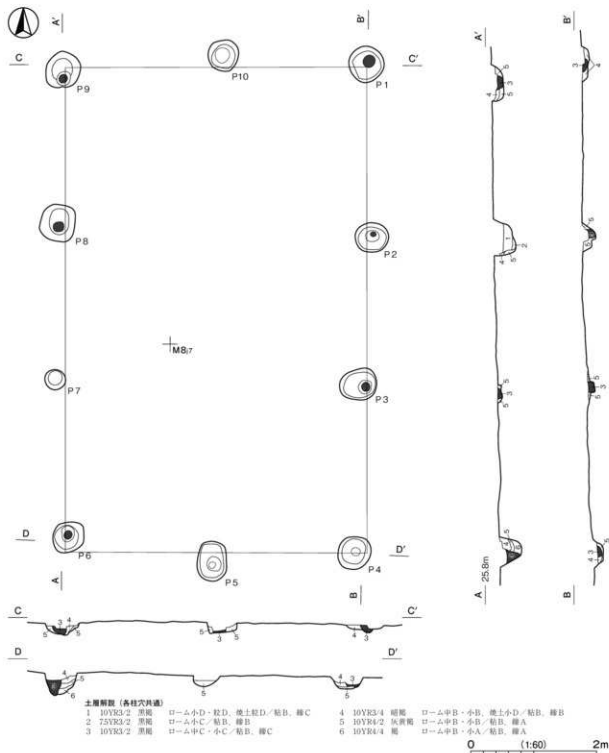
規模と構造 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-2°-Eの南北棟である。規模は桁行7.76m、梁行4.85mで、面積は37.64㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.70m（9尺）、2.40m（8尺）、2.70m（9尺）で、梁行は2.30m（8尺）、2.50m（8尺）で、概ね揃っている。P1～P3・P6・P8・

P 9の底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 10か所。掘方の平面形は円形または楕円形で、長径35～65cm、短径30～60cmである。深さは8～36cmで、掘方の断面は直立または外傾している。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3層は柱痕跡、第4～6層は掘方への埋土で、版築状を呈している。

遺物出土状況 土師器片2点（埴、甕）が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

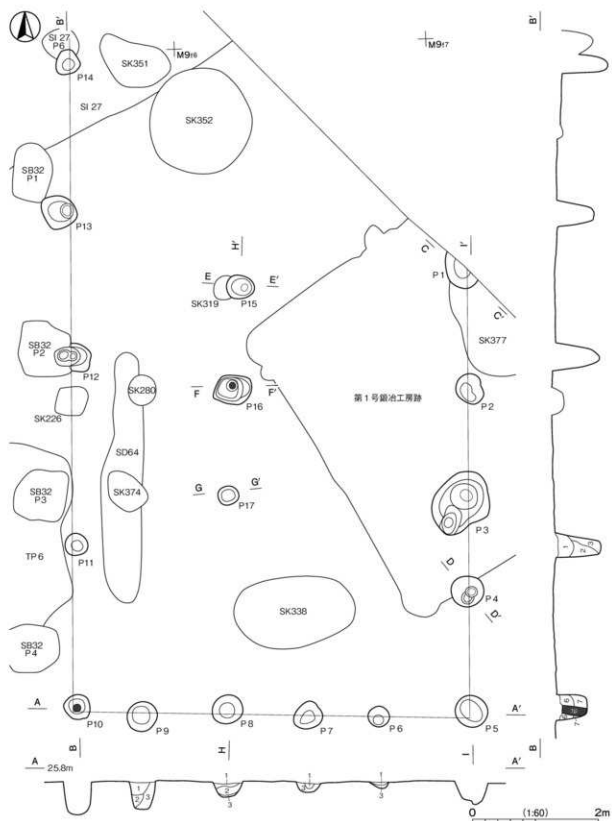
所見 時期は、掘方の規模や主軸方向から、中・近世に属すると考えられる。



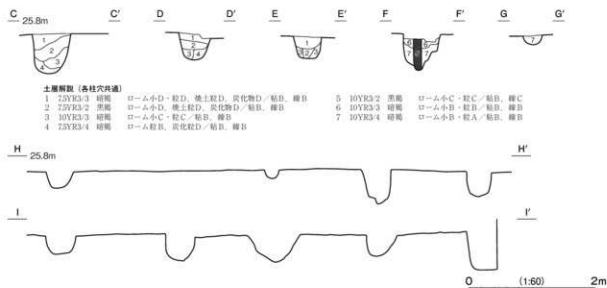
第184図 第31号掘立柱建物跡実測図

第 35 号掘立柱建物跡 (第 185・186 図)

位置 調査区南部のM9区6区、標高26mほどの平坦な台地上に位置している。



第 185 図 第 35 号掘立柱建物跡実測図 (1)



第186図 第35号掘立柱建物跡実測図(2)

重複関係 第27号竪穴建物跡、第32号掘立柱建物跡、第1号鍛冶工房跡、第319・377号土坑を掘り込んでいる。また、本跡の範囲内に第226・280・338・351・352・374号土坑、第64号溝跡が位置しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 北部が調査区域外に延びているため、全ての柱穴を確認することができなかった。桁行は4間以上で、梁行は5間の桁行方向が $N-2^{\circ}-E$ の南北棟と推定できる。確認できた規模は桁行10.16m、梁行6.28mである。P8から北に向かって間仕切柱穴3カ所が並んで配置されている。柱間寸法は、西平側が南妻から2.60m(9尺)、3.00m(10尺)、2.30m(8尺)、2.40m(8尺)、東平側が1.90m(6尺)、1.40m(5尺)、1.90m(6尺)、1.90m(6尺)で、柱筋はほぼ揃っている。南妻側が東平から1.45m(5尺)、1.10m(4尺)、1.30m(4尺)、1.40m(5尺)、1.10m(4尺)である。間仕切柱穴は南妻より3.50m(12尺)、1.70m(6尺)、1.70m(6尺)である。P10、P16の底面で、柱のあたりを確認した。

柱穴 17カ所。掘方の平面形は円形または楕円形で、長径33～108cm、短径30～90cm、深さは10～85cmである。第1～4層は柱抜き取り後の覆土、第5層は柱痕跡、第6・7層は掘方への埋土である。

遺物出土状況 土師器片2点(鉢、甕)、土製品1点(羽口)、鉄滓2点(61.38g)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、掘方の規模や主軸方向から、中・近世に属すると考えられる。

第95表 中・近世の掘立柱建物跡一覧

番号	位置	桁行方向	柱間数 桁×梁間 (間)	規模 面積 (m ²)	面積	柱間寸法		柱穴			主な出土遺物	時期	備考	
						桁間 (m)	梁間 (m)	構造	柱穴数	平面形				深さ (cm)
15	L 8.11	N-80°-E	3×2	4.40×2.92	12.85	1.20-1.40	1.36-1.36	竪柱	10	円形・楕円形	20-40	土師器	中・近世	SK186重複
30	N 9.64	N-12°-W	2×2	3.36×2.52	8.47	1.52-1.81	1.12-1.40	竪柱	9	円形・楕円形	28-60	土師器、須恵器	中・近世	SK28→本跡
31	M 8.17	N-2°-E	3×2	7.76×4.85	37.64	2.36-2.22	2.28-2.52	竪柱	10	円形・楕円形	8-36	土師器	中・近世	
35	M 9.65	N-2°-E	(4)×5	(10.16)×6.28	(63.80)	1.52-2.52	1.08-1.48	竪柱	17	円形・楕円形	10-85	土師器	中・近世	SK 281 掘立柱跡 SK28 土師器 SK29 須恵器 土師器

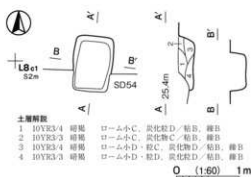
(2) 土坑

中・近世の溝跡周辺で、形状が類似する土坑を8基を確認した。調査時に骨粉を確認していることから、墓坑の可能性が考えられる。ここではその特徴的なもの3基を取り上げて記述し、その他は図と一覧表で示すこととする。

(7) 特徴的な墓坑と考えられる土坑

第151号土坑 (第187図 PL27)

位置 調査区中央部のL8c1区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。



第187図 第151号土坑実測図

重複関係 第54号溝に掘り込まれている。

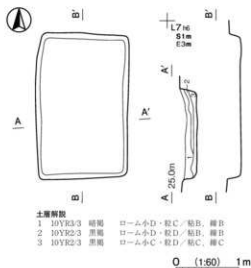
規模と形状 平面形は長方形で、主軸方向はN-6°-Eである。規模は、長軸0.88m、短軸0.64mで、確認面からの深さは24cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

覆土 4層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 底面付近から、骨粉が出土している。

所見 時期は、出土土器がないため明確ではないが、形状や第54号溝跡との重複関係から近世と考えられる。

第160号土坑 (第188図)



第188図 第160号土坑実測図

位置 調査区中央部のL7h6区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 平面形は長方形で、主軸方向はN-0°である。規模は、長軸2.32m、短軸1.48mで、確認面からの深さは20cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

覆土 3層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 底面付近から、骨粉が出土している。

所見 時期は、出土土器がないため明確ではないが、形状から近世と考えられる。

第178号土坑 (第189図 PL27)

位置 調査区中央部のL7g7区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

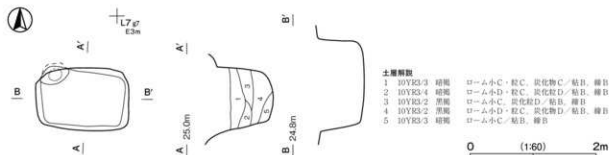
重複関係 第55号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 平面形は長方形で、主軸方向はN-90°である。規模は、長軸1.47m、短軸0.98mで、確認面からの深さは76cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

覆土 5層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

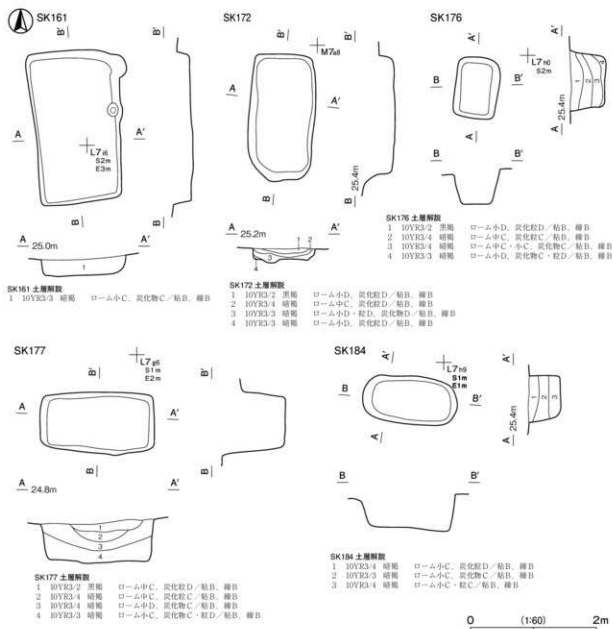
遺物出土状況 底面付近から、骨粉が出土している。

所見 時期は、出土土器がないため明確ではないが、形状から近世と考えられる。



第189図 第178号土坑実測図

(イ) その他の墓坑と考えられる土坑 (第190図 PL27)



第190図 中・近世のその他の土坑実測図

第96表 中・近世の土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形状	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
151	L 8c1	N-6°-E	長方形	0.88×0.64	24	ほぼ直立	平坦	人為	骨粉	本跡→SD54
160	L 7b6	N-0°	長方形	2.32×1.48	20	ほぼ直立	平坦	人為	骨粉	
161	L 7i6	N-3°-W	長方形	2.44×1.44	28	直立	手掘	人為	骨粉	
172	M 7a7	N-0°	長方形	2.12×1.06	44	直立	平坦	人為	骨粉	
176	L 7i9	N-6°-E	長方形	0.96×0.68	56	直立	平坦	人為	骨粉	
177	L 7g6	N-90°	長方形	1.80×0.98	75	直立	平坦	人為	骨粉	SD65→本跡
178	L 7g7	N-90°	長方形	1.47×0.98	76	ほぼ直立	平坦	人為	骨粉	SD65→本跡
184	L 7i9	N-85°-W	楕円形	1.52×1.16	56	ほぼ直立	平坦	人為	骨粉	

(3) 溝跡

当遺跡の北西部には、当財団第443集に記載した、中世の屋敷に伴う区画溝や、江戸時代の性格不明の溝が確認されており、今回もそれらに関連すると思われる溝跡を確認した。

第54号溝跡 (第191図 PL26)

位置 調査区中央部のL7c0区～L8c1区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

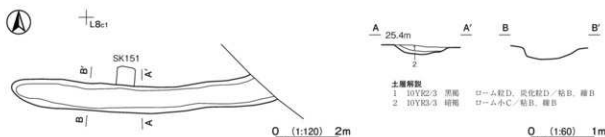
重複関係 第151号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 L7c0区から東(N-91°-W)へ直線的にL8c2区まで伸び、調査区域外へ至っている。確認できた長さは8.4mで、上幅78cm～100cm、下幅44cm～64cm、深さ8～18cmである。断面形状は皿状である。

覆土 2層に分層できる。レンス状に堆積していることから、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片2点(坏、甕)、須恵器片1点(甕)、土師質土器片1点(焙烙)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、重複関係や出土土器から、江戸時代と考えられる。



第191図 第54号溝跡実測図

第55号溝跡 (第192図 PL26)

位置 調査区中央部のL7g4区～M7b8区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第56号溝跡を掘り込み、第177・178号土坑に掘り込まれている。

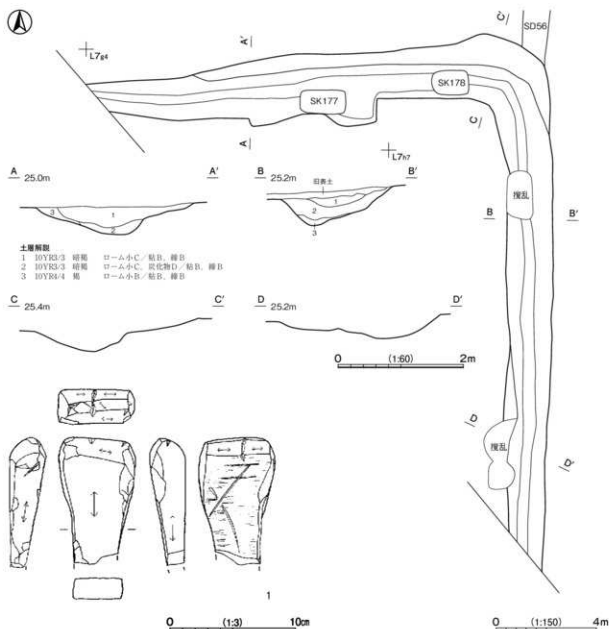
規模と形状 M7b8から北方向(N-2°-E)へ直線的に延び、L7g8から西方向(N-93°-W)へL字状に屈曲し、直線的にL7g4まで延びている。溝の先はいずれも調査区域外へ至っている。確認できた

長さは29mで、上幅72cm～268cm、下幅24cm～170cm、深さ10～46cmである。断面形はV字状である。

覆土 3層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片7点(鉢1, 甕6)、須恵器片2点(甕)、陶器片3点(碗)、磁器片3点(碗)、石器1点(砥石)、鉄滓1点(22.37g)、瓦片3点(椀瓦)が出土している。1は覆土中から出土している。

所見 時期は、幅や深さの規模、断面の形状が当財団第443集で報告した溝跡と類似していることから、16世紀代に造作され、19世紀代に埋め戻された可能性が高い。



第192図 第55号溝跡・出土遺物実測図

第97表 第55号溝跡出土遺物一覧

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	砥石	(10.1)	6.1	2.8	(212.3)	砂岩	砥面5面	覆土中	PL47

第56号溝跡 (第193図 PL26)

位置 調査区中央部のL7c8区-L7g8区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

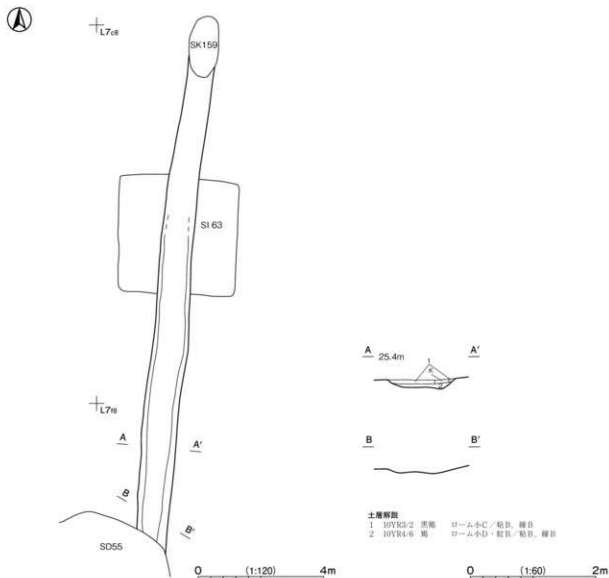
重複関係 第63号竪穴建物跡を掘り込み、第159号土坑、第55号溝に掘り込まれている。

規模と形状 L7c8区から南(N-175°-W)へ直線的にL7g8区まで伸びている。確認できた長さは15mで、上幅97cm~113cm、下幅44cm~84cm、深さ7~12cmである。断面形は皿状である。

覆土 2層に分層できる。いずれの層にもロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

遺物出土状況 土師器片4点(坏1、甕3)、須恵器片3点(坏1、甕2)、陶器片2点(碗)、磁器片2点(碗)、瓦片5点(椀瓦)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、重複関係から第55号溝跡同様16世紀代に造作されて、19世紀代までに埋め戻されたものと考えられる。



第193図 第56号溝跡実測図

第98表 中・近世の溝跡一覧

番号	位置	方向	平面形	規模			断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考	
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)						深さ(cm)
54	L7c0-L8c1	N-91°-W	直線状	8.4	78-100	44-64	8-18	溝状	硬質	自然	土師器、須恵器、土師質土器	SK151→本跡
55	M7b6-L7g5	N-2°-E N-93°-W	L字状	290	72-208	24-170	10-46	V字状	硬質	人為	須恵器、陶器、土師器	SK6→*SK7-SK17-18
56	L7c8-L7g8	N-175°-W	直線状	150	97-113	44-84	7-12	溝状	硬質	人為	土師器、須恵器、陶器、磁器	SK9→*SK10-SK19 SK25

(4) 道路跡

第3号道路跡 (第194図 PL27)

位置 調査区北部のK6h5-K8g4区、標高24~25mほどの平坦な台地上に位置している。

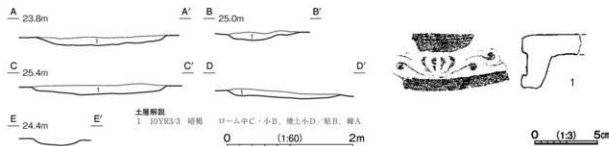
重複関係 第4号道路跡の上部に構築され、第380号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 K6h5区から南東方向(N-103°-E)へ直線状に延び、K7j4区付近で緩やかに曲がりながら北東方向(N-71°-E)のK8g4区へ曲線状に延びて調査区域外へ至っている。確認できた長さは77.5mで、上幅0.64~3.58m、下幅0.33~2.20m、深さ10~28cmである。断続的ではあるが、硬化面が確認できた。路面の幅は0.33~1.90mである。

覆土 単一層の路面で、よく踏み固められている。

遺物出土状況 土師器片3点(葉)、須恵器片2点(坏)、土師質土器片2点(擂鉢、甑)、陶器片7点(碗)、磁器片2点(碗)、瓦片1点(軒平瓦)が出土している。1は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物から18世紀後半から19世紀代と考えられる。



第194図 第3号道路跡・出土遺物実測図

第99表 第3号道路跡出土遺物一覧

番号	器種	全長	全幅	部位			軒平部			胎土・色調	文様・特徴	出土位置	備考		
				瓦内縁	文様区縁	珠縁	文様区縁	文様区縁	上縁					下縁	瓦厚
1	軒平瓦	(47)	(90)	-	-	-	(90)	1.7	1.0	0.9	2.3	長石・茶母 黄灰	御寺文(江戸式)模版 表裏面滑母	覆土中	PL48

第4号道路跡 (第195図 PL27)

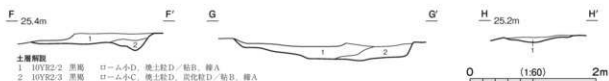
位置 調査区中央部のK8g4-K7j9区、標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第379号土坑に掘り込まれ、第3号道路が上部に構築されている。

規模と形状 K8g4区から南西方向(N-109°-W)へ直線状に延び、K7h9区付近で曲がり南方向(N-168°-W)のK7j9区へ曲線状に延びて調査区域外へ至っている。確認できた長さは26.0mで、上幅1.00~2.80m、下幅0.90~2.60m、深さ10~26cmである。直線的に硬化面が確認できた。路面の幅は0.90~2.60mである。

覆土 2層に分層できる。底面が硬化している。

所見 時期は、出土遺物はないが第3号道路跡と重複する部分が多く、18世紀から19世紀代と考えたい。既存の溝の底を削いたとみられ、調査区域内の溝につながっていた可能性が高い。



第195図 第4号道路跡実測図

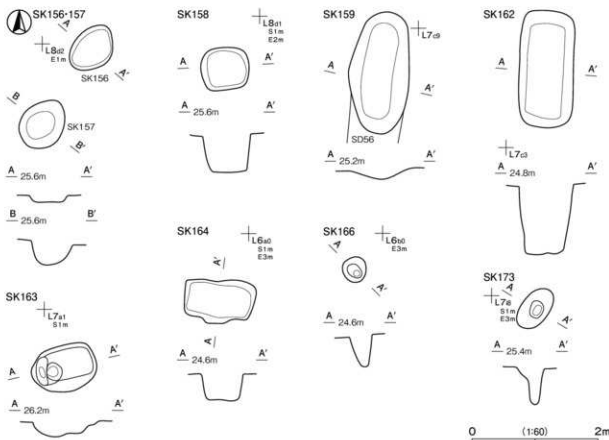
第100表 近世の道路跡一覧

番号	位置	方向	平面形	規模			断面	積層	覆土	主な出土遺物	備考	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)						深さ(cm)
3	K 6 55 - K 8 64	N - 30°E N - 71°E	直線状 曲線状	(77.5)	0.64 - 3.58	0.33 - 2.20	10 - 28	直状	緩斜	人為	陶器、磁器、瓦	SF 4 → 本跡 → SK 380
4	K 8 64 - K 7 19	N - 30°W N - 70°W	直線状	(26.0)	1.00 - 2.80	0.90 - 2.60	10 - 26	直状	外傾	人為		本跡 → SK 379、 382

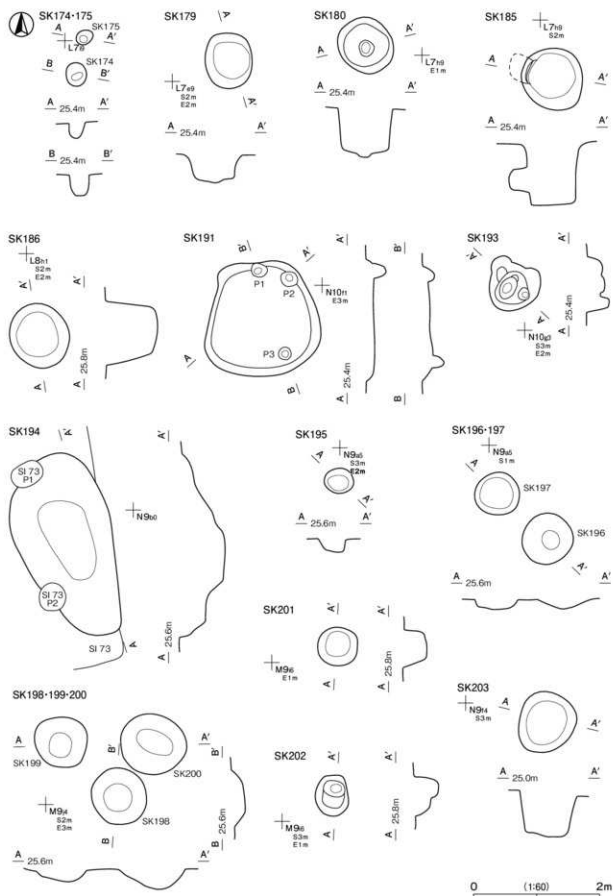
7 時期不明の遺構

時期が明確にできなかった土坑109基、溝跡9条の遺構について記述する。

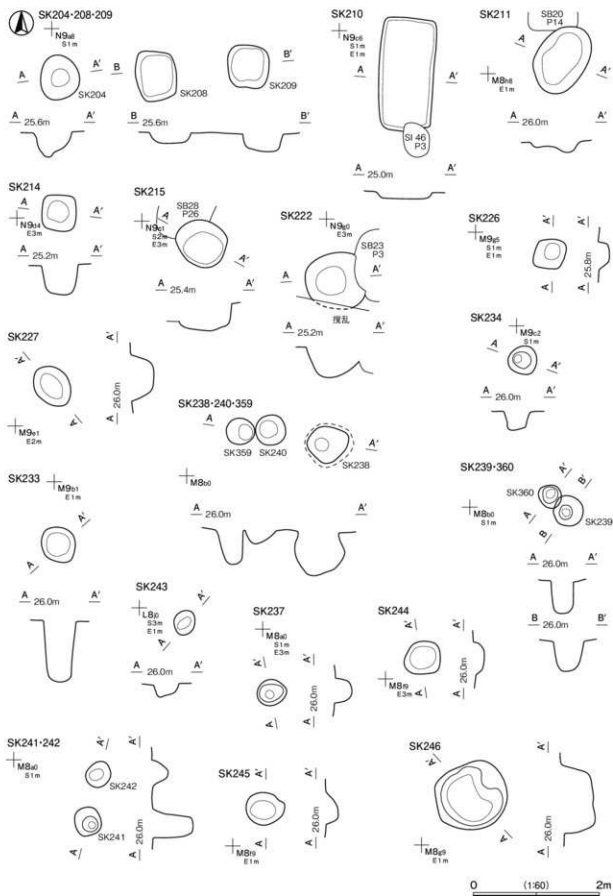
(1) 土坑 (第196～201図)



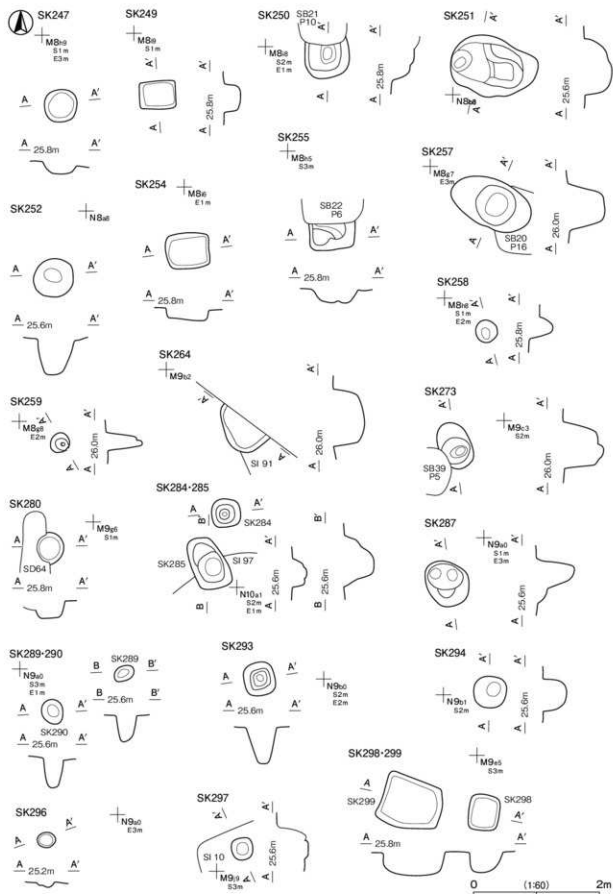
第196図 時期不明の土坑実測図(1)



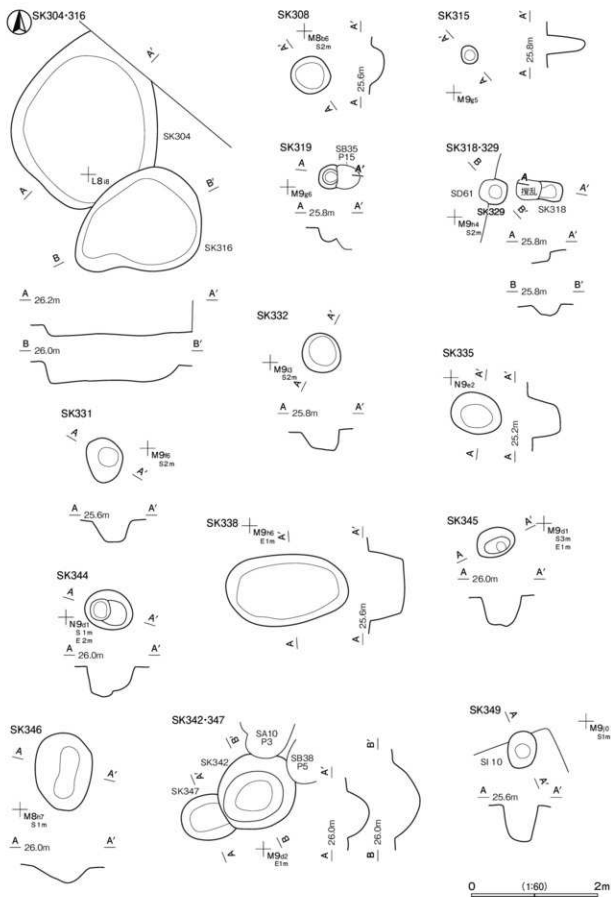
第197図 時期不明の土坑実測図(2)



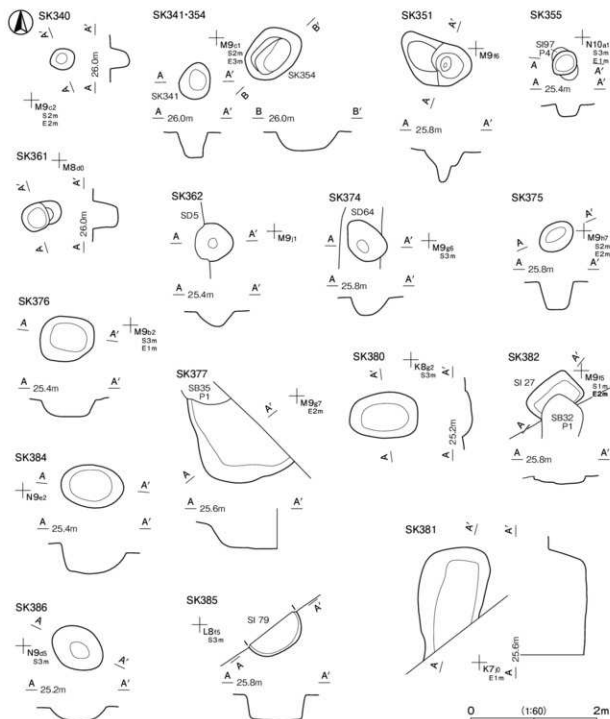
第198図 時期不明の土坑実測図(3)



第199図 時期不明の土坑実測図(4)



第 200 図 時期不明の土坑実測図 (5)



第 201 図 時期不明の土坑実測図 (6)

第 101 表 時期不明の土坑一覧

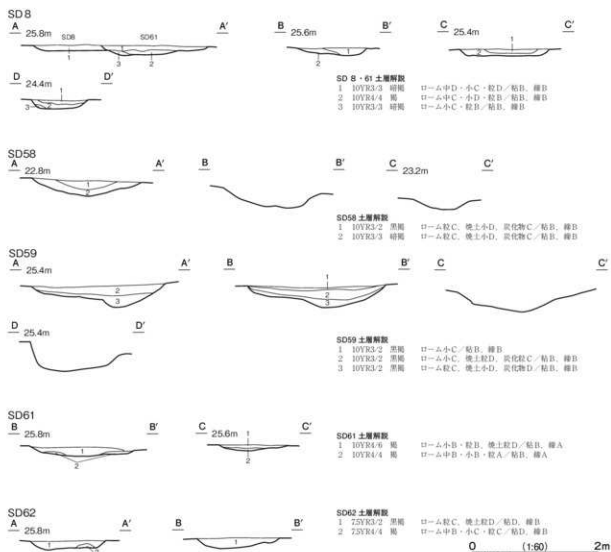
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深 (cm)					
156	L 8 d2	N - 44° - E	楕円形	0.84 × 0.60	12	外傾	平直	人為		
157	L 8 d2	N - 38° - E	楕円形	0.84 × 0.68	36	外傾 (1:1.2) 直立	凹状	人為		
158	L 8 d1	N - 86° - E	楕丸長方形	0.76 × 0.68	60	直立	平直	人為	縄文土器、土師器、陶器	
159	L 7 c8	N - 6° - E	楕円形	1.92 × 0.96	20	緩斜	凹状	人為	土師器、須恵器	SD66 → 本誌
162	L 7 b3	N - 3° - E	楕丸長方形	1.84 × 0.87	112	直立	平直	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	横面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
163	L7a1	N-77°-E	隅丸長方形	1.04×0.72	24	縦斜	着段	人土		
164	L6a0	N-84°-W	長方形	1.12×0.68	44	直立	平坦	人土		
166	L6b0	-	円形	0.40×0.39	50	直立	U字状	人土		
173	L718	N-40°-E	楕円形	0.72×0.44	58	直立	U字状	人土	土師器	
174	L719	N-20°-W	楕円形	0.36×0.32	32	直立	U字状	人土		
175	L71b9	N-56°-E	楕円形	0.28×0.22	24	直立	U字状	人土		
179	L7g8	N-0°	楕円形	0.88×0.74	44	ほぼ直立	凹凸	人土	縄文土器、弥生土器、陶器	
180	L7g9	N-18°-W	楕円形	0.92×0.84	78	直立	凹凸	人土	縄文土器、土師器、陶器	
185	L71b9	-	円形	1.04×0.96	98	直立	平坦	人土		
186	L8h1	N-8°-W	楕円形	1.04×0.92	80	直立	平坦	人土		SR15と重複
191	N011	-	不整形円形	2.00×1.96	30	外堀 縦斜	平坦	人土	縄文土器、土師器、須恵器、鉄片	
193	N0g3	-	不整形円形	0.88×0.86	36	外堀 直立	凹凸	人土		
194	N9b9	N-21°-W	楕円形	2.96×1.58	76	外堀 縦斜	平坦	人土	縄文土器、土師器、鉄片	SR73→本跡
195	N9a5	N-85°-W	楕円形	0.47×0.40	30	直立 外堀	平坦	人土		
196	N9a5	-	円形	0.82×0.80	16	縦斜	平坦	人土	土師器、須恵器	
197	N9a5	-	円形	0.72×0.68	15	縦斜	扇状	人土		
198	M9j5	-	円形	0.92×0.84	19	縦斜 外堀	平坦	人土	土師器、須恵器	
199	M9j4	-	円形	0.88×0.84	18	縦斜	扇状	人土	鉄片	
200	M9j5	-	円形	1.06×0.96	32	縦斜	扇状	人土	土師器	
201	M9b6	-	円形	0.67×0.66	38	外堀	平坦	人土		
202	M916	N-2°-E	楕円形	0.64×0.52	39	縦斜 外堀	着段	人土	土師器	
203	N9f4	N-29°-E	楕円形	1.00×0.86	64	直立	平坦	人土		
204	N9a8	N-3°-W	楕円形	0.72×0.61	38	外堀 縦斜	着段	人土	縄文土器、須恵器、鉄片	
208	N9a8	N-5°-W	隅丸長方形	0.82×0.66	12	外堀 直立	平坦	人土		
209	N9a8	N-2°-E	隅丸長方形	0.68×0.65	24	直立	平坦	人土		
210	N9c6	N-4°-E	長方形	1.80×0.84	12	外堀	平坦	人土	縄文土器、須恵器	本跡→SR46
211	M8g8	N-28°-E	楕円形	1.36×0.80	16	縦斜	凹凸	人土	土師器	SR20→本跡
214	N9c4	N-6°-E	隅丸方形	0.58×0.56	46	直立	U字状	人土		
215	N9c2	N-61°-W	楕円形	0.88×0.72	72	直立	扇状	人土		SR28→本跡
222	N9g0	N-33°-E	[円形・楕円形]	0.94×(0.80)	44	外堀	扇状	人土		SR9→本跡→SR23
226	M9g5	N-9°-E	方形	0.48×0.48	16	外堀	扇状	人土	土師器	
227	M9d1	N-40°-W	楕円形	0.71×0.54	36	外堀	扇状	人土		
233	M9b1	N-38°-W	楕円形	0.64×0.56	96	直立	U字状	人土		
234	M9c2	-	円形	0.45×0.44	30	外堀 直立	扇状	人土	縄文土器	
237	M8a0	N-80°-E	楕円形	0.48×0.41	68	外堀 ほぼ直立	浅いU字状	人土		
238	M8a0	N-76°-E	不整形円形	0.67×0.60	68	内壁	凹凸	人土		
239	M8b0	N-46°-W	[楕円形]	0.48×0.42	48	直立	U字状	人土	土師器	SR36と重複
240	M8a0	-	円形	0.48×0.47	24	外堀	扇状	人土		
241	M8a0	N-13°-E	隅丸長方形	0.48×0.44	64	直立	U字状	人土	縄文土器、土師器	
242	M8a0	N-25°-E	楕円形	0.42×0.32	24	外堀	浅いU字状	人土		
243	L8j0	N-26°-E	楕円形	0.40×0.30	21	外堀	浅いU字状	人土		
244	M8e9	-	不整形円形	0.60×0.56	16	縦斜 外堀	扇状	人土		
245	M8e9	N-77°-E	楕円形	0.60×0.52	20	外堀 縦斜	扇状	人土	縄文土器	
246	M8f9	-	不整形円形	1.20×1.10	48	ほぼ直立	平坦	人土		
247	M81b9	-	円形	0.52×0.52	16	縦斜 外堀	扇状	人土	土師器	
249	M819	N-83°-E	長方形	0.58×0.45	27	直立	平坦	人土		

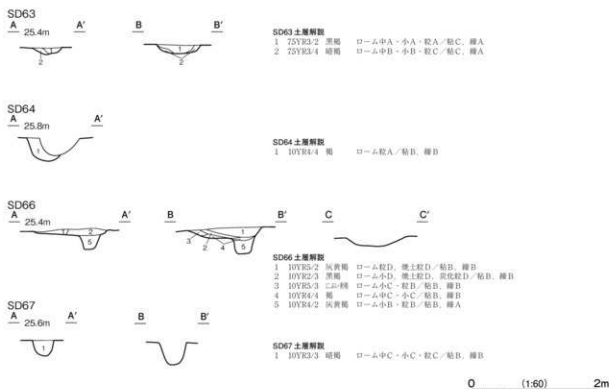
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	断面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
250	M 8 18	N-86°-E	[方形・長方形]	0.71×0.54	34	外傾	有段	人瓦		本跡→SI21
251	N 8 a8	N-75°-W	楕円形	1.38×0.97	42	外傾 直立	凹凸	人瓦		
252	M 8 a7	-	円形	0.65×0.61	56	外傾 直立	皿状	人瓦	縄文土器、土師器	
254	M 8 16	N-83°-E	長方形	0.69×0.55	17	直立	平皿	人瓦		
255	M 8 15	N-86°-E	[方形・長方形]	0.73×0.41	22	外傾	凹凸	人瓦		本跡→SI22
257	M 8 a7	N-63°-W	楕円形	0.76×0.76	56	直立	皿状	人瓦		SI20→本跡
258	M 8 b8	-	円形	0.36×0.35	36	1:1.2直立 外傾	点・U字状	人瓦	土師器	
259	M 8 g8	-	円形	0.32×0.30	56	直立	有段	人瓦	土師器	
264	M 9 b2	N-25°-W	[円形・楕円形]	(0.83×0.48)	50	1:1.2直立	平皿	人瓦	縄文土器、鉄片	SI91→本跡
273	M 9 c2	N-33°-W	楕円形	0.74×0.46	50	1:1.2直立	U字状	人瓦	縄文土器	本跡→SI39
280	M 9 g5	-	[円形]	0.48×0.44	24	外傾	平皿	人瓦		本跡→SI64
284	N10a1	N-0°	方形	0.46×0.46	24	外傾	有段	人瓦		
285	N10a1	N-30°-W	隅丸長方形	0.86×0.56	48	外傾	有段	人瓦	縄文土器	SI97→本跡
287	N 9 a0	N-28°-W	楕円形	0.76×0.64	60	直立 緩斜	有段	人瓦	土師器	
289	N 9 a0	N-33°-E	楕円形	0.32×0.24	42	直立	U字状	人瓦		
290	N 9 a0	N-20°-W	楕円形	0.40×0.32	48	直立	U字状	人瓦		
293	N 9 10	N-13°-W	隅丸方形	0.54×0.50	56	1:1.2直立	U字状	人瓦	縄文土器、土師器	
294	N10b1	-	円形	0.52×0.48	40	外傾	点・U字状	人瓦	縄文土器	SI97→本跡
296	N 9 a9	N-90°	楕円形	0.28×0.24	8	外傾	凹凸	人瓦		SI10→本跡
297	M 9 19	N-66°-E	楕円形	0.34×0.28	6	緩斜	平皿	人瓦		SI10→本跡
298	M 9 e5	N-6°-E	長方形	0.56×0.48	33	直立	点・U字状	人瓦	土師器、須恵器	SI27→本跡
299	M 9 e4	N-76°-W	長方形	0.95×0.82	36	外傾	平皿	人瓦	弥生土器、土師器	SI27→本跡
304	L 8 b7	N-6°-E	[楕円形]	2.80×2.32	19	外傾	平皿	人瓦	縄文土器	本跡→SK316
308	M 8 b6	-	円形	0.62×0.60	20	緩斜 外傾	皿状	人瓦		本跡→SI87
315	M 9 15	N-43°-W	楕円形	0.30×0.27	58	直立	U字状	人瓦	縄文土器	
316	L 8 18	N-39°-E	不整楕円形	2.18×1.65	34	外傾	平皿	人瓦	縄文土器、土師器	SK304→本跡
318	M 9 b4	N-81°-W	兼3形・兼4形	0.32×0.34	16	外傾	平皿	人瓦		
319	M 9 g5	N-0°	[円形・楕円形]	0.38×0.28	22	1:1.2直立	点・U字状	人瓦		本跡→SI35
329	M 9 b4	N-78°-W	隅丸方形	0.44×0.42	17	外傾 緩斜	皿状	人瓦		SD61→本跡
331	M 9 15	N-3°-W	楕円形	0.72×0.57	32	外傾 直立	平皿	人瓦		
332	M 9 13	-	円形	0.64×0.62	32	外傾 直立	平皿	人瓦	土師器	
335	N 9 e2	N-68°-W	楕円形	0.80×0.64	48	1:1.2直立	平皿	人瓦		SI94→本跡
338	M 9 16	N-86°-W	楕円形	1.94×1.12	56	直立	平皿	人瓦	縄文土器	
340	M 9 c2	N-67°-E	楕円形	0.40×0.34	28	直立	U字状	人瓦	土師器	
341	M 9 c1	N-15°-E	楕円形	0.58×0.48	64	外傾 直立	皿状	人瓦	土師器	
342	M 9 c2	N-53°-E	楕円形	1.35×1.20	42	緩斜	皿状	人瓦	縄文土器	SK30→SI9→SI38、SI10
344	N 9 d1	N-72°-W	楕円形	0.76×0.66	48	直立	有段	人瓦	土師器	
345	M 9 d1	N-63°-E	楕円形	0.64×0.47	48	直立	U字状	人瓦	土師器、不明鉄製品	
346	M 8 b7	N-7°-W	楕円形	1.22×0.90	30	緩斜	皿状	人瓦		
347	M 9 c2	N-70°-E	[楕円形]	(0.71)×0.68	33	緩斜	皿状	人瓦		本跡→SK342
349	M 9 19	N-4°-E	楕円形	0.56×0.44	58	直立	U字状	人瓦	土師器	SI10→本跡
351	M 9 15	N-61°-W	不整楕円形	1.20×0.71	49	外傾 緩斜	凹凸	人瓦	土師器	本跡→SI27
354	M 9 c1	N-50°-E	楕円形	0.98×0.72	32	外傾	皿状	人瓦		
355	N10a1	N-49°-E	楕円形	0.44×0.38	20	外傾	平皿	人瓦		SI97→本跡
359	M 8 a0	N-82°-W	楕円形	0.46×0.40	56	直立	U字状	人瓦		
360	M 8 b0	N-42°-W	楕円形	0.39×0.34	52	直立	U字状	人瓦		SK239上重複

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	横面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
361	M8-99	N-66°-E	楕円形	0.65×0.43	40	直立	平坦	人為	縄文土器、土師器	
362	M8-10	-	[円形]	0.62×0.60	22	縦斜	圓状	人為	弥生土器、土師器	SH1, SD5→本跡
374	M9-65	N-49°-W	楕円形	0.76×0.52	26	外傾	圓状	人為		SD64→本跡
375	M9-67	N-52°-E	楕円形	0.59×0.43	43	ほぼ直立	平坦	人為		
376	M9-62	N-83°-W	楕円長方形	0.86×0.72	26	外傾	平坦	人為	土師器	
377	M9-67	N-45°-W	[円形・楕円形]	2.08×1.08	40	外傾	平坦	人為		本跡→SD65
380	K8-91	N-85°-E	楕円形	1.08×0.73	30	縦斜	圓状	人為		本跡→SF3
381	K7-10	N-5°-E	[楕円形]	1.60×1.06	63	直立	平坦	人為	土師器、銅片	
382	M9-e5	N-59°-E	長方形	0.84×0.56	12	外傾	平坦	人為		SD7→本跡→SD32
384	N9-d3	N-82°-W	楕円形	1.00×0.68	44	直立	圓状	人為		SD9→本跡
385	L8-15	N-53°-E	[円形・楕円形]	0.92×0.42	40	直立	平坦	人為		本跡→SD79
386	N9-d5	N-65°-W	楕円形	0.88×0.68	20	縦斜	圓状	人為		

(2) 溝跡 (第 202・203 図)



第 202 図 時期不明の溝跡実測図 (1)



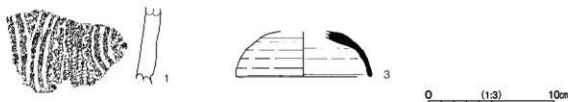
第203図 時期不明の溝跡実測図(2)

第102表 時期不明の溝跡一覧

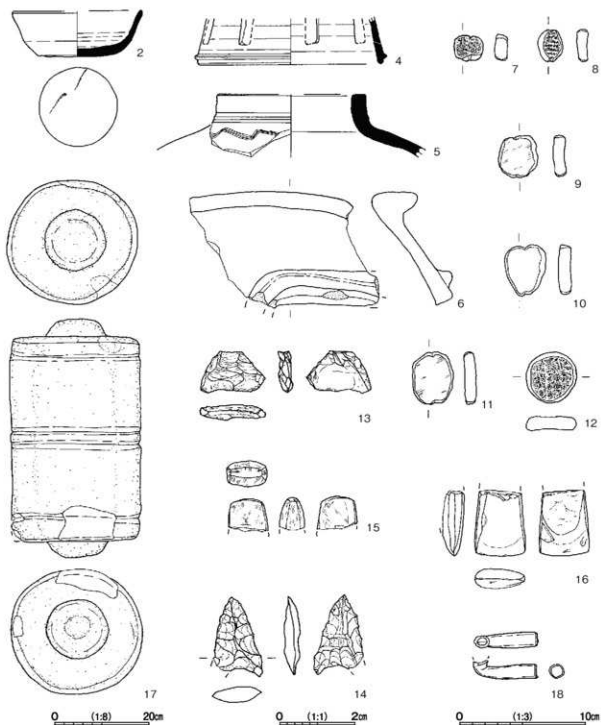
番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
8	M9s2-N9f0	N-40°-W	直線状	23.16	40~84	24~60	4~16	溝状 平坦	縦割	人為	土師器、須恵器、陶器	SK60・SK23・ 24・26→本跡 →SK61
58	J6f4-J6g5	N-58°-W	直線状	10.00	96~178	36~48	16~26	溝状	縦割	人為	土師器、須恵器	SK96・41・42 →本跡
59	N10e5-N10f5	N-19°-W N-17°-E N-80°-E	Y字状	20.60	116~216	20~74	8~44	溝状	縦割 外堀	人為	土師器、須恵器、陶器、 土	SK96・41・42 →本跡
61	M9g1-N9j2	N-160°-W	直線状	19.20	100~164	38~80	10~16	溝状	縦割	人為	土師器、陶器	SK28、SK129 SK28・66→本跡 →本跡
62	M9g7-M9j7	N-2°-E	直線状 (11.94)	80~124	60~94	8~16		平坦	縦割	人為	土師器	SK28・SK25・33 →本跡
63	N10c2-N10c3	N-95°-E	直線状	8.40	48~76	24~32	11~12	溝状	縦割	人為	土師器	SK24・71→本跡
64	M9g5-M9j5	N-170°-W	直線状	3.96	36~64	8~28	12~48	溝状 U字状	縦割 土	人為	土師器	SK280→本跡 →SK271
66	N8a9-N9c5	N-80°-W	直線状 (26.96)	92~124	12~20	22~40		有段	直立 縦割	人為	土師器、須恵器、陶器	SK66・78・83 SK28、SK33→ 本跡→SK61
67	N10a1-N10b1	N-3°-E	直線状	6.12	28~36	16~24	24~29	浅U字状	外堀	人為		SK24・97→本跡

8 遺構外出土遺物(第204・205図 PL44~46・48)

ここでは、遺構に伴わない遺物について、実測図と出土遺物一覧で掲載する。



第204図 遺構外出土遺物実測図(1)



第205図 遺構外出土遺物実測図(2)

第103表 遺構外出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様の特徴	ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	-	長石・石英・雲母・赤鉄粉子	橙	普通	縄文に準拠縄文風(編)		表土	PL44
2	須恵器	杯	[102]	3.6	3.1	長石・石英	灰	普通	手法の特徴はか		出土位置	備考
2	須恵器	杯	[102]	3.6	3.1	長石・石英	灰	普通	体部外・内面クロナデ	底部多方向のナデ	表土	50% PL44

番号	器 種	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
3	須恵器	壺	[106]	(3.6)	-	長石	灰青緑	普通	天身部刻削へう削り	表土	10%
4	須恵器	内面瓶	-	(3.7)	[144]	長石・石英・雲母	灰	普通	脚部 方形の透かし孔	表土	5% PL44 露出層
5	須恵器	短頸壺	[118]	(5.1)	-	長石・石英・雲母	灰青	普通	口縁部外・内面横ナデ 外面波状文	表土	10% PL44 露出層
6	土質土器	蓋き壺	-	(9.3)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粘土	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 方形の窓	表土	5% PL44 外・内面露出層

番号	器 種	長 寸	幅	厚 寸	重 量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
7	土器片鉢	2.1	2.3	1.0	5.02	長石・石英・雲母・ 赤色粘土	橙	製部片 同縁部縦線に研磨 両端にキザミ目	表土	PL45
8	土器片鉢	2.0	2.0	0.9	6.08	長石	橙	製部片 同縁部縦線に研磨 両端にキザミ目	表土	PL45
9	土器片鉢	3.3	3.1	1.1	13.18	長石・石英	にぶい橙	製部片 両端にキザミ目	表土	PL45
10	土器片鉢	4.0	3.2	1.0	17.26	長石・石英・雲母・ 赤色粘土	にぶい赤褐	製部片 同縁部縦線に研磨 両端にキザミ目	表土	PL45
11	土器片鉢	4.1	3.2	0.9	16.05	長石・石英	にぶい橙	製部片 同縁部縦線に研磨 両端にキザミ目	表土	PL45
12	土製内瓶	4.0	4.1	1.1	20.28	長石・石英	橙	製部片 同縁部丁字に研磨	表土	PL45

番号	器 種	長 寸	幅	厚 寸	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
13	鉢部	3.3	5.2	1.2	17.72	チャート	両面押圧潤磨	表土	PL46
14	石皿	2.1	(1.4)	0.4	(0.86)	黒曜石	基部中央深く穿入 両面押圧潤磨	表土	PL46
15	磨製石片	(2.6)	(3.2)	(2.0)	(27.3)	緑色変成岩	小型 表裏面丁字に研磨 縁部には 刃部欠損	表土	PL46
16	磨製石片	(5.3)	4.0	(1.6)	(49.8)	硬質砂岩	小型 表裏面丁字に研磨 縁部には 基部欠損 刃は表裏から 露出する	表土	PL46

番号	器 種	長 寸	幅	厚 寸	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
17	石輪	50.0	27.4	26.0	(56.8)	花崗岩	半部 上下に半円形の駒	表土	平らな半円状の石 器の片と見られる

番号	器 種	長 寸	幅	厚 寸	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
18	磨管	5.1	1.2	(1.5)	(8.95)	陶	磨管部	表土	PL48

第4節 総括

1 はじめに

金田西坪B遺跡は、1959年に現在のさくら学園つくば市立桜中学校校庭の拡張工事の際に総柱掘立柱建物跡が確認され、古代の河内郡衙の一部と考えられてきた。平成12年度に初めて確認調査が行われ、『茨城県教育財団文化財調査報告第195集』¹⁾(以下「調査報告」)にて堅穴建物跡9棟、掘立柱建物跡3棟、礎石建物跡8棟、溝跡5条等が報告されている。また、再度平成13年度に確認調査が行われ、『調査報告第209集』²⁾で堅穴建物跡50棟、掘立柱建物跡3棟、溝跡3条等が報告されている。これらの調査により、かねてから河内郡衙跡比定地の一部を占めるとされてきた金田西坪B遺跡は、金田西遺跡、九重東岡庵寺を含めた河内郡衙関連遺跡とされ、その全体の変遷が示されることとなった。平成16年には、当遺跡と、隣接する金田西遺跡、九重東岡庵寺を含む一帯は、古代河内郡衙の推定地、「金田官衙遺跡」として国の史跡に指定されている。平成27・28・30年度には、当遺跡の発掘調査(第1区)が行われ、『調査報告第443集』³⁾で堅穴建物跡8棟、掘立柱建物跡10棟、溝跡32条等が報告されている。ここでは、中世の区画溝の内側に構築された小集落の屋敷跡の存在が明らかとなった。

今回の調査区(第2区)は、さくら学園つくば市立桜中学校から南へ350mの地点に位置する。今回報告する掘立柱建物跡群や堅穴建物跡を主とする奈良時代の遺構は、金田西遺跡の郡庁院をはじめとする金田官衙遺跡を構成するものである。そのほか、縄文時代から平安時代まで断続的に営まれた集落や中・近世の掘立柱建物跡、溝跡などを確認した。

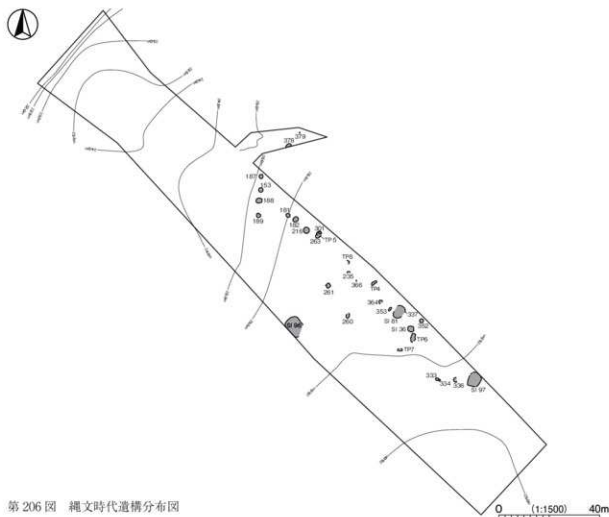
本節では、縄文時代から江戸時代までの様相について概観し、主に奈良時代の遺構と遺物を中心に若干の考察を加えて総括とする。

2 縄文時代(第206図)

当該期の遺構は、堅穴建物跡4棟と土坑22基、陥し穴5基である。中心時期は中期中葉で、出土土器などから阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期から加曽利E1式期である。以下特徴的な遺構、遺物について述べる。

堅穴建物跡は調査区中央部から南部にかけての平坦部に位置している。形状は、第96・97号堅穴建物跡が有段式堅穴建物跡で、第36・81号堅穴建物跡が楕円形の平面形をした堅穴建物跡である。有段式堅穴建物跡2棟は、いずれも平面形は上段・下段ともに隅丸長方形を呈しており、炉が付設されていない。第96号堅穴建物跡は上段と下段に部分的に壁溝が廻り、下段には4か所の主柱穴をもつ。規模や形状、出土遺物などから本県における有段式堅穴建物跡の様相の阿玉台Ⅲ式期に相当する⁴⁾。第97号堅穴建物跡は北東部が調査区域外へ延びており平面形が完全ではないが、上段はやや円形に近い隅丸長方形で、はっきりとした主柱穴をもたない。規模や形状から第96号堅穴建物跡と同時期か、やや古段階の阿玉台Ⅲ式期に比定される。楕円形の堅穴建物跡2棟には地床炉が付設されている。平面形が楕円形の堅穴建物跡が多く見られ、地床炉が付設されていることや出土土器などから、加曽利E1式期に比定される。

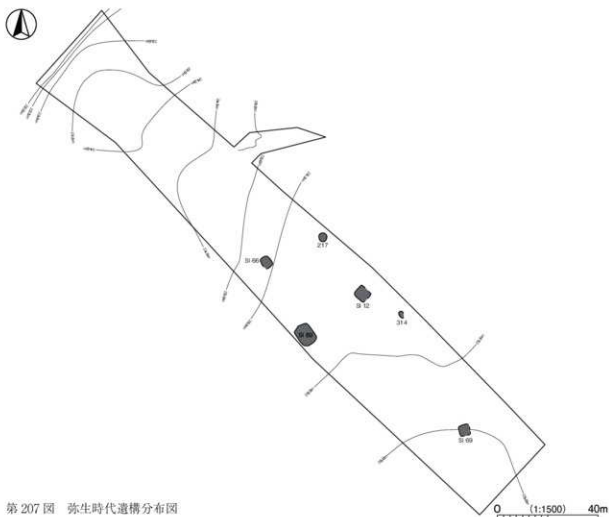
土坑は調査区中央部から南部の平坦部に位置している。時期が特定できたのは、早期1基、中期9基である。早期の土坑からは胎土に繊維を含む貝殻炭灰文系土器が出土した。中期の土坑は開口部が円形または楕円形で、第181・182・188・261・336・352号土坑は袋状を呈している。第153・187・189号土坑は開口部が円形であるが、底面までが浅く、出土している土器の様相や壁面が外傾していることから袋状土坑の上部



第206図 縄文時代遺構分布図

が削平されたものと考えられる。出土土器は、中葉の阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期から加曾利E1式期が主体である。第187号土坑からは、口縁部と胴部が隆帯によって区画され、区画内には隆帯による渦巻き文が貼り付けてあり、胴部には頭部から垂下した蛇行沈線文が施されている加曾利E1式土器が出土している（第17図1）。さらに、第336号土坑からは、口縁部に交互刺突文による連続口の字文を有する中幹式土器の様相をもつもの（第24図4）や口縁部に穿孔把手を有し、キザミ目のある隆帯が口縁部から頭部に施された勝坂式の影響を受けたと思われる土器が出土しており（第25図9）、南関東の文化が流入していたものと推測される。また、平成12年度に実施された確認調査の際には、第1号埋塞から加曾利E1式土器が出土しており⁹¹、当該期の集落はさらに北へ広がっていたものと推測される。

陥し穴5基は調査区中央部から南部に位置している。形状は、第7号陥し穴は長方形、第5・8号陥し穴は楕円形、第4・6号陥し穴は不整楕円形で、断面形は第4・8号陥し穴はV字形でそのほかはU字形である。また、第4・5・7号陥し穴はビットを伴っている。関東地方の早期後半から前期の陥し穴は、楕円型が顕著である⁹¹。当遺跡の陥し穴も形態としては楕円型陥し穴に分類でき、出土土器や形状の特徴などからいずれも早期から前期の陥し穴と考えられる。これらはいずれも、南に向かって緩やかに下る下がり際に、間隔を空けて設けられており、当該期は当遺跡は獣道などを想定して陥し穴を配置した狩猟場であったと考えられる。



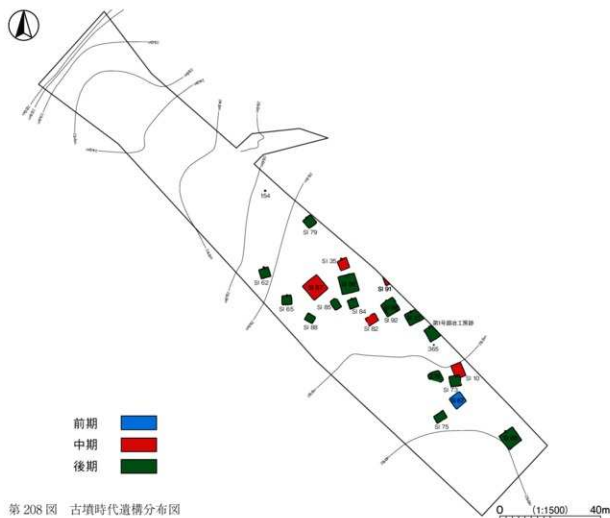
第207図 弥生時代遺構分布図

3 弥生時代(第207図)

当該期の遺構は、竪穴建物跡4棟と土坑2基である(第207図)。時期はいずれも後期前半である。以下特徴的な遺構、遺物について述べる。

竪穴建物跡は調査区中央部から南部の平坦部に位置している。形状は、第12・66・89号竪穴建物跡が隅丸長方形、第69号竪穴建物跡が隅丸方形の平面形をした竪穴建物跡である。出土土器は、第12号竪穴建物跡からは、体部に附加条一種(附加2条)を施しつつ口縁部が波状口縁の鉢(第36図1)や、頭部に櫛歯文を施すもの(第36図2)が、第89号竪穴建物跡からは複合口縁で頭部に櫛歯文を施すもの(第42図1)が確認されている。土器の様相は土浦市原出口遺跡から出土している上稲吉式の系譜の土器に類似している。また、第12・66・89号竪穴建物跡からは石英を含んだ礫がまとまって出土している。用途は不明であるが、土浦市西原遺跡²⁷⁾やつくば玉取向山遺跡²⁸⁾からも同様の出土例が確認されている。これらは、県南地域の竪穴建物跡内から特徴的に出土することが知られており、様々な仮説が提示されている²⁹⁾。当遺跡出土の石英を含む礫からは明確な被熱痕は確認できなかったが、破碎された痕跡があることから、何らかの生産に使用していた可能性が高いと考えられる。

土坑2基は、第217号土坑が調査区中央部、第314号土坑が南部の平坦部に位置している。平面形は第217号土坑が円形、第314号土坑が楕円形である。第217号土坑は11か所のピットが壁際に廻り、規模や形状から、炬は付設されていないが竪穴建物跡や貯蔵施設の可能性が考えられる。



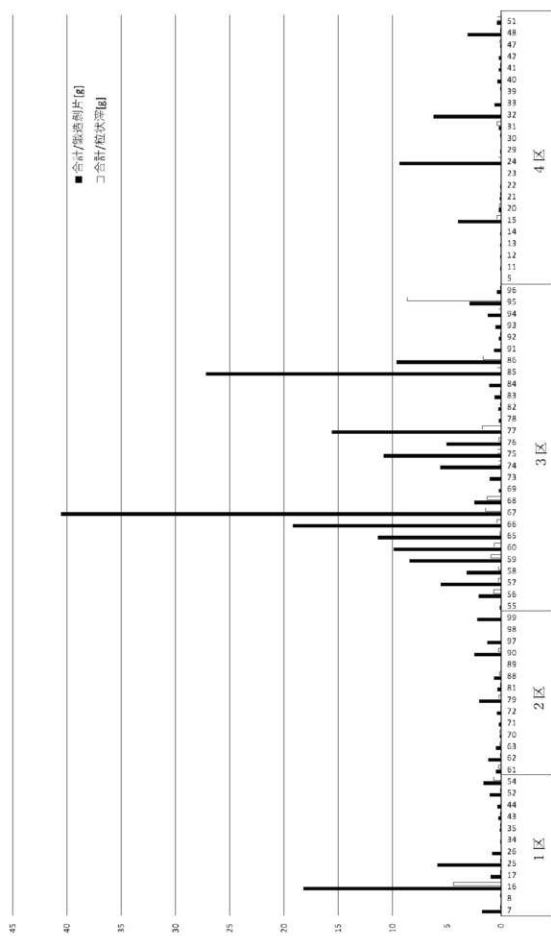
第208図 古墳時代遺構分布図

4 古墳時代 (第208図)

当該期の遺構は、竪穴建物跡19棟と鍛冶工房跡1棟、土坑3基である。中心となる時期は中期から後期で、調査区中央部から南部にかけて分布している。以下特徴的な遺構、遺物について述べる。

竪穴建物跡は、前期1棟(第67号竪穴建物跡)、中期5棟(第10・35・82・87・91号竪穴建物跡)、後期13棟(第27・62・65・68・73・75・79・84～86・88・92・98号竪穴建物跡)である。前期の第67号竪穴建物跡(N-51°-E)と、中期の第82号竪穴建物跡(N-62°-E)以外、いずれもやや西に軸が傾いている(N-3°-58°-W)。竪穴建物跡の変遷からは、古墳時代前期後葉に集落が形成され始め、中期に集落が拡大していき、後期に隆盛する様子を見てとることができる。竪を備えた住居が5世紀後葉の竪穴建物跡から窠をもつようになる点や、伴う土師器が和泉式から鬼高式に断続的に変遷していく点など、古墳時代の一般的な集落の様相を示している。特徴的なのは、竪も窠も付設されていない竪穴建物跡が6棟存在することである。うち第88・98号竪穴建物跡の2棟は、後世の掘り込みにより窠が消滅している可能性もあるが、残りの4棟(第67・75・82・85号竪穴建物跡)は竪なし窠をもっていないことが確実である。これらの竪穴建物跡は、前期から後期までのどの時期にも存在し、台地の縁辺部の集落の中心からやや外れた所に位置する。これらの竪穴建物跡がどのような用途で使われたものなのかは断定することが難しいが、生活の場ではなく、簡易的な作業場や倉庫として用いられた可能性がある。

鍛冶工房跡1棟を、調査区南部で確認した。元々、窠を備えた一般的な竪穴建物跡であったものを、作業空間を広くするために柱を壁際に作りかえ、屋根を高くして作業効率を上げたものと考えられる。前述のと



第104表 第1号線土工房跡鑑定測片・粒状浮出土量グラフ

おり、鉄滓のほか、粒状滓や鍛造剥片が大量に出土した（第48表）。P3・P6と炉1・2・5からの出土重量が多く、特に炉2は不定形滓の重量が300gを超えており、比較的長期間に渡って採集していたと考えられる。一方、粒状滓と鍛造剥片の出土量は、下層から床面のグリッド別の分布¹⁰をみると、3区からの出土重量が突出している（第104表）。炉1と炉4の間に大量の鍛造剥片が飛散しており、周辺で鍛錬鍛冶が行われたと考えられる。

また、鍛冶工房跡に関連する遺構として、第276号土坑を検出した。これは、鍛冶工房跡から南に約20mの地点で確認し、大量の鍛冶関連遺物が出土している。これらの鍛冶関連遺物の総重量は447361gに達し、古墳時代の原始的な鍛冶工房とはいえ、一定の期間採集していた様子が推測できる。そのほか、土坑2基を確認した。調査区中央部に位置する第154号土坑からは、一定量の鍛冶関連遺物が出土している。

以上、当遺跡の古墳時代は前期から後期にかけて連続して集落が営まれ、その規模を拡大していった様子が明らかになった。鍛冶工房跡の存在は注目され、過去の確認調査でも鉄滓が出土している¹¹ことから、今回の調査区より北側には他にも鍛冶工房跡が存在する可能性が高い。そして、これらの要素からは、古墳時代に継続的に営まれ、倉庫や鍛冶工房を備えた大規模な集落を想起できる。このような技術をもった集落の存在が、のちに官衙が置かれる一つの要因となっている可能性があると考えられる。

5 奈良時代（第209～211図・第105表）

当該期の遺構は、竪穴建物跡13棟、掘立柱建物跡29棟、大型円形土坑1基、土坑2基、柱穴列2条、溝跡1条である。中心となる時期は7世紀末葉から8世紀中葉である。以下、過去の金田官衙遺跡に関連する周辺遺跡の報告に基づいて時期を設定し¹²、各時期の特徴について述べる。

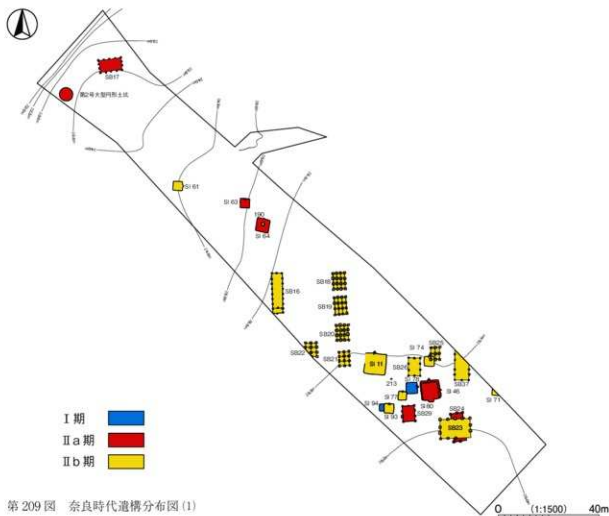
（1）建物群の変遷（第209・210図、第105表）

第Ⅰ期

本期は、河内郡衙展開前の前身集落が展開する時期である。今回の調査区では竪穴建物跡2棟（第78・94号竪穴建物跡）を確認した。第94号竪穴建物跡は第93号竪穴建物に掘り込まれており、竈の様相が明確ではないが、第78号竪穴建物跡同様、東に竈をもっていた可能性が高い。この二つの竪穴建物跡は大きさが若干異なるものの、主軸を同じくしており、出土する土器も7世紀末葉と古手である（第117図）。よって、この時期には、小規模な河内郡衙の前身集落が存在していたと考えられる。

第Ⅱa期

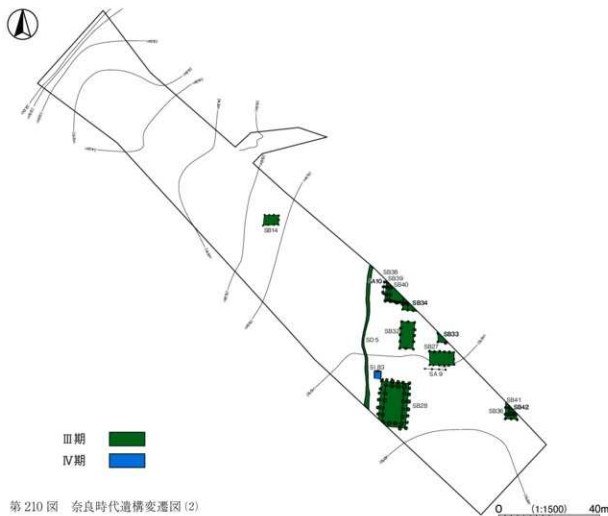
本期は、8世紀前葉の郡衙の成立期のうち、より古い時期に位置付けられる。今回の調査区ではⅡ期に突如として竪穴建物跡10棟、掘立柱建物跡16棟が造営されるが、そのうち、a期としたものは竪穴建物跡4棟（第46・63・64・80号竪穴建物跡）と掘立柱建物跡3棟（第17・24・29号掘立柱建物跡）である。竪穴建物跡4棟のうち第80号竪穴建物跡のみが東竈であり、重複関係から第46号竪穴建物跡に先行する。この第80号竪穴建物跡とはほぼ同じ場所に第46号竪穴建物跡が作られる。第46号竪穴建物跡は大型の竪穴建物跡で、出土物が質・量ともに他の竪穴建物跡と明らかに異なっている（第104図）。その他の2棟は離れた場所に並んで作られている。掘立柱建物跡は、第24・29号掘立柱建物跡の2棟とも南北棟で、傾きが西に若干振れている。また、第17号掘立柱建物跡は東西棟で、こちらも西に若干振れている。これは、隣接する大型円形土坑を管理する建物であった可能性がある。以上、この時期は竪穴建物跡が増加するとともに、掘立柱建物跡も出現する。また、大型竪穴建物跡である第46号竪穴建物跡と、隣接する掘立柱建物跡のセットから、有力者の存在が推定できる。



第209図 奈良時代遺構分布図(1)

第II b 期

本期は、8世紀前葉の郡衙の成立期のうち、より後出する時期である。今回の調査区でb期としたものは堅穴建物跡6棟(第11・61・71・74・77・93号堅穴建物跡)と掘立柱建物跡10棟(第16・18・19・20・21・22・23・25・26・37号掘立柱建物跡)である。堅穴建物跡6棟のうち第61号堅穴建物跡のみが東廡であり、その他の堅穴建物跡は北竈で真北か東に $3^{\circ} \sim 6^{\circ}$ 振れる。注目されるのはやはり大型の堅穴建物跡で、第11号堅穴建物跡がII a期の大型の堅穴建物跡である第46号堅穴建物跡の北西約20mの位置に造営される。これは、第46号堅穴建物跡に居住していた特別な立場の人物が居宅を建て替えたものと考えられる。II a期に比べ、全体的に堅穴建物跡から出土する須恵器の量が増えている。なかには第74号堅穴建物跡出土の須恵器など(第113図3)、東海地方からの搬入品も含まれており、他地域との交流をうかがうことができる。掘立柱建物跡は、10棟とその棟数を大幅に増やす。主軸は真北を向くか、 $2^{\circ} \sim 5^{\circ}$ 西に振れる。なかでも、第11号堅穴建物跡の西に築かれた総柱の第18～22号掘立柱建物跡は高床の倉庫であったと考えられる。これは、堅穴建物に付随する倉庫であり、間隔が揃っていないこと、遺物から大きな時期差が認められないこと、などから、倉庫が手狭になった際に順次増築していったものと考えられる。その他は第23号掘立柱建物跡のみが東西棟で、それ以外は南北棟である。馬小屋の可能性のある第16号掘立柱建物跡も確認したが、全体的に遺物の出土が少なく、得られた情報は極めて限定的である。この時期には、堅穴建物跡と掘立柱建物跡の数がそれまでと逆転し、掘立柱建物跡が多数を占めることとなる。また、有力者の住まいと考えられる堅穴建物跡が倉を伴うようになる。



第210図 奈良時代遺構変遷図(2)

第Ⅲ期

本期は、8世紀中葉の郡寺・郡衙の展開期である。今回の調査区では堅穴建物跡はなくなり、掘立柱建物跡12棟（第14・27・28・32～34・36・38～42号掘立柱建物跡）が該当する。ほぼ東西を向く東西棟が2棟、2°～8°東に振れる南北棟が10棟である。中でも、第28号掘立柱建物跡は、桁行5間、梁行3間の身舎の四面に桁行7間、梁行5間の廂が付く側柱建物跡である。廂を含めると桁行18.0m（60尺）、梁行7.2m（24尺）で、面積は194.4㎡になる。身舎と廂の柱筋が一致しておらず、一体的に構築されていない。廂の柱穴は掘方がしっかりしており、床をもつ縁であった可能性もある。北には掘立柱建物が連続して建てられているが、10m以上離れている。また、第28号掘立柱建物跡の東側は建物がなく、大きな空間が設けられている。これは、それまで堅穴建物に住居してきた有力者が、この時期に掘立柱建物を居宅とするようになったためと考えられる。また、第38～40号掘立柱建物跡と第41・42号掘立柱建物跡は、東から西に建て替えられており、この場所に何度も立て替えられる同様の機能をもつ施設が存在した可能性が高い。主軸方向もそれぞれ一致しており、それほど時間を置かず建て替えられたと考えられる。以上、この時期は堅穴建物跡がみられなくなり、建物は掘立柱建物跡のみとなる。また、特別な建物である大型の四面廂建物が造営され、有力者の住まいとして機能したと推測できる。

第Ⅳ期

本期は、8世紀後葉の郡寺・郡衙の展開期で、河内郡衙が成熟し、最も隆盛する時期である。ところが、今回の調査区内で確認できた遺構は堅穴建物跡1棟（第83号堅穴建物跡）のみで、それまでの堅穴建物跡

時期 区分	年代	推定河内郡衙変遷	金田西坪B遺跡			
			第2区	正倉城	第1区	
I期	7世紀 末葉	前身集落 郡衙関連施設展開の前段階	SI78・94	SD 3	SI53・57、 SB11、 SD21・23・51 SB 5・10	
II期 a	8世紀 前葉	九重東岡庵寺・郡衙の成立期	SI46・63・64・80 SB17・24・29			
II期 b			SI11・61・71・74・77・93 SB16・18・19・20・21・22・23・25・26・37			
III期	8世紀 中葉	郡寺・郡衙の展開期Ⅰ	SB14・27・28・32・33・34・36・38・39・40・ 41・42 SD 5			SB 1・2・3
IV期	8世紀 後葉	郡寺・郡衙の展開期Ⅱ	SI83			SS 1・2・3・ 4・5・6・7 SD 1
V期	9世紀 前葉	郡寺・郡衙の衰退期Ⅰ				
VI期	9世紀 後葉	郡寺・郡衙の衰退Ⅱ 一般集落化			SI55・56・60 SI51・52・58、 SB 6、SD10	

第105表 河内郡衙の遺構変遷

や掘立柱建物跡の遺物より一段階新しく位置付けられる。以上、この時期に当調査区では、掘立柱建物跡はひとつ残らず廃絶し、住んでいた有力者はその住まう場所を移したものと考えられる。

以上のことから、今回の調査区では、有力者の住まいが構成を変えながら継続して営まれていたことが明らかとなった。この有力者については、河内郡を治めた郡司層が想定できよう。そうすると、これらの建物跡群は郡司の居宅であったと考えられる。

(2) 河内郡衙関連遺跡からみた奈良時代の金田西坪B遺跡 (第211図・第105表)

ここでは、河内郡衙全体における金田西坪B遺跡の性格について述べる。河内郡衙の変遷は、7世紀末に前身集落が生まれ(I期)、成立期(II期)・展開期(III期)・衰退期(IV期、V期)を経て9世紀後半には一般集落化することが報告されている¹³⁾。これは、河内郡衙が奈良時代8世紀前葉に成立し、平安時代の9世紀後半に郡衙としての機能を終えることを示している。金田官衙遺跡は広範囲に渡って当財団により調査が行われており、全体の配置が明らかになりつつある。金田西遺跡は東部が郡庁院、中央の北部が館、南部が居宅と推定されており¹⁴⁾、その西には仏教関連施設である九重東岡庵寺が位置する。また、金田西坪B遺跡については、平成12・13年度に確認調査が行われ、正倉院と推定される遺構群が確認されている。

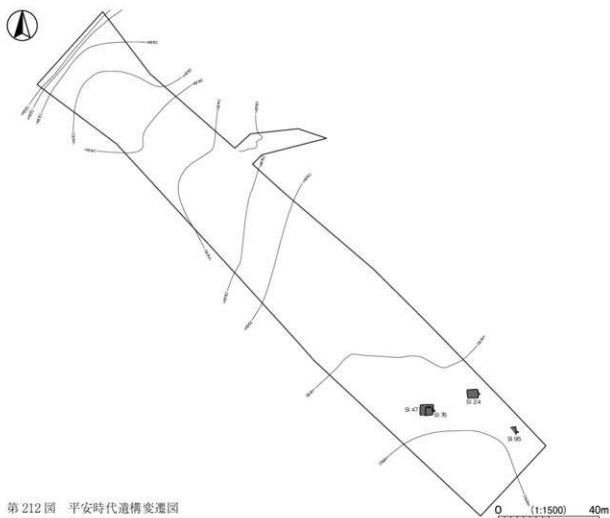
金田西坪B遺跡北部で確認されている正倉院は、建物の傾きや配列をもとに金田西遺跡の分析結果に照らし合わせて検討が行われている¹⁵⁾。正倉院区域からは8種の礎石建物跡、3種の掘立柱建物跡、3条の区画溝が確認されており、それらを今回の時期区分に当てはめると、第2・3号溝跡の時期は現状から決めるのが難しいが、どちらも正倉院の区画を囲んでおり、第3号溝跡が最も古く位置付けられる(第105表)。第1・2号溝跡の関係は結合する部分に土坑が重複しており新旧関係が不明であるが、第2号溝跡に区画された領域はここでは正倉院の拡張や別院との想定に従いたい¹⁶⁾。第1・2号溝跡の南北方向の溝は共有されており、新旧は有無も含めて不明であるが、大きな時期差なく機能したと考えられる。平成12・13年の確認調査の際には、正倉院のこれらの溝の南に第5号溝跡が確認されている。これは、第1・2号溝跡と並行する形で東西に延びており、今回の調査区と正倉院を区画している。つまり、既述のように、今回の調査区を居宅と考えると、その居宅の中心と正倉院の礎石建物群との距離は300mほどで、隣接して造営されており、居宅域、正倉院をそれぞれ第5号溝跡、第1・2号溝跡で区画している様子が分かる。

このように、金田西坪B遺跡は、居宅域と正倉院からなり、居宅域では郡司層の住まいの変遷を知ることができ、正倉院では部分的ではあるが河内郡正倉院の規模や配置を知ることができる。そして、それぞれの区域には少しずつ時期差が存在し、III期で掘立柱建物群が積極的に作られる点は共通するものの、IV期に正倉



第211図 河内郡衙関連遺構群全体図(茨城県教育財団文化財調査報告第209集 付図に加筆)

域で礎石建物が造営されるころには、当調査区の居宅は他の場所へ移っている点が注目される。



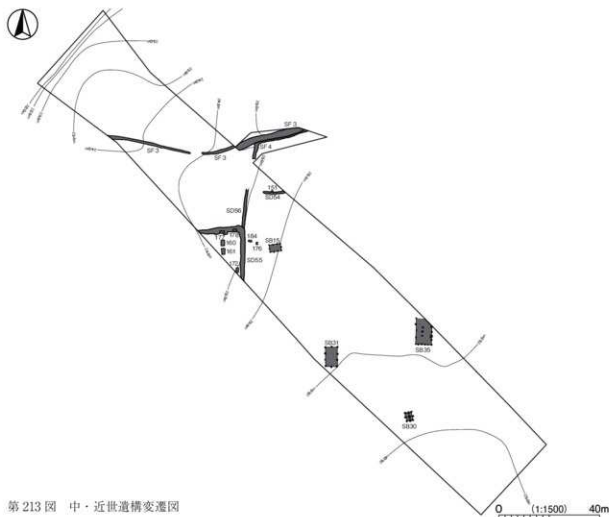
第212図 平安時代遺構変遷図

6 平安時代（第212図）

今回の調査区で確認できた平安時代の遺構は、竪穴建物跡4棟である。中心となる時期は10世紀後半である。以下特徴的な遺構、遺物について述べる。

竪穴建物跡はいずれも調査区南部の平坦面に位置している。4棟のうち3棟が東廂であり、第76号竪穴建物跡のみ北廂である。竪穴建物跡の規模は、第95号竪穴建物跡が削平により全体の規模が不明であるものの、第76号竪穴建物跡のみが長軸、短軸ともに3mに満たない小型の竪穴建物跡となっている。いずれの竪穴建物跡も、明確な柱穴が確認できなかった。第47号竪穴建物跡の竈中央部では、火を受けた雲母片岩を2点確認した。二つ掛けの支脚と考えられ、異なる高さで土器を掛けられるように掘えられていた。土器は、内面に黒色処理を行った高台付坏が全体的に確認できた。第24号竪穴建物跡からは外面下位に縦位のヘラ磨きが施された土師器の甕が出土しており（第24図4）、この竪穴建物跡のみ9世紀代に入ると考えられる。また、第47号竪穴建物跡からは、土師器の小皿が13点出土している（第24図4）。貯蔵穴周辺から出土したが、いずれも器高が低く扁平化が進んでいるため、10世紀後葉と考えられる。

これら平安時代の竪穴建物跡は8世紀後半から9世紀にかけて継続する金田官衛遺跡群との関連が認められず、特に9世紀代はほぼ空白域であったと考えられる。よってこれらは、官衛が衰退した後に営まれた一般的な小集落と考えるのが妥当であろう。



第213図 中・近世遺構変遷図

7 中・近世(第213図)

今回の調査区から確認できた中・近世の遺構は、掘立柱建物跡4棟、溝跡3条、土坑8基、道路跡2条である。中心となる時期は、15～16世紀代と考えられる。以下特徴的な遺構、遺物について述べる。

溝は当道路の中央部に確認した。既に今回の調査区の北西に当たる平成28年度調査(1区)で中世の溝が13条確認されている¹⁵⁾。北西の調査区では、かわらけや内耳鍋などが大量に出土しており、それらの年代から15世紀中葉から16世紀後葉にかけて構築と廃絶が繰り返されている様相が明らかになった。報告されている溝の上幅は0.28～4.64 m、下幅が0.08～1.04 m、深さが22～174 cmと、かなりの幅がある。断面形も逆台形、U字状、V字状とバリエーションがある。今回の調査区(2区)の第55号溝跡は上幅0.72～2.68 m、下幅0.24～1.70 m、深さ30～46 cm。断面形はV字状である。年代の決め手となる遺物が出土していないものの、方形に区画する形状などから、同時代に含まれる溝跡と考えられる。また、第55号溝跡に掘り込まれている第54号溝跡も同様と考えられる。なお、第55号溝跡で区画された内部には、今回の範囲では確認できなかったが、平成28年度調査区同様、屋敷域が形成されていた可能性が高い。

土坑は、上述した溝と同じ調査区中央部で確認した。骨粉が混じっており、墓坑の可能性が高い。軸方向は東西軸と南北軸の2種類ある。また、規模も大型(長軸1.9～2.4 m)と小型(長軸0.9～1.5 m)の2種類ある。深さは25～90 cmと墓坑としては浅く、底部は平坦で断面形はU字状を呈している。伴う遺物がないが、底面に骨粉がみられるものが多いことから墓坑と考えたい。このような土葬に伴う墓坑は、当道路の近隣に所在する上野陣場遺跡や上野古屋敷遺跡でも報告例がある¹⁶⁾。時代は江戸時代と推定できる。

最後に道路跡であるが、近年まで使われていた現代の道路の下から第3号道路跡を、それよりも古い第4号道路跡をその下層から確認した。第4号道路跡は、平成30年度調査区の西側で南に向かって曲がっているが、平成29年度調査区では確認できなかった。底面が硬化しているため道路跡としたが、本来溝として利用していたとみられ、調査区内の第8・54・66号溝等につながっていた可能性がある。また、第3号道路跡からは陶磁器片に混じて軒平瓦が出土した。「江戸式」の模倣で、雲母を含み、18世紀後半から19世紀中葉に在地で生産されたものである¹⁰⁾。その他、遺構に伴わないもの、石輪の竿部や煙管、置き竈など、概ね中世末から江戸時代の範囲内の遺物が出土した。

8 おわりに

金田西坪B遺跡の時代区分と遺構分布を中心に、遺構配置や出土遺物から集落の変遷や郡衙関連施設との関係のみてきた。その結果、縄文時代から江戸時代に渡る当遺跡の土地利用の実態が明らかになった。

特に本調査区で注目されるのは、奈良時代の掘立柱建物跡を中心とした遺構群である。8世紀前葉から8世紀中葉にかけて堅穴建物や掘立柱建物が繰り返し造営され、なかでも郡司層と思われる特別な立場の人物の居宅が、形態を変えながら建て替えられていることを確認した。これらの建物跡群は、極めて限定的な時期に営まれており、8世紀後葉以降は遺構数が急激に減少し、9世紀後半に一般集落化するまで約100年間の断絶がある。ここに居宅を構えていた人々がどこへ移ったのか、また、郡司層とした人物の具体的な実像など、残された課題も多いが、河内郡衙における建物の変遷が分かる重要な事例となるものと考ええる。

今後、河内郡衙全体像の解明のためには、金田西坪B遺跡と周辺遺跡とのより綿密な比較検討が必要である。そのためには、未報告である金田西遺跡北部の性格を検討した上で、官衙を支えた集落である東岡中原遺跡や郡寺と目される九重東岡庵寺、政庁域をはじめとした金田西遺跡を関連付けて総合的に判断していく必要があると考える。

註

- 1) 川上直登 長谷川聡 大塚雅昭 『金田西・西坪B遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VI』茨城県教育財団文化財調査報告第196集 2002年3月
- 2) 白田正子 『金田西遺跡 金田西坪B遺跡 九重東岡庵寺 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VII』茨城県教育財団文化財調査報告第209集 2003年3月
- 3) 野田真直 『金田西坪B遺跡 中根・金田台地区埋蔵文化財調査報告書XXII』茨城県教育財団文化財調査報告第443集 2020年3月
- 4) 縄文時代研究班 『関東地方における縄文時代中期の「有段式壑穴遺構」について』『研究ノート』5号 財団法人茨城県教育財団 1996年6月
- 5) 註1に同じ
- 6) 中村信博 『関東地方の福し穴氣』『縄文時代の考古学 5』同成社 2007年12月
- 7) 江崎良夫 『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書II 原田北遺跡 西原遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第85集 1994年3月
- 8) 奥沢哲也 『玉取岡山遺跡 照立つくば養護学校(仮称)整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第263集 2006年3月
- 9) a 註7に同じ
b 小川和博・大澤敦史・諏治文博 『六十塚遺跡』土浦市遺跡調査会 1998年3月
c 中村賢也 『野中遺跡 第2次調査報告書』美浦村教育委員会 2000年3月
d 黒澤春彦 『土浦周辺における弥生時代後期の様相』『土浦市立博物館紀要』第11号 土浦市立博物館 2001年3月
e 関口満・窪田忠一 『下郷遺跡・下郷古墳群』下郷古墳群遺跡調査会 2001年7月
- 10) 区は北方から右回りで1～4区とし、グリッドは4区左上を起点として50cmで設定
- 11) 註2に同じ
- 12) a 註1に同じ
b 註2に同じ
c 荒井保雄 『九重東岡庵寺 金田西遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XXI』茨城県教育財団調査報告書第435集 2019年3月
d 註3に同じ
- 13) a 註2に同じ
b 註11 cに同じ
- 14) 註2に同じ
- 15) 註2に同じ
- 16) 註1に同じ
- 17) 註3に同じ
- 18) a 三谷正 大塚雅昭 桑村裕 『上野古原敷遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書IX』茨城県教育財団文化財調査報告第285集 2007年3月
b 川井正一 『上野古原敷遺跡2 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書X』茨城県教育財団文化財調査報告第307集 2008年3月
- 19) 桜井正広 瀬田正明 石川功 吉田忠二 加藤晃 神戸信俊 采川仁一 塩谷修 『茨城県指定史跡 土浦城址発掘調査報告書』土浦市教育委員会 1989年3月

参考文献

- ・増田精一 岩崎卓也 東和幸 谷延尚 坂井達彦 「東国道跡-九重庵寺跡調査報告-」 1984年3月 桜村教育委員会
- ・山中敏史 「古代地方官衙道跡の研究」 塙書院 1994年8月
- ・成島一也 「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 中原道跡1」 茨城県教育財団文化財調査報告第155集 2000年3月
- ・成島一也 宮田和男 「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 中原道跡2」 茨城県教育財団文化財調査報告第159集 2000年3月
- ・高野隼夫 白田正子 仲村浩一郎 鳥田和宏 「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中原道跡3」 茨城県教育財団文化財調査報告第170集 2001年3月
- ・白田正子 「九重東阿婆寺確認調査報告書1」 財団法人茨城県教育財団 2001年3月
- ・稲田義弘 「熊の山道跡 島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」 茨城県教育財団文化財調査報告第190集 2002年3月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 「古代の官衙道跡Ⅰ遺構編」 2003年3月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 「古代の官衙道跡Ⅱ遺物・道跡編」 2004年3月
- ・茨城県考古学協会シンポジウム実行委員会 「古代地方官衙周辺における集落の様相-常陸国河内郡を中心として-」 茨城県考古学協会 2005年2月
- ・長谷川聡 田中幸夫 小野克敏 「大塚道跡Ⅰ やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」 茨城県教育財団文化財調査報告第242集 2005年3月
- ・佐々木義則 「常陸国河内郡における掘立柱建物跡群の展開」『要旨と考古』第27号 要旨と考古同人会 2005年5月
- ・田中広明 「国司の館-古代の地方官人たち-」 学生社 2006年9月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 「古代豪族居宅の構造と機能」 2007年12月
- ・清水哲 船橋理 「小作道跡 主要地方道電ヶ崎阿見線バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」 茨城県教育財団文化財調査報告第346集 2011年3月
- ・小林和彦 宮崎剛 「宮内道跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」 茨城県教育財団文化財調査報告第359集 2012年3月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 「第15回古代官衙・集落研究会報告書 西方面建物を考える 報告編 奈良文化財研究所研究報告 第9冊」 2012年12月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 「第15回古代官衙・集落研究会報告書 西方面建物を考える 資料編 奈良文化財研究所研究報告 第9冊」 2012年12月
- ・海老澤聡 「茨城県南部における弥生式後期前半の土器様相-新治台地における原出口1式・2式、松延1式・2式の設定-」 『茨城県史研究』第97号 茨城県教育委員会 2013年3月
- ・藤木海 「南相馬に躍動する古代の郡役所 泉官衙道跡」 シリーズ「道跡を学ぶ」106 新泉社 2016年2月
- ・佐藤信 「古代の地方官衙と社会」 日本史リフレット8 山川出版社 2017年2月
- ・清水哲 内田勇樹 海老澤聡 仙波亨 「吉十北道跡 勸十郎御跡 東関東自動車道水戸線(鉾田-茨城空港北間)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」 茨城県教育財団文化財調査報告第419集 2017年3月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 「第20回古代官衙・集落研究会報告書 郡宇城の空間構成 報告編 奈良文化財研究所研究報告 第19冊」 2017年12月
- ・独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 「第20回古代官衙・集落研究会報告書 郡宇城の空間構成 資料編 奈良文化財研究所研究報告 第19冊」 2017年12月

写 真 图 版



平成29年度調査区 掘立柱建物跡群



平成28年度調査区遠景（南から）



平成29年度調査区遠景（北から）

PL2



平成28年度調査区全景



平成29年度調査区全景

PL4



第18~22・32号掘立柱建物跡



第28号掘立柱建物跡



第36号竖穴建物跡



第36号竖穴建物跡 炉



第81号竖穴建物跡 遺物出土状況



第81号竖穴建物跡 炉



第81号竖穴建物跡



第96号竖穴建物跡



第97号竖穴建物跡



第153号土坑 遺物出土状況

PL6



第153号土坑



第181号土坑 遗物出土状况



第181号土坑



第182号土坑 遗物出土状况



第182号土坑



第187号土坑 遗物出土状况



第188号土坑 遗物出土状况



第188号土坑



第189号土坑



第216号土坑



第235号土坑



第260号土坑



第261号土坑



第334号土坑



第336号土坑 遺物出土状況 (1)



第336号土坑 遺物出土状況 (2)

PL8



第352号土坑



第353号土坑



第364号土坑



第4号陥し穴



第5号陥し穴



第6号陥し穴



第7号陥し穴



第8号陥し穴



第12号竖穴建物跡 遺物出土状況



第12号竖穴建物跡 炉



第12号竖穴建物跡



第66号竖穴建物跡 焼土検出状況



第66号竖穴建物跡 炉



第66号竖穴建物跡



第69号竖穴建物跡



第89号竖穴建物跡 炉



第89号竖穴建物跡



第217号土坑



第10号竖穴建物跡 遺物出土状況 (1)



第10号竖穴建物跡 遺物出土状況 (2)



第10号竖穴建物跡 遺物出土状況 (3)



第10号竖穴建物跡



第27号竖穴建物跡 竈



第27号竖穴建物跡



第35号竖穴建物跡 竈



第35号竖穴建物跡



第62号竖穴建物跡 遺物出土状況



第62号竖穴建物跡 竈



第62号竖穴建物跡



第65号竖穴建物跡 遺物出土状況



第65号竖穴建物跡 竈



第65号竖穴建物跡



第67号竖穴建物跡



第68号竖穴建物跡 竈



第68号竖穴建物跡



第73号竖穴建物跡 遺物出土状況 (1)



第73号竖穴建物跡 遺物出土状況 (2)



第73号竖穴建物跡 竈



第75号竖穴建物跡



第75号竖穴建物跡 遺物出土状況



第79号竖穴建物跡 竈



第82号竖穴建物跡



第84号竖穴建物跡 竈



第84号竖穴建物跡 遺物出土状況



第84号竖穴建物跡



第85号竖穴建物跡



第86号竖穴建物跡 竈



第86号竖穴建物跡

PL14



第87号竖穴建物跡 炉



第87号竖穴建物跡



第88号竖穴建物跡



第91号竖穴建物跡



第92号竖穴建物跡 竈



第92号竖穴建物跡



第1号鍛冶工房跡 炉 (1)



第1号鍛冶工房跡 炉 (2)



第1号鍛冶工房跡 炉 (3)



第1号鍛冶工房跡 炉 (4)



第1号鍛冶工房跡 炉 (5)



第1号鍛冶工房跡 (1)



第1号鍛冶工房跡 (2)



第154号土坑 遺物出土状況



第276号土坑 遺物出土状況



第276号土坑



第365号土坑



第11号竖穴建物跡 遺物出土状況



第11号竖穴建物跡 竈



第11号竖穴建物跡



第46号竖穴建物跡 遺物出土状況 (1)



第46号竖穴建物跡 遺物出土状況 (2)



第46号竖穴建物跡 遺物出土状況 (3)



第46号竖穴建物跡 竈遺物出土状況



第46号竖穴建物跡 竈



第46号竖穴建物跡



第61号竖穴建物跡 遺物出土状況



第61号竖穴建物跡 竈



第61号竖穴建物跡



第63号竖穴建物跡 遺物出土状況



第64号竖穴建物跡 竈



第64号竖穴建物跡

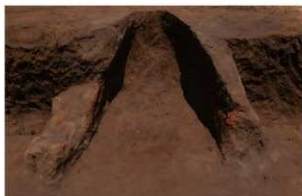
PL18



第71号竖穴建物跡



第74号竖穴建物跡 遺物出土状況



第74号竖穴建物跡 竈



第74号竖穴建物跡



第77号竖穴建物跡 竈



第77号竖穴建物跡



第78号竖穴建物跡



第80号竖穴建物跡 竈



第80号竖穴建物跡



第83号竖穴建物跡 竈



第83号竖穴建物跡 遺物出土状況



第93号竖穴建物跡 竈



第93号竖穴建物跡



第94号竖穴建物跡



第14号掘立柱建物跡



第16号掘立柱建物跡

PL20



第17号掘立柱建物跡



第18号掘立柱建物跡 確認状況



第18号掘立柱建物跡



第19号掘立柱建物跡



第20号掘立柱建物跡 確認状況



第20号掘立柱建物跡



第21号掘立柱建物跡 確認状況



第21号掘立柱建物跡



第22号掘立柱建物跡 確認状況



第22号掘立柱建物跡



第23・24号掘立柱建物跡 確認状況



第23号掘立柱建物跡



第24号掘立柱建物跡



第25号掘立柱建物跡 確認状況



第25号掘立柱建物跡



第26号掘立柱建物跡 確認状況



第26号掘立柱建物跡



第27号掘立柱建物跡



第28号掘立柱建物跡 確認状況 (1)



第28号掘立柱建物跡 確認状況 (2)



第28号掘立柱建物跡



第29号掘立柱建物跡 確認状況



第29号掘立柱建物跡



第32号掘立柱建物跡 確認状況



第32号掘立柱建物跡



第34号掘立柱建物跡 確認状況



第34号掘立柱建物跡



第36・41・42号掘立柱建物跡



第38・39・40号掘立柱建物跡



第41号掘立柱建物跡 遺物出土状況



第2号大型円形土坑



第190号土坑 遺物出土状況

PL24



第213号土坑 遺物出土狀況



第9号柱穴列



第5号溝跡 (1)



第5号溝跡 (2)



第24号竖穴建物跡 遺物出土狀況



第24号竖穴建物跡



第47号竖穴建物跡 遺物出土狀況 (1)



第47号竖穴建物跡 遺物出土狀況 (2)



第47号竖穴建物跡 竈遺物出土状況



第47号竖穴建物跡 竈



第47号竖穴建物跡



第76号竖穴建物跡



第95号竖穴建物跡 遺物出土状況



第95号竖穴建物跡 竈



第95号竖穴建物跡



第15号掘立柱建物跡



第30号掘立柱建物跡 確認状況



第30号掘立柱建物跡



第31号掘立柱建物跡 確認状況



第31号掘立柱建物跡



第55号溝跡 (1)



第55号溝跡 (2)



第56号溝跡



第54号溝跡



第151号土坑



第160号土坑



第161号土坑



第176号土坑



第177号土坑



第178号土坑



第184号土坑



第3·4号道路跡



第36・81・96・97号竖穴建物跡出土土器

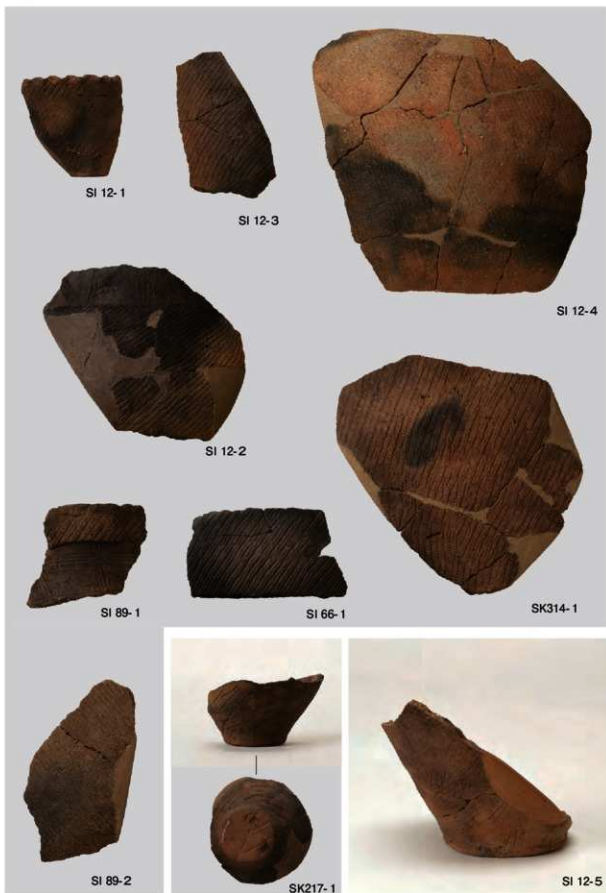




第153·181·182·188号土坑出土土器



第216・336・352・364号土坑，第5・6号陥し穴出土土器



第12·66·89号竖穴建物跡，第217·314号土坑出土土器



第10·27号竖穴建物跡出土土器

PL34



第35・65・67・68号竖穴建物跡出土土器



第73·75·79号竖穴建物跡出土土器

PL36



第84号竖穴建物跡出土土器



第84～86号豎穴建物跡出土土器



SI 86-12



SI 86-10



SI 92-2



SI 87-5



SI 87-3



SI 87-1



SI 87-2



SI 88-1



SI 92-1



第11号豎穴建物跡，第1号冶冶工房跡，第154・276・365号土坑出土土器

PL40



第11·61号竖穴建物跡出土土器



第46·63·64号豎穴建物跡出土土器

PL42



第74·77·78·93号竖穴建物跡，第19号掘立柱建物跡，第190·213号土坑，第5号溝跡出土土器



第24·47号竖穴建物跡出土土器

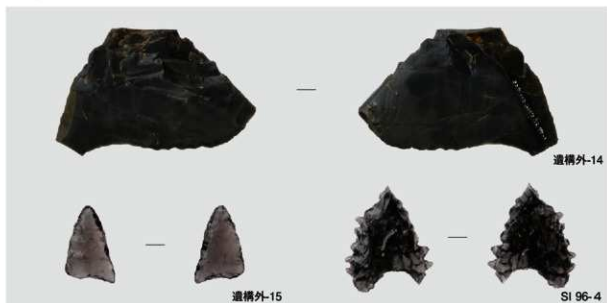


第47・95号竖穴建物跡，遺構外出土土器

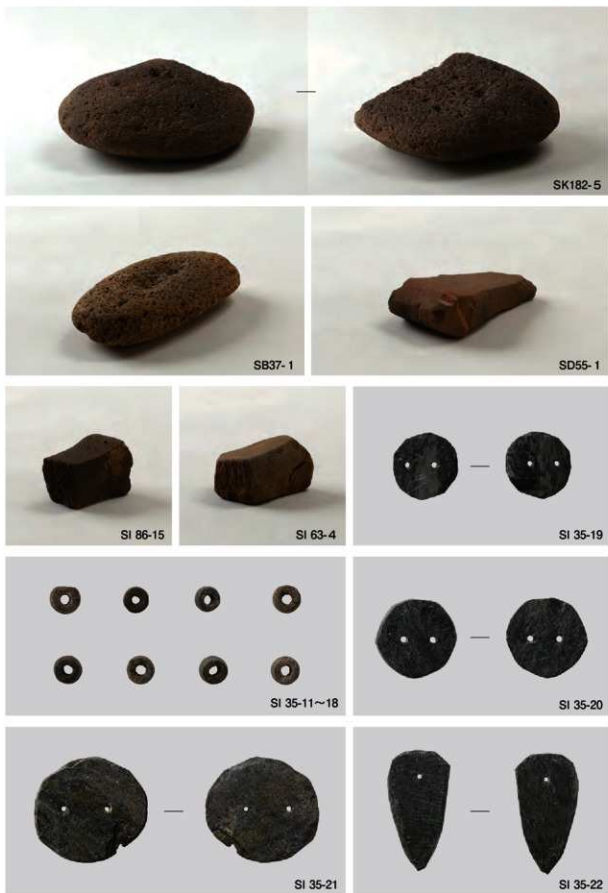


第11・73・75・79・81・84・86・89号竪穴建物跡，第1号鍛冶工房跡，遺構外出土製品

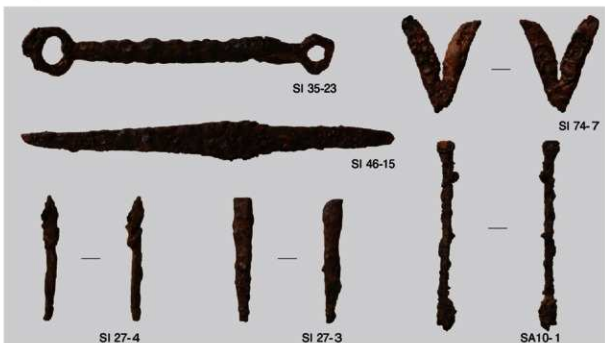
PL46



第81・96号竖穴建物跡，第216号土坑，遺構外出土石器



第35号竖穴建物跡出土石製品，第63・86号竖穴建物跡，第37号掘立柱建物跡，第182号土坑，第55号溝跡出土石器



第27・35・46・74号竪穴建物跡，第1号鍛冶工房跡，第10号柱穴列，遺構外出土金属製品，第3号道路跡出土遺物

抄 録

ふりがな	こんだにしばびーいせき2								
書名	金田西坪B遺跡2								
副書名	中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XXII								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第449集								
著者名	野内智一郎 齋藤貴輝 バリノ・サーヴェイ株式会社								
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587								
発行日	2021(令和3)年3月16日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
金田西坪B 遺跡	茨城県つくば市 金田字二本松台 1636-1番地ほか	08220	36度 07分 110	140度 09分 58秒	24 ~ 26m	201601201 ~ 20170331 20170401 ~ 20170630 20180801 ~ 20180930	4,470㎡ 4,247㎡ 279㎡	中根・金田 台特定土地 地区画整理事 業に伴う事 前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項		
金田西坪B 遺跡	狩猟場 集落跡	縄文	竪穴建物跡	4棟	縄文土器(深鉢・浅鉢)、石器 (石鏃・磨製石斧・石皿・凹石)				
	集落跡	弥生	竪穴建物跡 土坑	4棟 2基	弥生土器(壺・鉢)、土製品(紡 錘車)				
		古墳	竪穴建物跡 鍛冶工房跡 土坑	19棟 1棟 3基	土師器(坏・碗・壺・埴・高坏・ 鉢・小型甕・甕・瓶・手柄)、土 製品(土玉・羽目・支脚)、石製 品(白玉・有孔円板・刺形品)、 金属製品(釘・釧)				
	奈良	良	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 大型円形土坑	13棟 25棟 1基	土師器(坏・碗・甕・瓶)、須 恵器(坏・高台付坏・蓋・盤・ 鉢・控鉢・長頸器・横瓶・甕・瓶・ 円面鏡)、石器(砥石)、金属製 品(刀子・鉄鏃)				
		平安	竪穴建物跡	4棟	土師器(坏・高台付坏・小皿・ 甕・瓶)、須恵器(坏・高台付坏・ 蓋・盤・鉢・甕)、石器(砥石)、 金属製品(刀子)				
	中・近世	掘立柱建物跡 土坑 溝跡 道路跡	4棟 8基 3条 2条	陶器(碗)、磁器(碗)、金属製 品(煙管)、瓦(軒平瓦)					
	その他	時期不明	土坑 溝跡	109基 9条	縄文土器(深鉢)、土師器(坏・ 甕)、須恵器(坏)、陶器(碗)				
要約	今回の調査では、古墳時代から奈良時代を中心とする竪穴建物跡44棟、掘立柱建物跡29棟、鍛冶工房跡1棟、大型円形土坑1基、溝跡13条、陥し穴5基などを確認した。調査区は、河内郡街を構成する都司層の居宅跡と考えられる。建て替えを繰り返しながら倉庫や広場を整備していく居宅の様子が明らかとなった。								

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 10 Pro
	編集	Adobe InDesign CC
	図版作成	Adobe Illustrator CC
	写真調整	Adobe Photoshop CC
	Scanning	RICOH MPW4002
使用Font	OpenType	リュウミンPro L-KL, 太ゴB101 Pro Bold 見出ミンMA31 Pro, 太ミンA101 Pro Bold 中ゴシックBBB Pro Medium
写真	線数	カラー210線以上
印刷	印刷所へは,	Adobe InDesign CCでレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第449集

つくば市

金田西坪B遺跡2

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

令和3（2021）年3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 富士オフセット印刷株式会社

〒310-0067 水戸市根本3丁目1534-2
TEL 029-231-4241

